

325
545

0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁸/₇₀^m 1 2 3 4 5

始



特216
642

八段高部道平著

圖解
圍碁入門

東京金竜堂發兌



圖解 圍碁入門 (目次)

初段を目指して	一
彼我の比較	四
石の死活	六
實戦	七
待った	一〇
簡單なる手所	一四
對局	一六
雜觀	一七
布石	二二
定石	三三
大衆合戦	四九
優分	五七

圍碁入門圖解

初段を目指して

高 部 道 平

碁を覚える前提として、碁が何で世間に流行し、交際上の要技となつたか、先づその概念から頭に入れてもらひ、そして初段を目指し、といふ順序に説かう。

碁の構成が如何に微妙であるかは、次第に會得されるが、夫れ碁の制たるや。天地方圓の象あり、陰陽動靜の理あり、星辰分布の度あり、風雲變化の機あり、春生秋殺の權あり、山河表裏の勢あり、世道の昇降、人事の盛衰、これに寓せざるはなし。

初段を目指して

と文献にもある如く、一種の道徳的、修養的、または哲學的技藝であることは、之にも幾多の文献が遺つて、一口に言えば入り易いが容易に奥を知り難い、高尚で面白い、といふことが交遊上にも善用の、流行の原因であらう。即ち奥行の浅いものは小供の遊具、速く達成、面白くないからである。

また碁は、棋、棋の字も用ひる、古く支那或は印度に發し、吾國へは奈良朝以前に傳はり、處が今は超然日本の國技に固定し、聊か吾國自慢に西洋にも宣傳され、殊に明治初年の獨逸國公使は、當時の名人村瀬秀甫に學び、それに因るものか獨逸陸軍では圖上戰術に碁を應用と聞く。その獨逸國公使は初段の免狀を授與さる。

また近くは米國ナショナル、シチイ銀行、東京詰めの重役ダン・エフ・ウオー氏はかく言ふ拙者に學び、之に因つて米國へも紹介され、やがては國際親善の技にもならう。ウオー氏の熱心には感服した。

さて左圖は碁盤の縮圖にして、縦横に十九線、に自乗が三百六十一、即ち交合線、其處へ打つのであつて、周圍の最端迄――

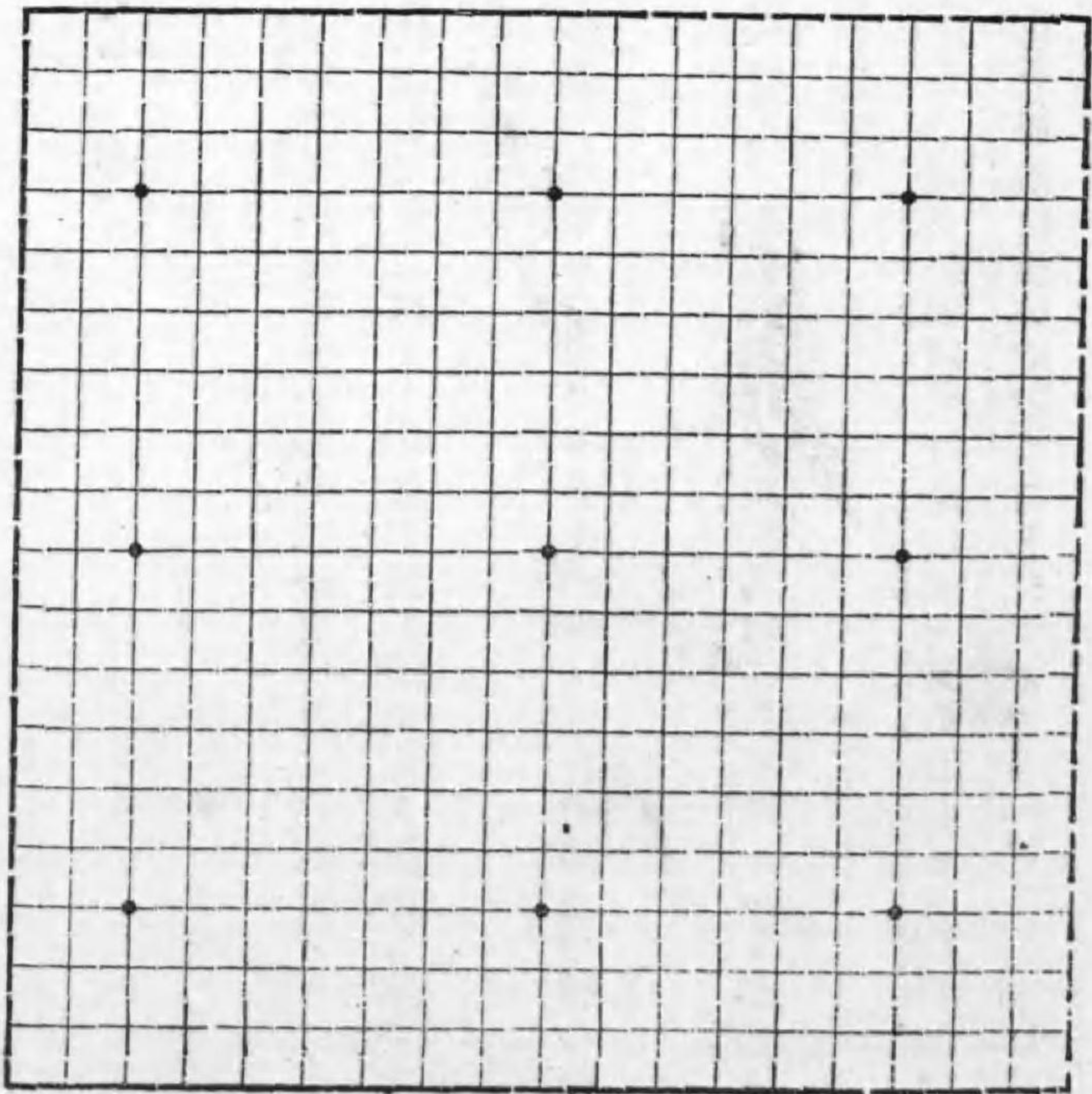
されば碁石は黒石百八十
一個、白石八十個あつて、
即ち全面へ打つだけの數で
ある。

打始めは黒一次に白二と
互ひに一手交し合ひ一人で
二手は打てない。

白を持つのは上手、即ち
強い方、黒を持つのは下手
である。

盤上、九ヶ所の星は、例
へば九目弱い方が、黒石九
目置く、その場所である。

初段を日指して



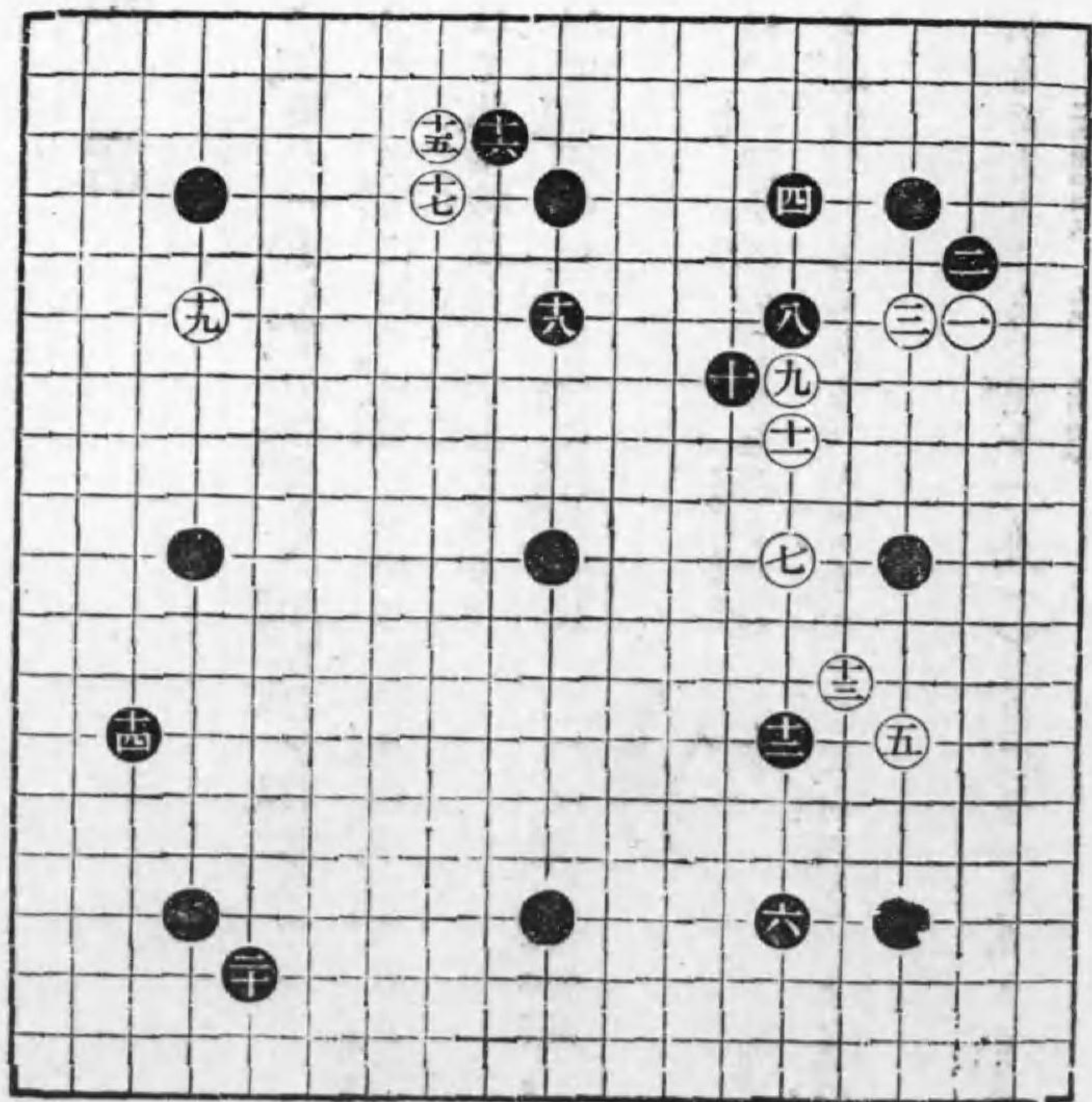
彼我の比較

左圖は九目の置碁であつて、即ち下手が九目置いて黒二十まで運んだもの。
 黒二十の時、先づ白の地域と比較して見られよ——必ず黒の領域が大優勢と認識で
 き、白がどうして勝つかの疑念も起さる筈。
 即ち碁は一目でも地の多い方が勝つのであつて、下手は無事に進行、地域で勝つ
 を上乘とするものである。
 されば上手は戦争を起し黒地へ侵入、下手はそれを防ぎ其處に石の取りやりが始
 り、この接戦が勝敗の分れるところである——
 それは如何に堅固な城を構えても、城主が弱將では敵に城を奪取されると同じ理。
 それで次譜に石の取りやり、また死活に就いて説くことにする。

碁盤の上等は日向國産、
 榧の木で他は地物、またはは
 俗にバチといつて本場物で
 ない。

次に公孫樹の木、桂の木
 などである。

碁石は白が蛤貝、黒が紀
 州産の那智石、蛤貝も日向
 産を本場とし、分厚の物が
 上等である。
 が練習用には簡易な値安
 物もある。



石の死活

右上隅、黒一から七までは、白四の一子を黒が打抜き、即ち白を討取つた圖。
 黒七で白四の一子を取れて、それを俗に四ツ目殺しといつて、黒四手で取れた其態をいふのである。白四を取られて此接戦は白の失敗である。

黒七を(い)だと、次に白(ろ)で黒三の一子を白に打抜かれ、これは黒の大失策、最も注意を要する所である。

左下隅、黒一から十一までは、白四と六の二子を黒が打抜いた圖。

白六は四を黒に取られるから逃出したのである。が黒十一と黒に白四と六とを討取られたもの。

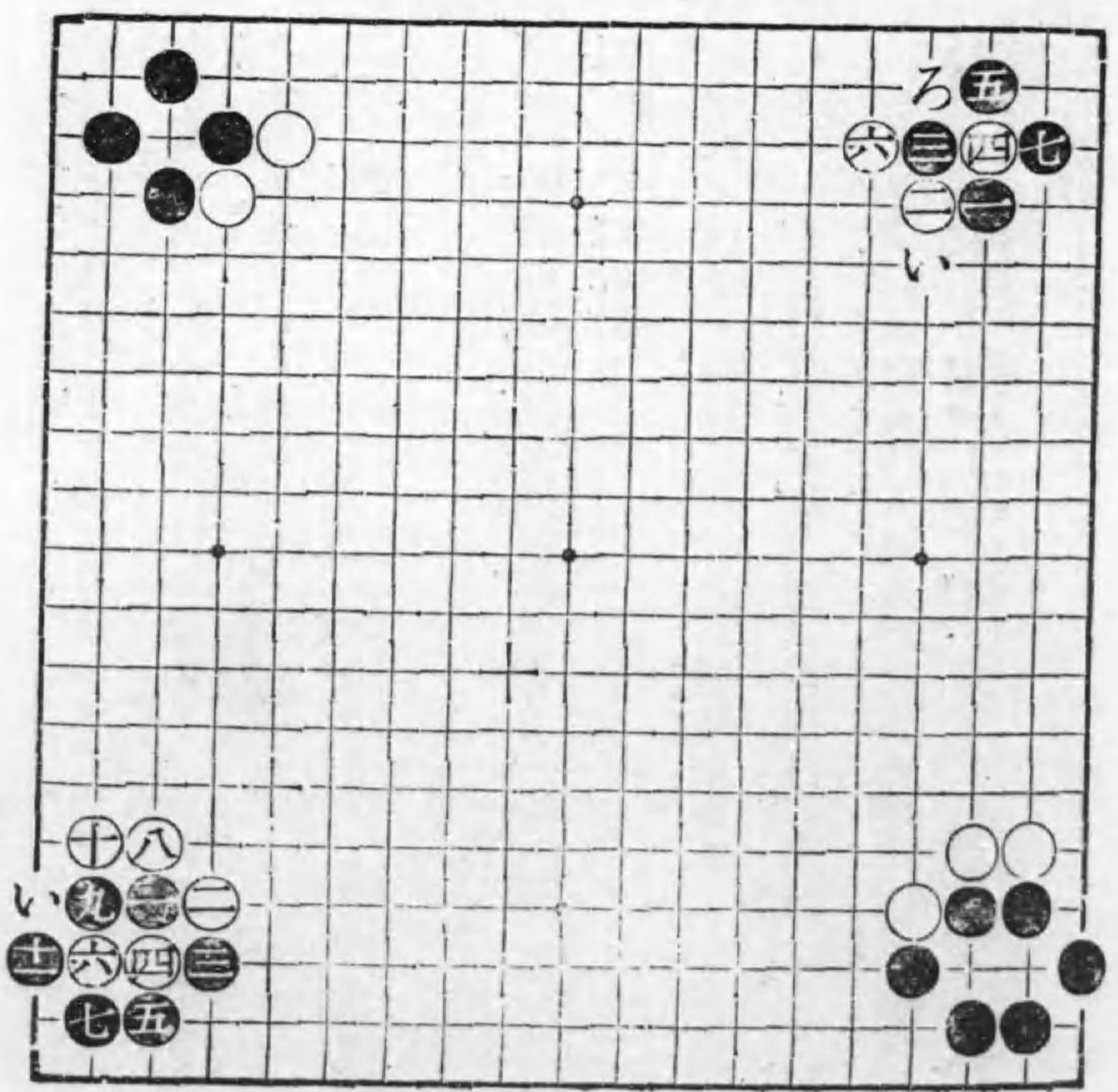
黒九は白に其處で取られるからである。また黒十一も(い)で白に黒一と九とを取られるからである。黒十一と成つて此接戦も白の失敗である。

左上隅、その圖は右上隅、黒七までの跡で、黒は立派な一城が出来、また地も相當に有つて――

それに反し白の二子は惨に残つてゐるだけではないか、と認識できる筈。

また右下隅も左下隅の戦跡、之も白惨敗の跡で取る取られるかの如何に注意を要するかは言ふまでもない事。

石の死活



右上隅、黒一から十九までは、白四以下八の三子を黒に打抜かれた圖。

白十四は、黒三と十一の二子を十五の所で取らうといふのである。夫れが黒十五の用心、即ち之を當りといつて、黒十五と連続出る他は無。

次いで白十六は、黒五と七の二子を取らうであつて、之を攻合いといふのである。が黒十九と成つて黒一手攻合勝——

即ち白四以下八の三子が討死、その慘状の跡が左上隅の圖である。

左下隅、黒一から十九までも黒が一手攻合勝。

また右下隅も黒十九と白四以下十六の四子を打抜いた、その戦跡である。

前譜白の一子また二子、本譜も白の三子また四子を取つた、その白石は盤上より取去つて、碁石入れには蓋があるから、無論自分の蓋へ入れるのである。

それが例へば、本譜右下隅に現はれた圖で、即ち白石が無いからである。取つた石を盤上に置いては、どちらが敗戦だか判らなくもならう。

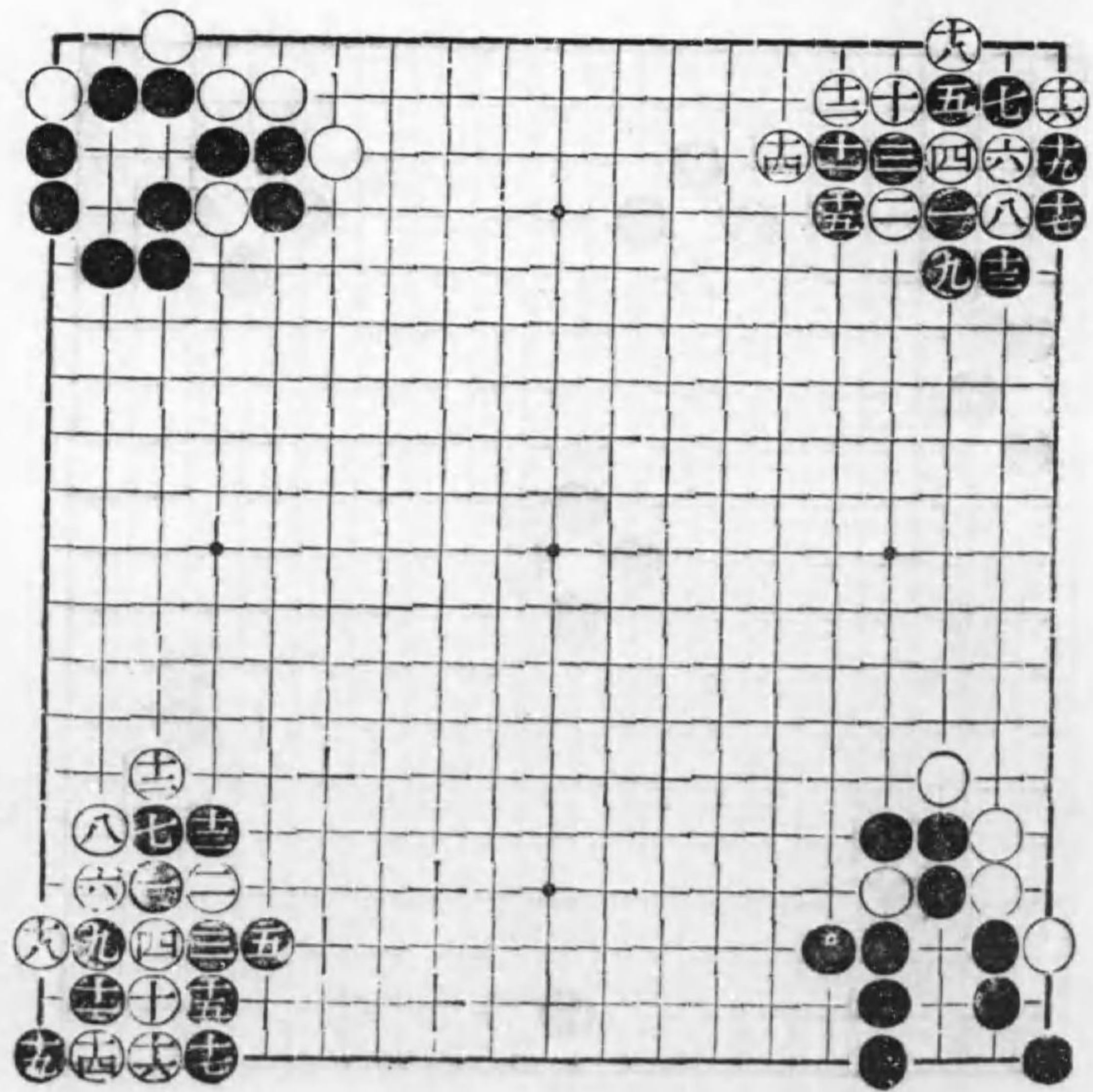
前譜または本譜白二の手段は、實戦に無い白の無理である。

それを本題に出したのは取る取られる現はれを簡易に用ひた爲。

白二と其方へ行くには、多く右上隅なら十一の所。即ち左下隅なら、五の所である。

併し之は後で解る事ではあるが、後に疑問となるから、此際に言つておく。

石の死活

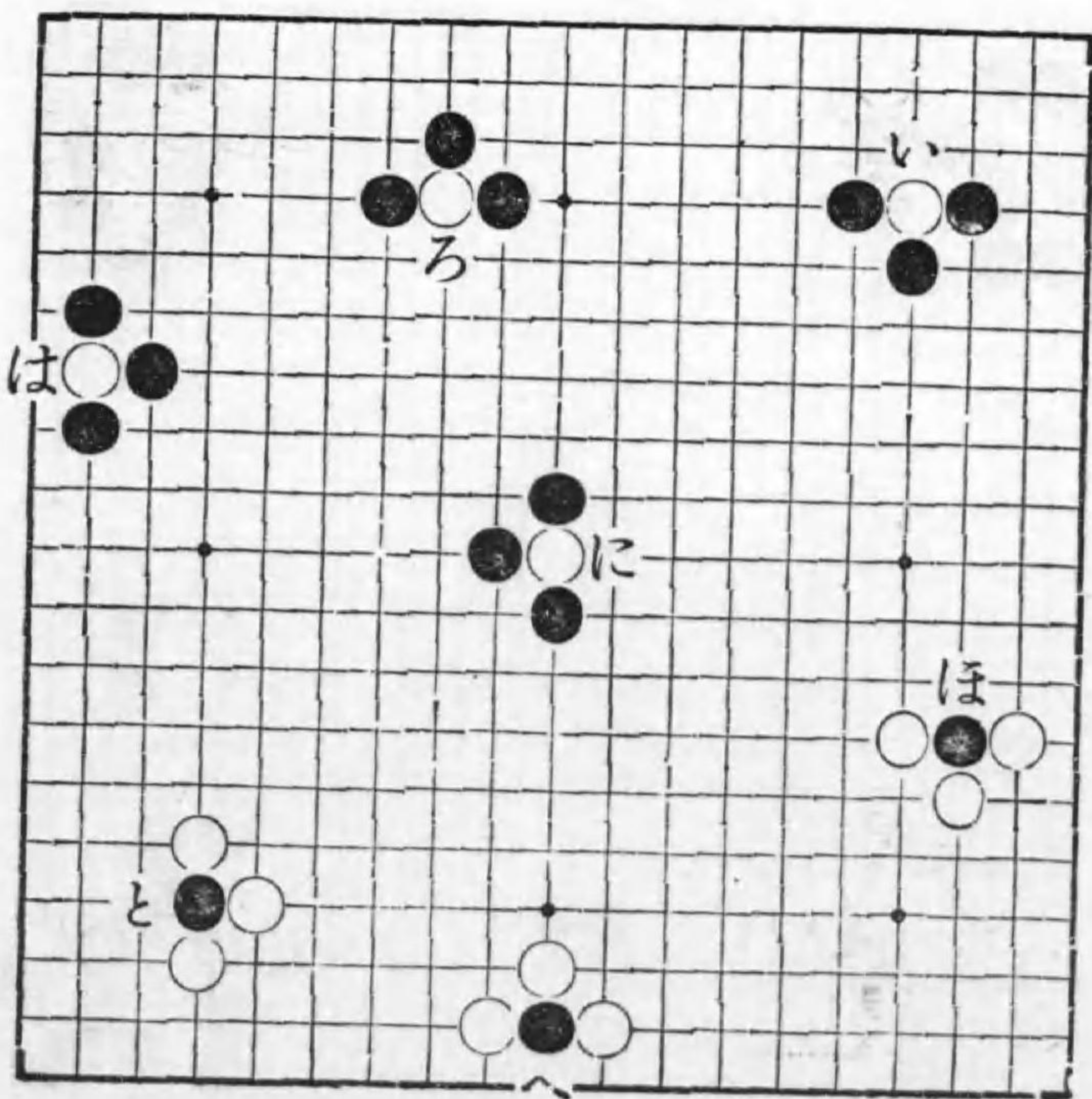


四ツ目殺しも大體分つた
であらうが、なほ簡明に説
いて於かう。

黒(い)で其白一子が取れ
る。

また(ろ)も(は)も(に)も
黒先手なら、場所と向きは
違ふが、白一子を取れるの
である。

更に(は)と(へ)と(と)は
黒一子を白が取れ、黒は取
られる。



一〇

これは一手で二子取りを
説くもの。

黒(い)で白二子を取れ。

白(ろ)で黒二子を取れ。黒

(は)で白二子を取れ。また

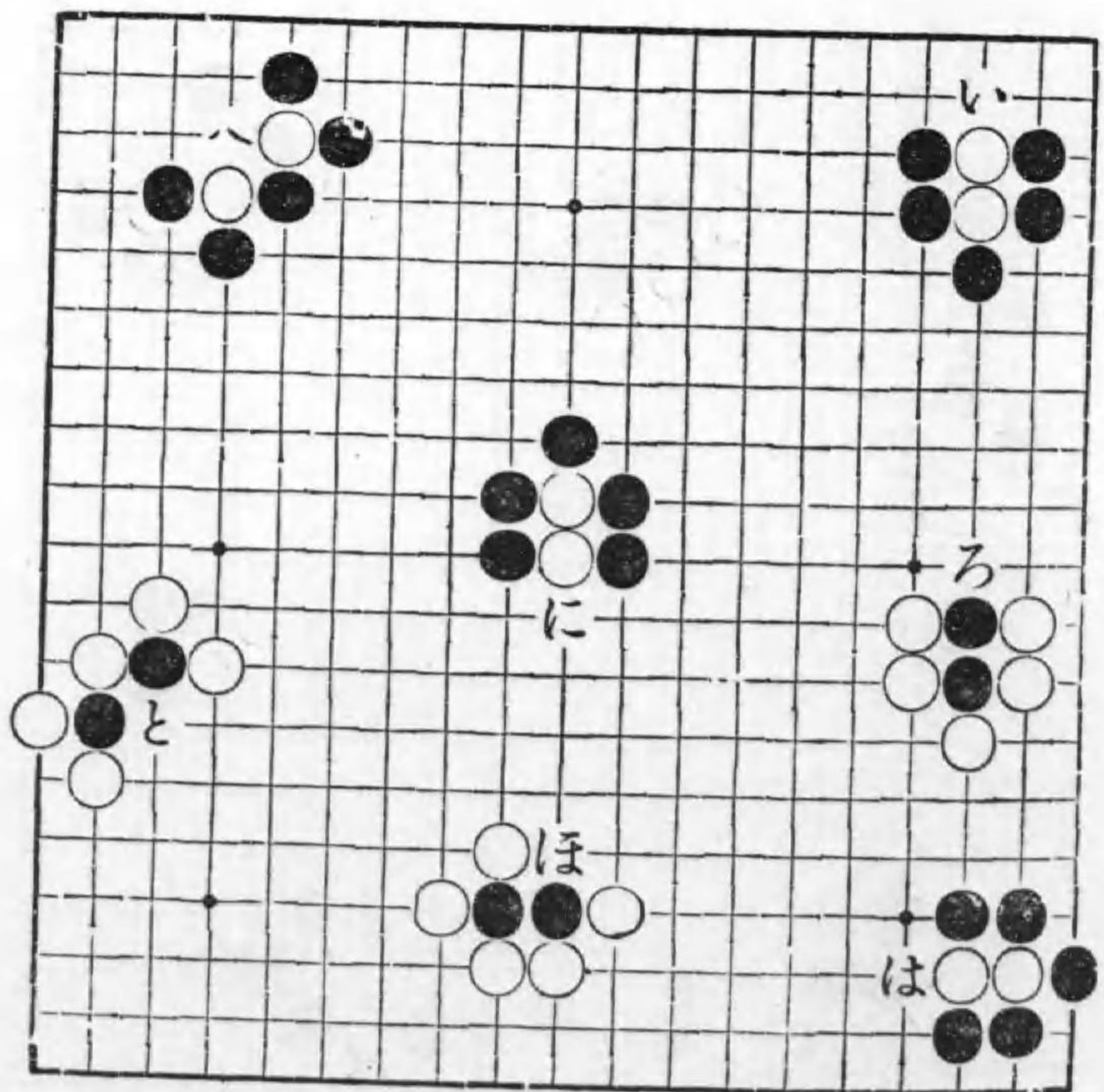
黒(に)で白二子を取れ。

次に白(ほ)で黒二子を取

れ。黒(へ)で白二子を取れ

白(と)で黒二子を取れ。此

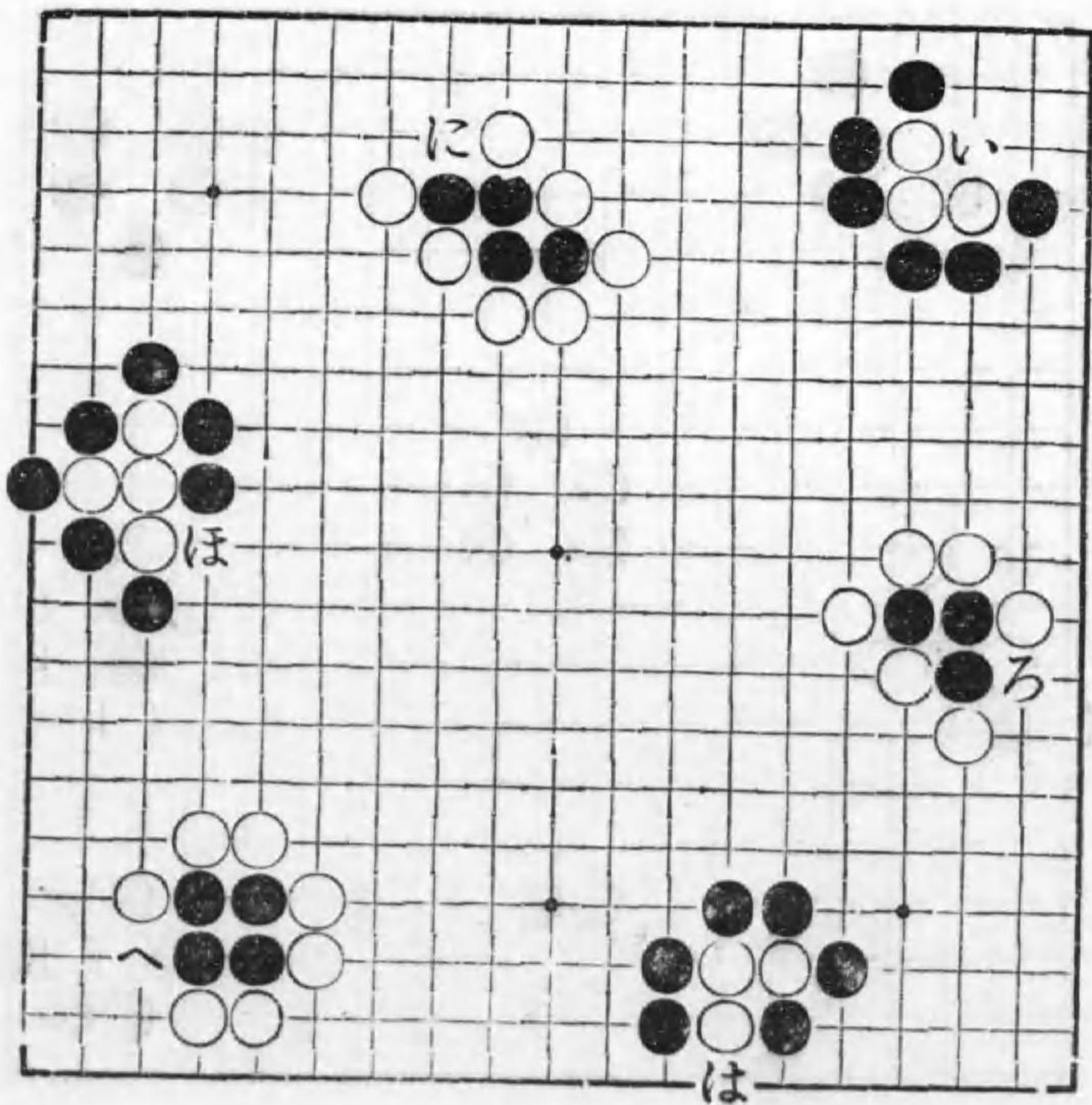
三ヶ所は前と變形だが取れ
るのである。



一一

本圖は三子取りと、四子取りである。黒(い)で白三子を取れ。白(ろ)で黒三子を取れ。黒(は)で白三子を取れ。

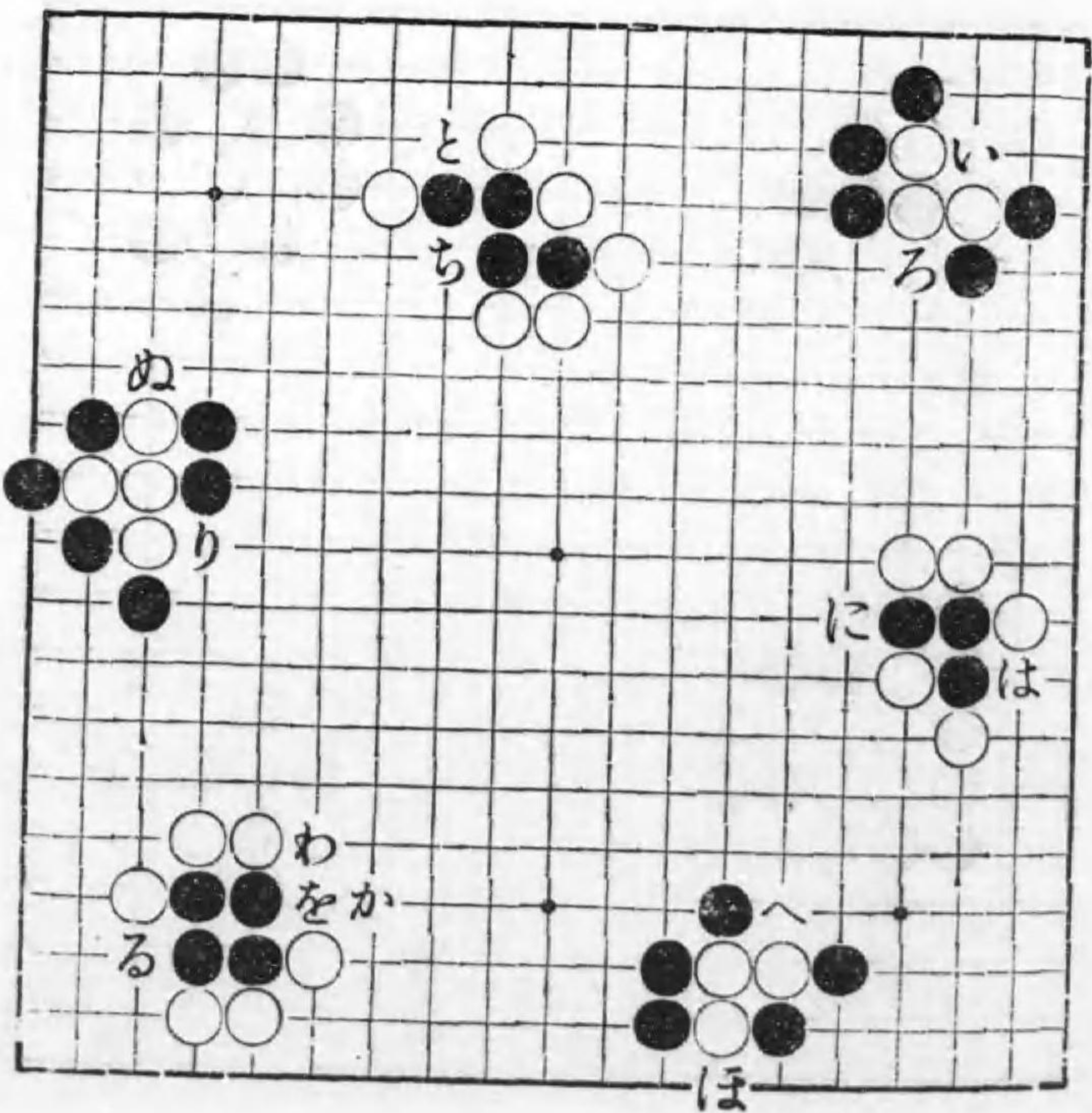
次に白(に)で黒三子を取れ。黒(ほ)で白四子を取れ。白(へ)で黒四子を取れ。要するに六圖の各々一手明いて取れるのであつて、次圖は取れない――



黒(い)だと、白(ろ)で白に逃げられ。白(は)だと、黒(に)で黒に逃げられ。黒(ほ)だと白(へ)で白に逃げられ。

次に白(と)だと黒(ち)と黒に逃げられ、黒(り)だと白(ぬ)と白に逃げられ。白(る)だと、黒(を)と黒に逃げられ。

また白(わ)だと黒(か)も此の理。



本圖は五子取りと、六子取りである。

黒(い)で白五子は取れ。

白(ろ)で黒五子は取れ。また

白(は)で黒五子は取れ。

黒(に)で白六子は取れ。

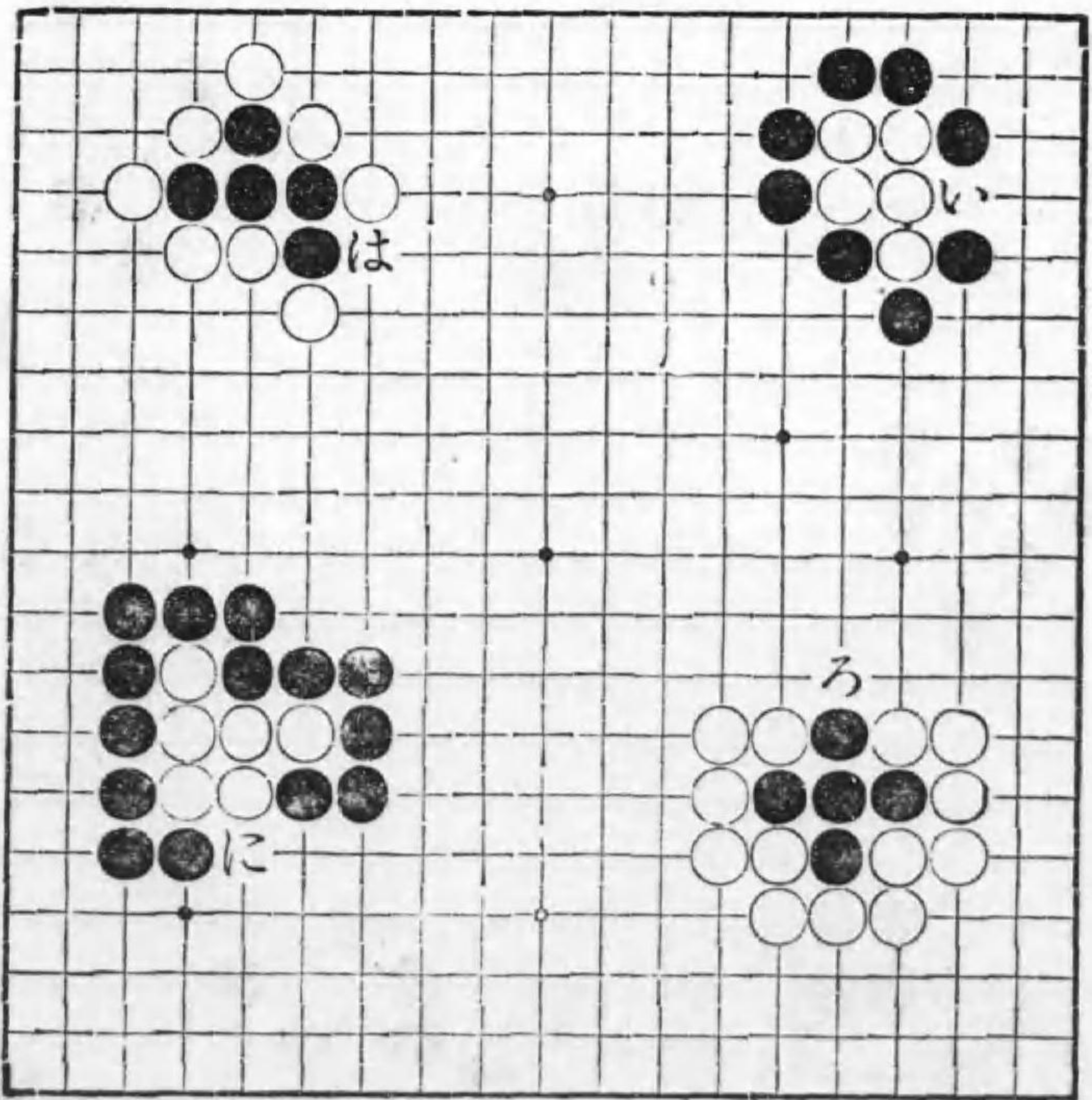
要するに一手明いてゐて

は、尾の方が何目連つても

取られるのである。

(ろ)と(に)は周圍がそんな

なでも取られる。



本圖は最端で取られる事。

黒(い)で白一子を取れ。

白(ろ)で黒一子を取れ。

白(は)で黒一子を取れ。

次に黒(に)で白一子を取

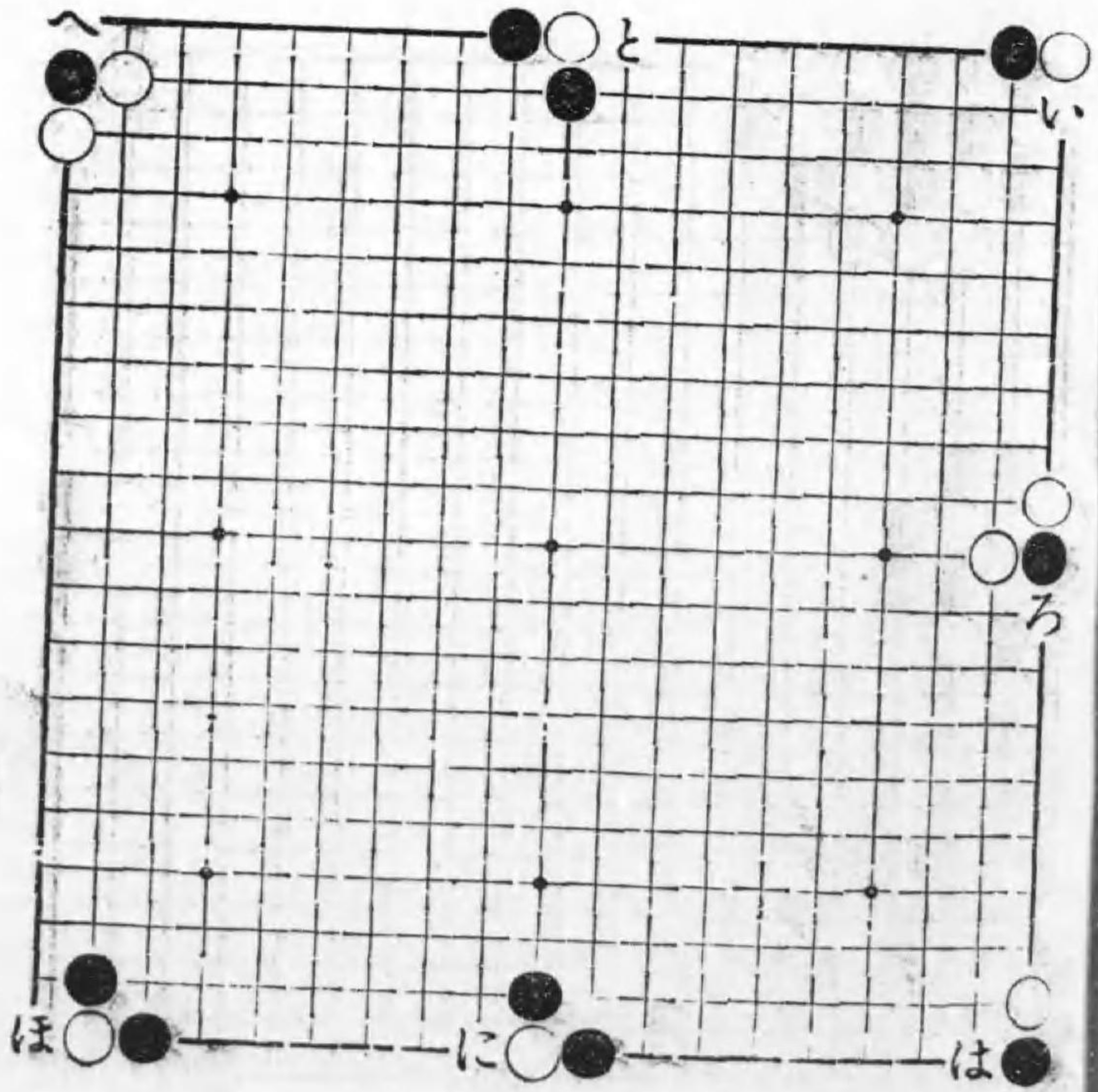
れ。黒(ほ)で白一子を取れ

白(へ)で黒一子を取れ。黒

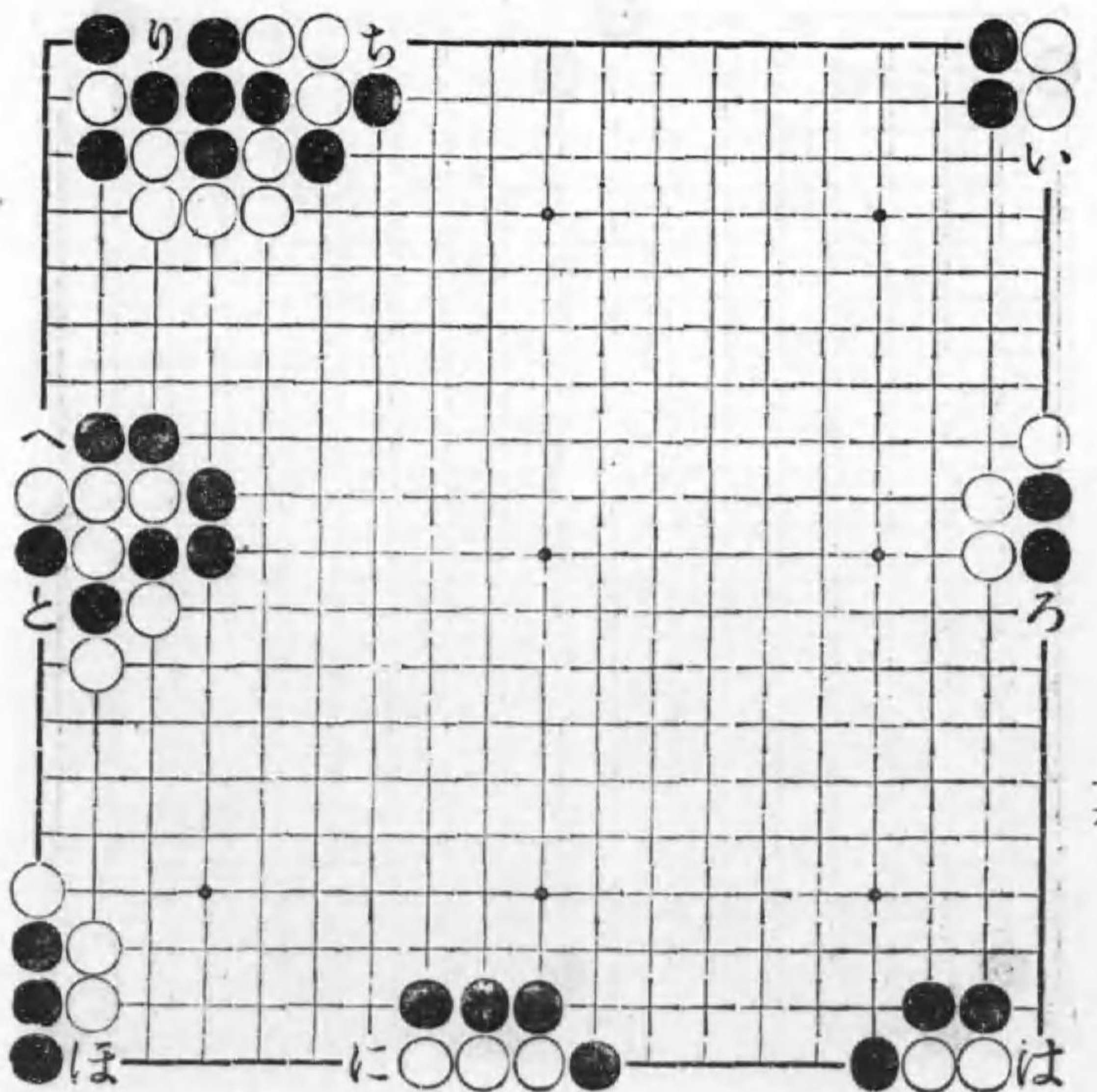
(と)で白一子を取れ。

これも一手明きなら取れ

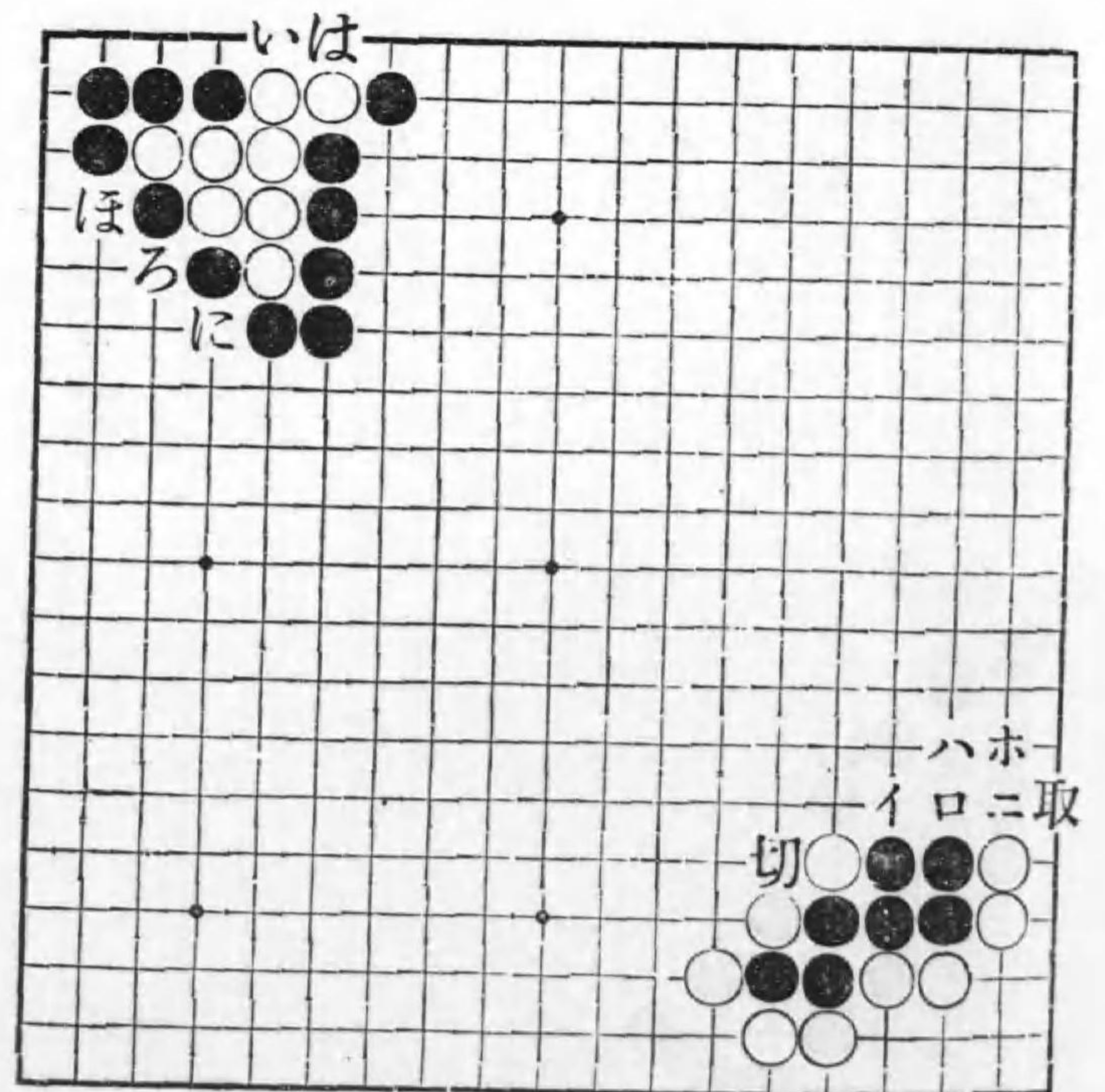
るのである。



黒(い)で白二子を取れ。
 白(ろ)で黒二子を取れ。黒
 (は)で白二子を取れ。
 次に黒(に)で白三子を取
 れ。白(ほ)で黒三子を取れ
 また黒(へ)で白四子を取
 れ。其處は白先だと白(と)
 で黒二子を取れ。黒(ち)で
 白三子を取れ。其處は白先
 だと、白(り)で黒五子を取
 れ。



本圖は二手明きの事。
 黒先黒(い)。
 其時白(ろ)なら黒(は)と
 白八子を打上げである。
 白(ろ)は(に)で黒一子を
 取るか、また(ほ)で黒一子
 を取る、即ち兩當りの一手
 下圖は白先白(イ)。(に黒
 (ロ)は白(ハ)黒(ニ)白(ホ)
 其時黒(切)なら白(取)。
 即ち黒九子打上げ。



黒(い)で其白八子は取れるのである――

即ち次に白(ろ)なら、黒

(は)白(に)黒(ほ)白(へ)黒

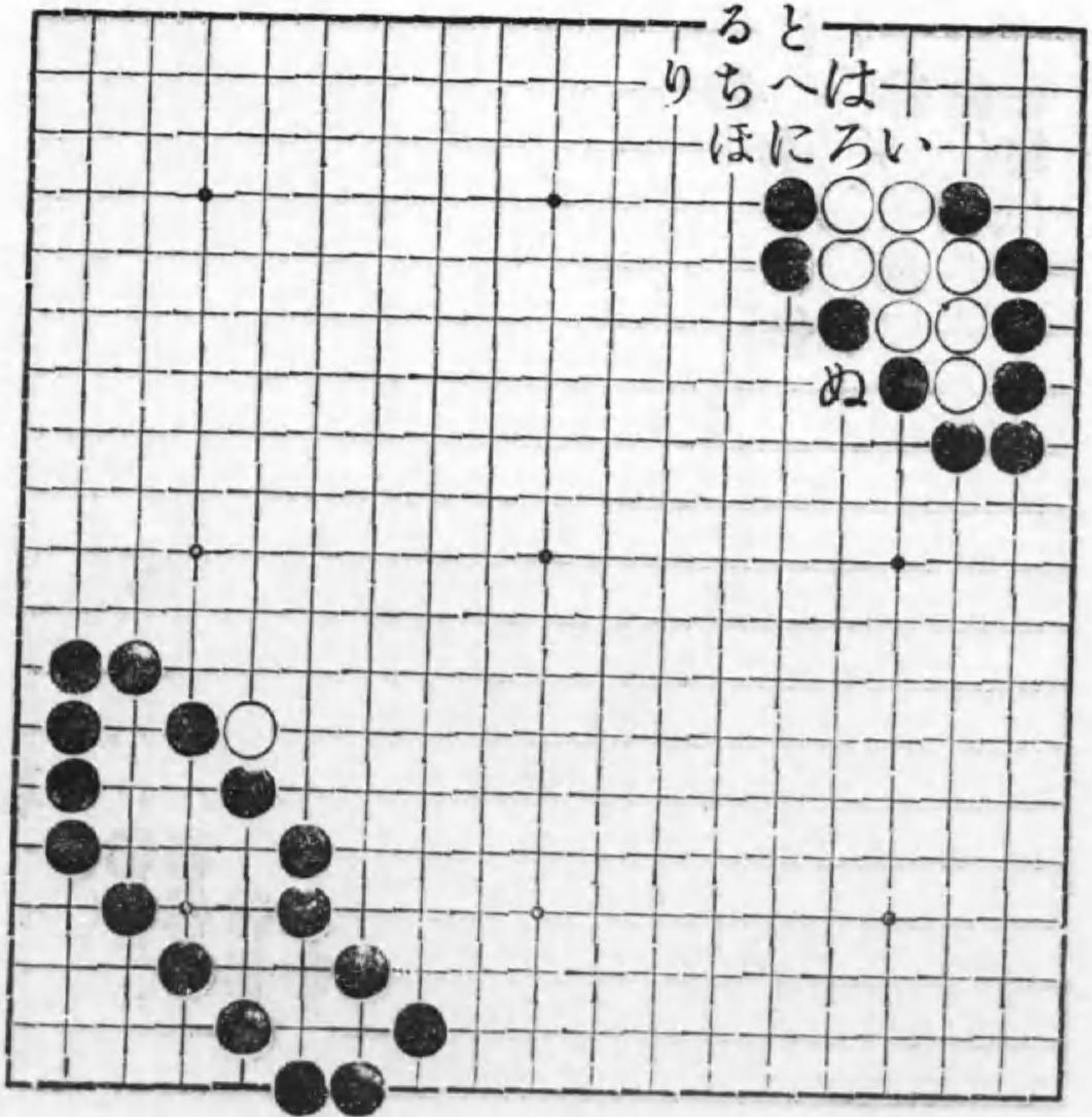
(と)白(ち)黒(り)。

そして白(ぬ)は黒(る)と

白十二子打上げ。

其打上げの跡が下圖である。

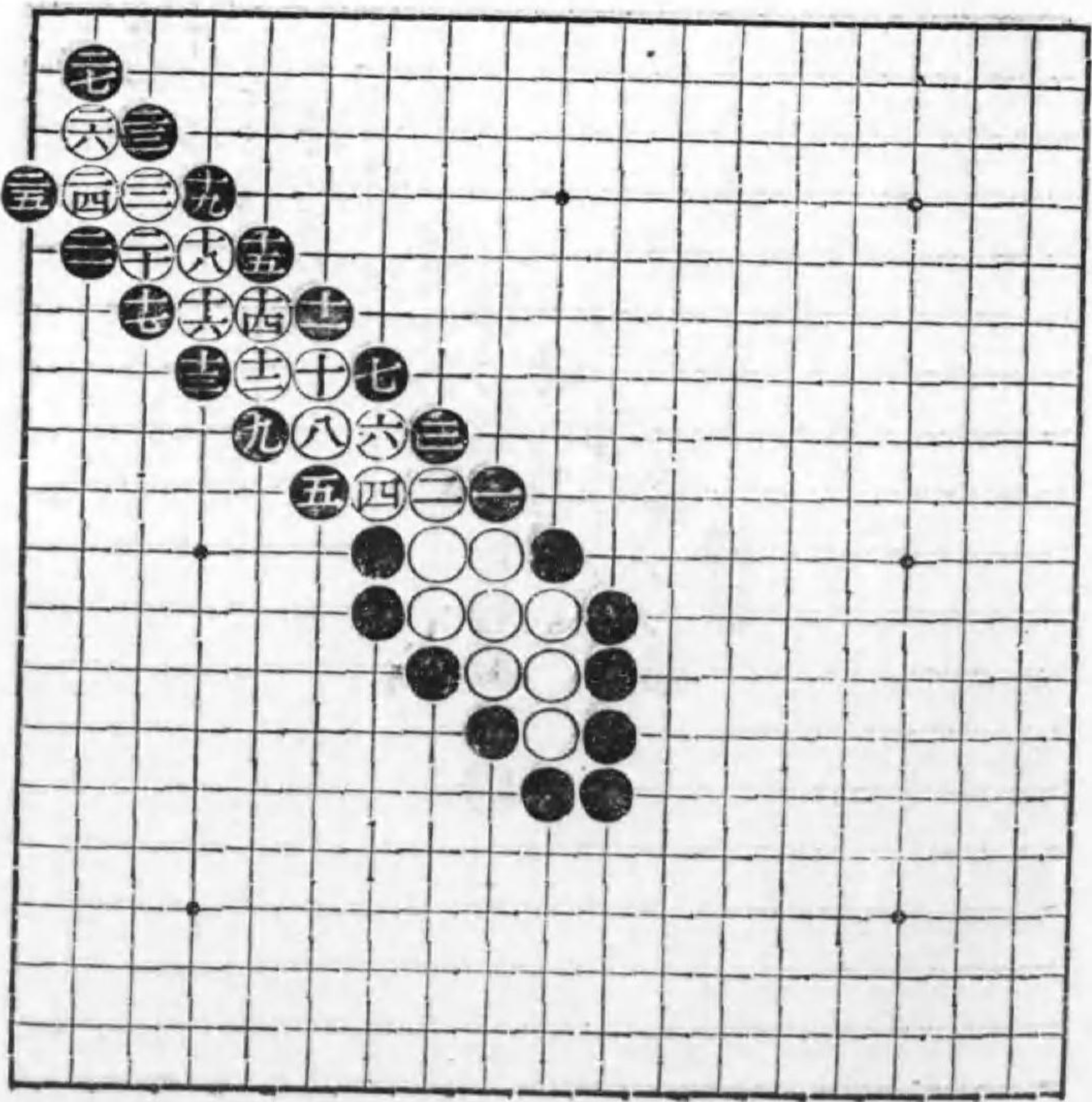
黒(い)から(る)迄を征しちやうといふ。



本圖は黒一に白二と出て以下黒二十七迄、征で白が取られたもの。

前圖は右上隅であつたが此中央でも、また右下隅最端にあつても、即ち黒二十七迄の如く、萬里征途がでさるのである。

征は本圖の様に、白に息もつがせず黒の方は壯快、征を見損じ一舉大敗、最も注意を要する手所である。

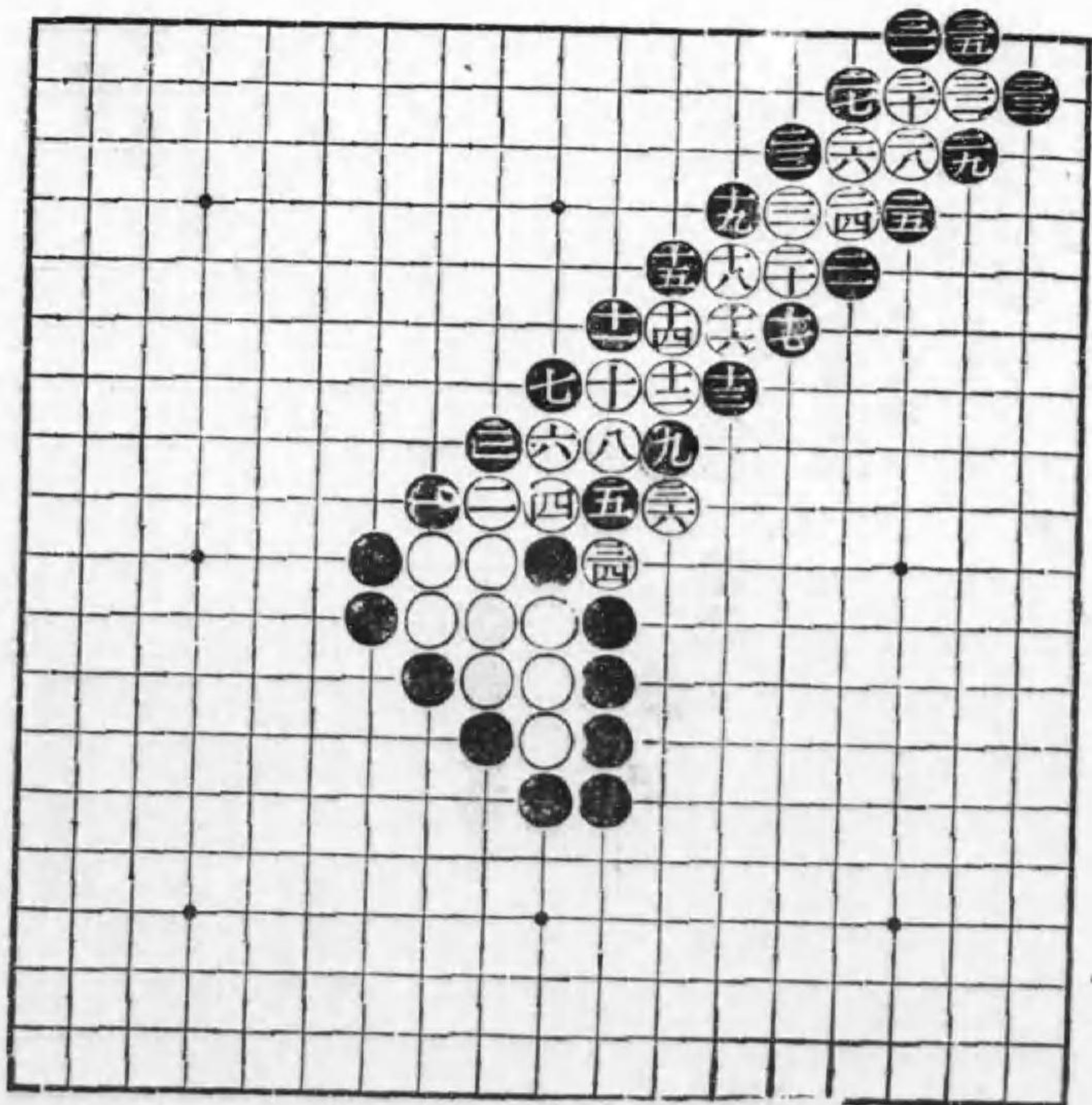


本圖は黒が征を見損じたもの。

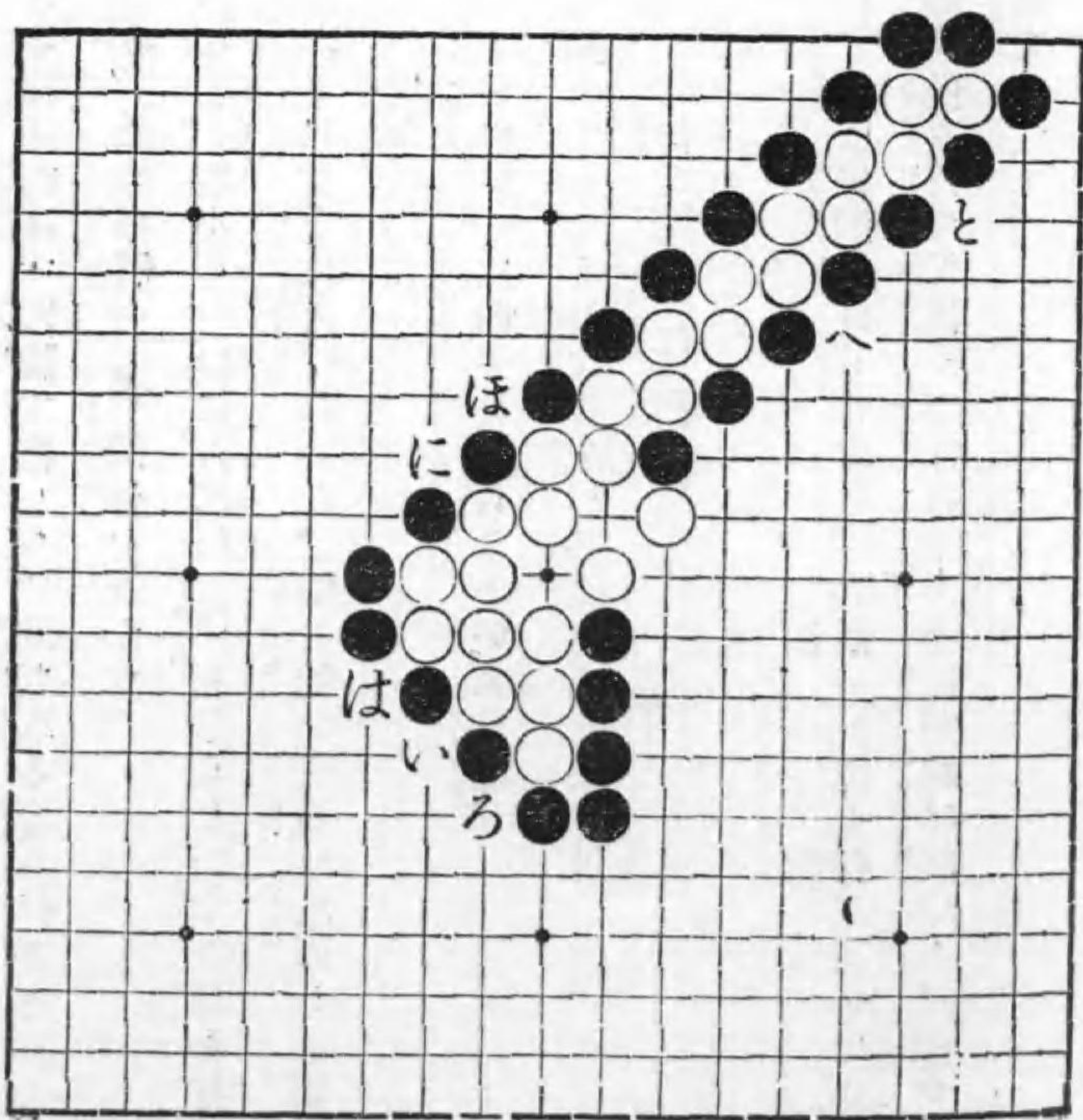
黒一を二の方なら、前圖の如く黒が成功である。

それを斯様黒一から三十三迄、そして白三十四に黒三十五は、白三十六で黒は大敗も大敗——

次譜を見られよ、黒は各所に隊伍亂れて、手もつけられない後始末、大變な事である。



黒は第一白(い)と白に切られて(ろ)か(は)で何れかの黒一子は白に取られる。それで黒(い)だと白(に)でも、又(ほ)でも其如くに其方の黒を突破。
なほ一方黒(へ)なら、白(と)と切り、此方も始末にあえない黒の慘状。



征の成功不成功の重大なる事は前述で明瞭であらう、即ち取る取られるとして、
されば征の發端は何處よりか。また各種の征關係を説かう。

殊に征しらずの碁打ちかな——なんて一口に言はれ征を知らないでは碁を打つ
資格がない、といふ意味。敗かされた上に笑はれもし、第一他の失策は取返しも出來
るが、征の失策は一舉敗定の場合が多い。

黒一は其處で白を兩斷、上下何れかの白四子を取らうといふ目的。
處が征を知らない、また知つてゐても時に度忘れのこともある——

即ち黒一に次いで白(5)黒(6)白(7)黒(8)に白(ほ)——
なほ黒(へ)でも白(と)。

といふ工合いに白に追はれ、黒は絶對逃げられない、角道の死途を行くものである
此れは前述で解つてゐやうが、度々言つて置く。それ——小供が親に詫びる、モウ決
して致しません？ といふ事もあつて。

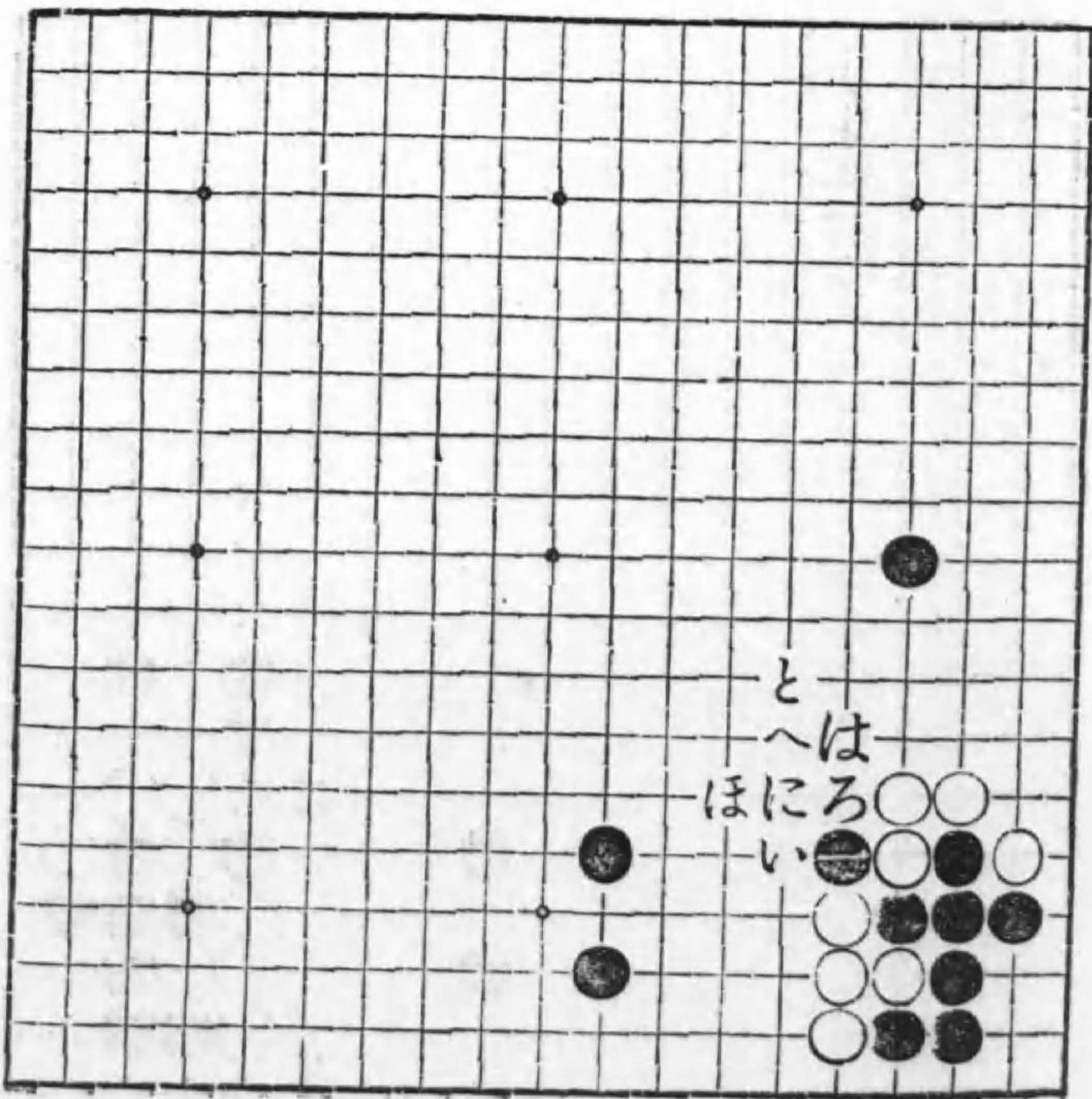
征の見損じに、強い者、

また有段者、とりわけ名人
にも其例が多々あつて、面
白いものである。

それ、上手の手から水が
漏れ——

また河童の川流れ——

なんぞ云ふのも、名人上
手が失敗するからである。
英雄、色に溺れ——なん
ていふ事もあつた。

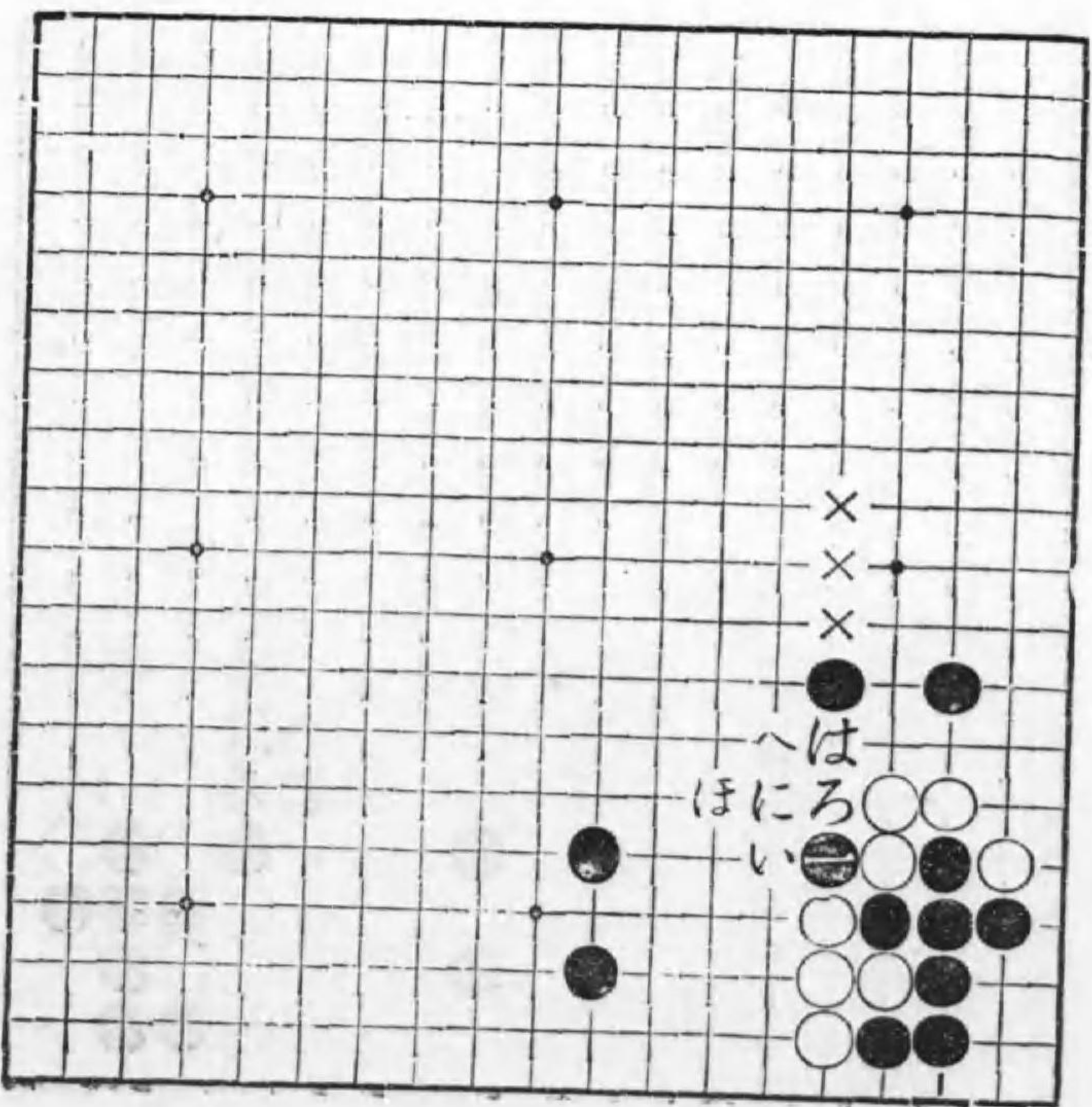


斯様な場合、即ち××の下に黒一子の在る時。黒一と切つても黒一は征取られない。

見られよ、黒一に白(い)黒(ろ)白(は)黒(に)白(ほ)黒(へ)。

黒(へ)は、白(は)に當つて――

其黒(へ)を一とした次譜で明瞭、白の失敗が分るのである。

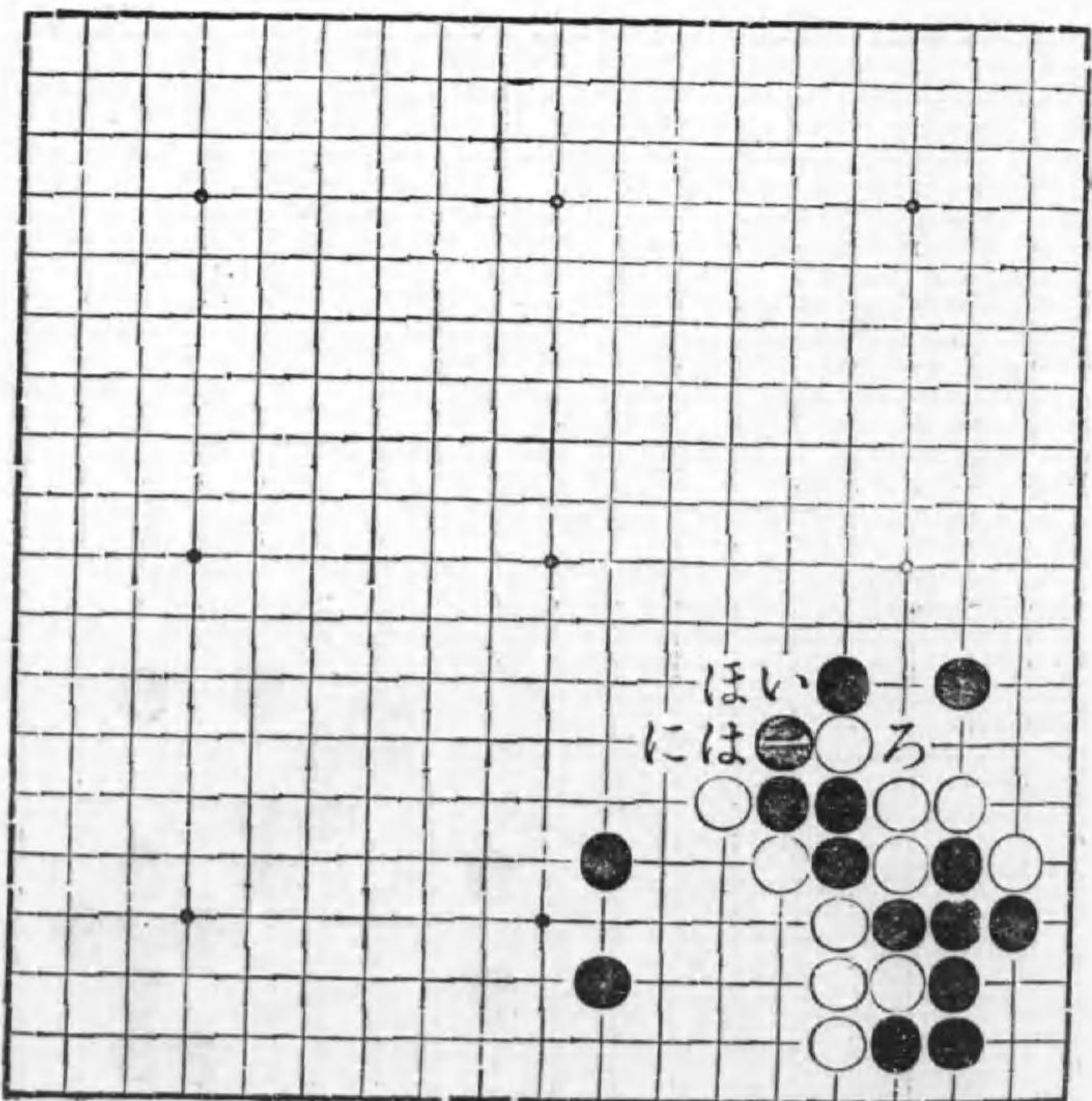


黒一となつて、次に(い)だと――

黒(ろ)で白一子が取れで分る筈。

併し黒(ろ)は(は)と出て黒がいいのである。

即ち黒(は)に――白(に)黒(ほ)なら、また白(い)に當つて白は大悪化である。なほ黒(ほ)を一とした次譜を見られよ。



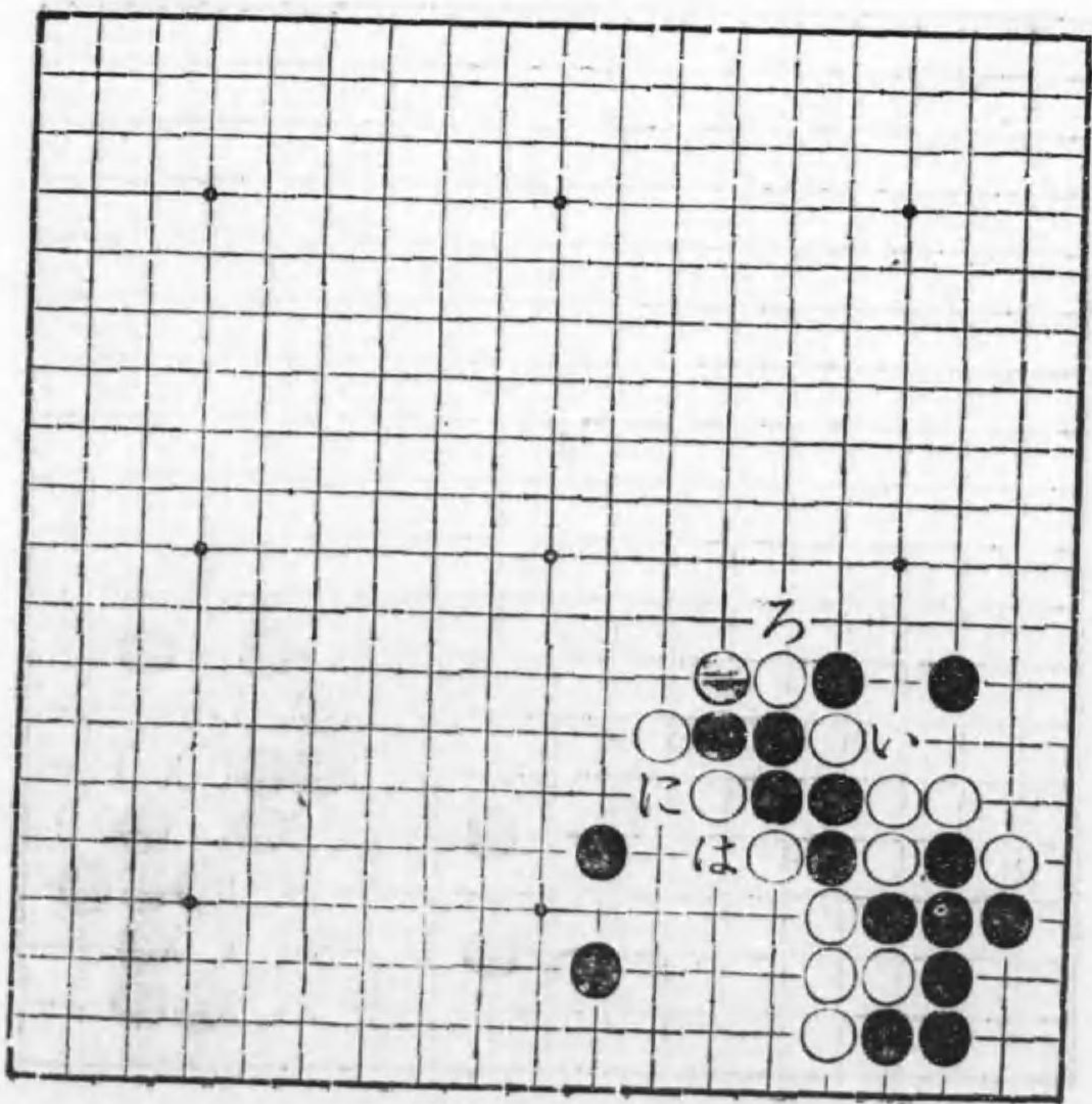
黒一と成つて白大悪化と解る筈。

即ち黒(い)と其白一子が取れ。

また黒(ろ)で其白一子が取れ。

なほ(は)と黒に切りも残つて、黒一の時、白(は)なら黒(に)。

これは白が征を見損じ、そんな事も残る——といふ事情。



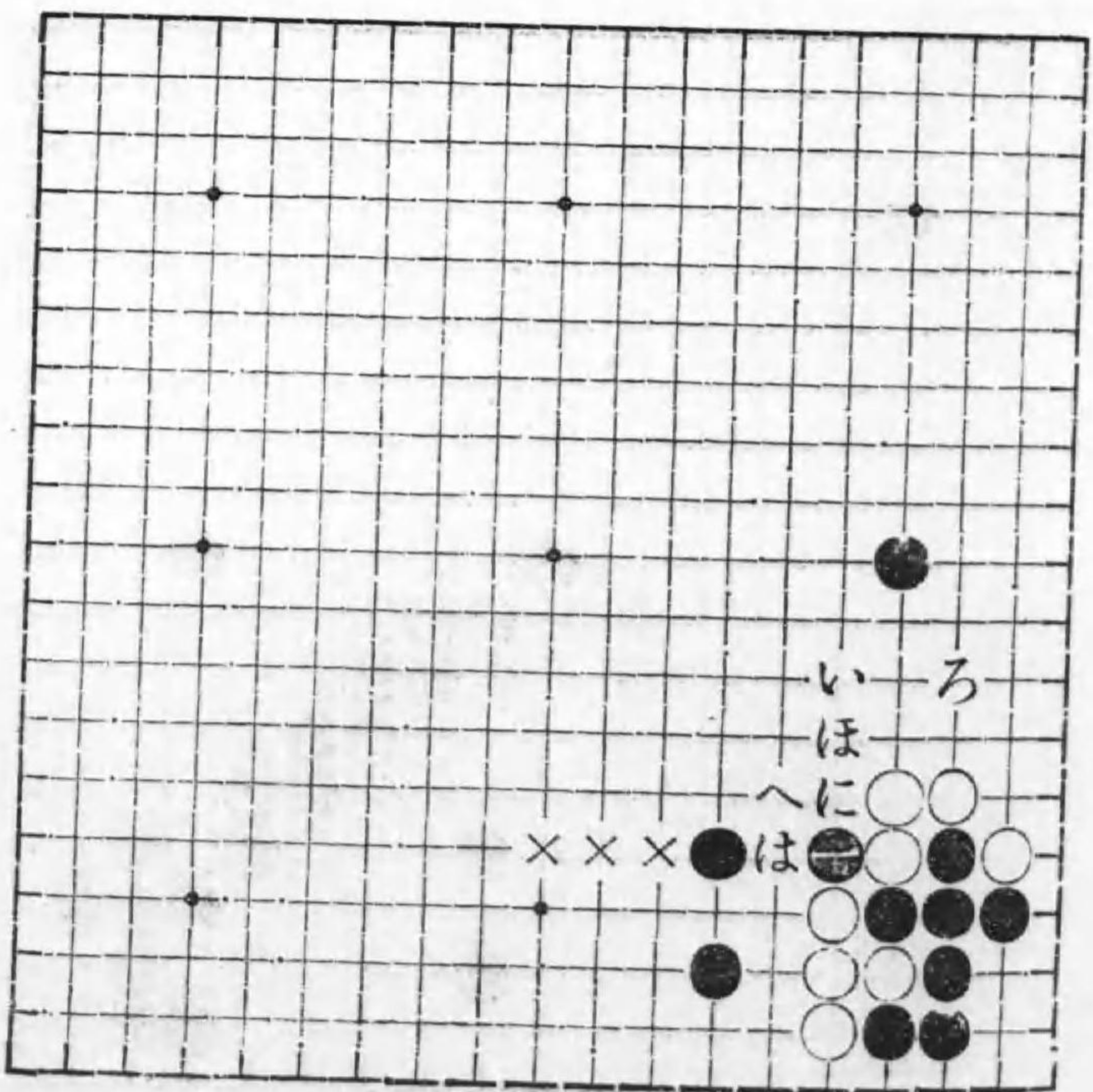
本圖も×××の右に黒一子が在つて——

前譜黒(い)と(ろ)の在るそれと同形。

されば黒一に、白(は)黒(に)白(ほ)だと——

黒(へ)で白(は)に當り、黒一は征に取られない。

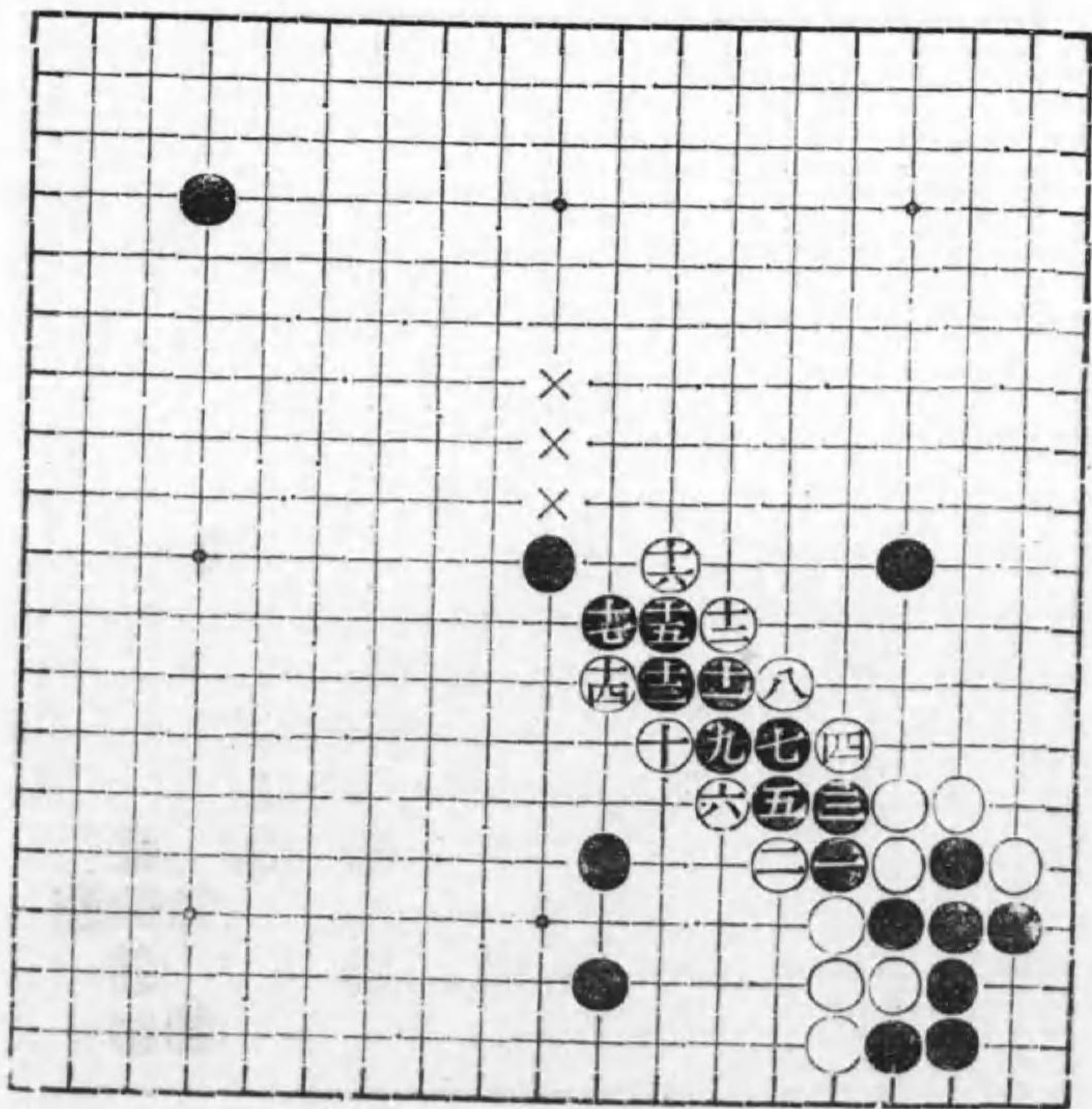
以上で本圖と前譜の、黒一が征に取られぬ、關係は解つた筈。



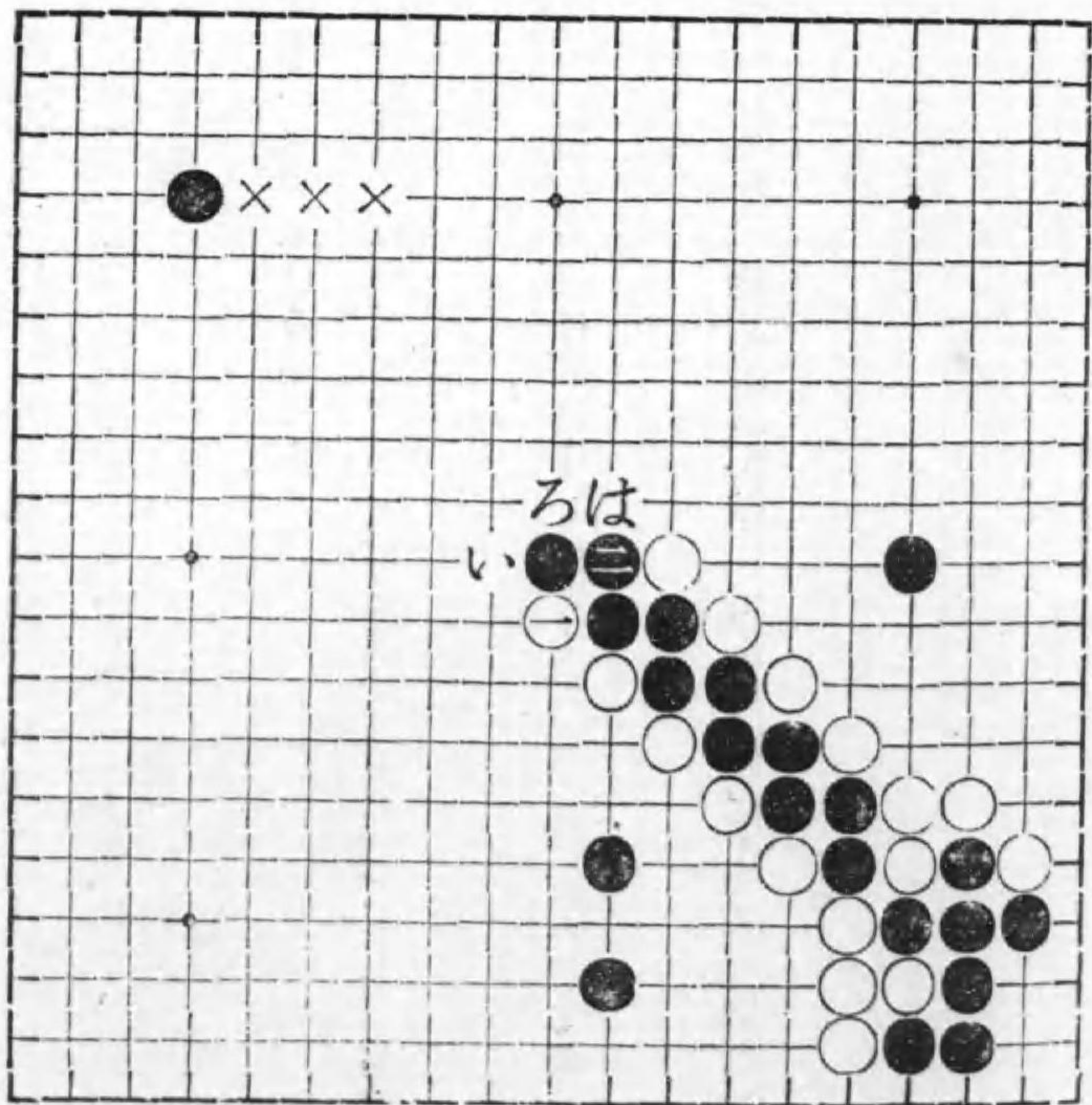
本圖は中央×××の下、
に黒一子の在る場合い—
これも黒一と白を兩斷、
黒がいいのである。

見られよ、黒一以下十七
と成つた、白二以下十六ま
での征を—

即ち黒十七が×××の下
の黒一子に接續、白大失敗
である、それを。
なほ次譜に明瞭にしてお
かう。



本圖は前圖黒十七まで。
そして、此の時白一なら
黒二。また白一を二なら黒
一。
と何れも黒は取られない。
即ち黒二と成つて分る如
く、(い)の所(ろ)の所(は)
の所が寛き—
三手明いてゐて白に取ら
れぬ。
中央の黒が×××の左に
在つても同理である。



念の爲に言ふが、取れる所は黒からでも白からでも取れるのであつて——
即ち黒先黒(い)なら其白一子を取れ。また白先白(ろ)なら其黒一子を取れ。されば
征も白一に黒二と——

前圖と場所は違ふが、白一は黒が征で取れるのである。

なほ白の一子が中央(は)に白一の前に在つても、また右上隅(に)と在つても、前述
の如く白一を黒二で取れない。

さて征は大體解つたものとして、各種の征は暫時中止のことにし、他の死活を説く
ことにしやう。

人間にしてもまた凡てのものにしても、死活問題が第一であるからである。即ち順
序として。

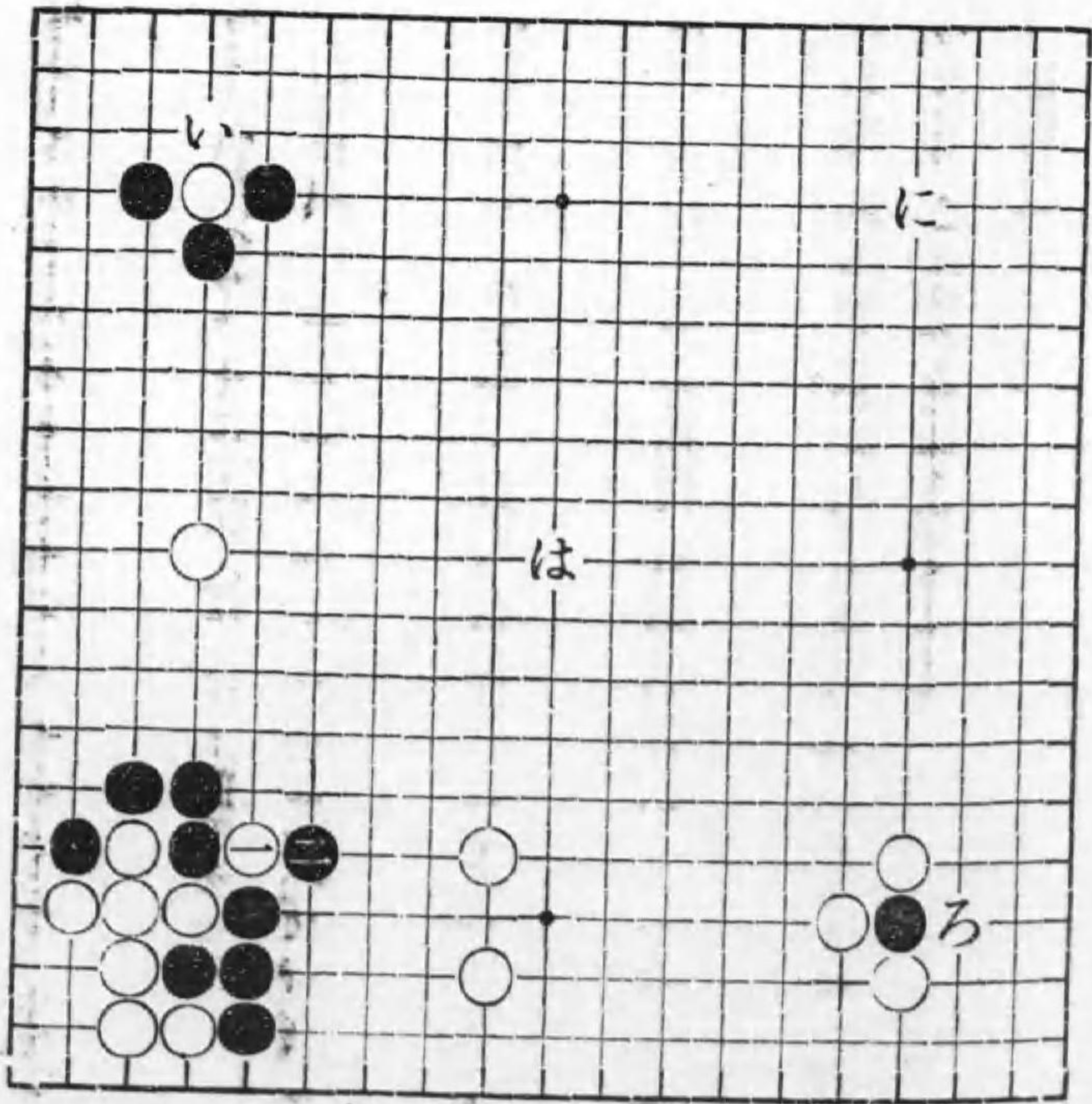
場所や、向きが違ふと、
どうしても判らない。

といふ人もあり、それも
尤もと思ふから、征關係を
本圖の様に變更、それで説
いたのである。

さうであらう、事件を話
すにしても、先方の居場所
で勝手が違ふ。

それを何處に居ても、キ
チンと話す人を、場なれた
といふ。

石の死活



死活問題は切合つて、取る取られるから生じるものであつて、切合ふとは、下圖黒一に白二と接戦――

次いで黒三と應戦、そして白四が切合つた、また切結んだといふ態である。

即ち黒三は白二と四を切り、白四は黒一と三を切り、斯くて結果は巧拙に待たれるもの。

右上隅に移つて、黒一は次に二の所で一城を築く目的。白二はそれを妨げ。ではと黒三は白二を一と挾撃――

そして黒七と成つて、七は白四と六以下二子を兩斷、目的は何れかの白を取らうである。

黒七を假りに(い)だと、次に白七。即ち白に粘がれてしまふ。粘がれるとは一身同體の事。以上で切る意味は解つた筈。また粘ぐ意味も解るもの。

さて黒七と成つて戰雲低迷、事體は急である。

一國と一國の戦争で――

大軍の中を突破するといふ事がある。

即ち突破は大軍を兩分。

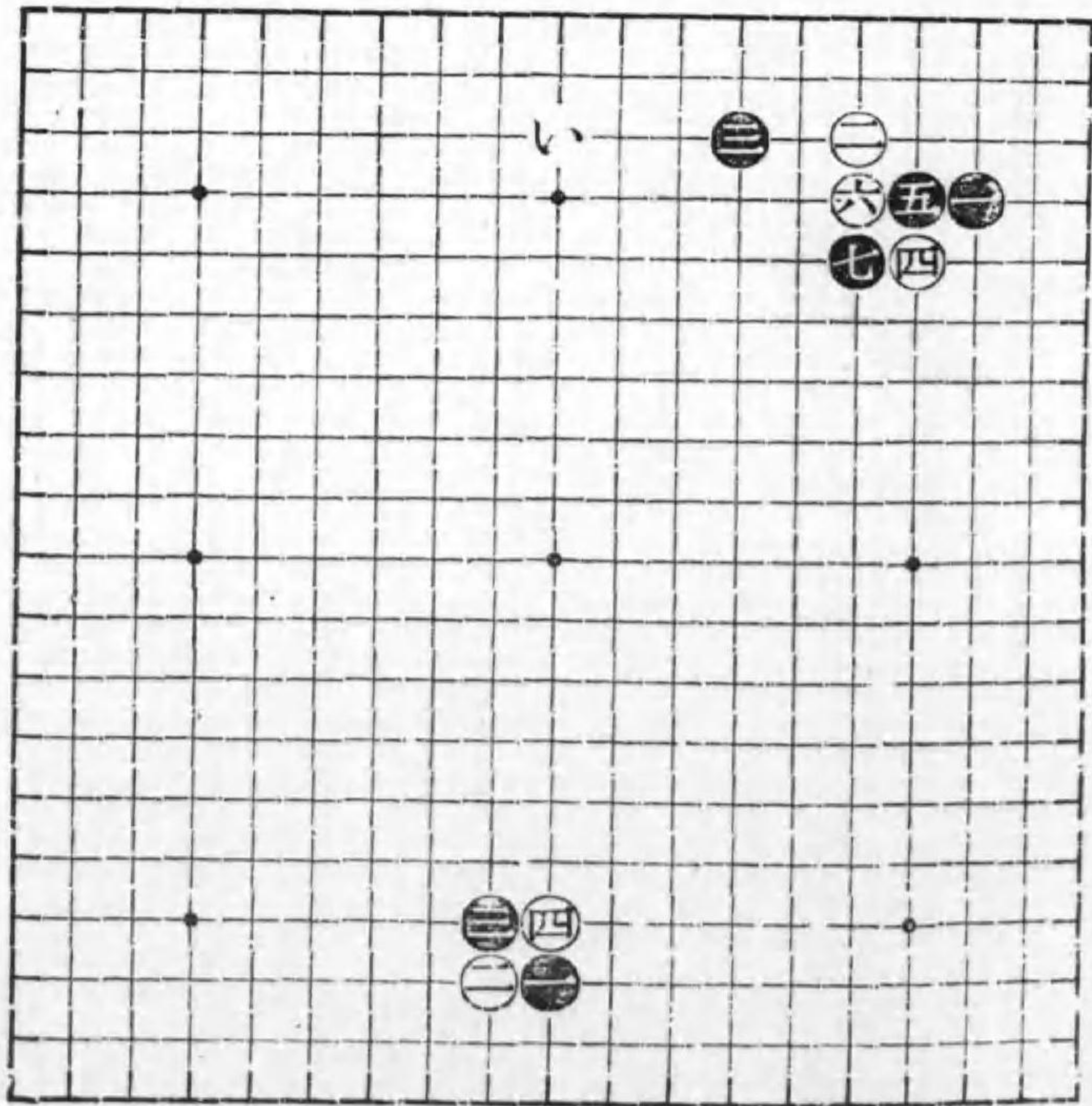
それ、それが本圖黒七と同様である。

突破兩分は勢力を半半にし、それで敵を塵殺できもする。

碁の理は、戦争の理と同様にも見られるもの。

碁の理は、戦争の理と同様にも見られるもの。

碁の理は、戦争の理と同様にも見られるもの。



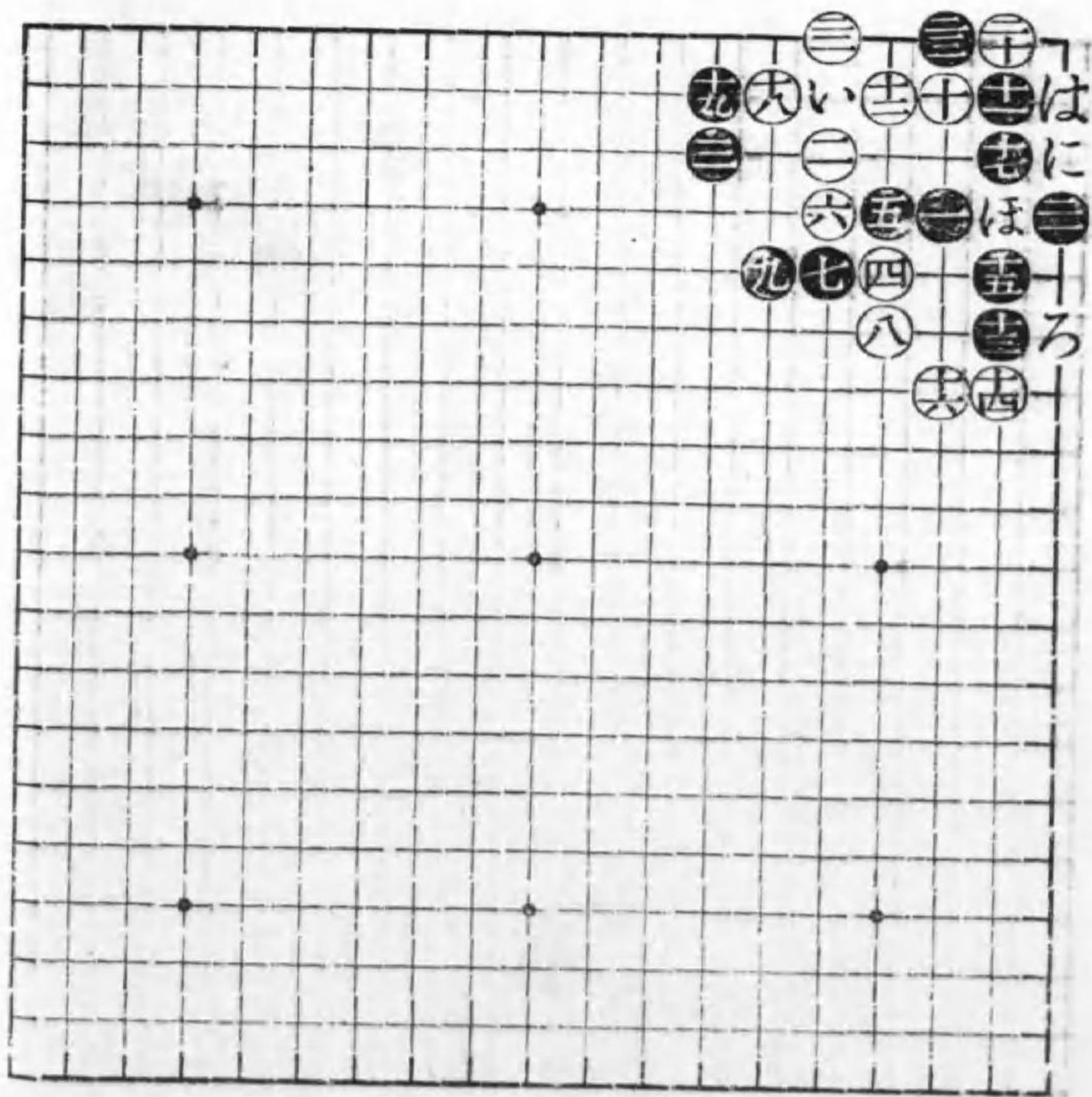
石の死活

黒二十三と成つて、白十二の方は一眼、これが死である。

また黒二十一の方は、两眼あつて、これは活きである。

とそれだけでは判るまいから、其生死の區別は次譜を見られよ。

だが一眼とは白(い)の事、两眼とは白(ろ)なら黒(は)で、(に)と(ほ)が黒の活點といふ。

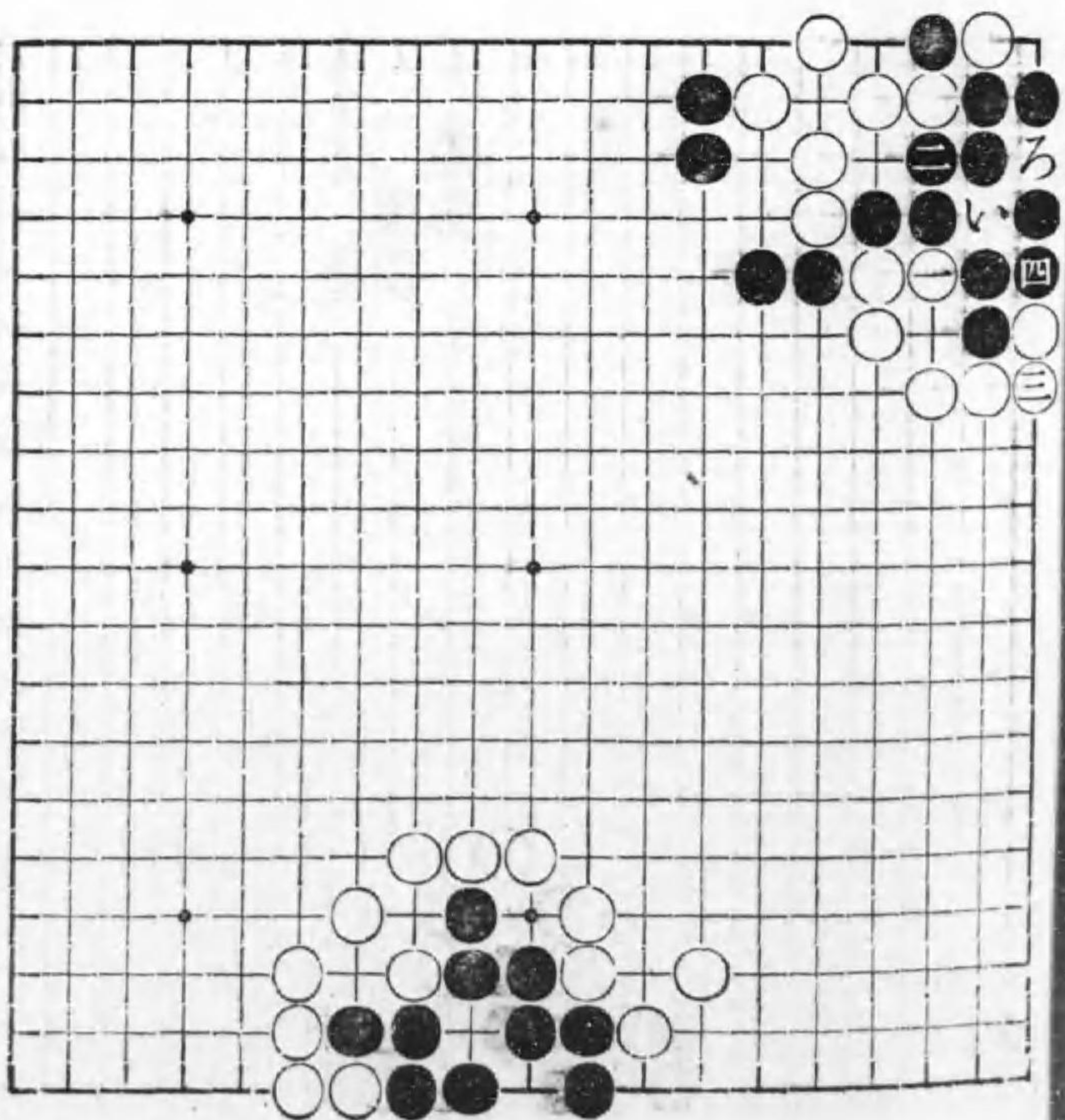


先づ黒の活きから説くことにしやう。

右上隅白一に黒二、また白三に黒四と成る他はないのである。

が黒(い)と(ろ)は完全無欠の本眼であつて、碁は一時に二手打つ事はできないから、従つて白は二手打てなく黒は取られぬ理。

下圖も場所と周圍は違ふが、黒それで活居である。

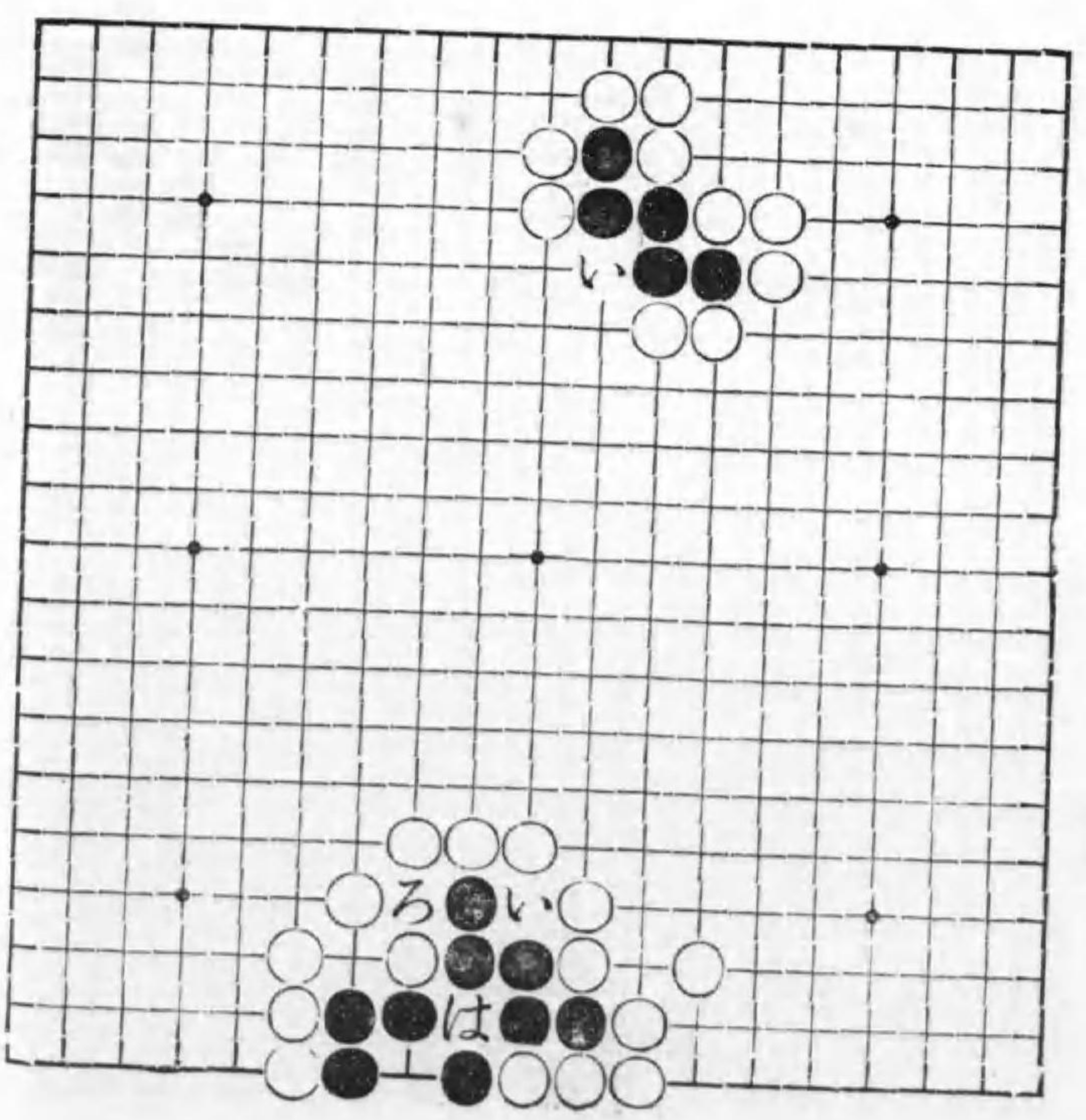


先づ上圖の、白(い)で黒五子が白に取られる事を見られよ——

さすれば下圖の黒死が明瞭である。

即ち本圖は前圖と違ひ、白(い)そして假りに黒他を打ち、また白(ろ)、また黒他を打ち、次に白(は)。

白(は)は黒五子を取つて其の取られた跡が次譜である。



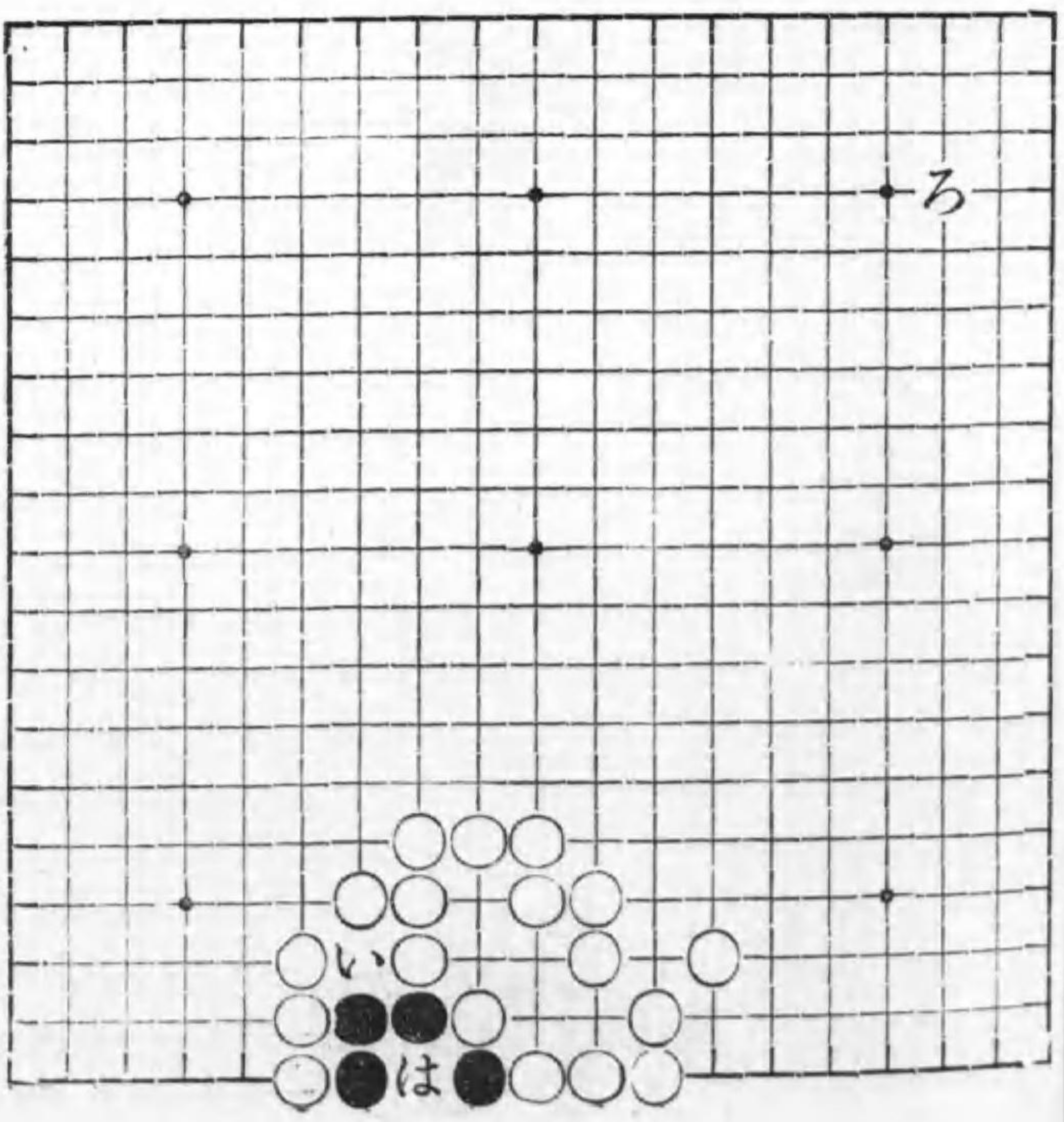
三六

本圖を見て、黒の死活が明瞭であらう。残つた黒四子は、其の態で白に取られて——

で判らないなら、白(ろ)黒次に(ろ)と假りに打ち、そして白(は)。

と黒四子は白に取られるのである。

が其れは一見して黒能動不可と思はれたいもの。



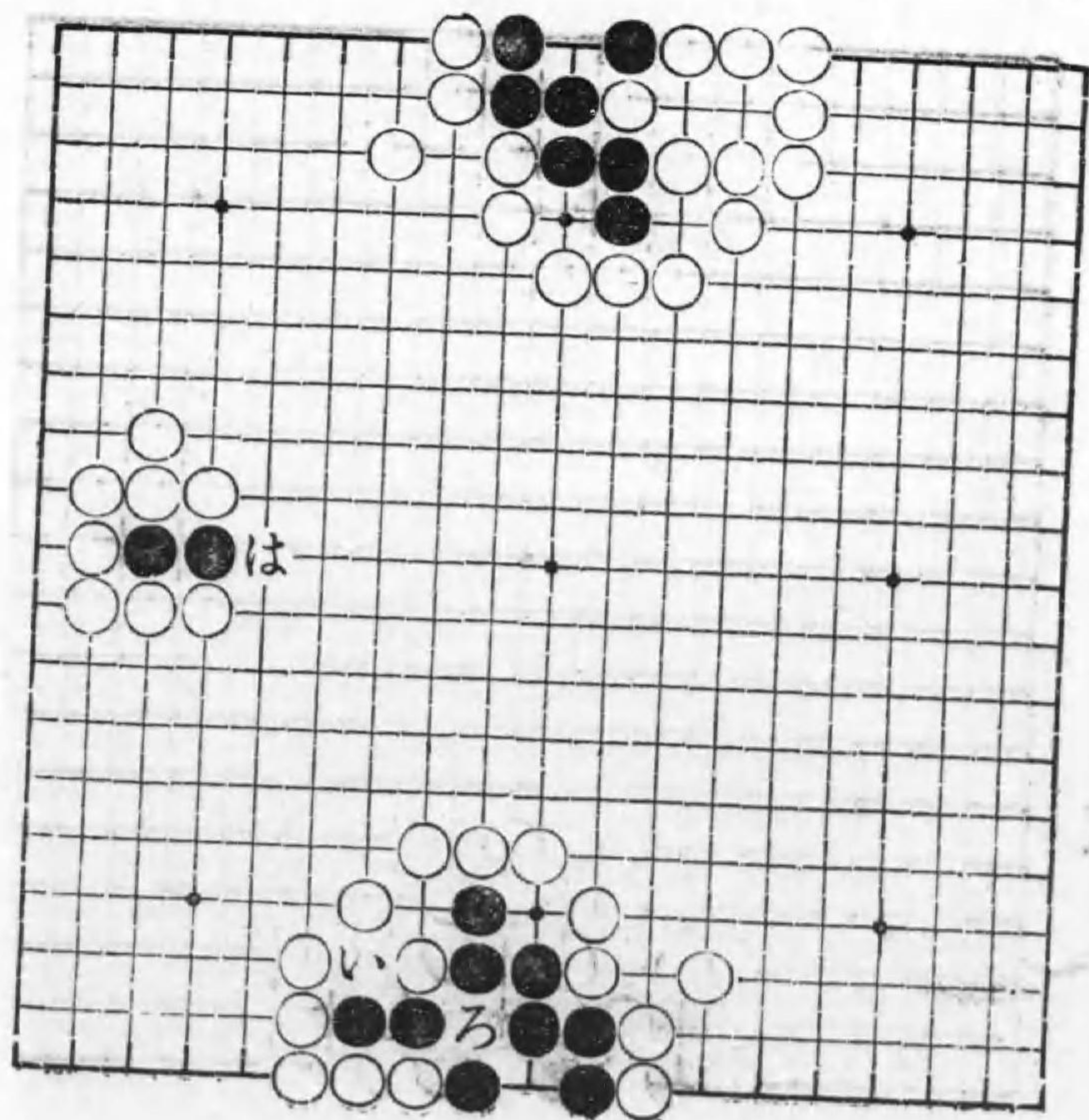
三七

下圖は取られるもので死石である。

即ち白(い)で(ろ)の所が當りであつて、(ろ)を欠目といふのである。

其理は左側の圖、白(は)で其黒二子を取れると同様である。

上圖は白(ろ)と白が黒二子を打抜いた跡で、黒活きでないのが明瞭であらう。



下圖の黒は活きである。

即ち白(い)また白(ろ)白

(は)と、白三手で其黒二子

取つても――

次は白(は)の一子を黒が

取返して――

それが上圖に見られる、

黒が取返した現はれである

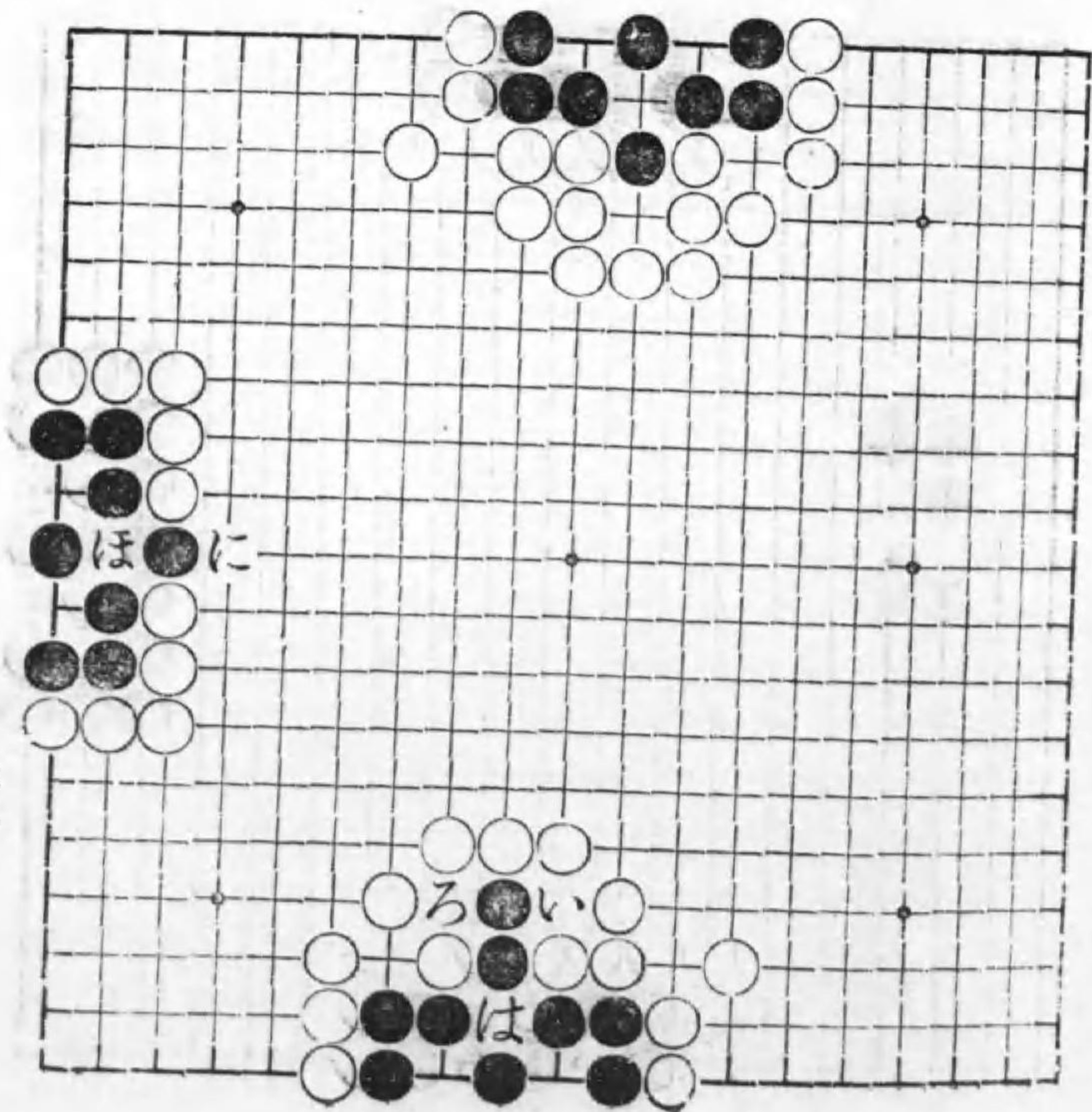
更に左側を見られよ、白

(に)なら黒(ほ)。

で黒完全無欠の活居と同

様である。

石の死活

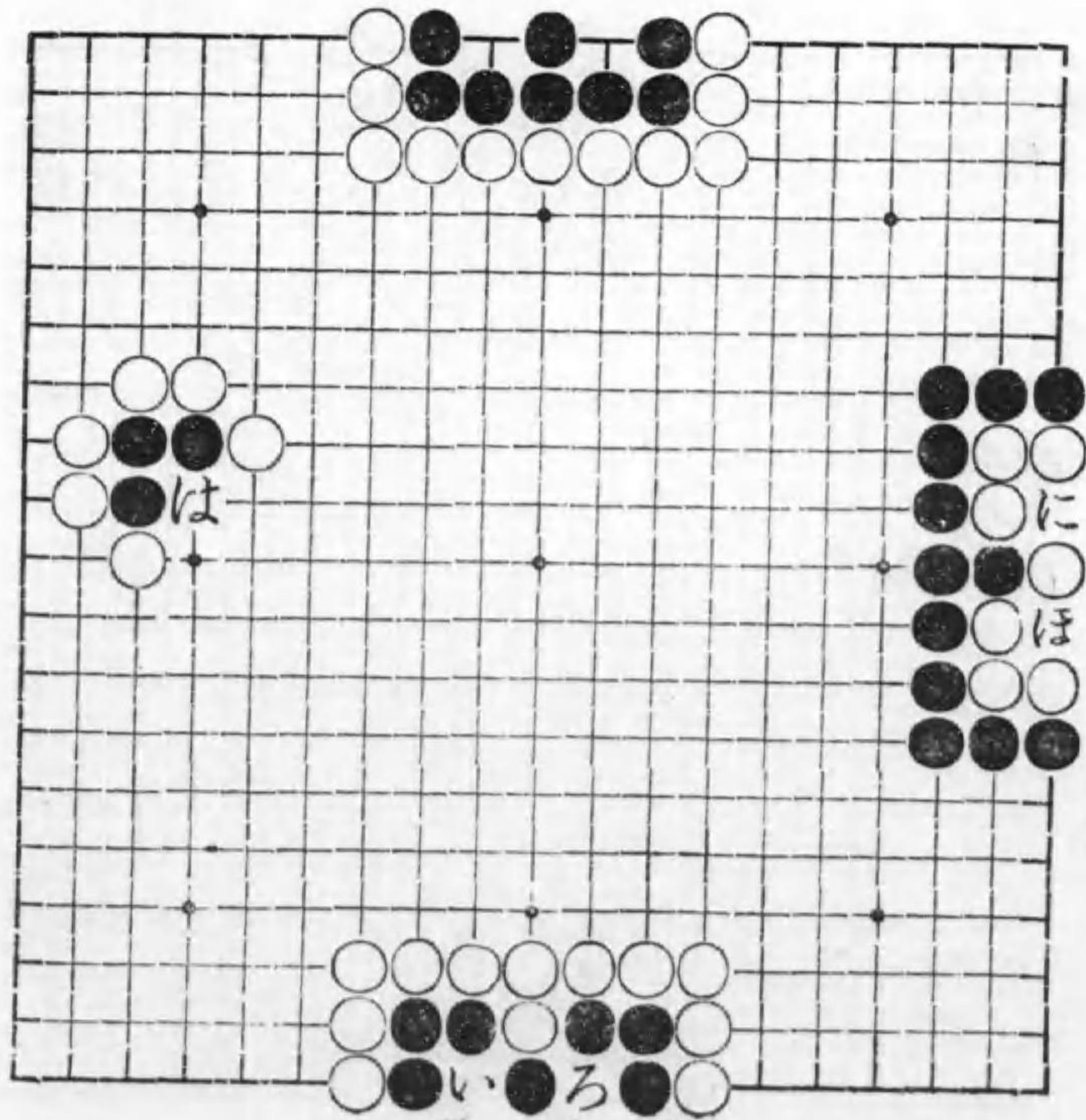


下圖の黒は死石である。
それは白(い)でも、また
(ろ)でも其黒三子が取れる
からである。

其理は白(は)で其黒三子
取れるのと同様。

上圖の黒は——活きであ
ると最早解つた筈。

白(い)、また白(ろ)と其
黒を取れると同様、右側の
白は黒(に)また黒(ほ)で白
の死石は言ふ迄もない。



四〇

右上隅、其白五子は黒に
取られるもの——

即ち其下の白三子が、黒
(ろ)で黒に取られるのと同
理である。

右下隅は白活居である。

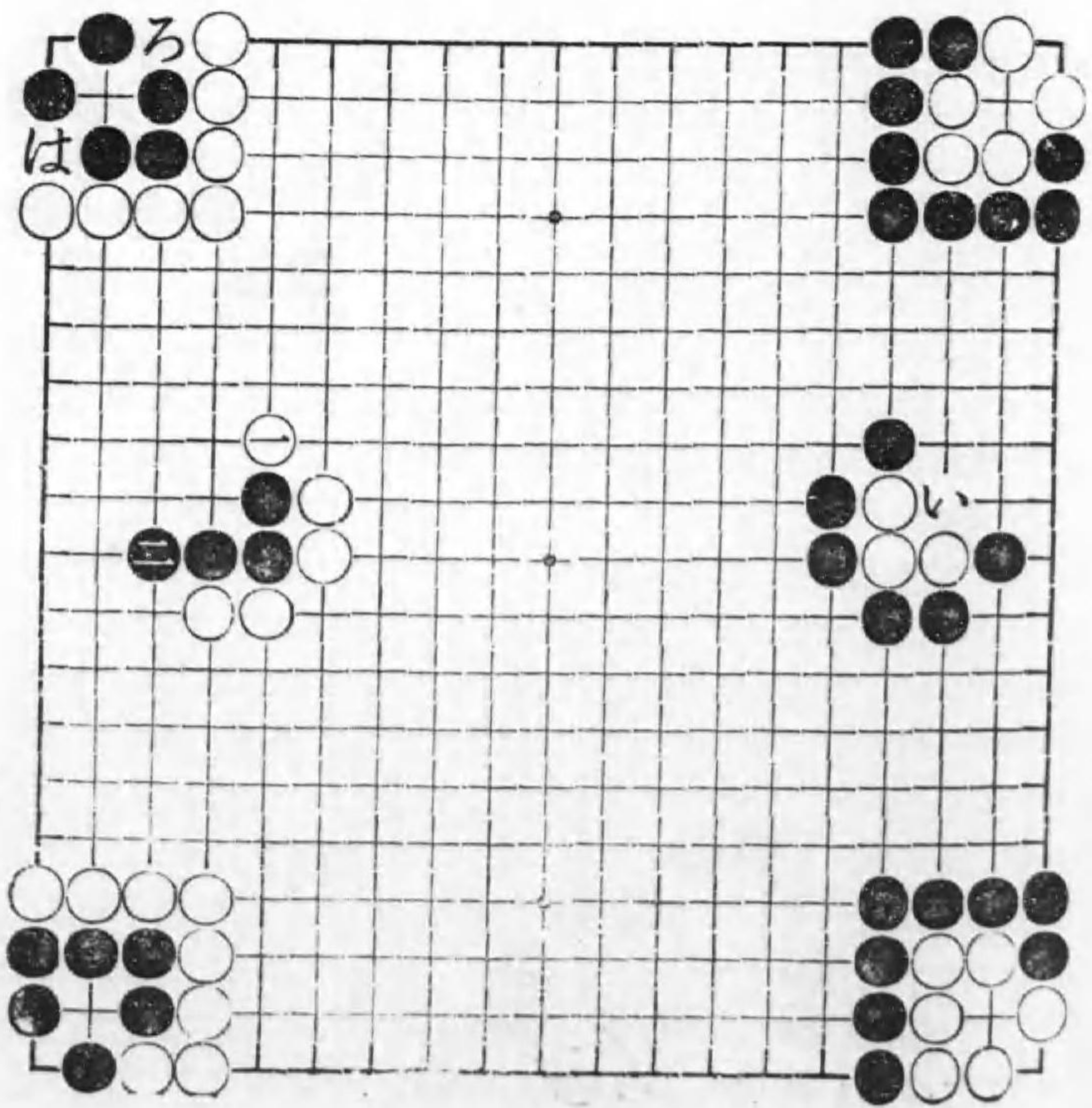
左上隅、白(ろ)と來たら

黒直下(は)と必要である。

黒(は)と用心の其圖が黒活
居の左下隅である。

白一と來たら、黒二と用
心と同様の理。

石の死活



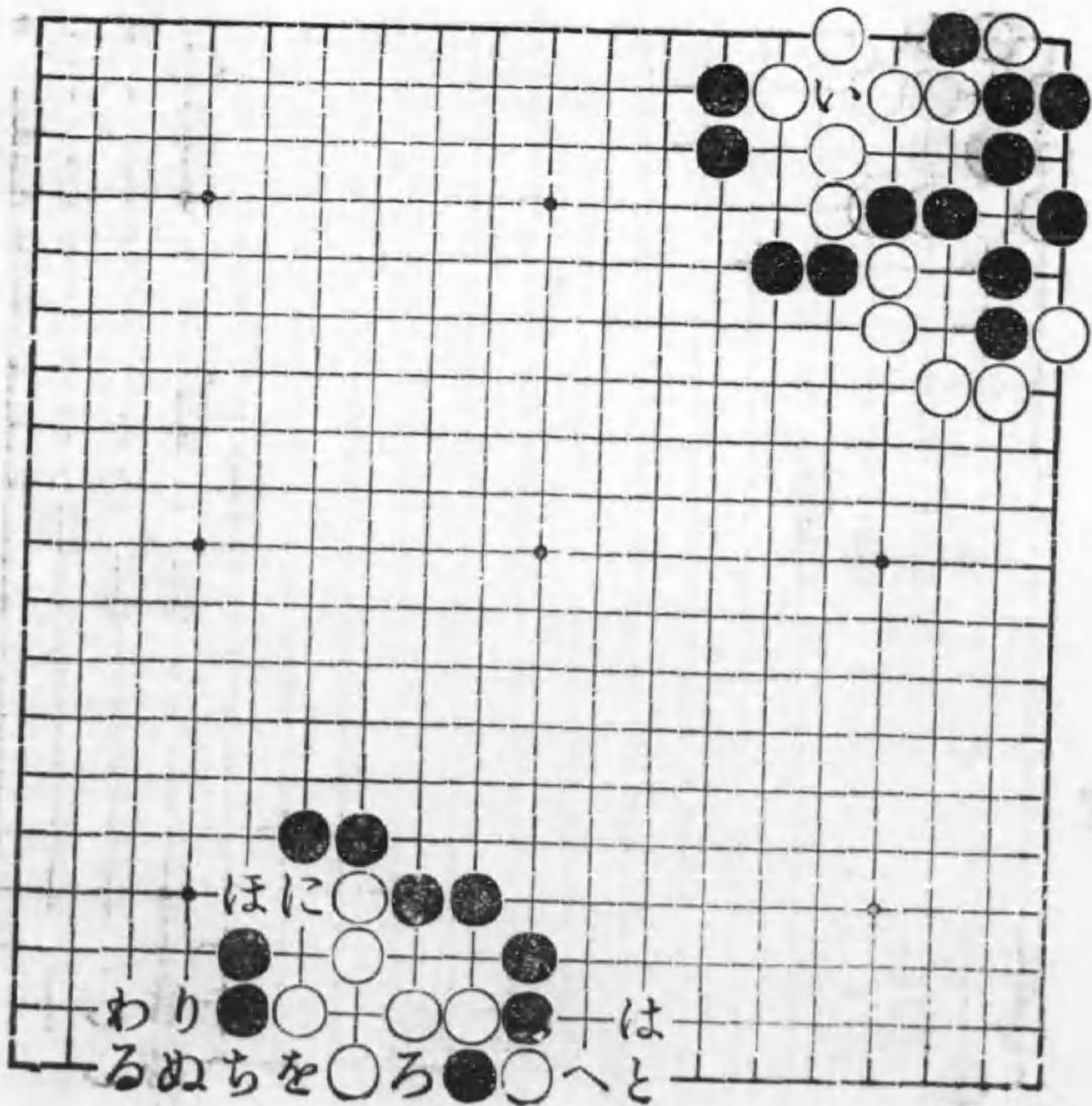
四一

右上隅の白は(い)に一眼
それでは死である。

此れを下圖に見られよ、
白(ろ)と黒一子を取つても
其跡が欠目。

即ち白(ろ)の次に黒(は)
で、白は活路が無いのであ
る。

白に活路が無いとは、白
(に)黒(ほ)白(へ)黒(と)白
(ち)黒(り)。
なほ白(ぬ)黒(る)白(を)
黒(わ)として、此次圖を見
られよ。



下圖は、白(い)黒(ろ)白
(は)だと――

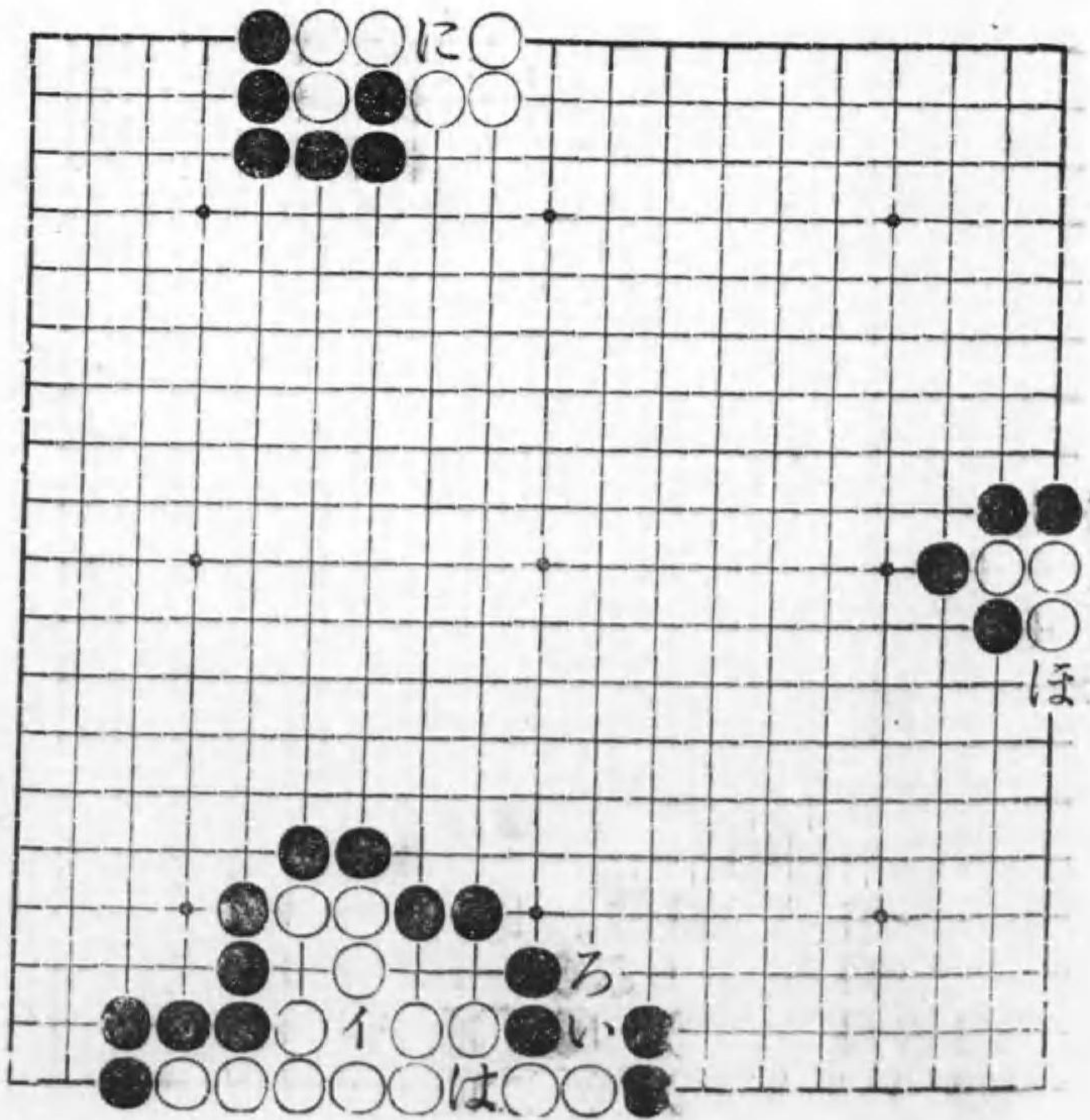
言ふまでもない白(い)に
一眼。

白(は)は其處で黒に取ら
れるからである。

それは黒(に)で、また黒
(ほ)で白三子を黒に取られ
るのと同理。

(に)の所は白からなら粘
ぎ。また黒からなら取り。
と餘地があるのである。

石の死活



下圖は白一眼、それは黒に取られる——

といふのは、自然黒(ろ)

黒(ろ)黒(は)黒(に)となる

からである。

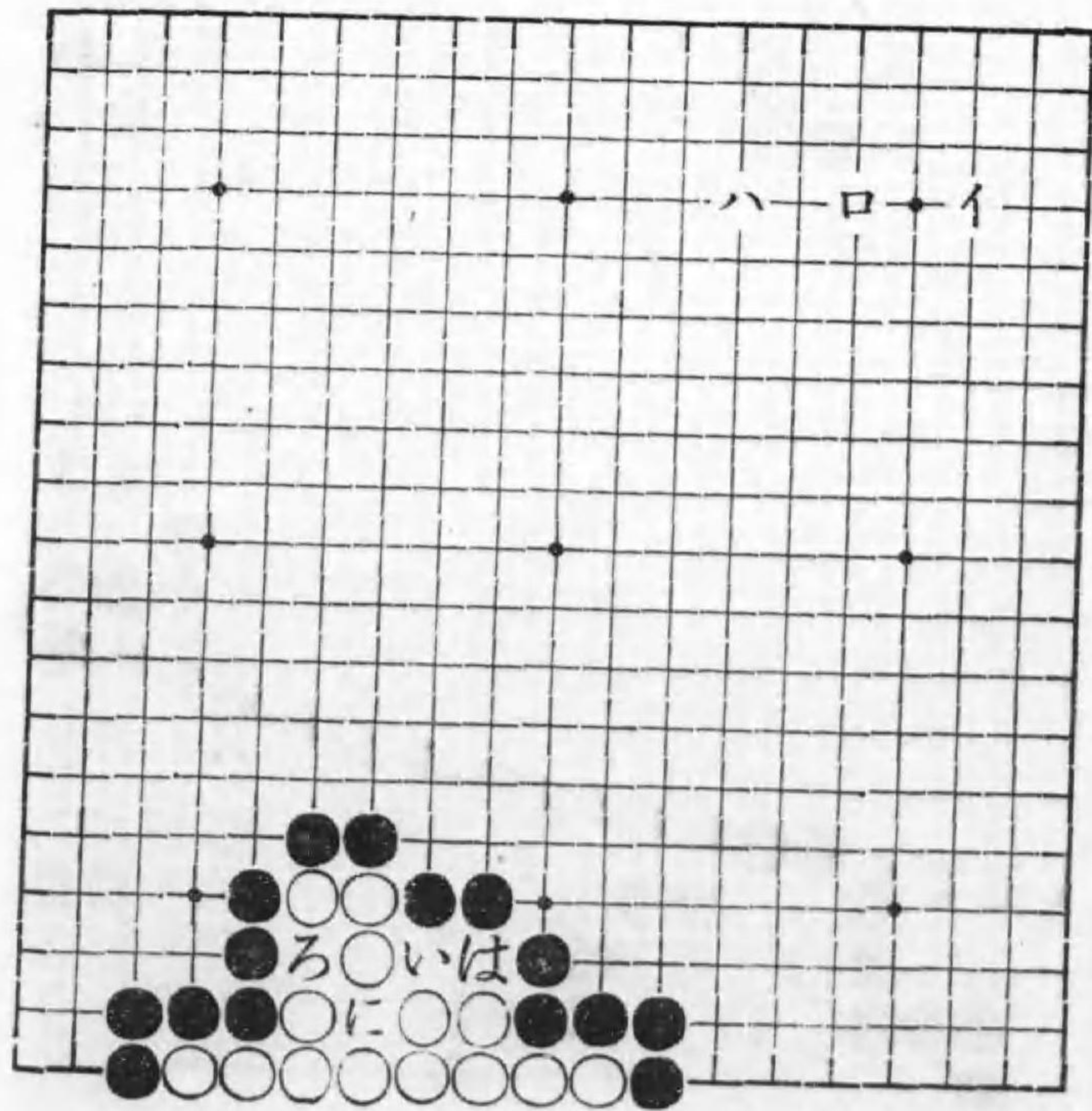
一人で二手打てないといふのに——

それを黒四手も? それ

なら黒(ろ)白(い)黒(ろ)白

(ろ)黒(は)白(ハ)黒(に)。

で明瞭であらう。



四四

下圖は、前譜黒(い)より(に)までの、白十四子を打上げたもの。

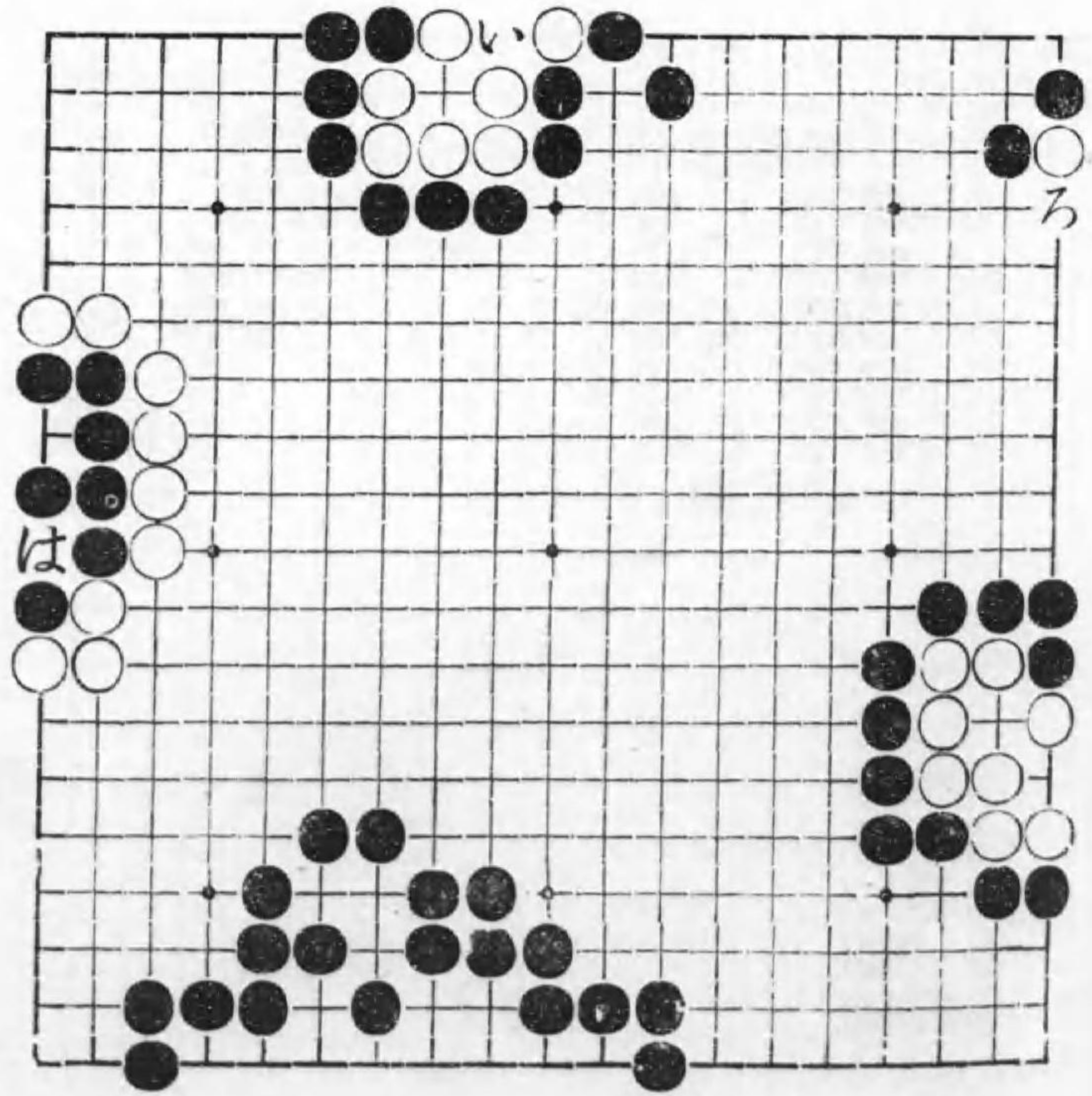
上圖は(い)と黒が行き、其餘地があつて白死石である。

右側なら白活居である。

黒(い)の理は、黒(ろ)で白を取れると同理。

なほ形ちは違ふが白(は)で、其黒の一團は死石である。と加えておく。

石の死活



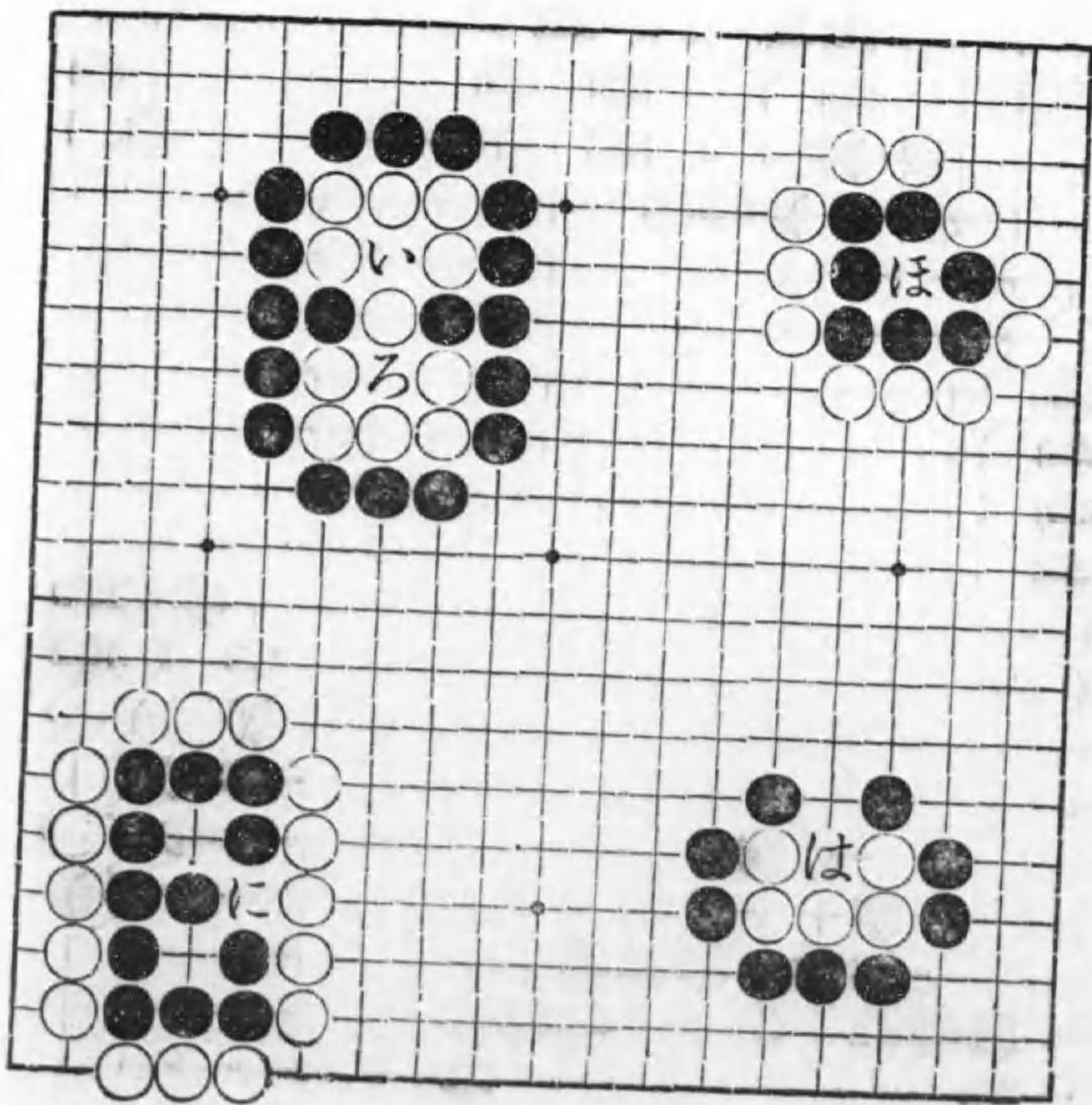
四五

本圖四題の中、黒(ろ)でも(ろ)でも白五子を取れ、其白の一團は死石である。それは――

黒(は)で其白五子が黒に取られるのと同理。

左下隅の黒二眼の一團は(に)に無くともそれで活居といふ理は――

(ほ)の所は黒が一眼、即ち白(ほ)と白に取られるからである。



本圖四題の中、白先白一が活點である。

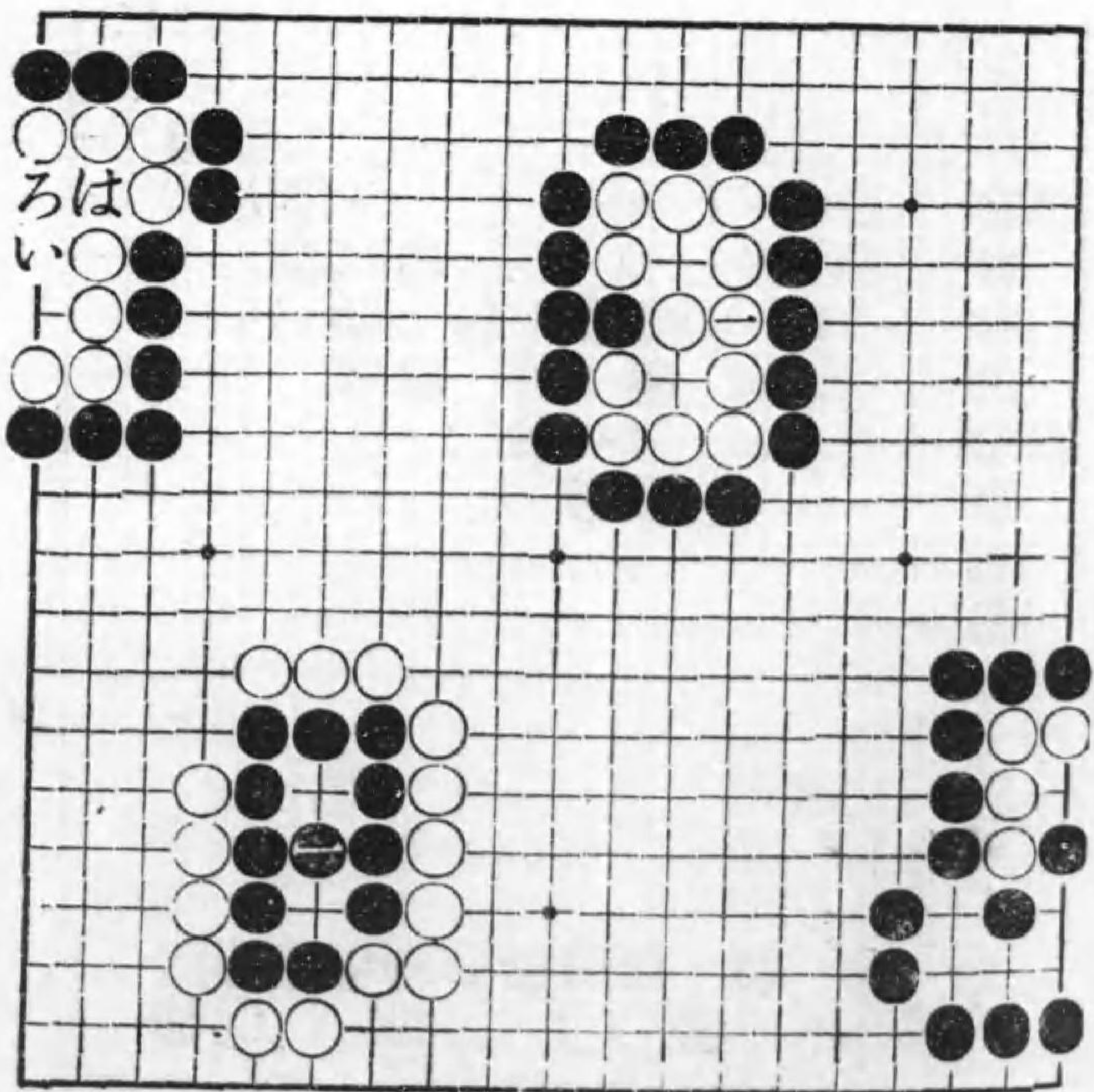
黒(い)に白(ろ)だと、黒(は)で――

白五子を取られた、其跡が右下隅の圖。

だから白先(い)だと、其白は活きの道理。

黒一の所は其一でそれが黒に活點。

従つて白先一だと、其黒は白に取られる道理である



本圖三題の中、白(い)黒(ろ)白(は)なら、黒(に)で隅に黒一眼。

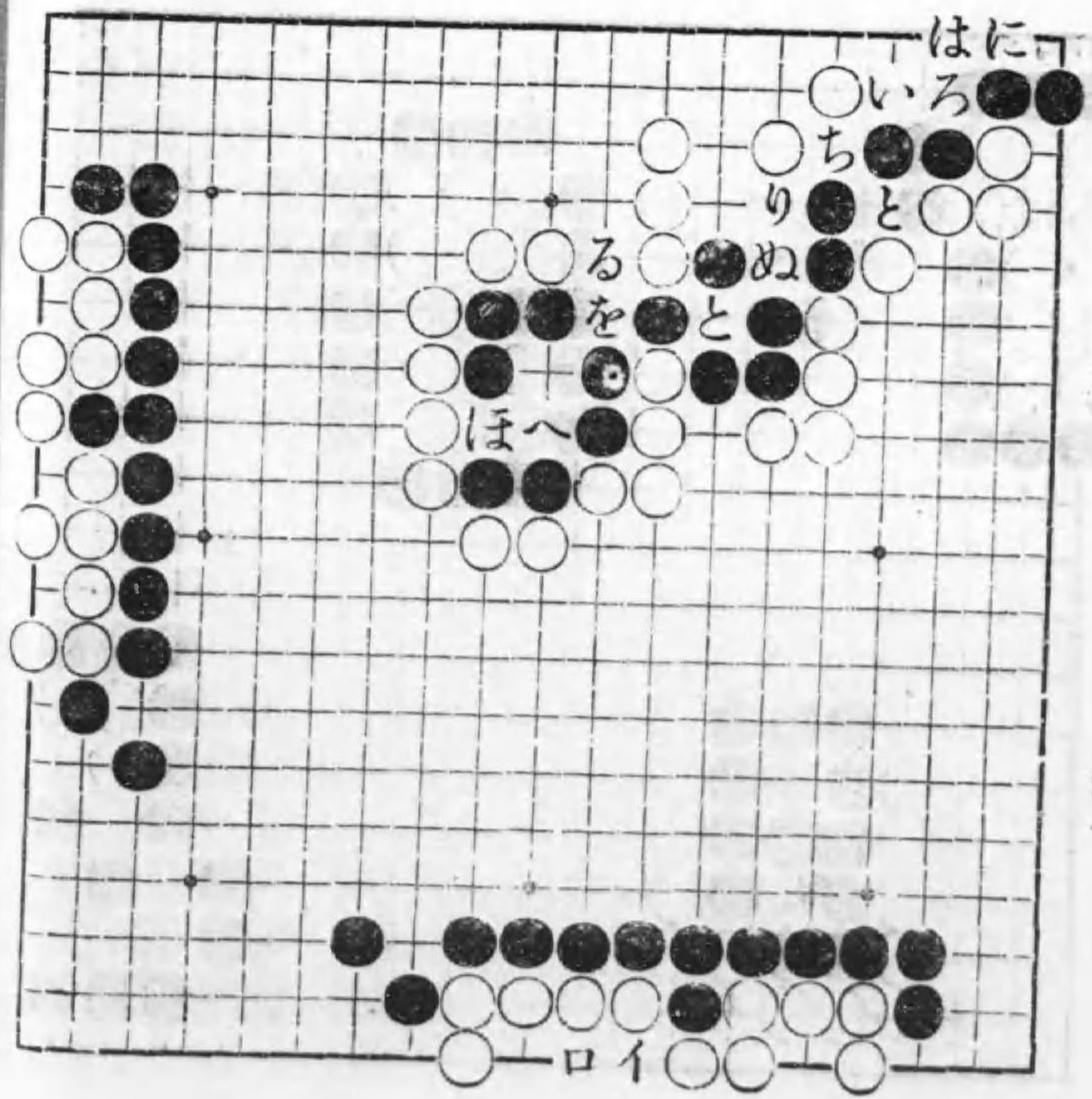
そして白(ほ)なら黒(へ)で此處にも黒一眼。

されば(と)の所は欠目でも黒は完全な活きである。

なほ白(と)に黒(ち)、白(り)に黒(ぬ)、白(る)に黒(を)で黒連続。

下圖(黒イ)に(白ロ)で

左側の黒欠目のある活。



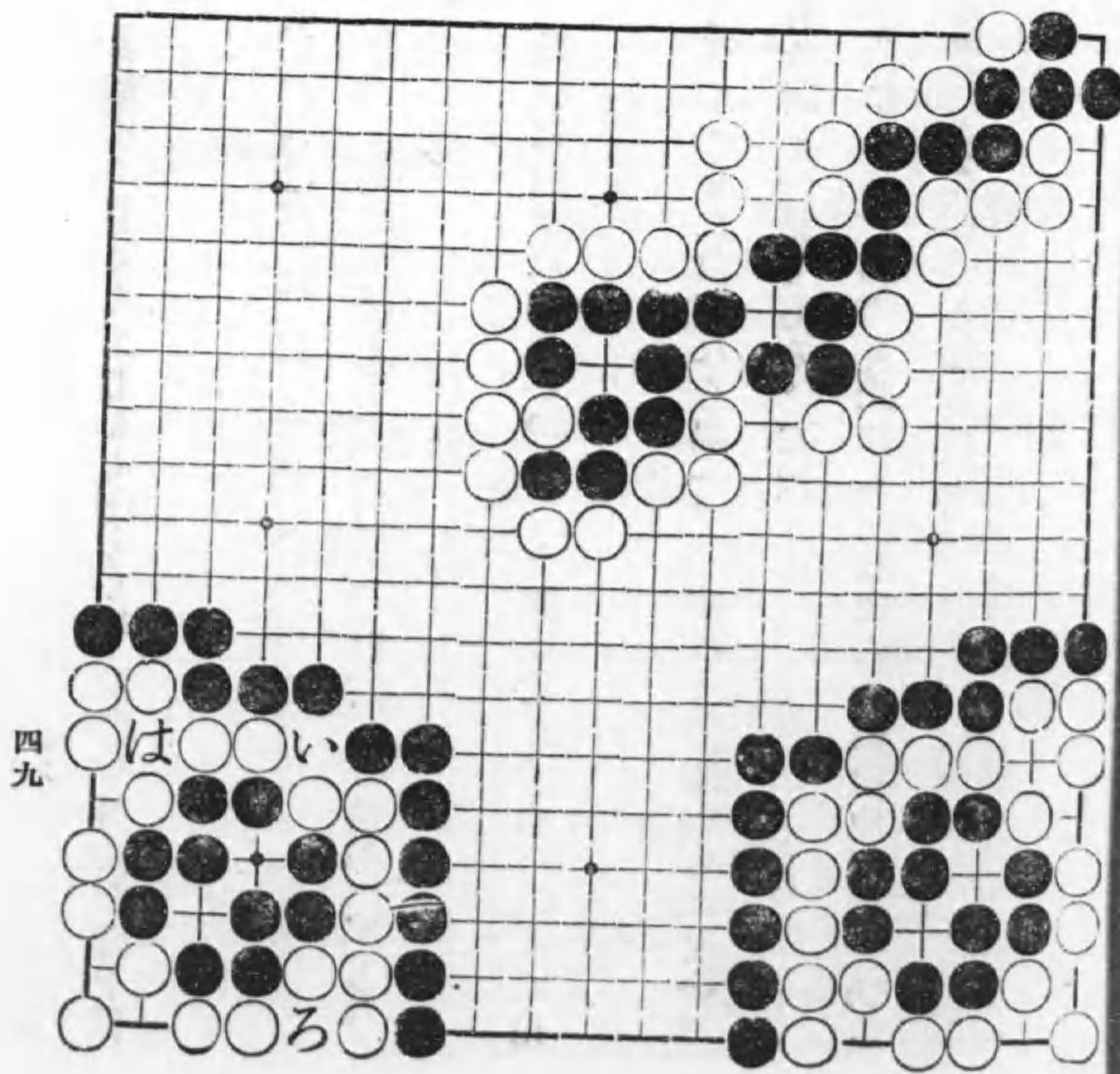
四八

右上隅より中央に亘る、其圖は、黒完全に連続活居である。

右下隅は、白欠目で連続面白い活きである。中の黒は、無論立派な二眼の活居である。

それが——黒(い)と黒に切られたら最後、黒(ろ)で白七子は取られる、黒(は)で白二子は取られる。要するに隅まで白は全滅である

石の死活



四九

同じ形が出るやうだが、それは充分に頭に入れてもらはうと、説者も努力し圖を作り出してゐるのである。

白先、白(い)だと、次に黒(ろ)白(は)黒(に)白(ほ)黒(へ)白(と)——
成程、それで白に取られる、な。と其處が黒先手なら考え、白(い)の前黒(い)と、それを活點に備えるのである。

黒(イ)白(ロ)黒(ハ)白(ニ)。此れは白を取れない、な。と黒は考え、白の時なら用心の要は無し。

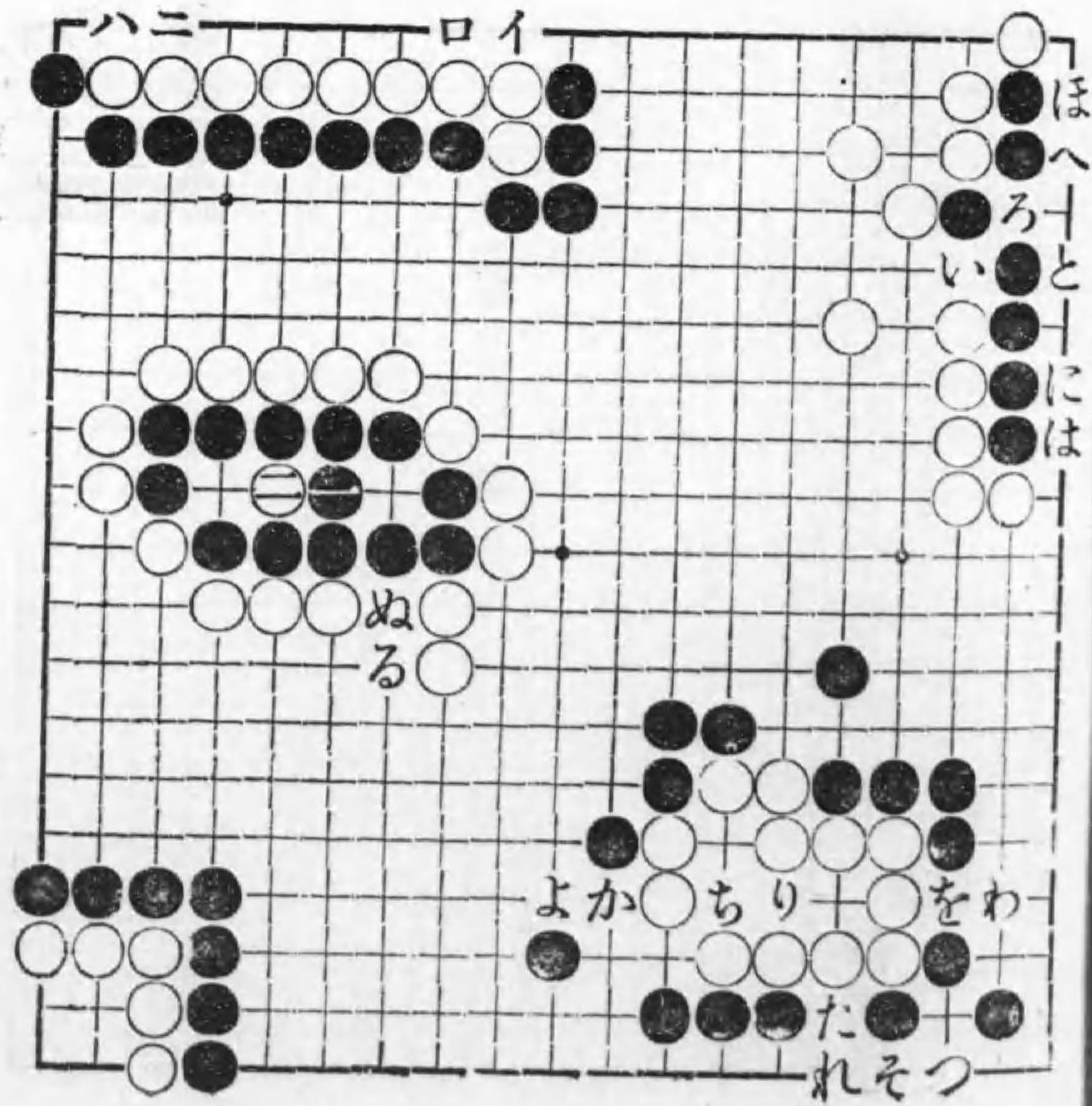
其引例の證左に——白一なら黒二。また白二なら黒一。で何れも黒は取られない。と其處は一見、即ち中に四目有る所を一目である。なほ——

黒(ち)なら白(り)。また黒(り)なら白(ち)。と此れも白は取られぬ白地四目である最後の左下隅、白地四目の所は黒に取られ。と知られよ。

黒(ぬ)なら白(る)と止め。
白(を)なら黒(わ)と止め。
また白(か)は黒(よ)。と何れも白の出を止められるのである。

なほ白(た)に黒(れ)と。
其時白(そ)なら黒——

(つ)で白(そ)の一手は黒が取れる。従つて白は(そ)等に行かぬもの。



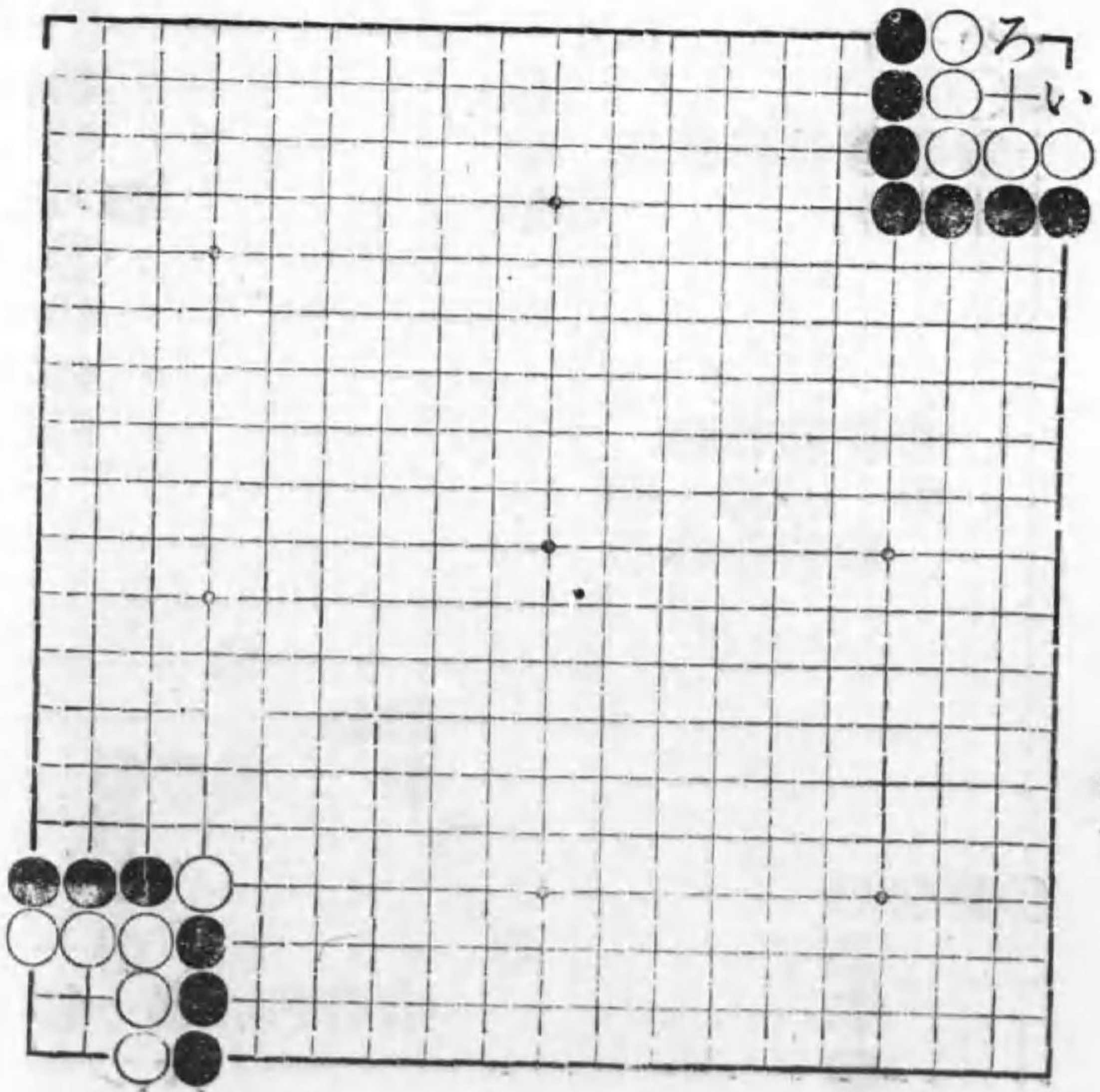
石の死活

右上隅は白(い)なら、黒(ろ)。また白(ろ)なら、黒(い)と、何れも白に二眼を與えぬ所。

されば隅の白五子は自然消滅である。

が外部の黒を白が包圍の場合いは、其白打上げの數手は要するもの。

それを左下隅で説明しやう、即ち圖の如く黒が白に切られたものとして。



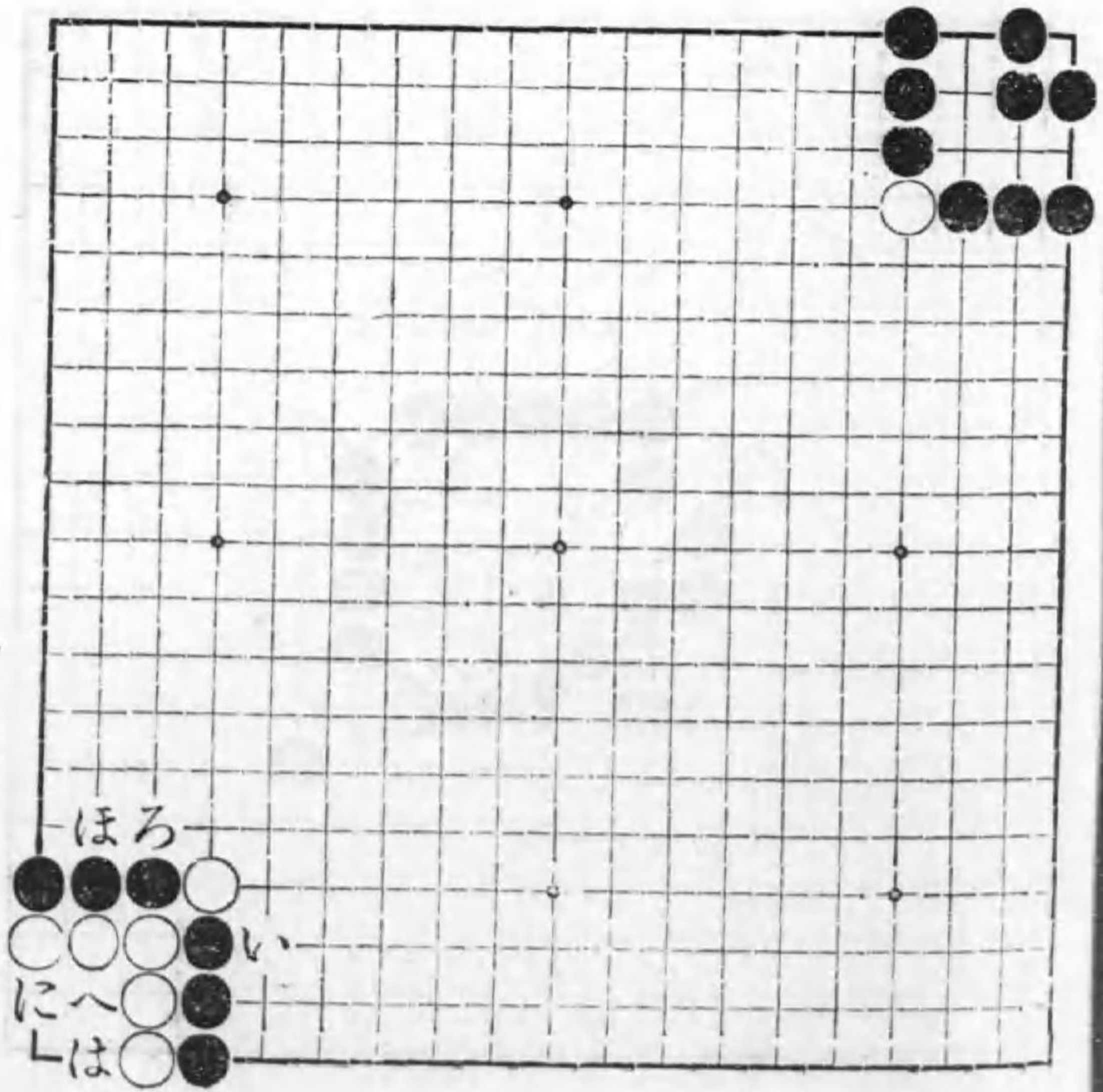
左下隅は攻合ひであつて白先だと白(い)でも(ろ)でも黒にとつて最悪な所。と認識——

黒先(は)。

に白(い)または(ろ)にも黒(に)。

黒(に)に白(ほ)なら、黒(へ)で白五子を打上げ。其跡が——

残、白一子の右上隅白惨敗の圖。



前圖の白隅で四目の攻合
いも、本圖の如き中央での
攻合いも、歸するところは
同様である。

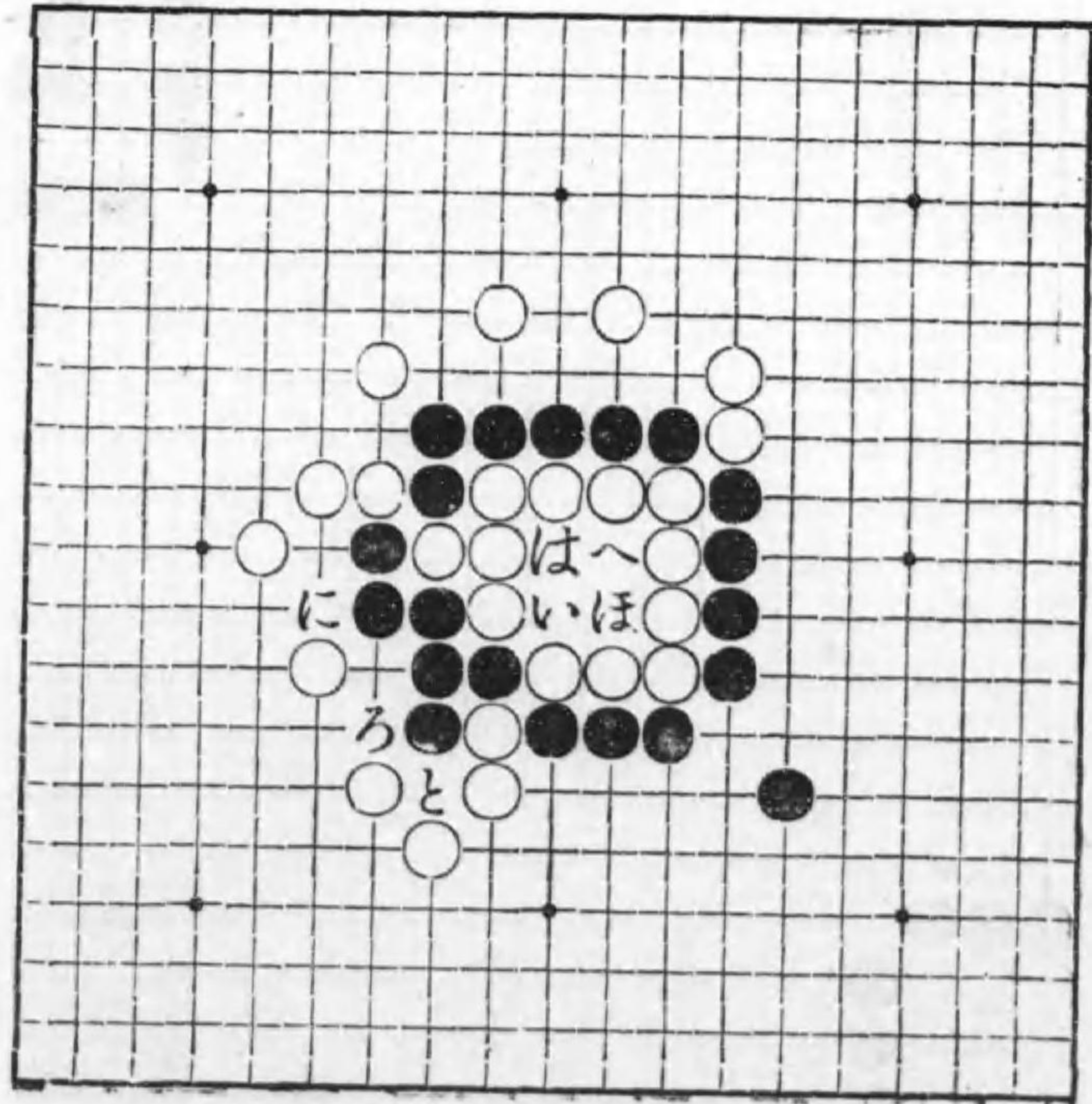
黒先黒(い)で黒勝ちであ
る。

即ち次に白(ろ)、黒(は)

白(に)黒(ほ)――

に白(へ)と黒三子を取り、
に黒(い)と打込み、そして
白(と)黒(は)――

此れを次譜に見られよ。



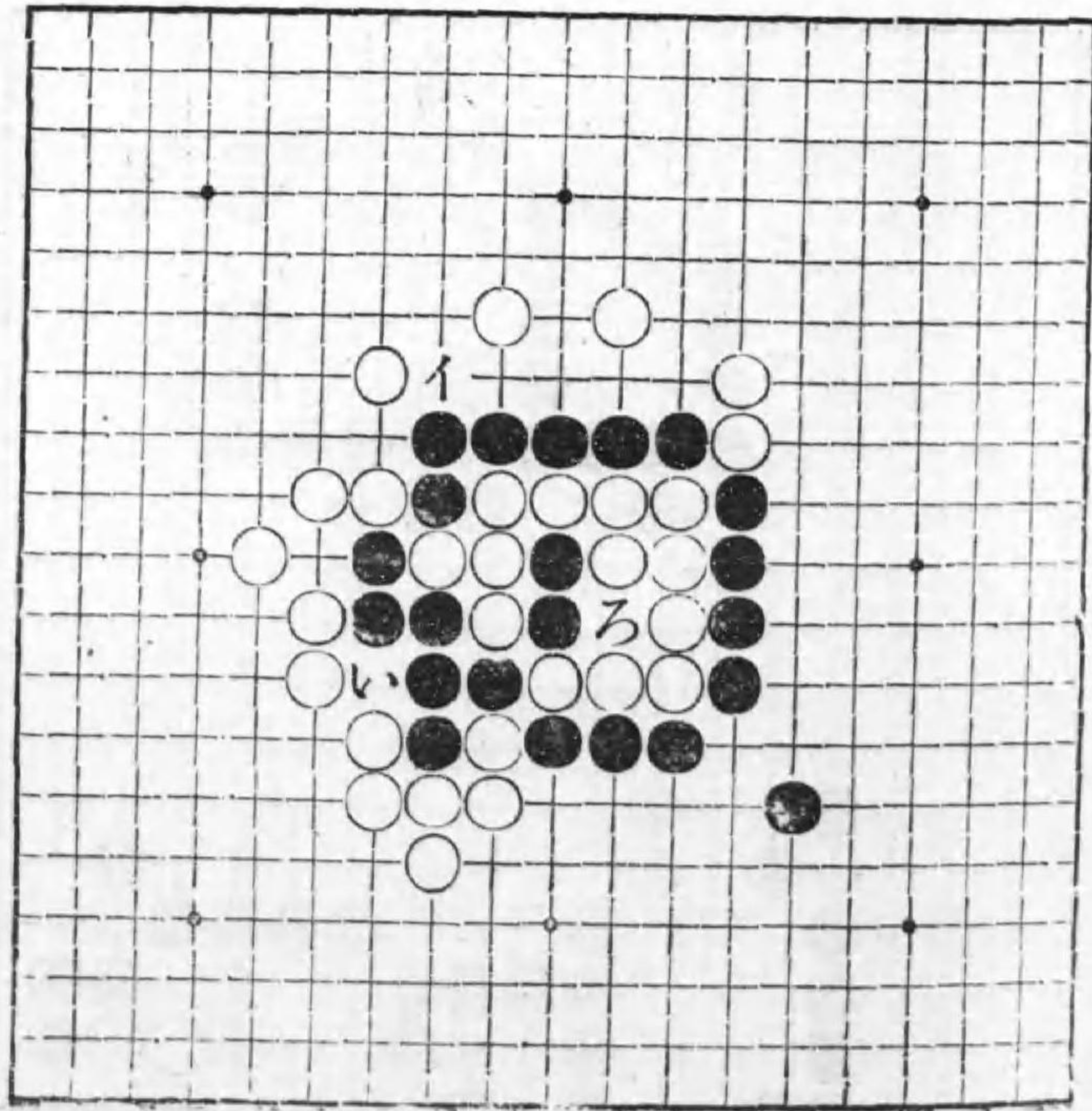
白(い)だと黒(ろ)で黒が
一手早い、即ち其白全部黒
が打上げである。

が白(い)を(ろ)と黒二子
取りでも――

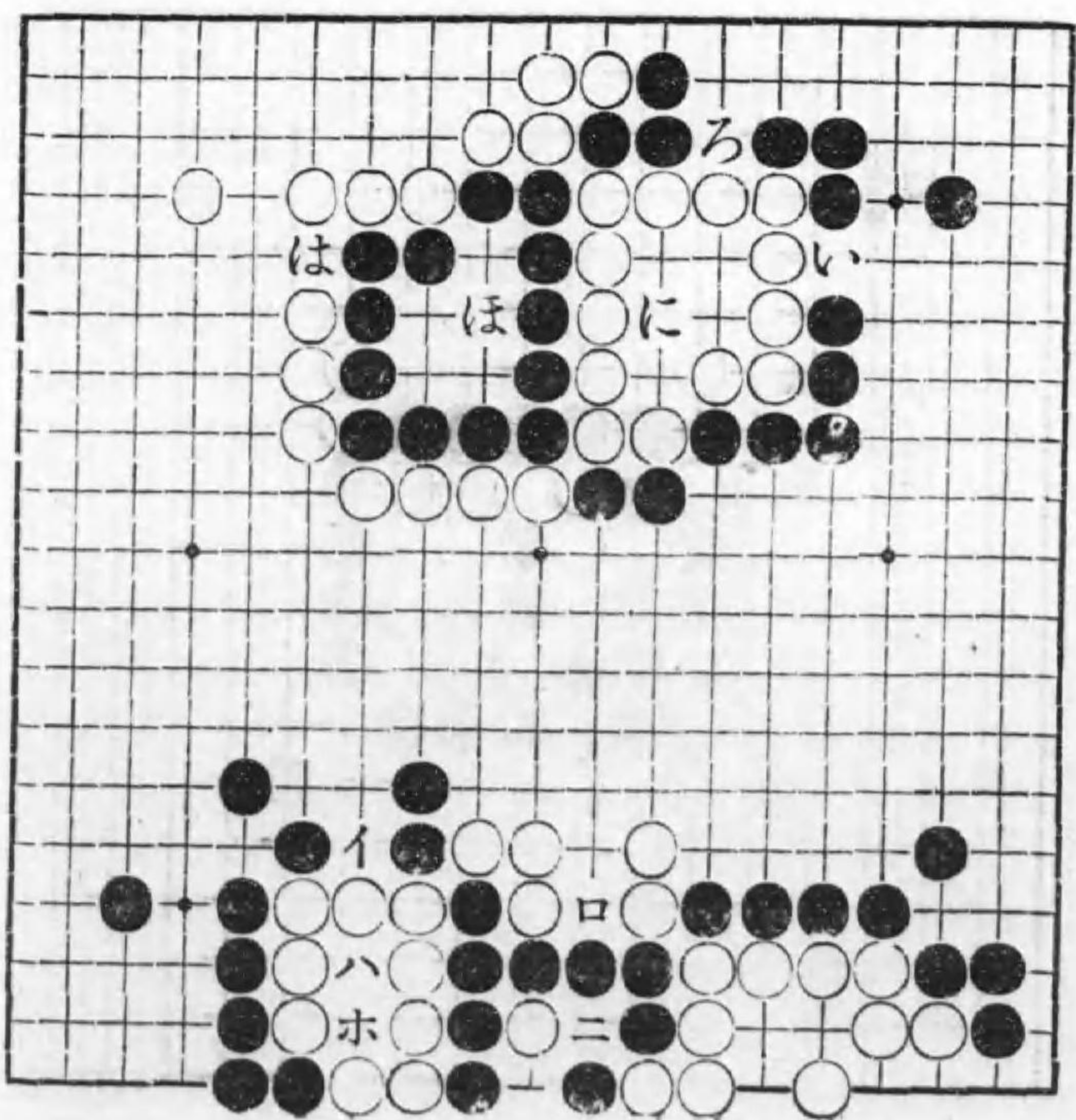
黒直に二子取られた跡へ打
込み、同様黒が一手早い。

即ち此時白(い)なら、黒は
全部の白を打上げ。

白(い)と、其方は黒六手
駄目あき、白二手負けであ
る。それは前譜での事。



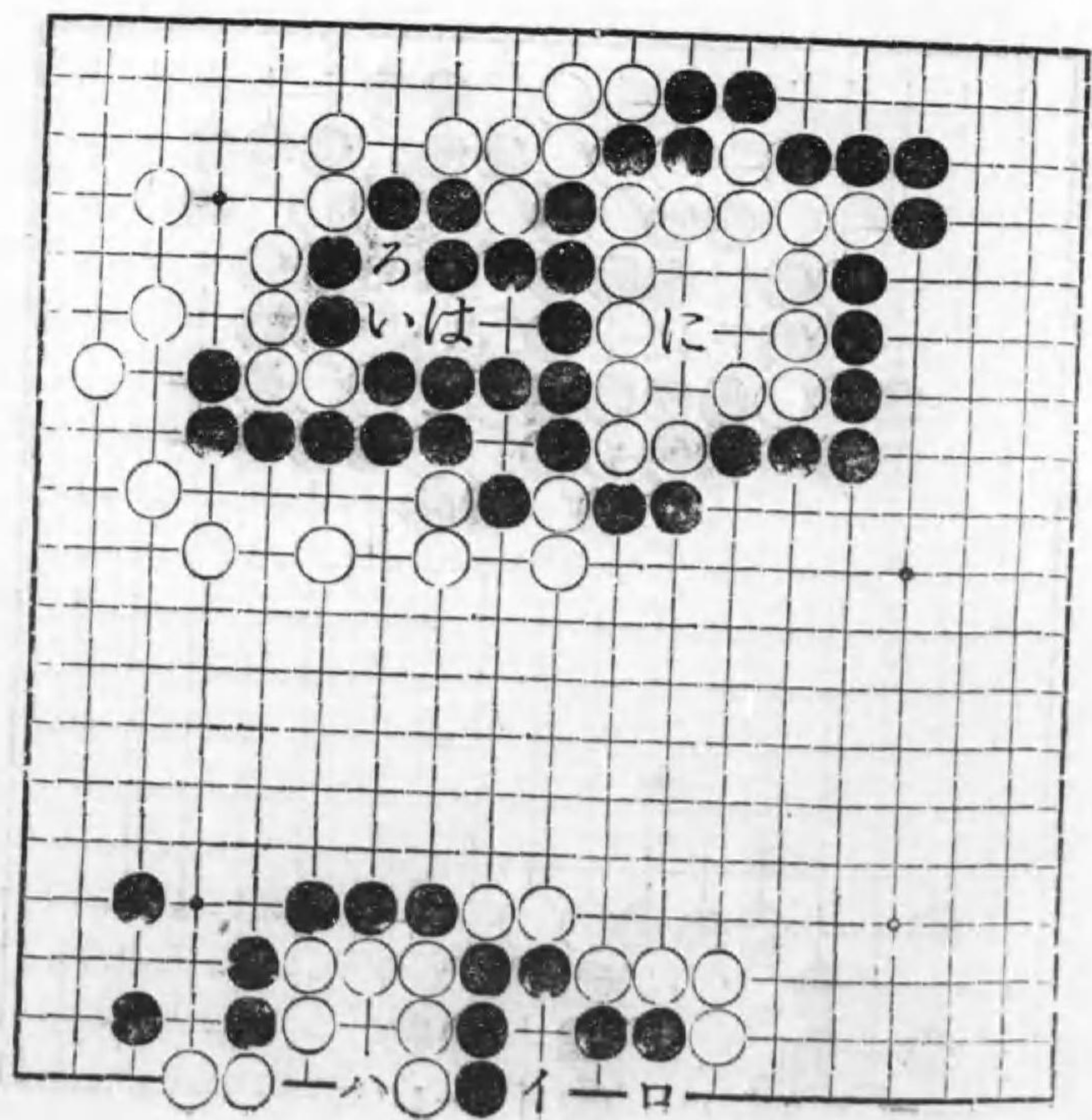
白には(い)(ろ)の二ヶ所
 黒には(は)の一ヶ所。斯様
 な際、黒先として黒(に)だ
 と白(ほ)で黒は攻合負け。
 と黒は考え、黒(ほ)白(に)
 と活活にするもの。
 黒(イ)白(ロ)黒(ハ)で、
 此處は堵易い黒勝の所。即
 ち次に白(ニ)なら、黒(ホ)
 で白九子打上げ。



本圖二題も黒先として。
 黒(い)と用心の要がある。
 白先白(い)だと、黒(ろ)白
 (は)で黒は一眼だからであ
 る。

が黒の周圍に駄目が多い
 と黒は見て黒(に)で黒攻
 合勝。

下圖は黒先黒(イ)
 に白(ロ)であらうから、
 次に黒(ハ)。
 黒(イ)を(ハ)だと白(イ)
 で黒敗。



なほ判り易く説かう。

黒先黒(い)。に白(ろ)黒

(は)白(に)。

次に黒(ほ)白(へ)黒(と)

白(ち)黒(り)白(ぬ)黒(し)

以下次譜。

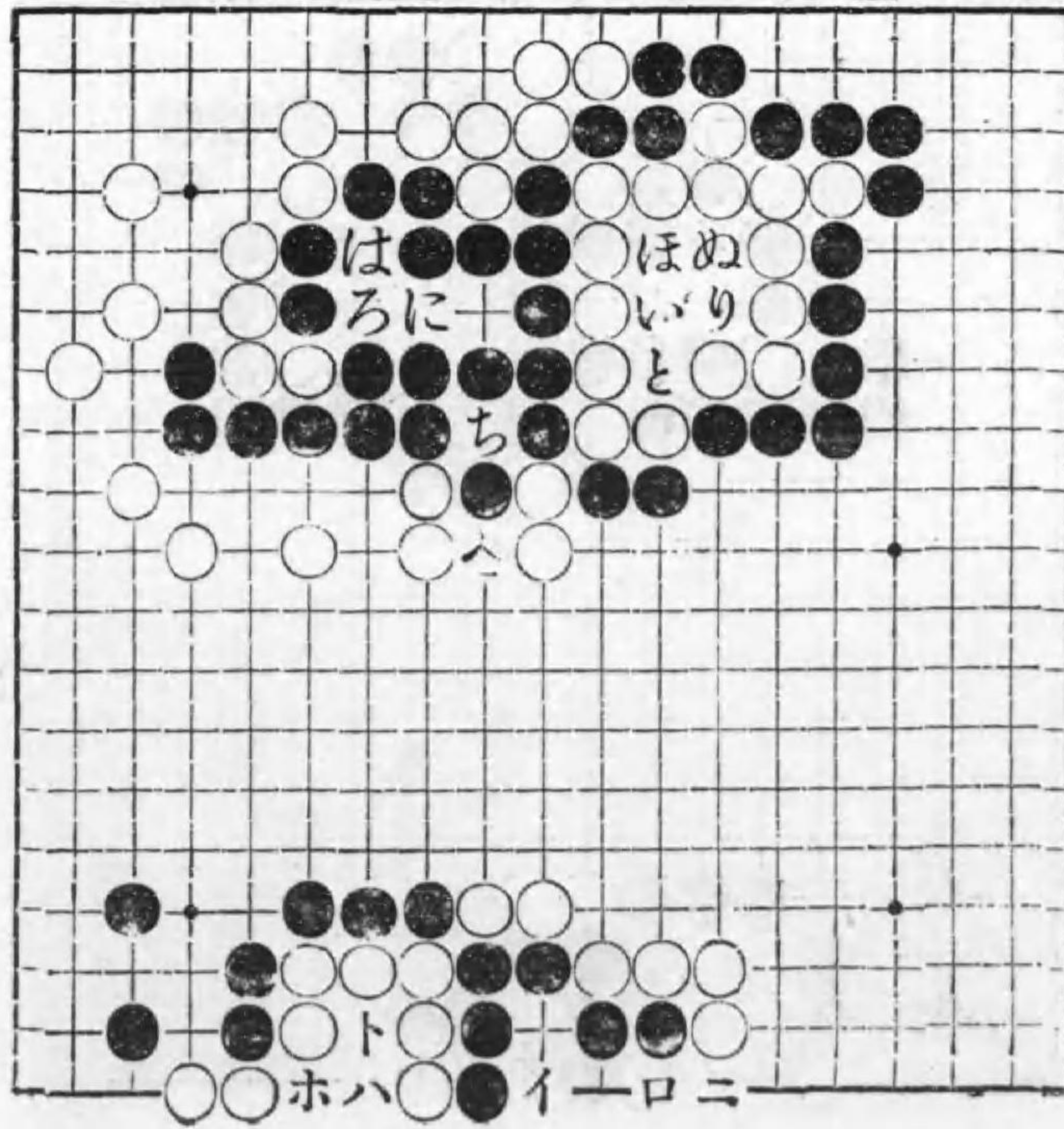
下圖黒先黒(イ)。此の黒

(イ)が必勝の妙手。

黒(イ)に白(ロ)黒(ハ)白

(ニ)黒(ホ)白(ト)黒(ホ)。

と成つたものも次譜。



先づ下圖から解決しやう。

此處は白先手と成つて白

(イ)。次に黒(ロ)で白七子

を打上げ、黒一手快勝であ

る。

上圖も白先手であつて、

白(い)黒(ろ)――

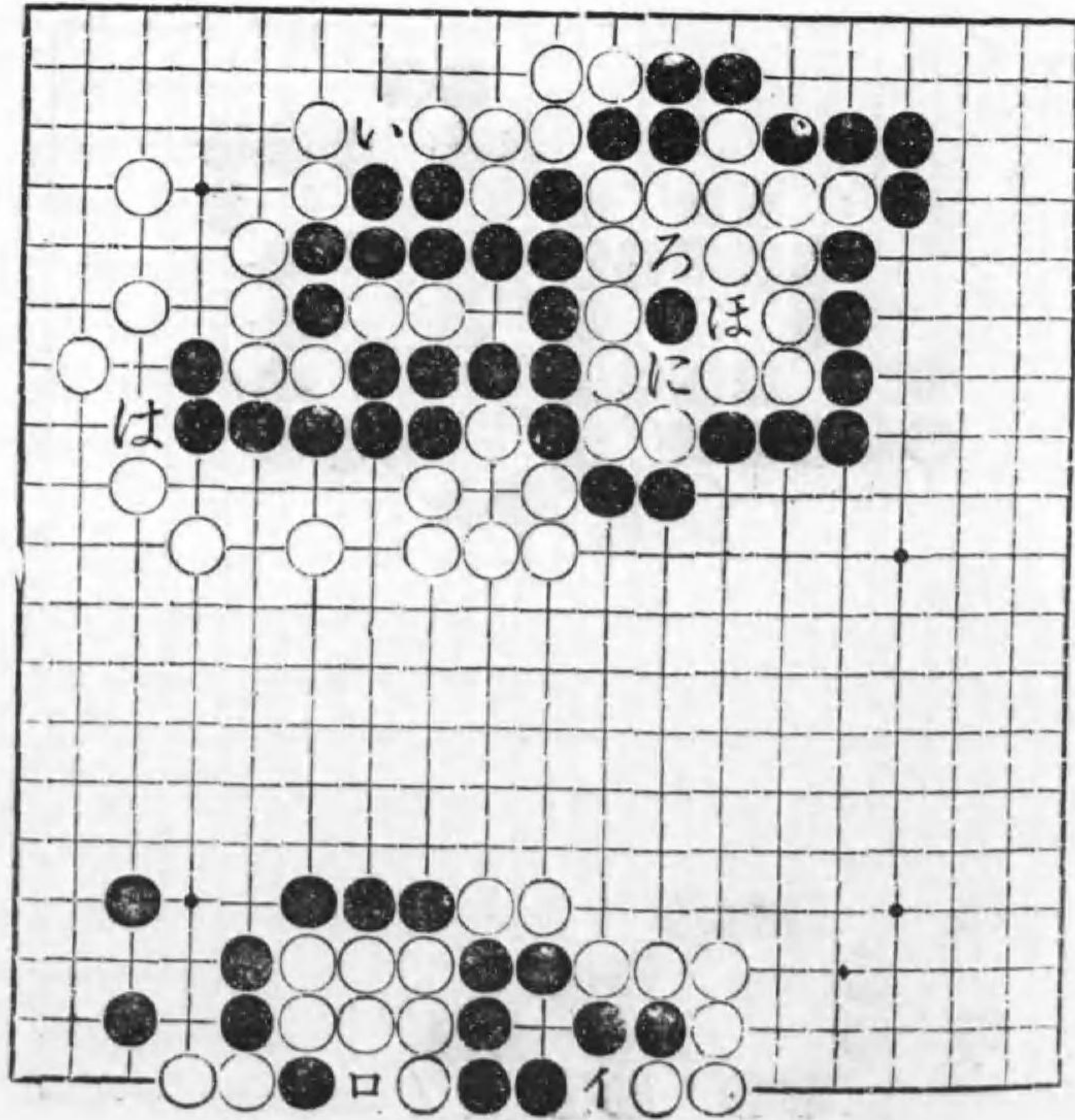
次に白(は)黒(に)白(ほ)

白(ほ)は黒に(ほ)で打上

げられるからである。なほ

次圖に見られよ。

石の死活



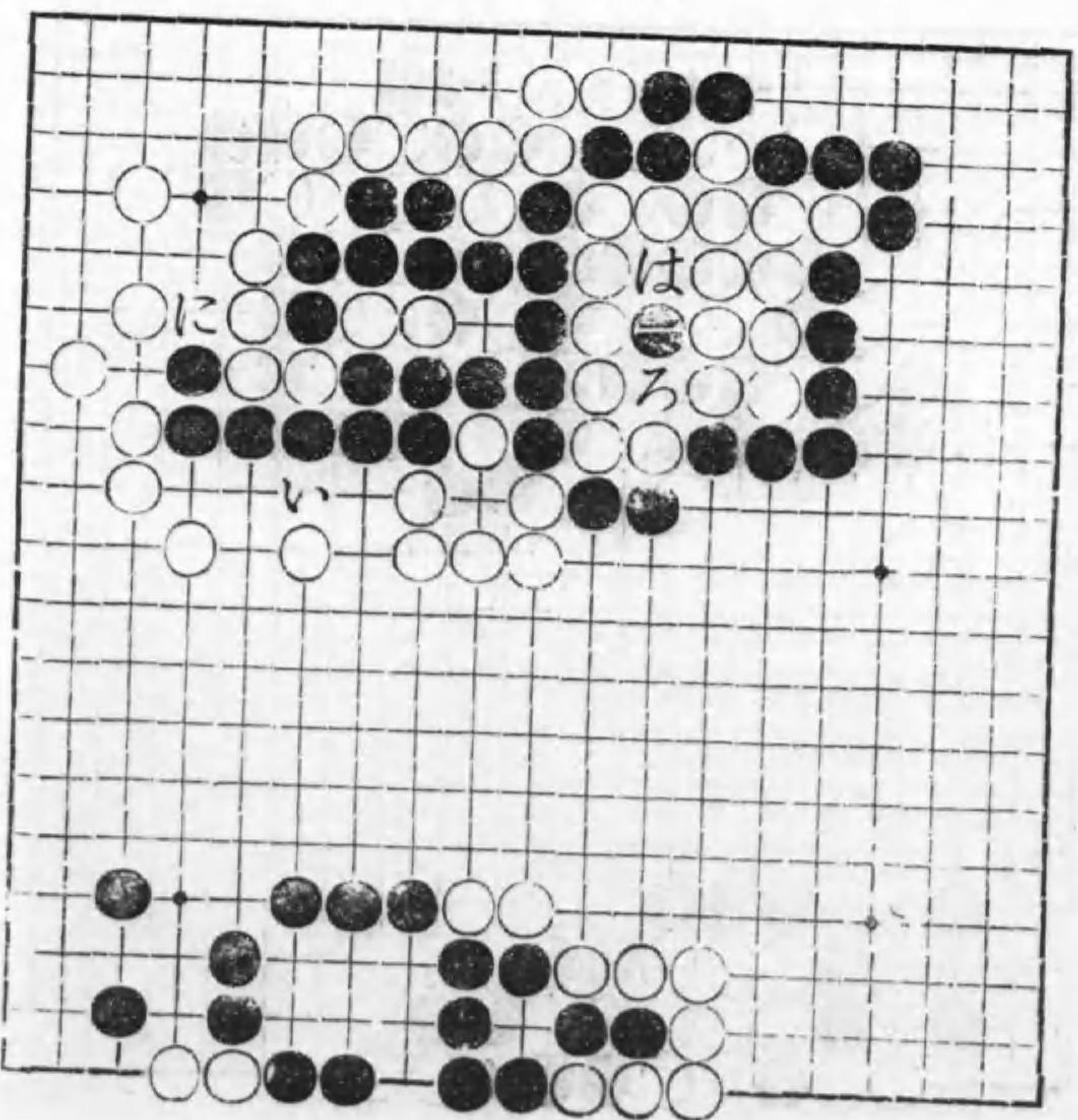
下圖は黒名譽の戦勝の跡。

上圖は前譜白最後の一手が白(ほ)で、本圖は黒先黒一がそれである。

黒一で攻めは黒なほ手数多いから黒大勝である。

が次に白(い)黒(ろ)白其黒二子を(は)――

そして黒(ろ)でも一でもだが一として、次に白(に)黒(ろ)で白を打上げ、それが次圖である。



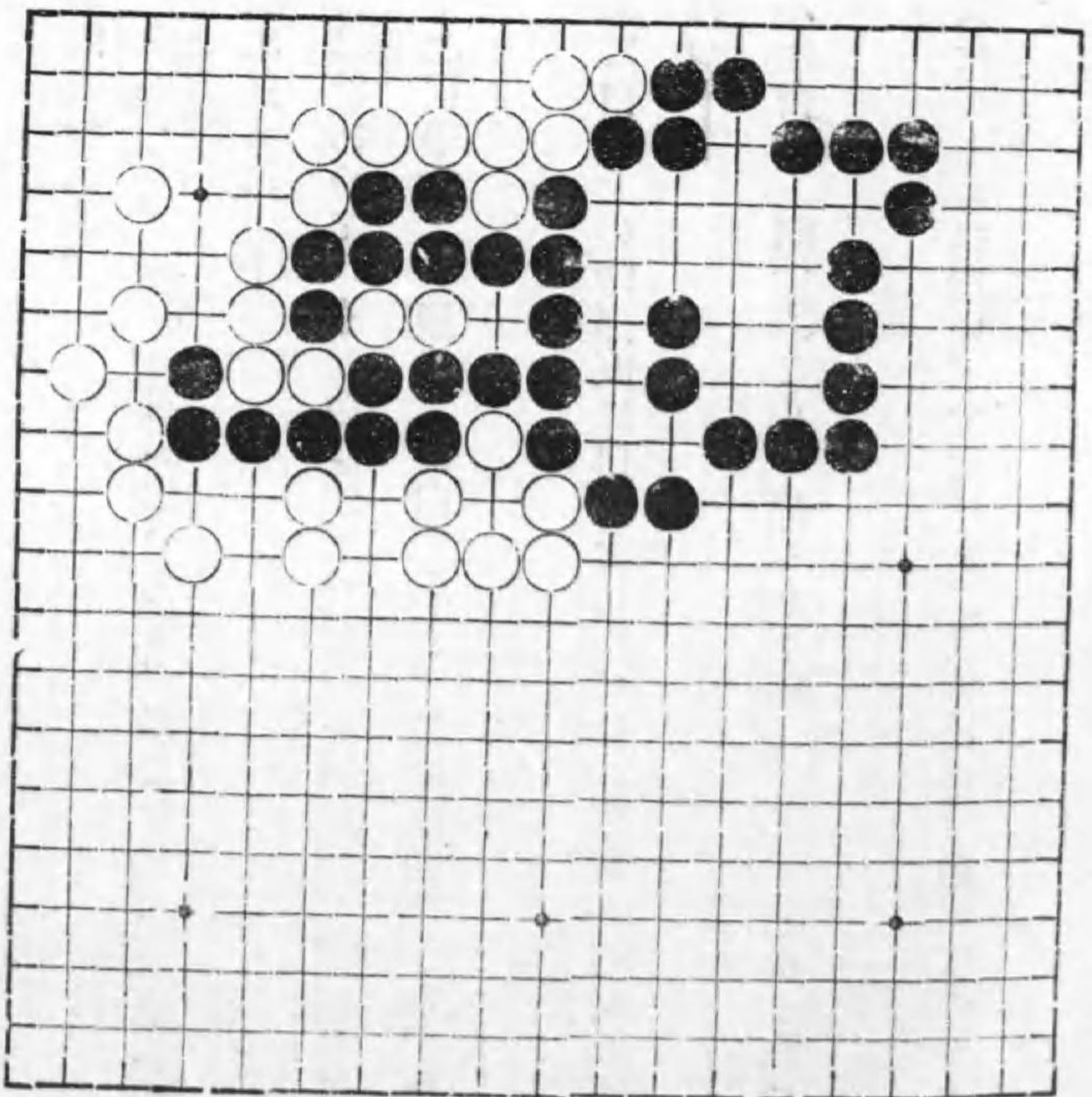
六〇

以上黒の攻合勝ち本圖に見るものである。

されば攻合いの方法も解り、また取る取られるも自然に解つた筈。

次は劫といふものがあるて、また取りやりが始まるから、次第に理解が速いといふもの。

また劫の戦術は面白い。やり繰り算だんにも見做され。



六一

本圖は劫争であつて、生死の問題である。
 白一に黒二と受、白三と黒一子取りの、其右上隅が劫である。黒二を三だと白(い)で黒が取られる、其圖が左上隅に見られ――

次に黒(ろ)白(は)黒(に)白(ほ)であつて、また白(ほ)までを左下隅に移し、此れは次に白(へ)、また白(と)、白(と)に黒(ち)、黒(ち)に白(と)と。最早認識できる、黒は白に取られるもの。

さて右上隅に戻つて、白一黒二白三、の時黒直に白三を取つては、際限がないから黒は劫立てといふものを他に打つ――
 それが右下隅黒一で、其黒一に白右上隅(イ)なら、黒も右下隅(ロ)で、其白を取つて交換。

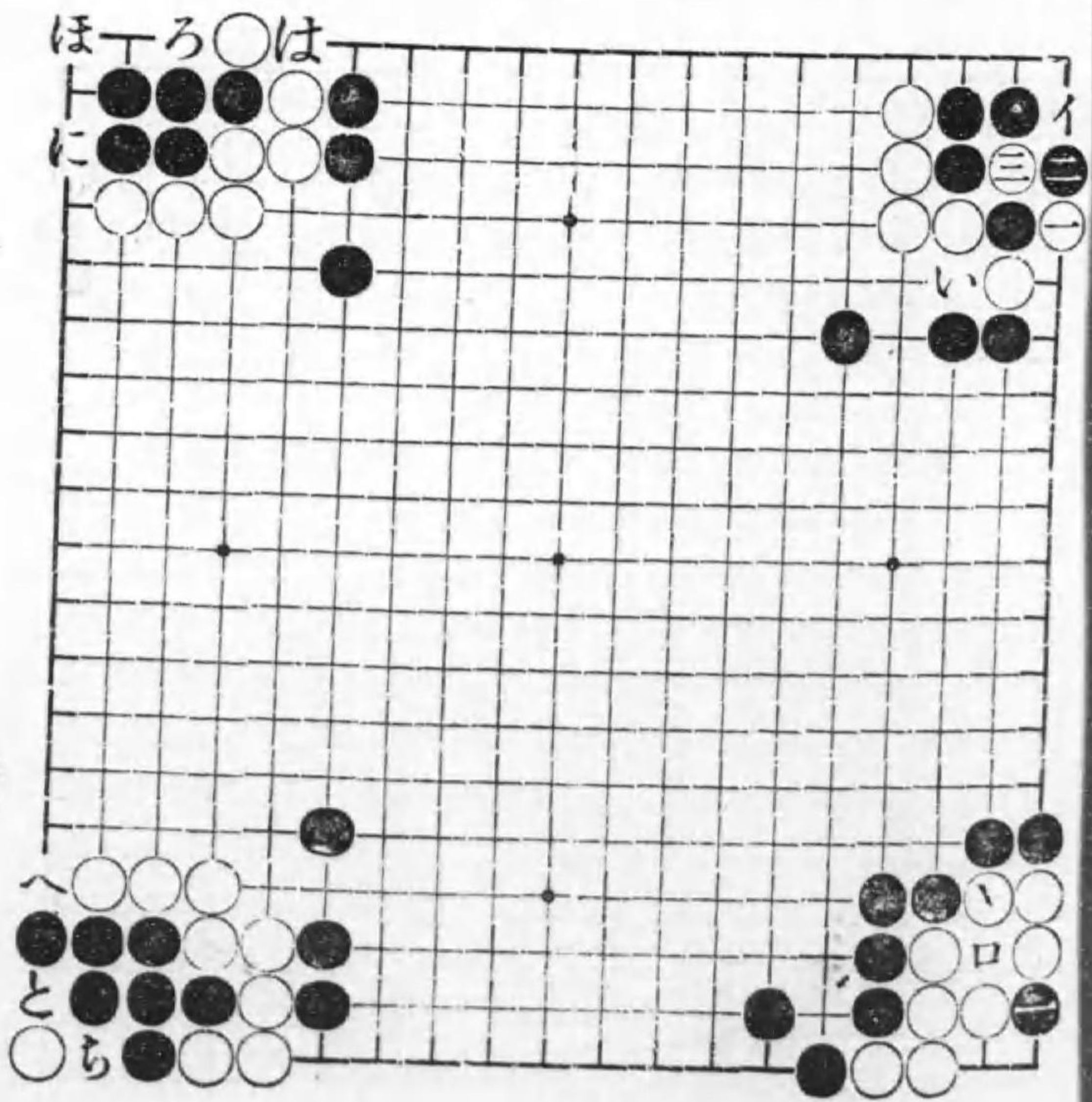
以上劫立ての所をよく頭に入れてもらひ度い。でない二人で萬年、劫を取つたり取つたり。面白くもあるまゝ。

此問題はお互いに固執し合つては、解決が出来ません。ですから――

何かと交換しましやう。
 と解決する世の中の事が
 碁の劫争に見做される。
 仲人が入つても解決出来ないものは裁判所。

碁の裁判所は自然解決である。
 それが碁を聖技ともいふ。

石の死活



右上隅、星の所に黒先に在るとして――

以下白九と劫に受、黒十と白五を取つて――

と本圖は見られやう。

さて黒十の次に白五の所

へ黒十を取り――

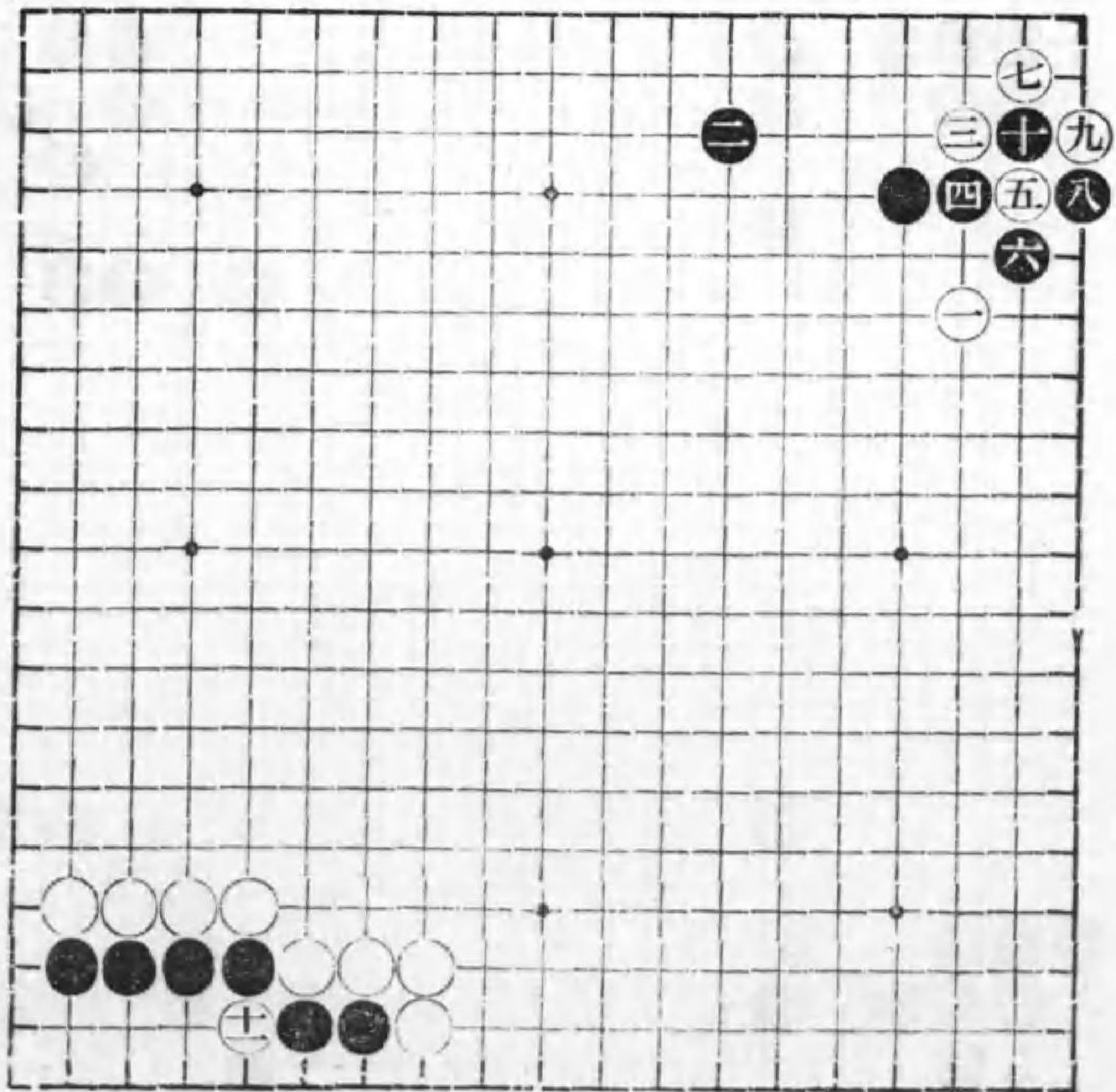
また黒直に十と其白を取

つたりでは――

際限がない、といふので

ある。で白左下隅に十一と

劫立て。



前譜白十一に――

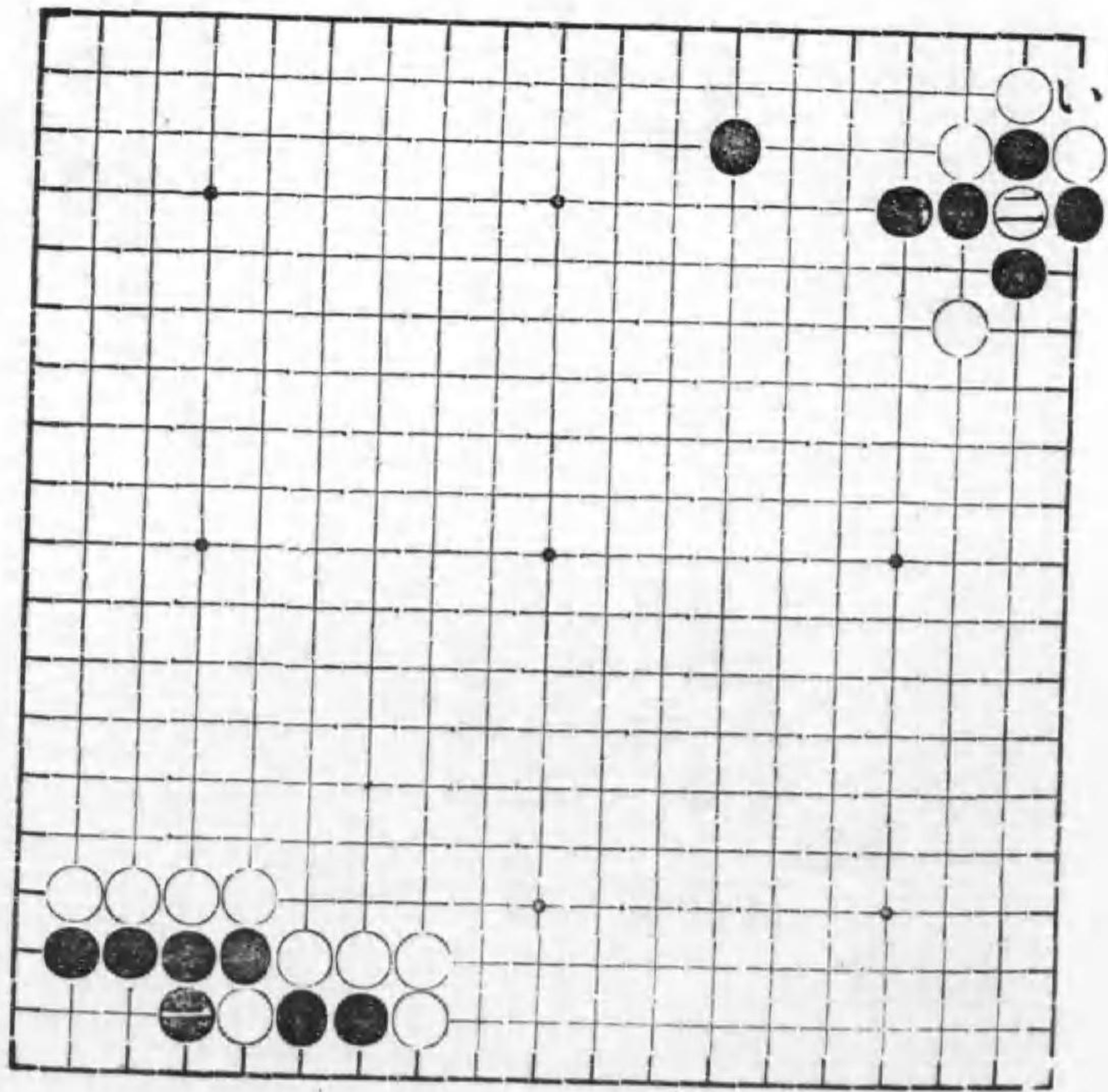
黒一は一で(5)だと、白一で、要するに交換。

それが黒嫌だから黒一と見られ度い。

そして白二と劫を取るものである。

以上で劫の性質は解つた筈。

なほ次譜に劫を説くから解りはするが、重ねて言つておく。

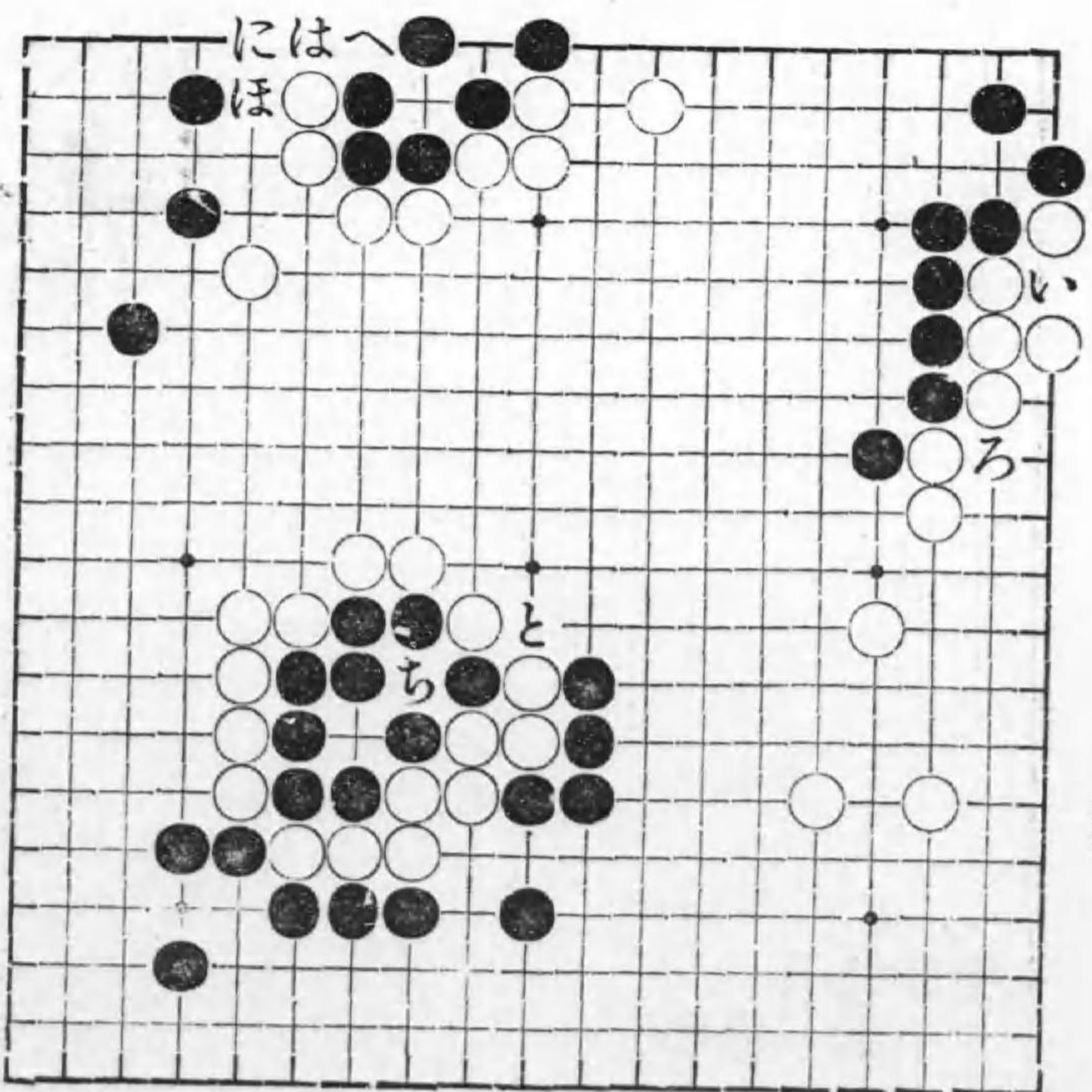


黒(い)で白(ろ)と替る、其劫は終局直前に運ぶ小事の劫である。

黒(は)白(に)黒(は)白(へ)と、其劫は、右の黒を助ける、黒の劫手段で、相當大きな問題。

また黒(と)に白(ち)の所は——

白先なら白(と)で、黒は自然消滅。即ち(ち)の方。



前譜白(ち)と成つた劫争

即ち中央の方——

に黒劫立てなら、黒(い)。

此處は黒が取られて——

黒(い)に白(ろ)なら、黒

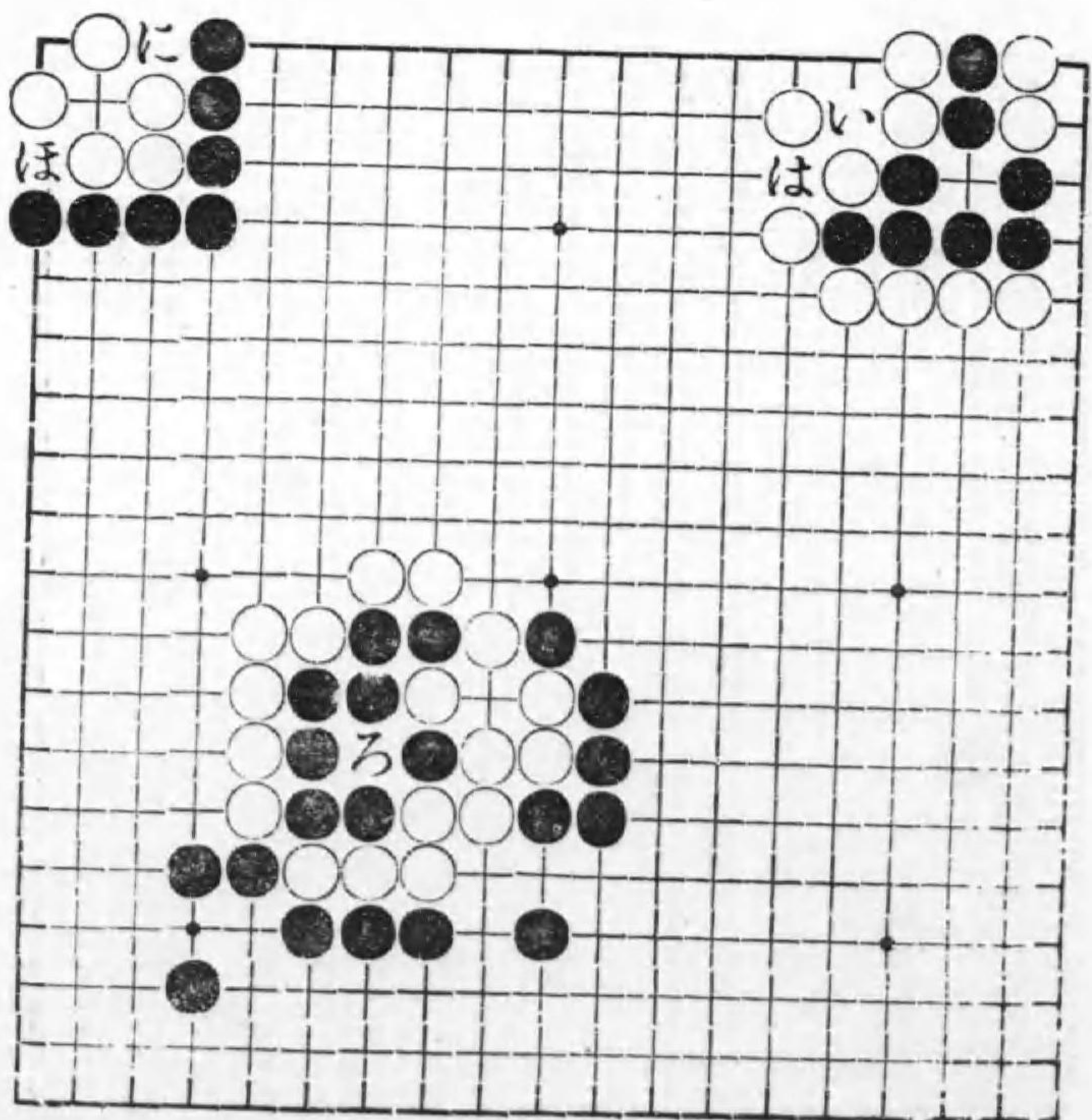
(は)で、中央の方と替つて

黒損ではない。

黒(い)を(に)だと——白

(ろ)黒(ほ)と交換。

此の交換は黒が大損である。それは一見、(い)の方と大小判別できる筈。



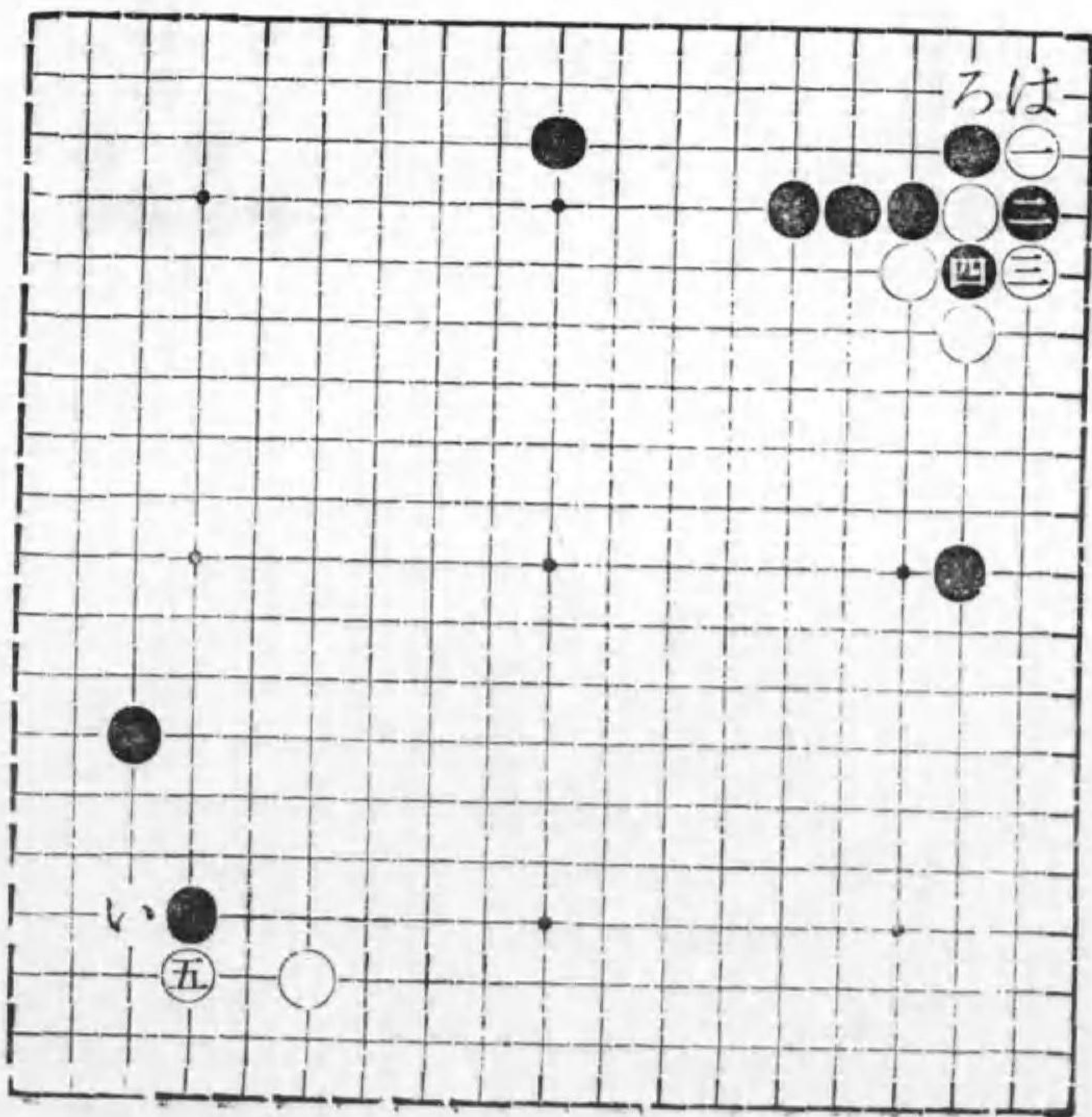
白一から黒四までは白の手段である。

白五は劫立てである。

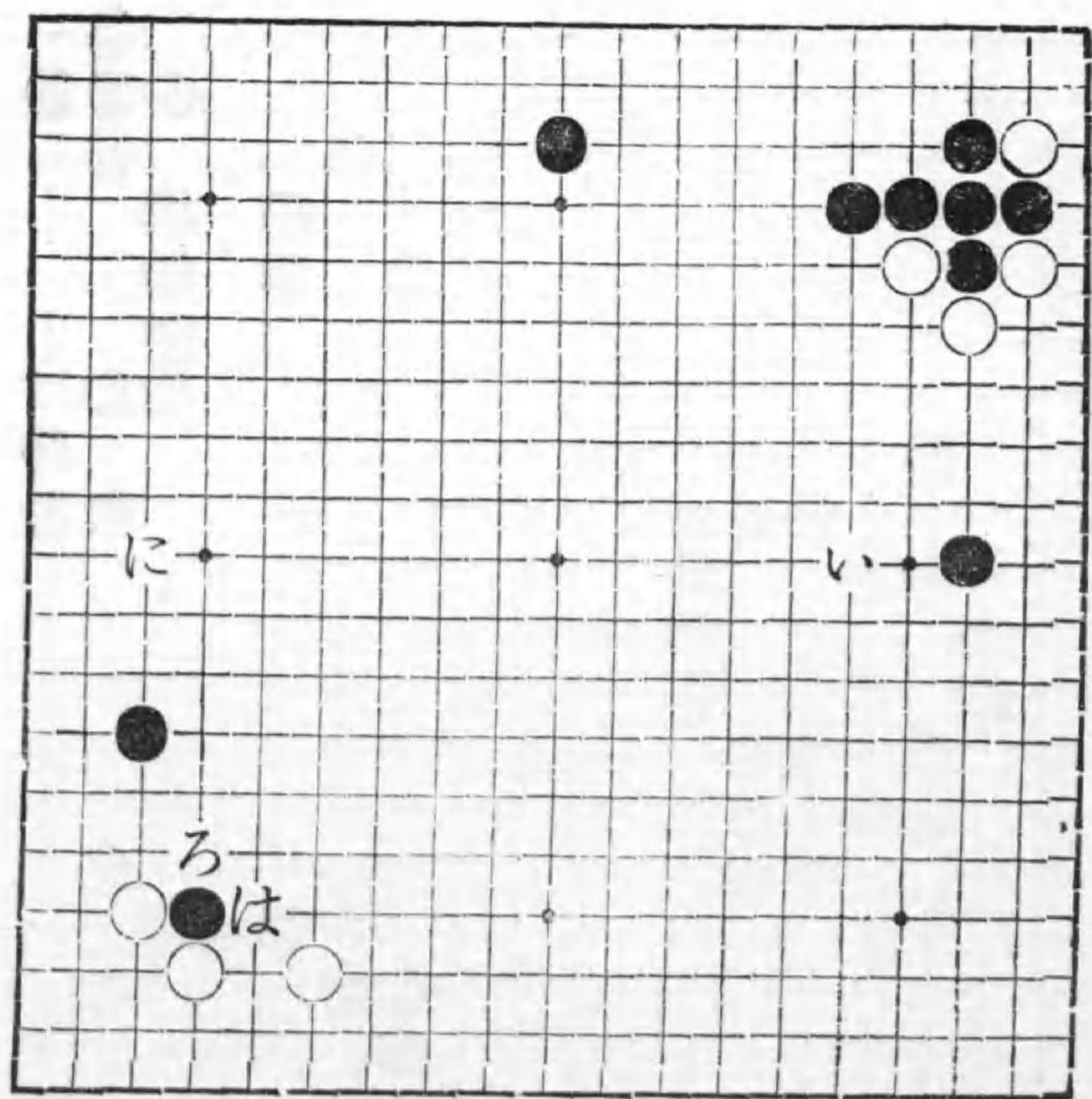
次に黒四の上の白丸に粘ぎ、そして白(い)と交換。

その交換は次譜に見られる如く、黒は一舉大模様、黒は損どころでない、大利である。

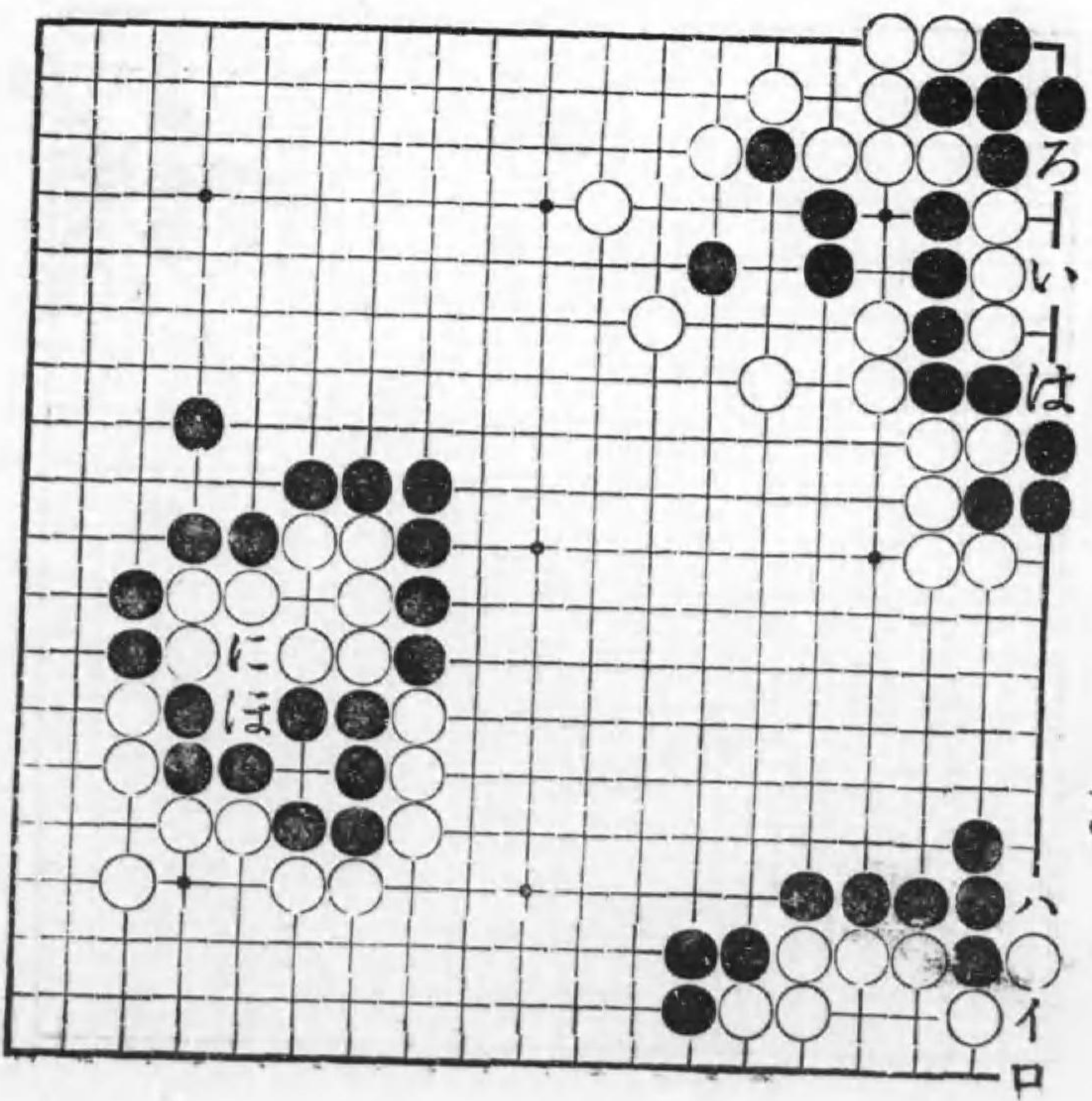
白一に黒(ろ)等の尻ごみは、次に白(は)。で黒一局の敗を招く第一歩。



前譜最終の一手は白(い)で本譜は黒の手番である。
黒(い)が大き。
黒(い)に白(ろ)なら(は)と、白に取られても黒悪くないから、黒(に)と其下の黒一子に備えるが、即ち劫争の後始末である。
等も初段を目指す道程である。



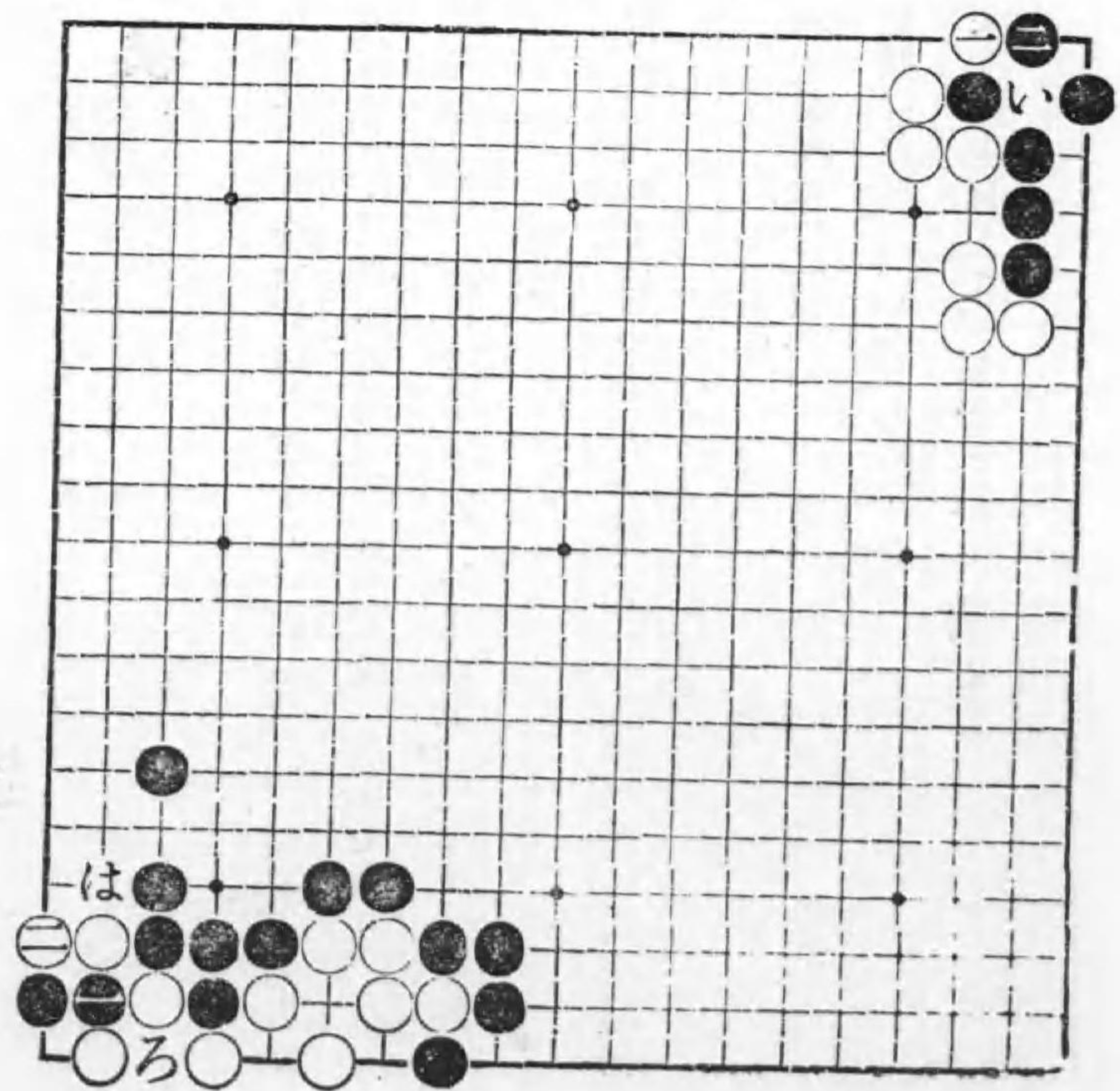
白先に(い)だと、(ろ)と(は)の二ヶ所に劫が生じ、黒は大いに困る。
 黒(イ)白(ロ)黒(ハ)で、此處は黒から劫争。
 中央の方は——
 黒から(に)、白からでも白(ほ)。
 即ち何れからでも劫手段のある所。
 兩方から劫を仕掛けないなら、其處は何れも取られぬセキ、と名稱のもの。



七〇

右上隅白一に黒二と劫の他は無い。
 黒二を(い)だと、白二で黒は取られるからである。
 左下隅黒一に白二と劫の他は無い。
 白二を(ろ)だと、黒(は)で、白は取られるからである。
 右上隅は白次に(い)と取るもの。
 左下隅は黒次に(ろ)と取るもの。

石の死活



七一

實戰

以上で豫備智識を得られたと思ひ、此邊で實戰を説くことにしやう。早く打ちたか
らうと思ふからである。本譜は白が八段、黒が六段、手合は定先の名局である。

黒一と三は、それでまづ一城であつて、即ち隅は城内、外は城壁、二手で最も經濟
的である。

無論防備も敵に侵入されない、見られよ白(い)なら、黒(ろ)と防ぎ。といふ金城湯
池である。

黒五は、また次に三の如く六と築城の目的である。

されば白六は、其黒の目的を妨げたもの。と見られやう。

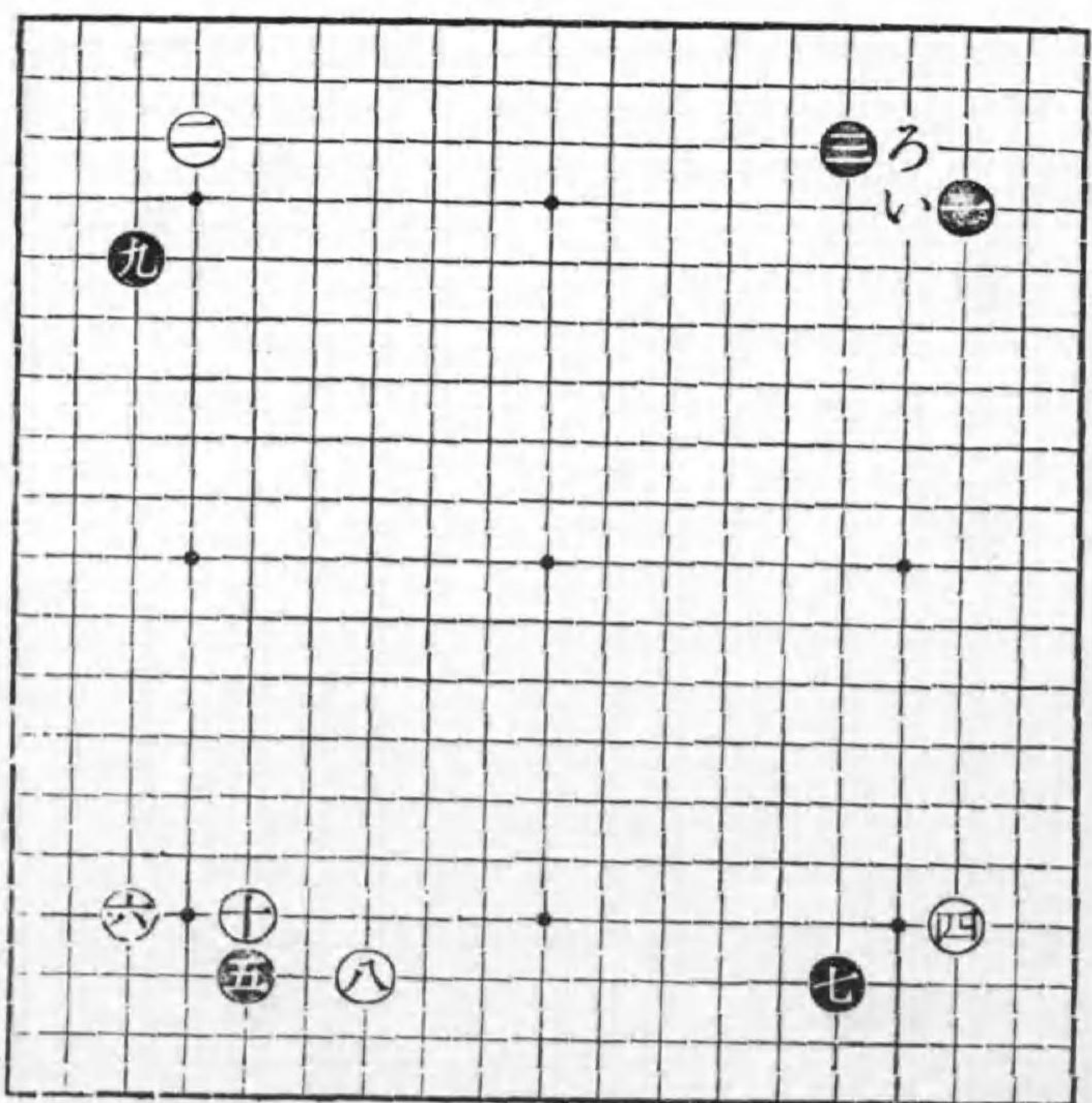
次譜は見よいやう、白十までを丸九にして、黒十一からである。

定先といふ手合は八段と
六段だからで、此例は黒七
段なら――

先相先といつて黒即ち七
段の方が八段に黒番二局、
白番一局の割合いである。

それは一段の差が半石で
二段の差が定先となるわけ
で。定先とは打つ毎に先だ
からである。

三段ちがひなら先二、即
ち先と二目置く事。

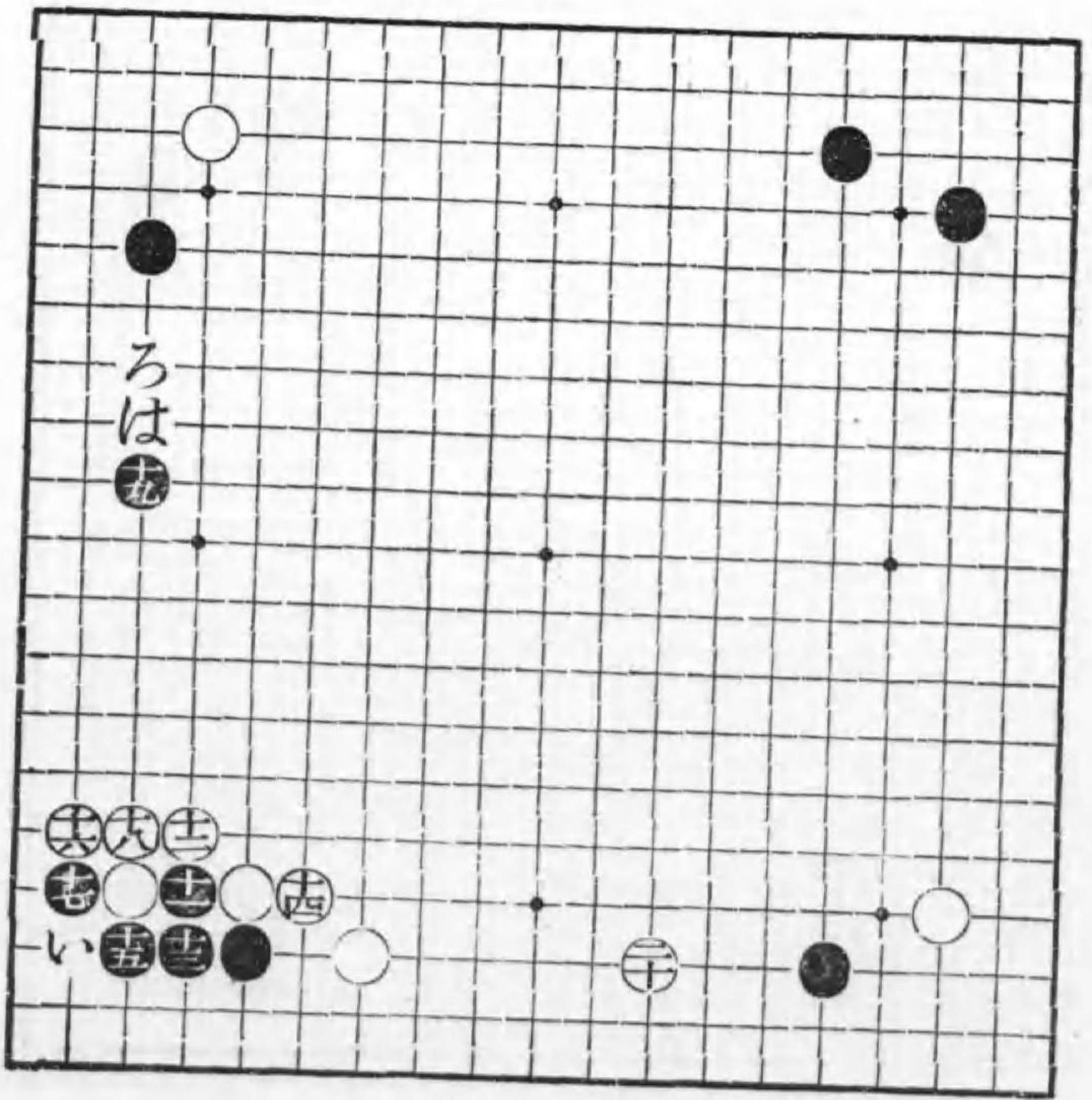


黒十一より十七までは、
前譜黒五の一子を取られな
い、それが活きであつて、
黒十七は――

次の黒十九に見られる如
く、先手を把る爲である。

黒十七を假りに(い)だと
白(ろ)又は白(は)で、(ろ)
の先に在る黒一子は攻めら
れ――

それに第一左側の白地が
大きい。



七四

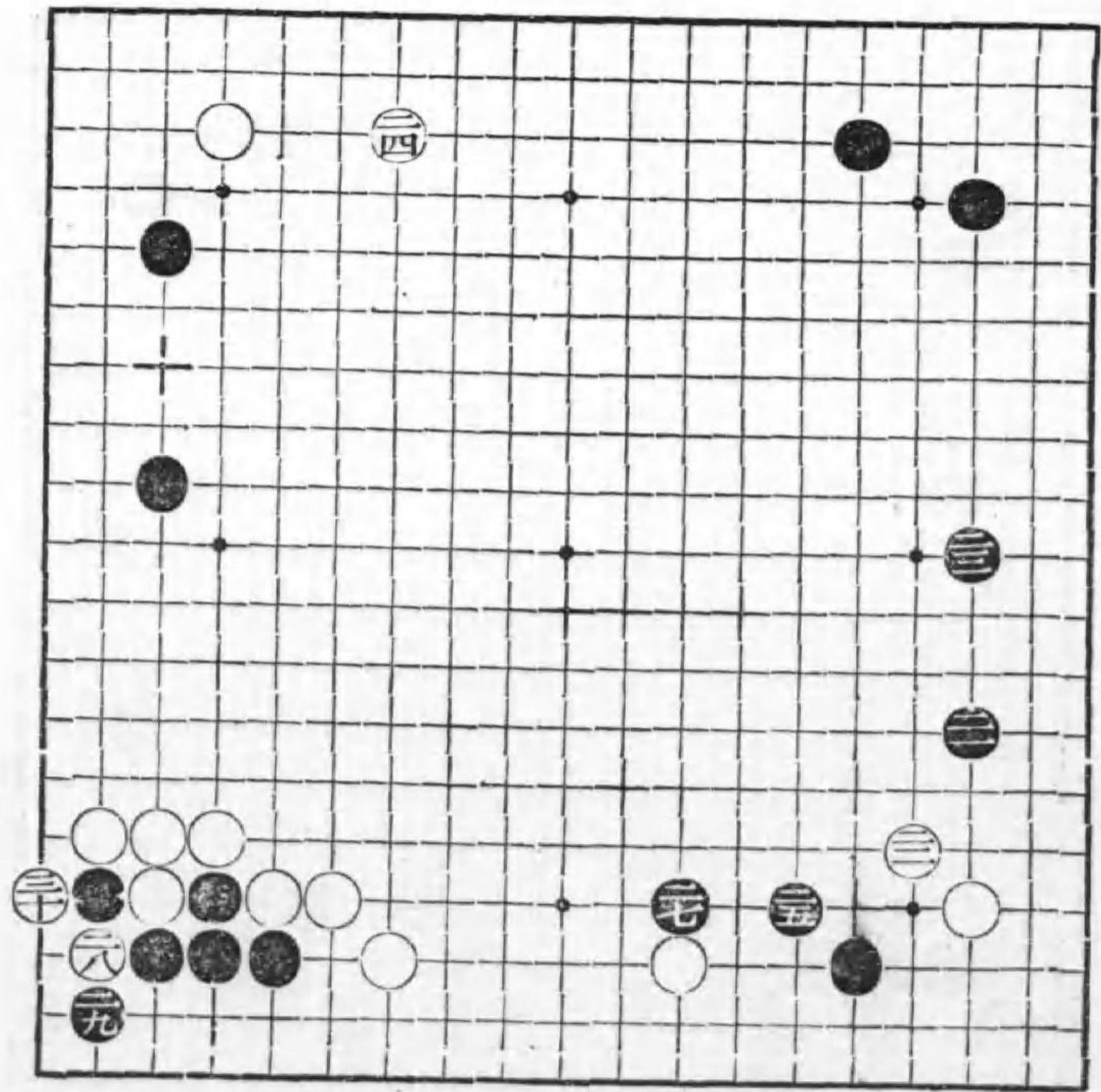
本譜は黒二十一からであ
る。其手は右側に。

黒二十一、二十三は、右
側に拓地の目的である。平
和に地の優勢で勝つのを最
上とするからである。

即ち平和裡に勝てるなら
戦争は避けたい。といふも
の。

黒三十一は何處――

それを本譜で判れば初段
に六七子の資格。



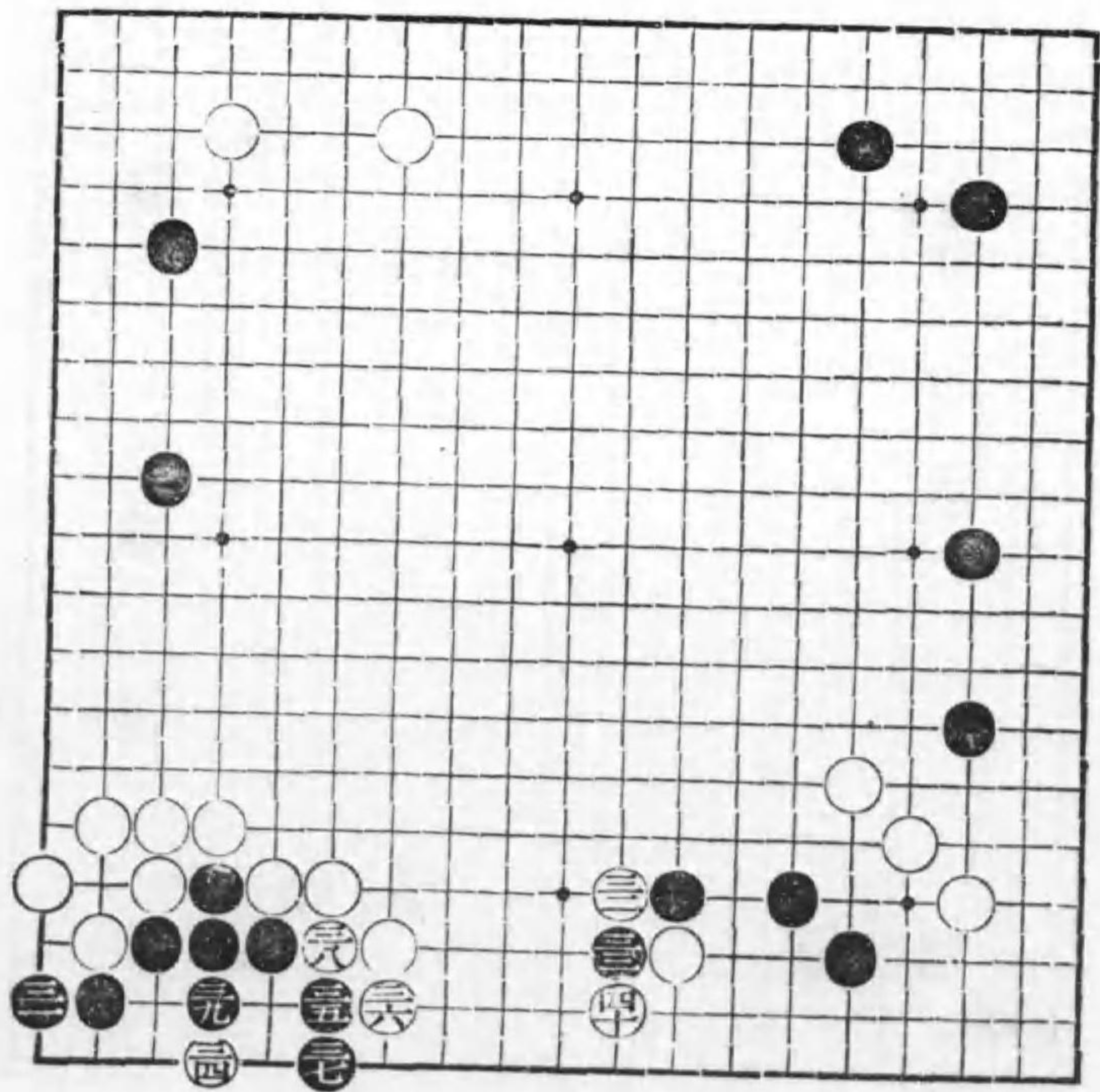
七五

黒三十一は其處で白に取られるからである。

取られたら其處は白地と化して、白地三十目位。

即ち一手で三十目、黒は三十目與えて悪いからである。平和時代に一手三十目の儲け事は無いもの。

初段位の先の効力は五六目に換算。初段に九子位の黒の方からの換算は十五目位。また――

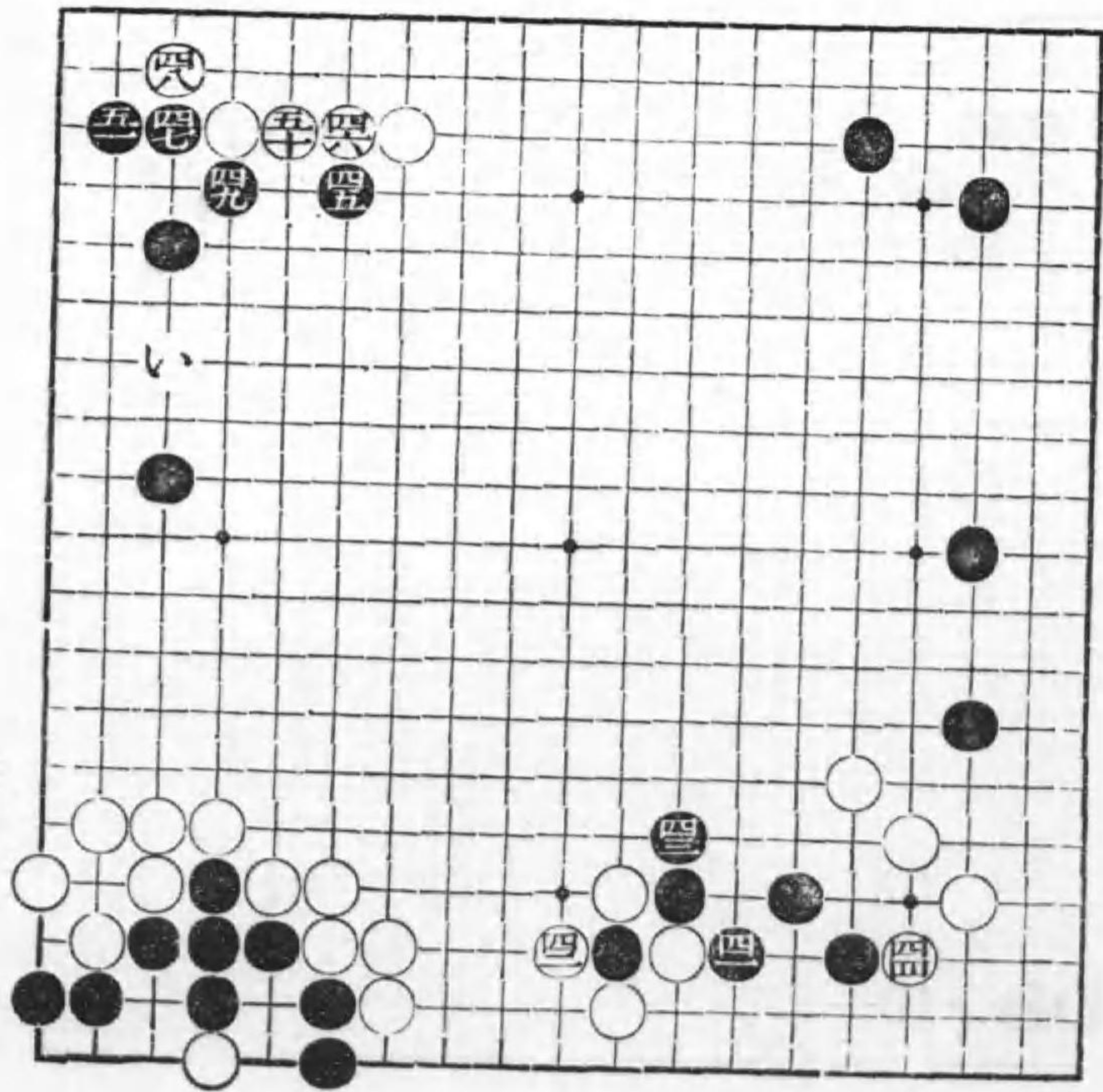


五段位なら即ち先着の効は四五目。

名人の域に至れば三四目と緻密を極めるものである。と知られよ。

さて本譜は黒四十一からで、黒四十一、四十三は、其一團の黒を早く治める目的である。

黒四十五より五十一までは、白(い)と白に打込まれないやう整備である。



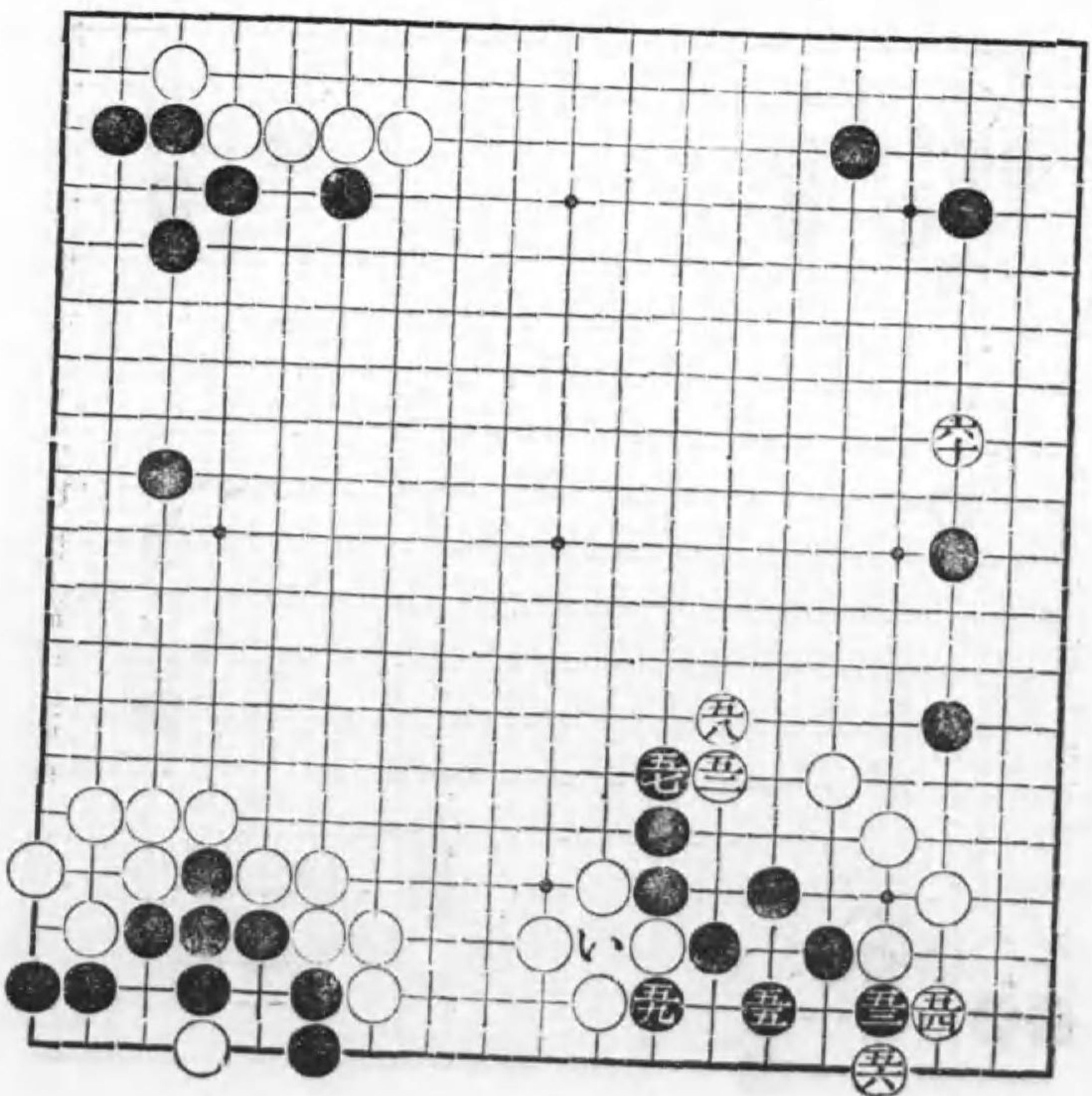
本譜は白五十二からで、

五十二は――

次に黒五十三より五十九までと備へた、それに見ても分る如く、其黒の一團奪取の意圖である。

黒五十九は(い)に白一子取りがあつて、即ち劫といふもの。

白六十は其下の黒二子を攻め、黒五十九の方と絡む戦略、今や風雲急である。



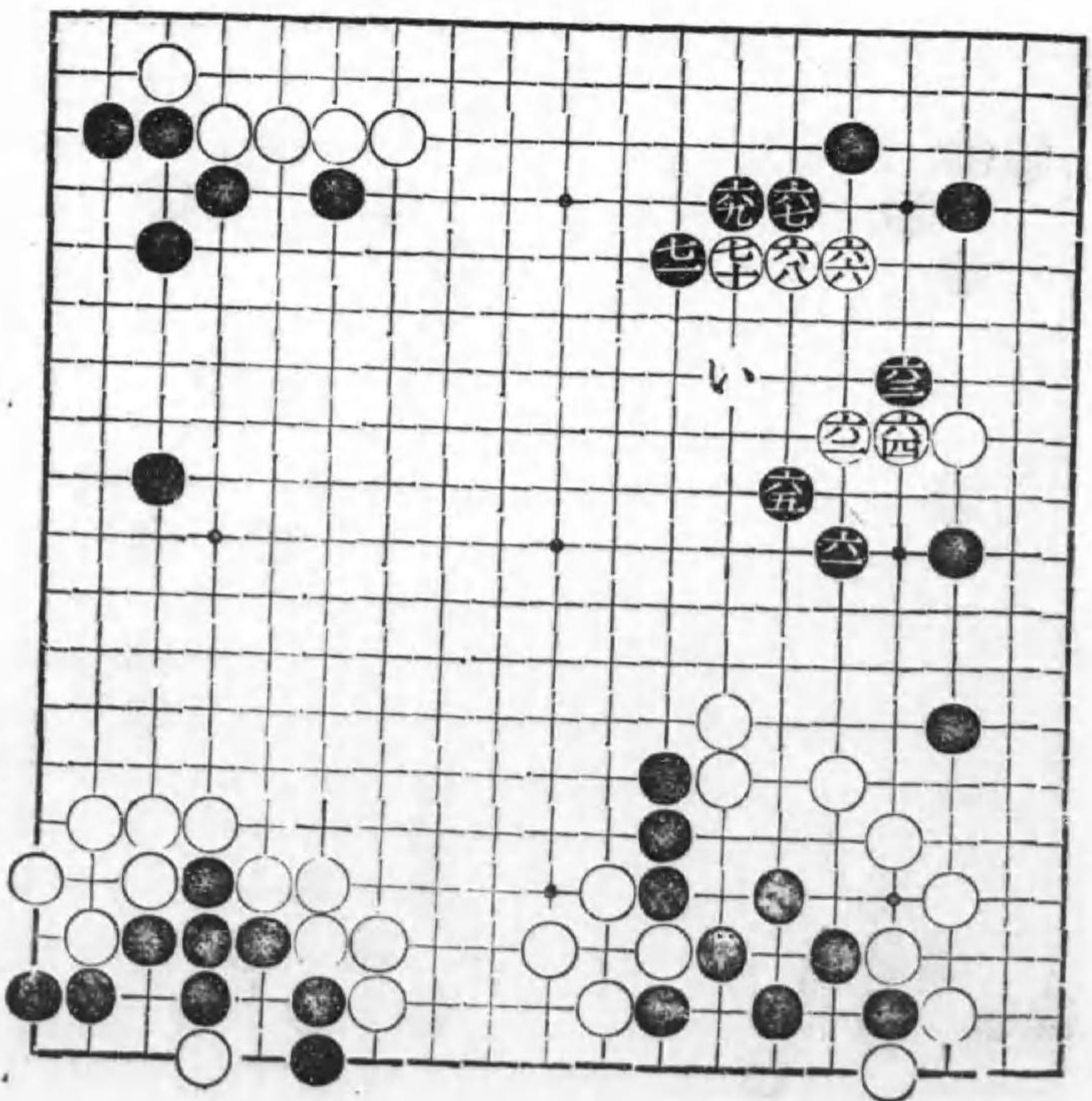
本譜は黒六十一からで、六十一は――

次に六十三の所で、白一子取りを目指す逆襲である
また黒六十三は次に六十四の所で白を兩斷の目的。
斯くて以下黒七十一と成つて――

黒七十一は次に(い)。

黒(い)は、それで白包圍の待望である。

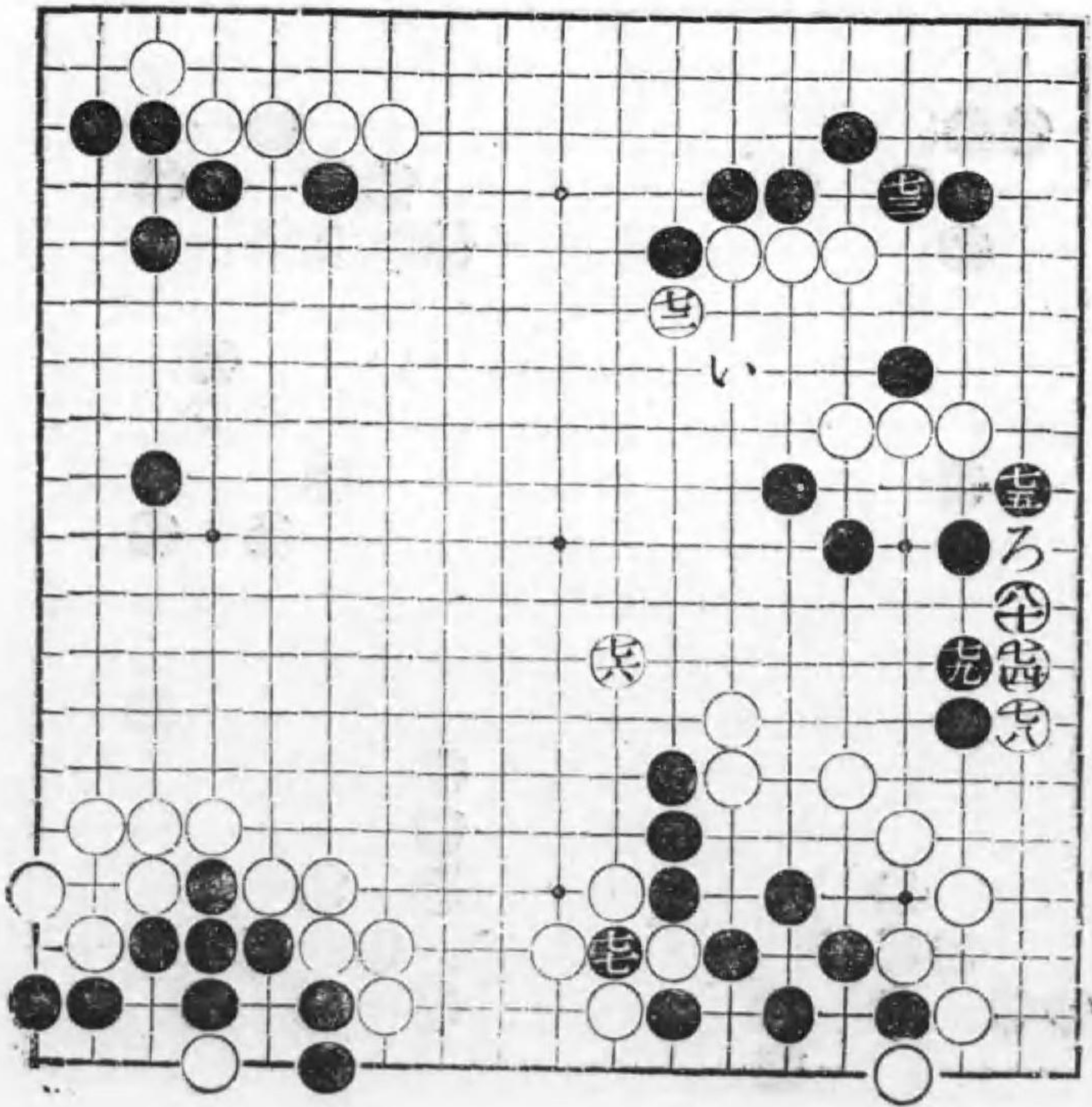
次は白七十二より。



白七十二は黒(い)と黒に包圍されない脱出である。また白七十四は、黒の根據を奪つて――

次に(ろ)で上の白三子へ連絡も待望。

白七十六は、黒七十五と成つて、其方が盲く行かない。と黒七十七の方を攻め黒の動向を窺つたもの。それで黒七十七と劫を取つて、危険に備へたもの。



本譜は黒八十一から。

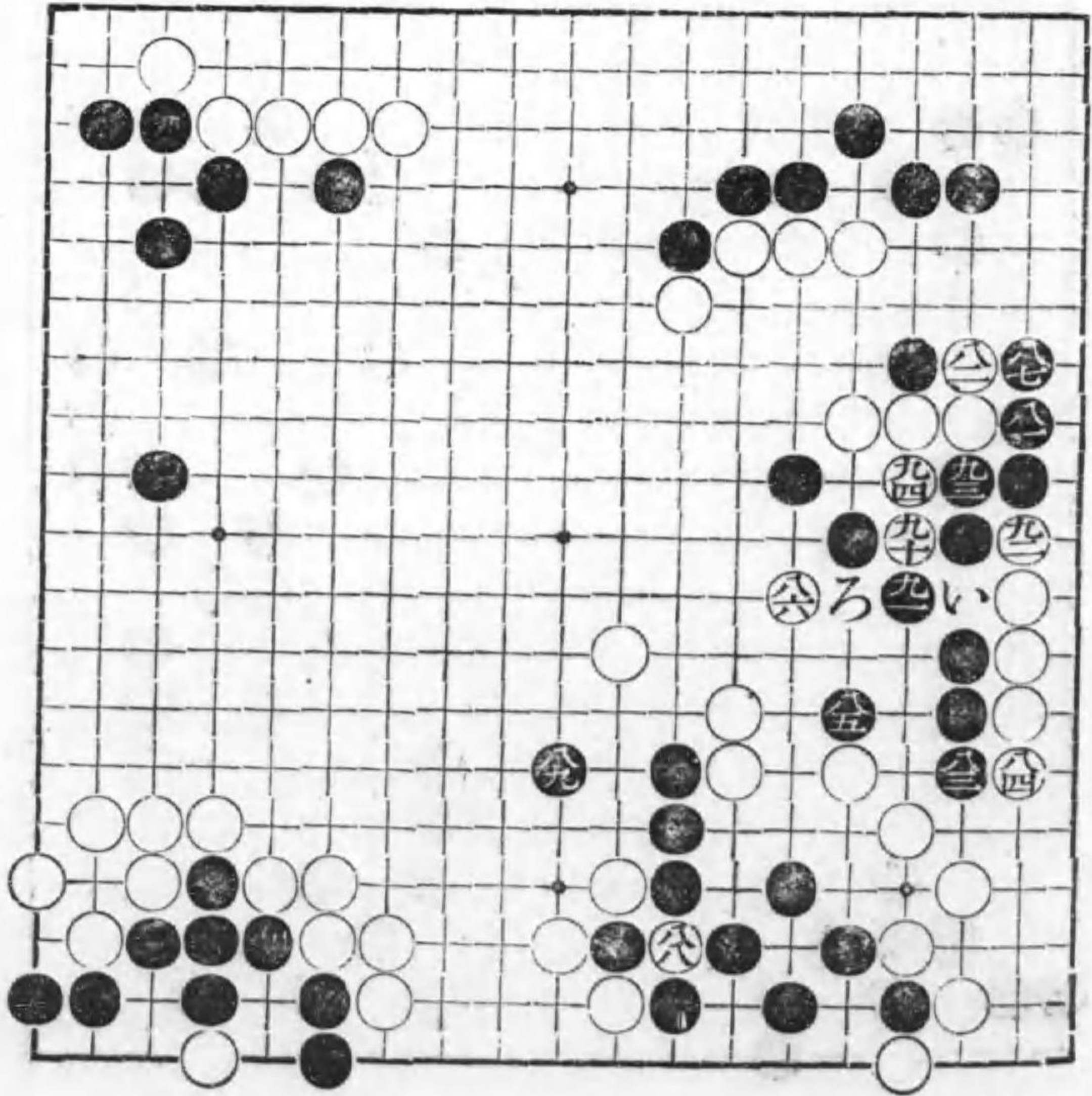
黒八十一は右上隅へ連絡の目的――

といふのは以下白九十四と成つて――

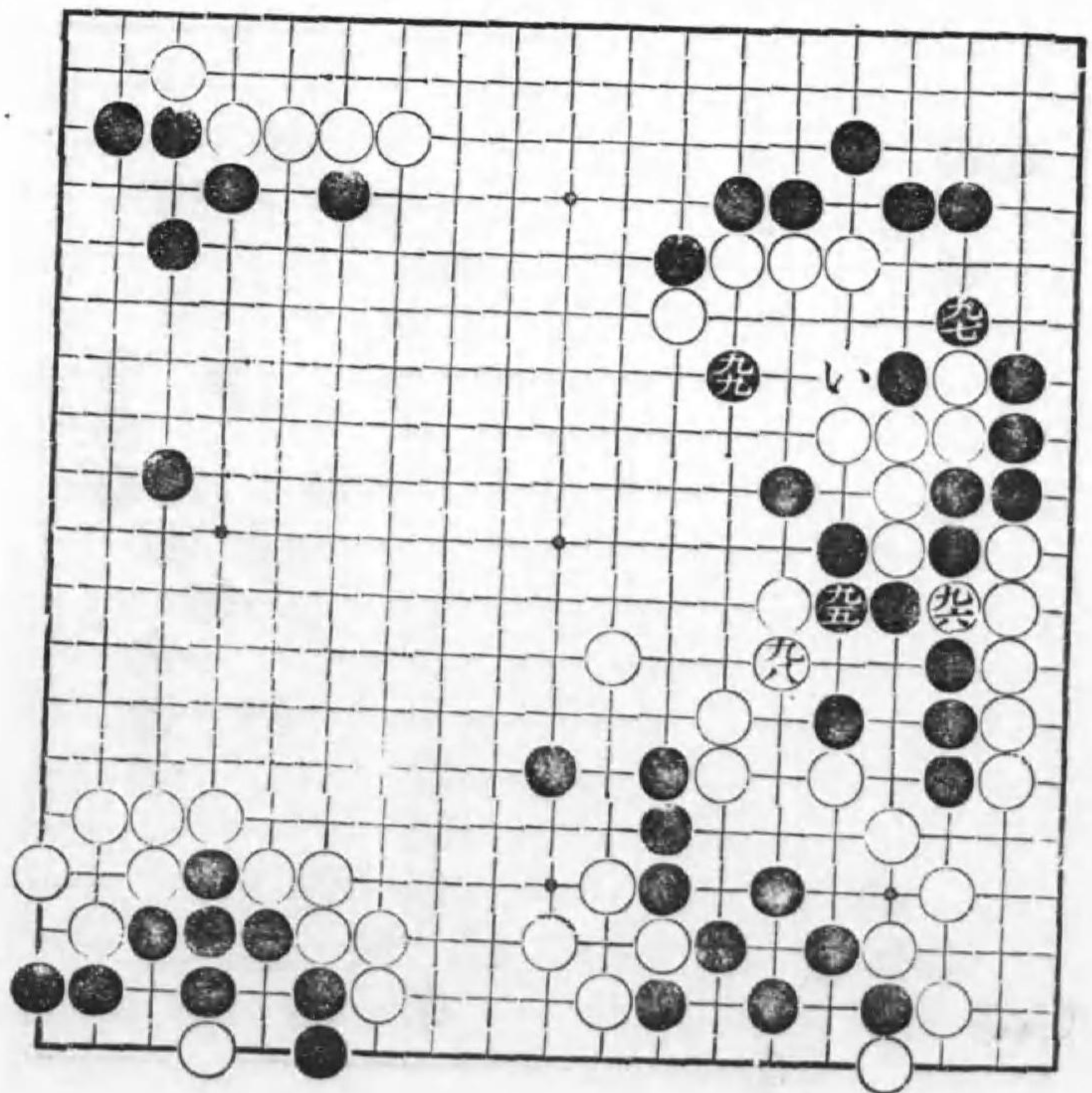
(い)の所、また(ろ)の所と、黒に二ヶ所の切りが生じ――

即ち黒八十七に見られる一方を連絡である。

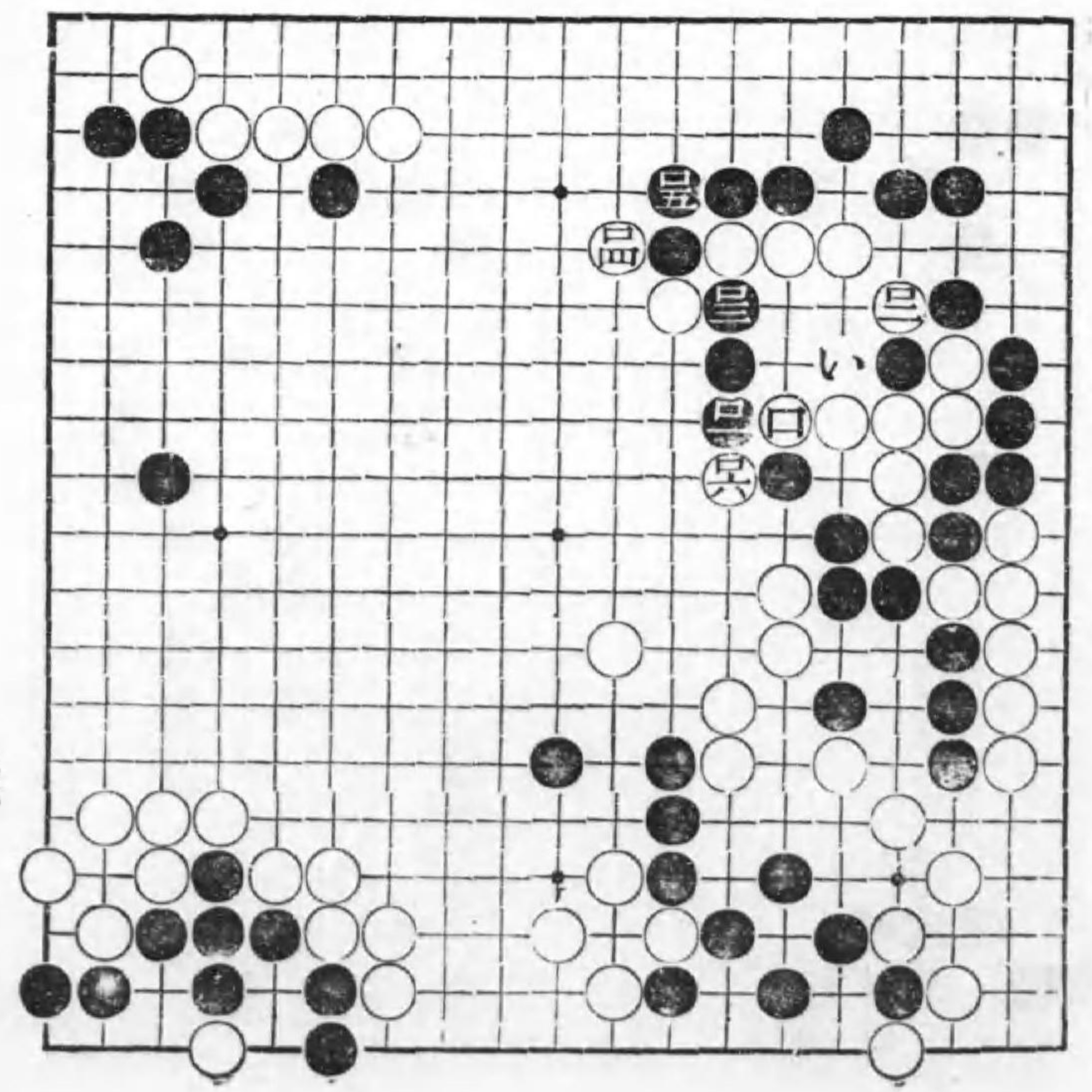
白八十八の劫取りに、黒八十九は其處で包圍を免がれ。



本譜は黒九十五から。
 黒九十五を九十六だと、
 九十五と白に切られて――
 其上の黒二子は心細い。
 と黒九十五の方を粘ぎ、
 即ち味方に勢力を加えたも
 の。見られよ――
 黒九十五は後に九十八で
 活形を残し。
 黒九十九は次に(い)で其
 白六子取り。
 で次の白百は何と――



本譜は白百からで、百の
 所は「□」――
 従つて黒百一は「□一」。
 「□」は百を略したもので
 度々いふが將來碁譜を見て
 「△」は二百、「○」は三百の
 略字と知られよ。
 さて白百は、黒(い)で白
 六子を取られるからである
 白百六は左様切つて決戦。
 興味は多大。



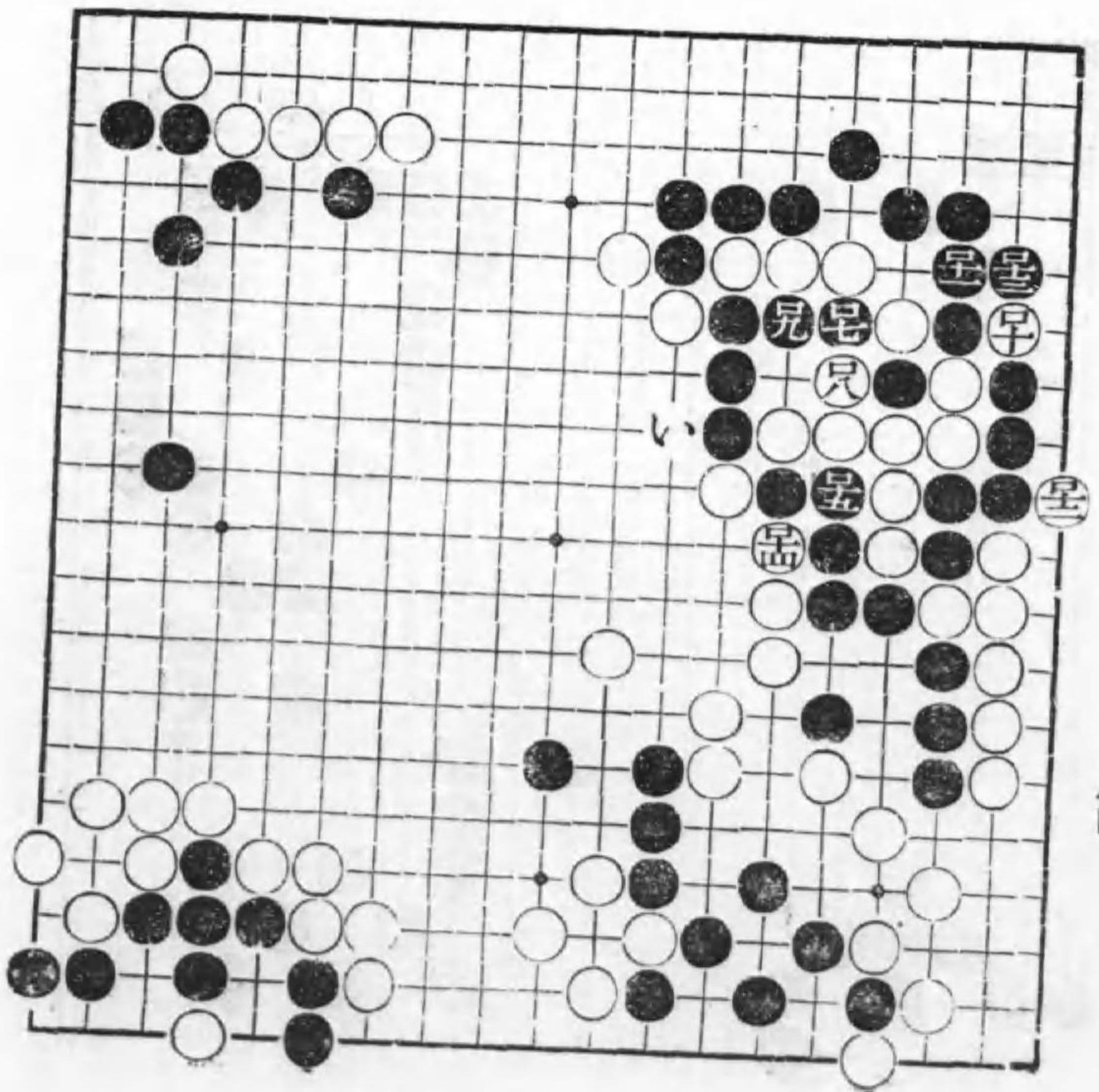
本譜は黒百七から。

黒百七は、白百八の方と、
また黒百十五の方との攻合
いであつて――

百八の方の白を取れば、
黒百十五の方が助かる事情
だが――

以下黒百十五と成つて、
白は取られない、其用意が
白に――

即ち白百十六を(イ)と
それを本譜で豫見されよ。



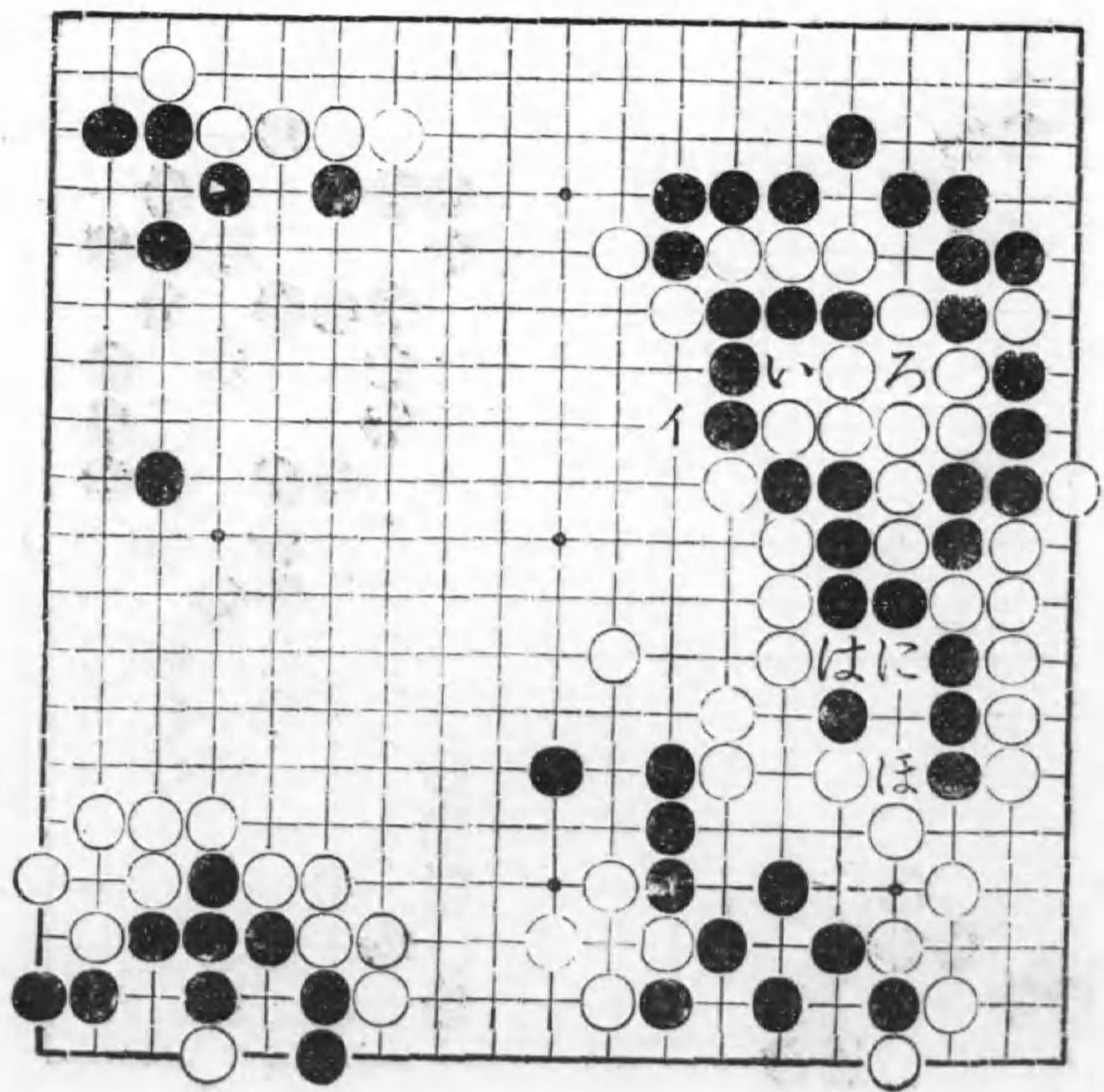
前譜黒百十五までは、本
譜白丸黒丸の全部である。

されば本譜は白の手番、
此白の手番は何處――

といふ問ひに、黒の手番
なら、黒(い)で(い)は(ろ)
で白八子を取れ――

即ち白先白(は)黒(に)白
(ほ)だと、黒(い)で黒が一
手早い。

で白百十六は(イ)と返
答なら上達顯著である。



本譜は白百十六から。

白百十六は、黒百十七を

(い)白(ろ)黒(は)なら、白

(に)黒(は)白百十八で白が

一手早い。即ち白攻合勝。

見られよ其時黒(へ)と行

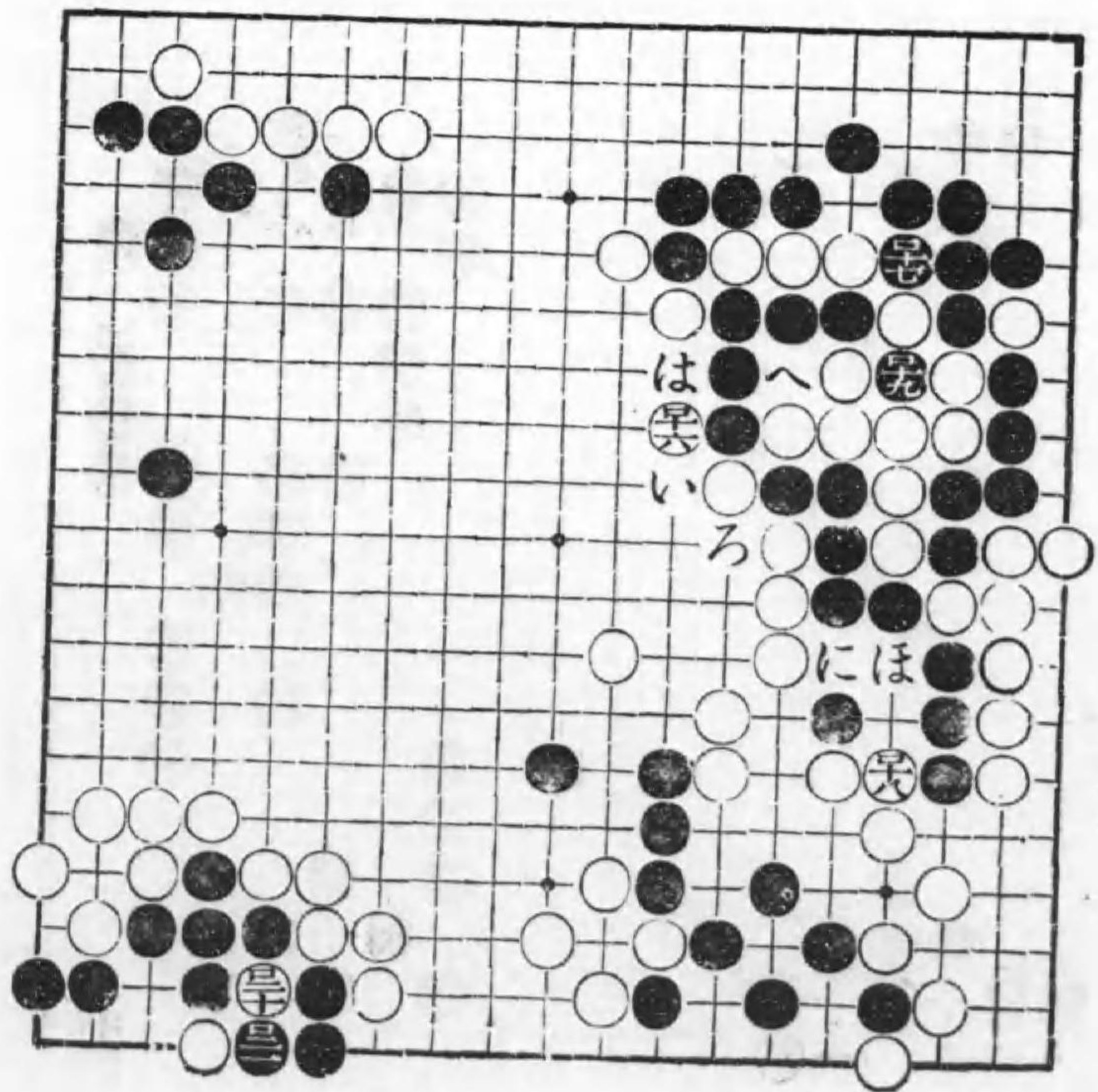
けないからである。

等で黒百十七、百十九と

黒から劫争。白百二十は劫

立て。

黒百二十一は交換嫌。



本譜は白百二十二と劫取りからである。

黒百二十三は劫立て、白

百二十四は其處を黒に打抜

かれて大變だからである。

黒百二十五は劫取りと考

えに入れてもらひ。

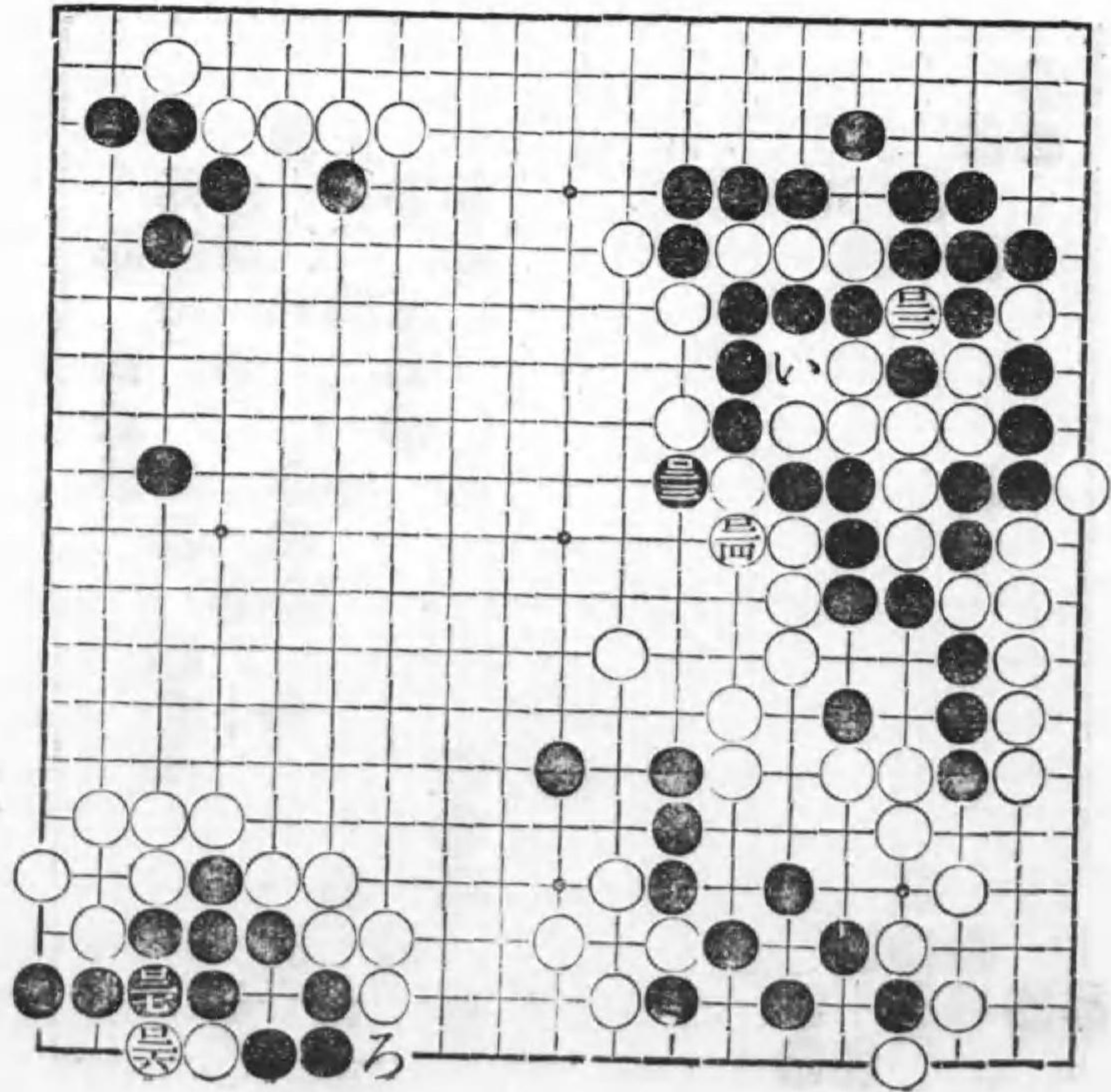
白百二十六は劫立て。

黒百二十七を(い)だと、

白(ろ)で要するに黒は取ら

れて交換、それが黒嫌だか

らである。



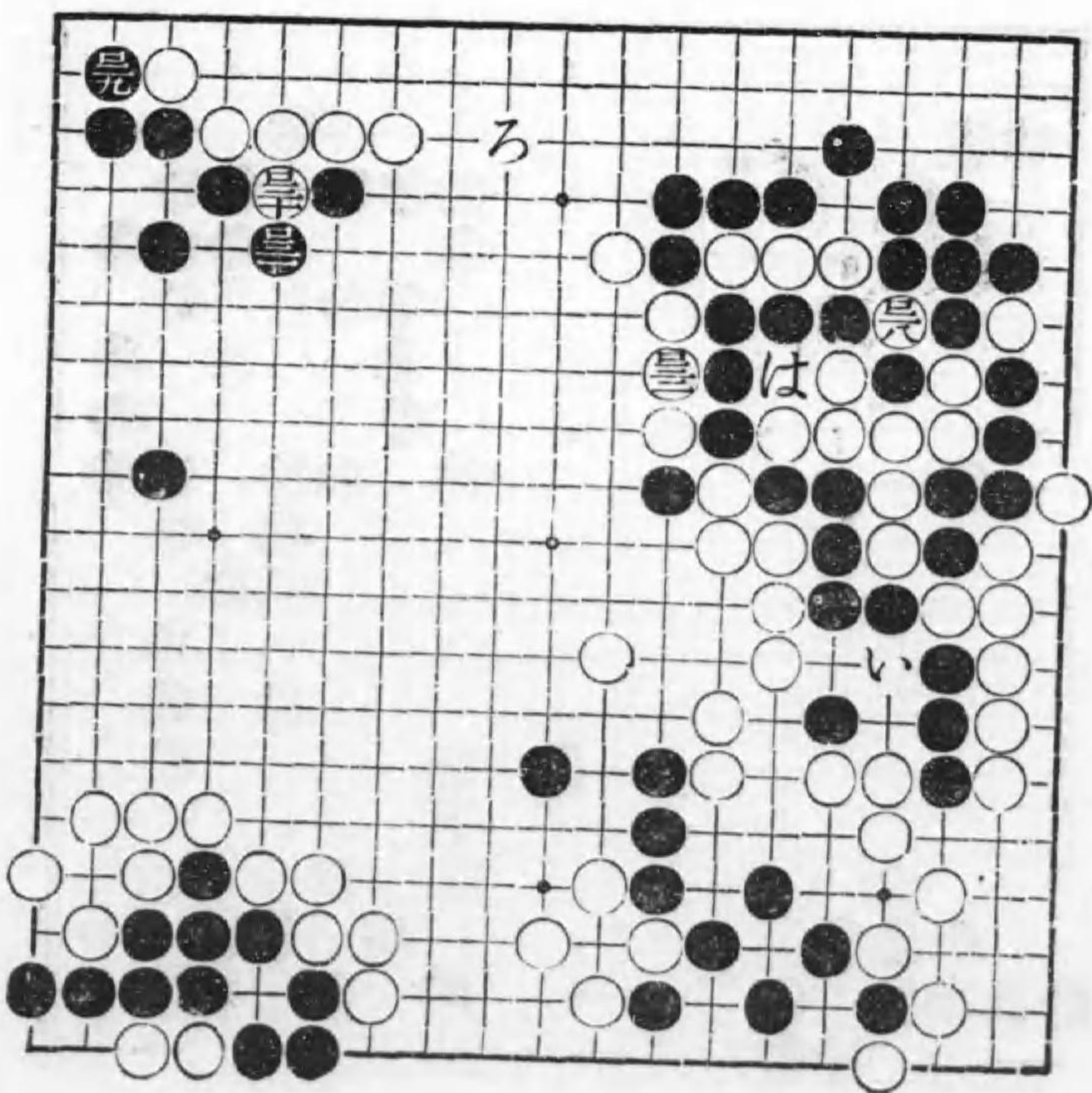
本圖は白百二十八の劫取りからである。

黒百二十九は、其方の白五子塵殺の計——

即ち次に白(い)なら、黒(ろ)と解する他はないのである。

處が白百三十二は(は)等で黒を取るより——

(は)の所で其黒五子を取つて、なほ其上の白三子も助けやうの大望である。



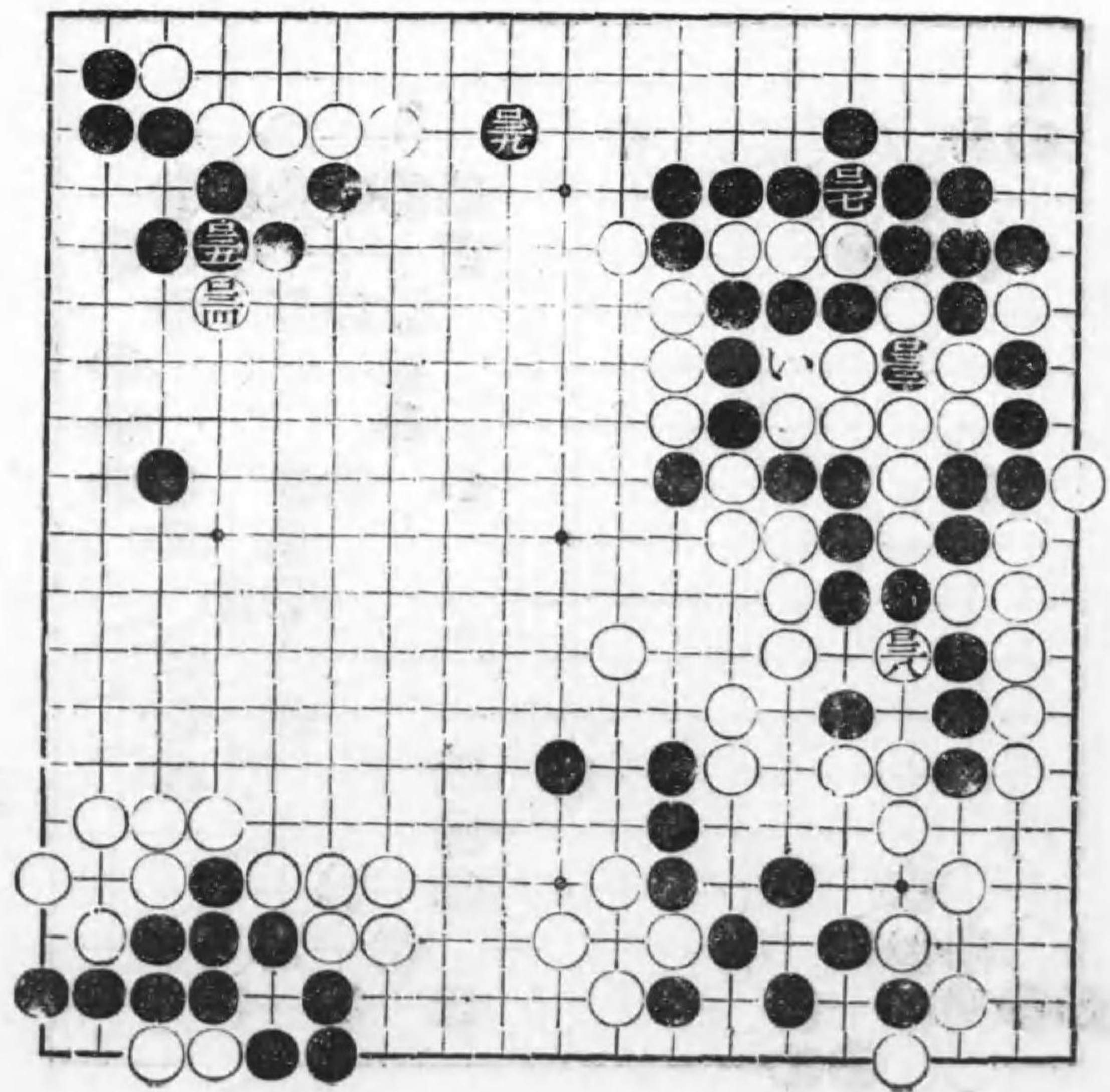
本譜は黒百三十三の劫取りからである。

白百三十四は次に黒(い)で白八子打上げなら——

言ふまでもない白百三十五に切つて、黒を兩斷の劫立て。

それが黒悪いと見て黒百三十五と應じ——

次に白劫取り。に黒百三十七は(い)と白に取られるのが大きいからである。



本譜は前譜最後の一手、
白百三十八までの現はれで
あつて――

次に黒(い)なら白(ろ)で
黒五子が取れ――

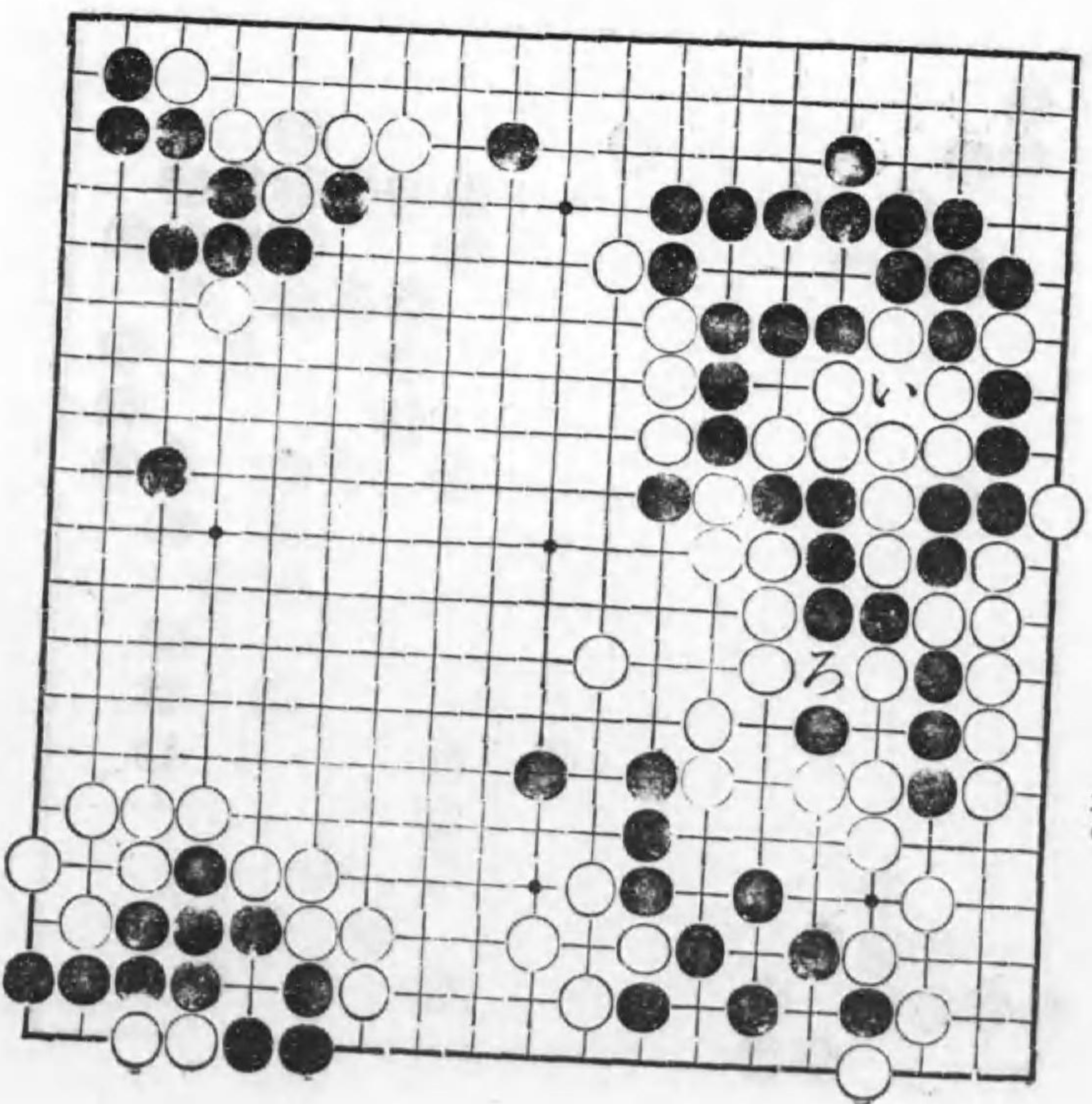
最早劫争解決である。

が、さしもの大劫戦も黒
が失敗本局は黒中押負けで
ある。

黒が中押負け――

だから白には中押勝。

と稱ふことは一見明瞭の
大勝敗で――



九〇

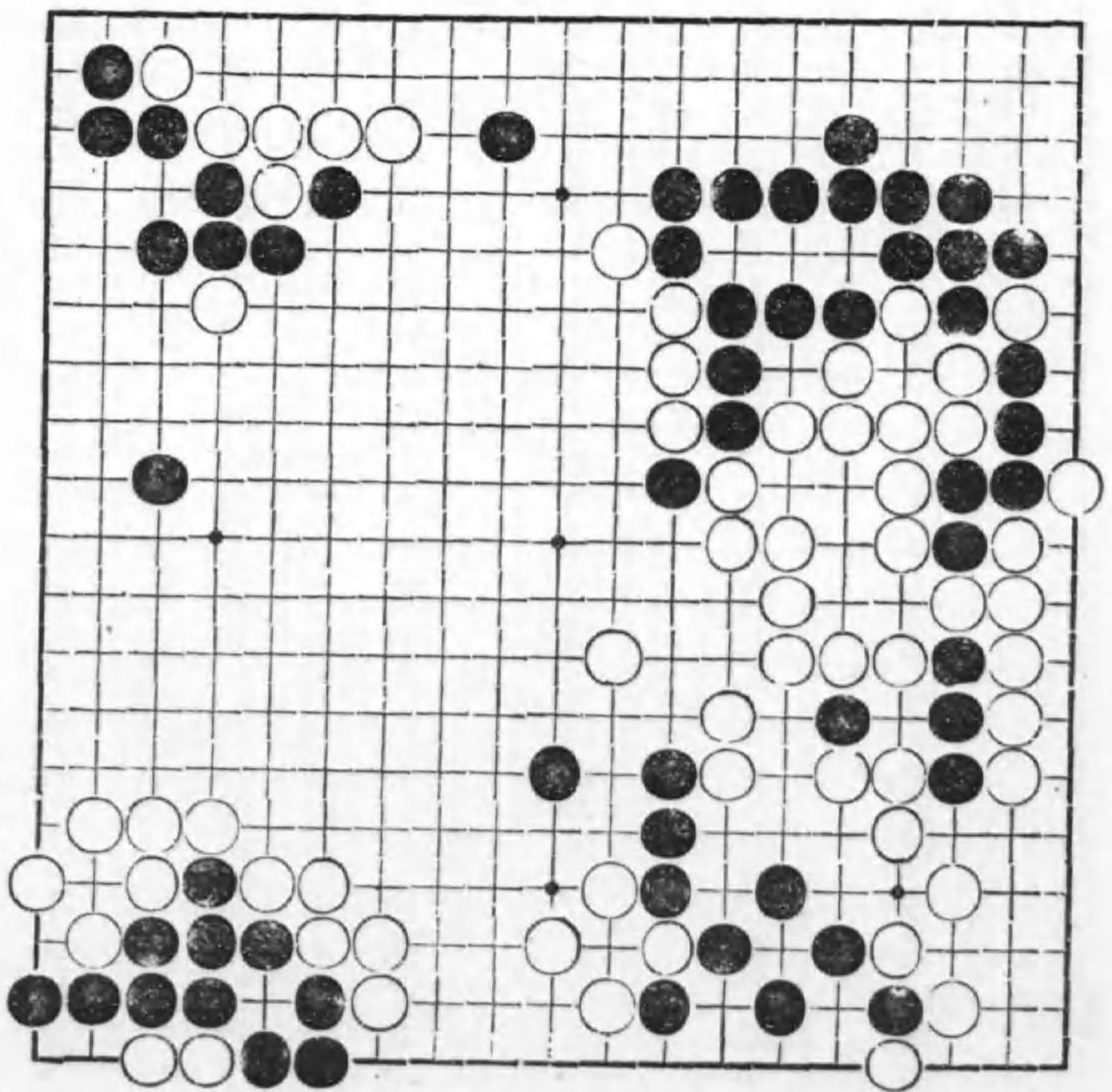
前譜より續く。

負けと見たら、負けまし
たと一禮して終局し、氣持
も大雨一過の明朝さ。

中押勝ちとは、五六目の
勝敗の差なら作碁といつて
要するに勘定の事。

大勝敗なら作らないから
途中で終局。此中途終局を
即ち中押勝。

譜は前譜黒(い)白(ろ)と
したもの。



九一

本局は作碁であつて、何目勝ちとか負けとか勘定までのもの、此一局で打つ方法、打つ目的、其他全貌展開、前局で解つたと思ふが、碁の構成は解らう。

本譜も白方八段、黒方四段の名局であつて、それが譜面に即ち黒が四段格下だけ二子置いたもの、従つて白から打始め、白一がそれ、黒二がそれといふ順序である。

白一に黒二は同地位であつて、黒は二子置いた効力を明瞭にしたもの。黒はなるべく變化を避け、前途分り易いからである。

白三を假りに(い)だと、次に黒三の所。では同じ事、同じ事を白がやつてゐては、二子置かせた、其効力減殺は不可能。といふ理に白三が見られやう。

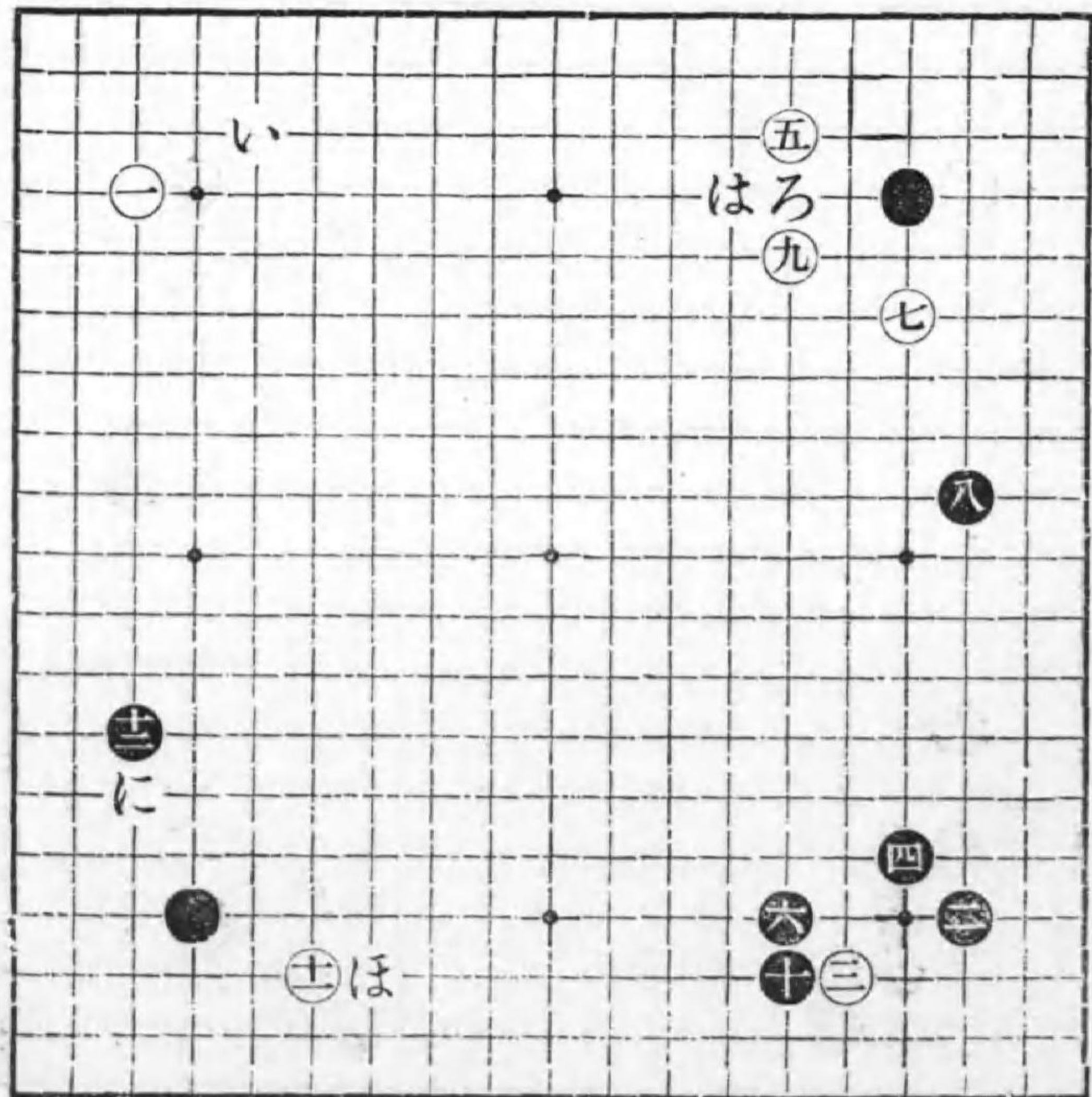
黒八は右上隅星の黒一子を捨、八より下の右側を、黒地にしやうといふ作戦、右上隅の黒一子を出るなら、黒(ろ)白(は)そして黒九の所。

白十一を(に)だと黒(ほ)と成つて、(ほ)の方即ち下邊一帶黒地。とも成つては白損の方針。それが白十一と此方より。と見られやう。

五、六目位ひを作碁といつたが、昔は十七目以上勝ちの中押勝。十六目以下を作つたものであつた。

が今は十目はあろか、七八目負けでも作つて醜態に見られ、時には——
一目負けと見透したら、無理でもそれで最後の一戦僥倖を目當。

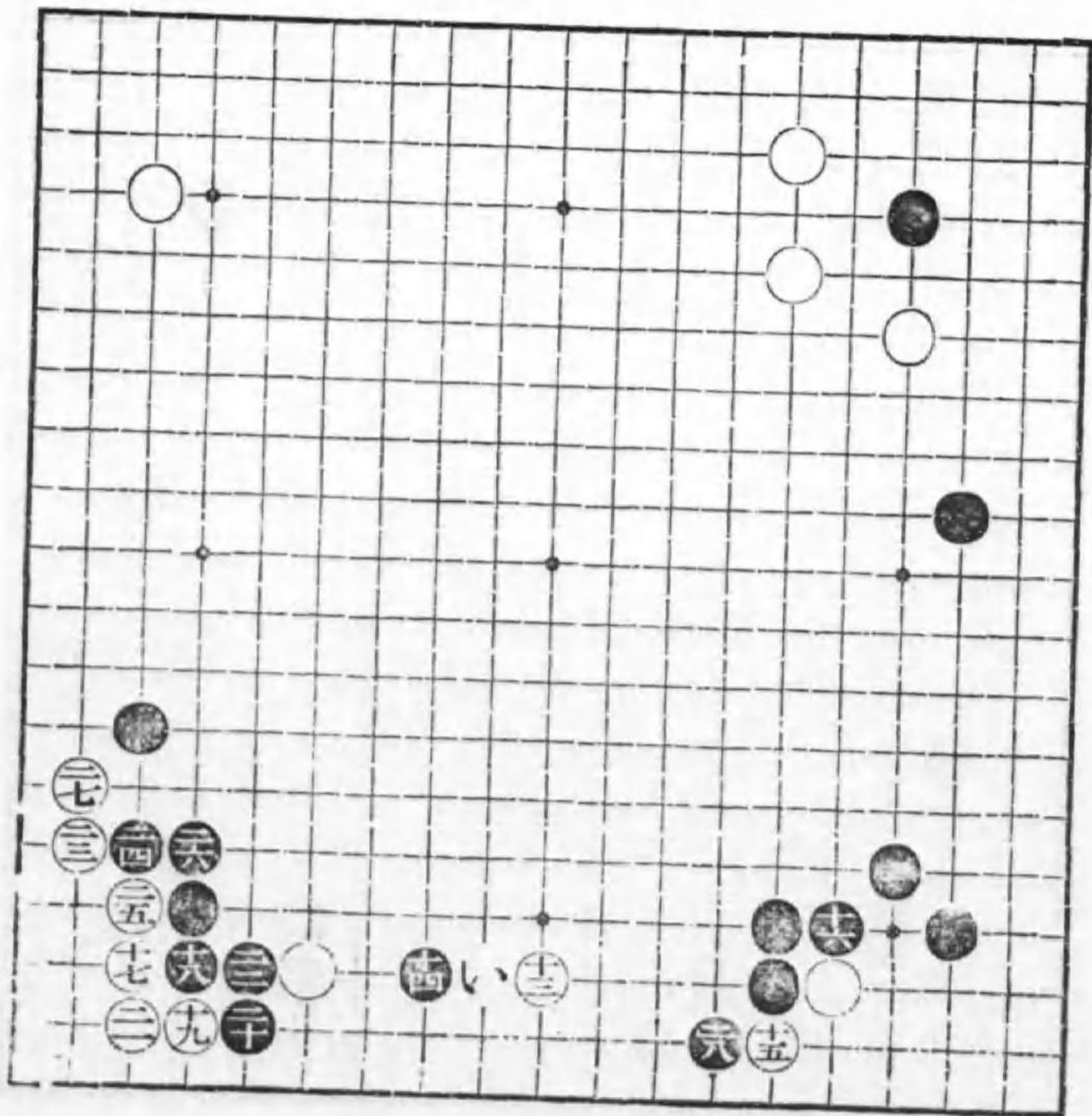
即ち一目も百目も敗けて不名譽は同じ。其見地からである。



本譜は白十三より黒二十八まで。

白十三を(い)なら無事。だが白の立場は局面の混亂を待望。それが左様白十三である。

處が黒から十四と戰爭を仕掛、黒十四は豪氣の打込みである。と觀られやう。黒無事を好むなら十四で十八が定石。隅を黒地にする意味である。



前譜白十三を(い)なら無事。といったのは――

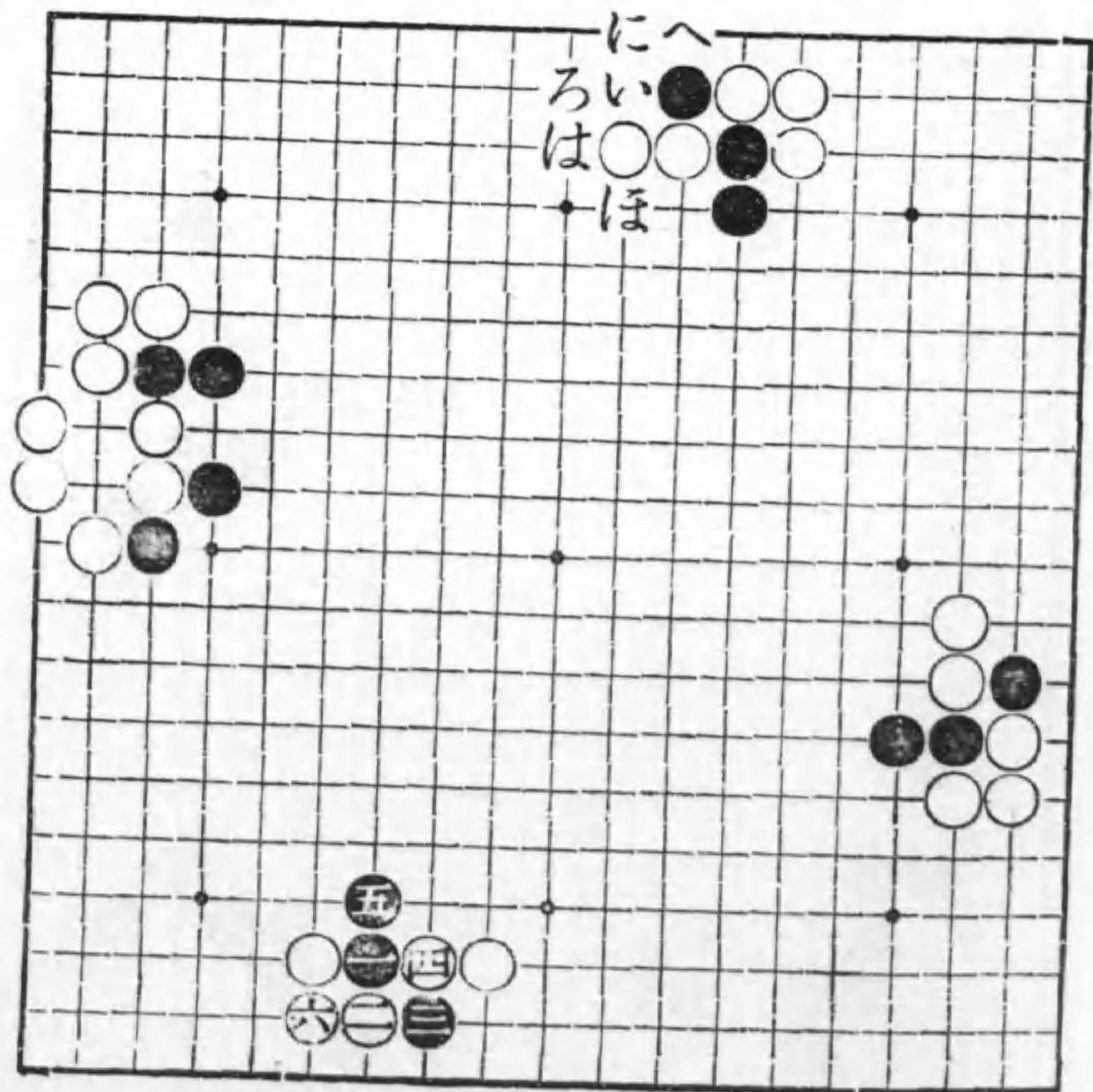
下圖に見られる黒一より白六迄。の此一例にも判る黒の惡果。

右側は黒一より白六迄を堵易くした圖。

上圖は黒(い)白(ろ)黒(は)白(に)黒(ほ)白(へ)迄は黒大惡果。

また此れを堵易くしたものが左側である。

實戰



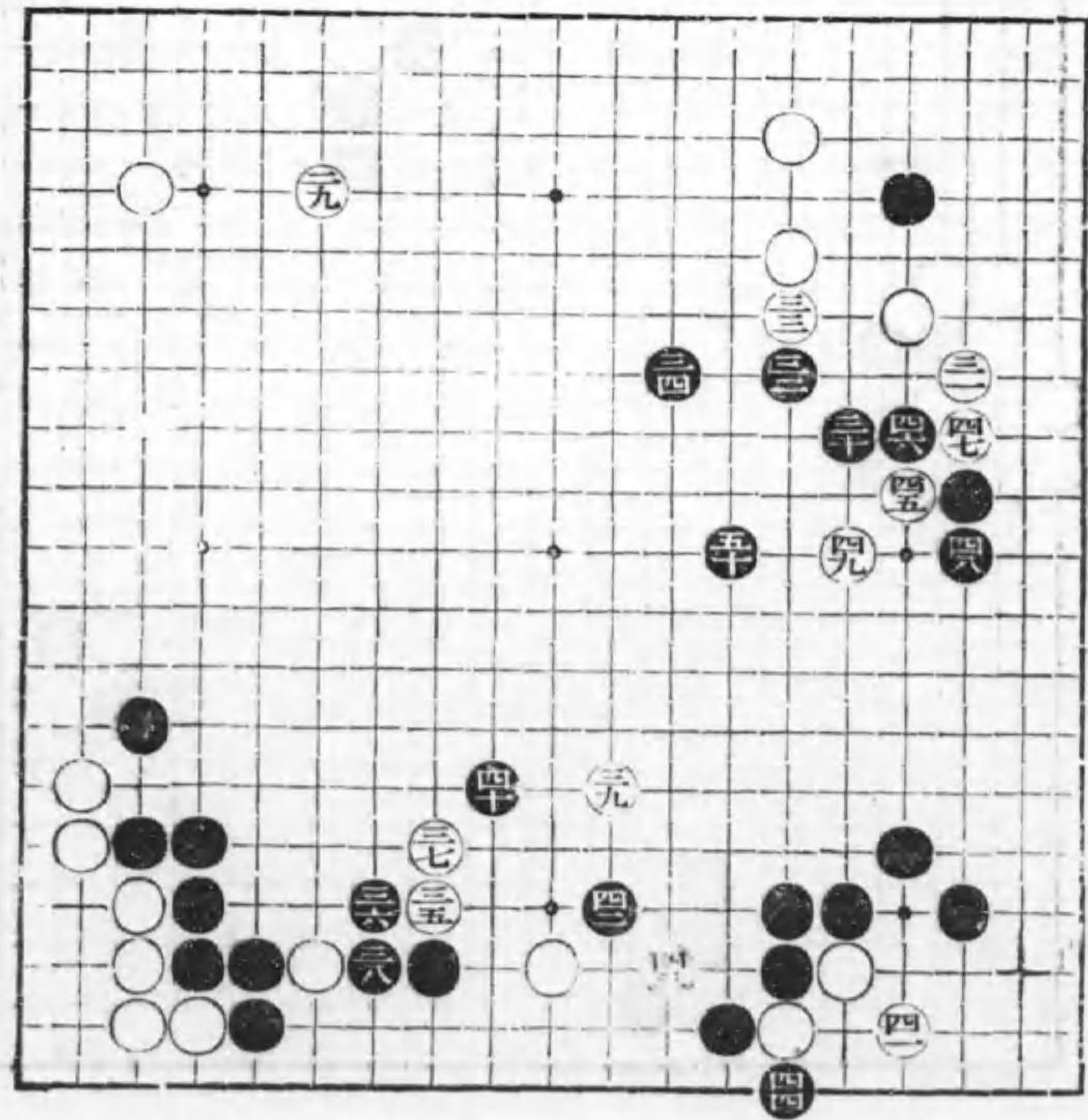
本圖は白二十九より黒五迄。

白二十九は下邊より右側の黒の大模様に対抗上の、上邊一帯地取りを目指した一手。と觀られやう。

黒三十より三十四迄は、層一層黒地擴大である。

併し白二十九の一手、また黒三十四迄で、何れも確定の地とは見られない。

それが白四十九迄の侵入手段。



前譜白四十三を(イ)だと

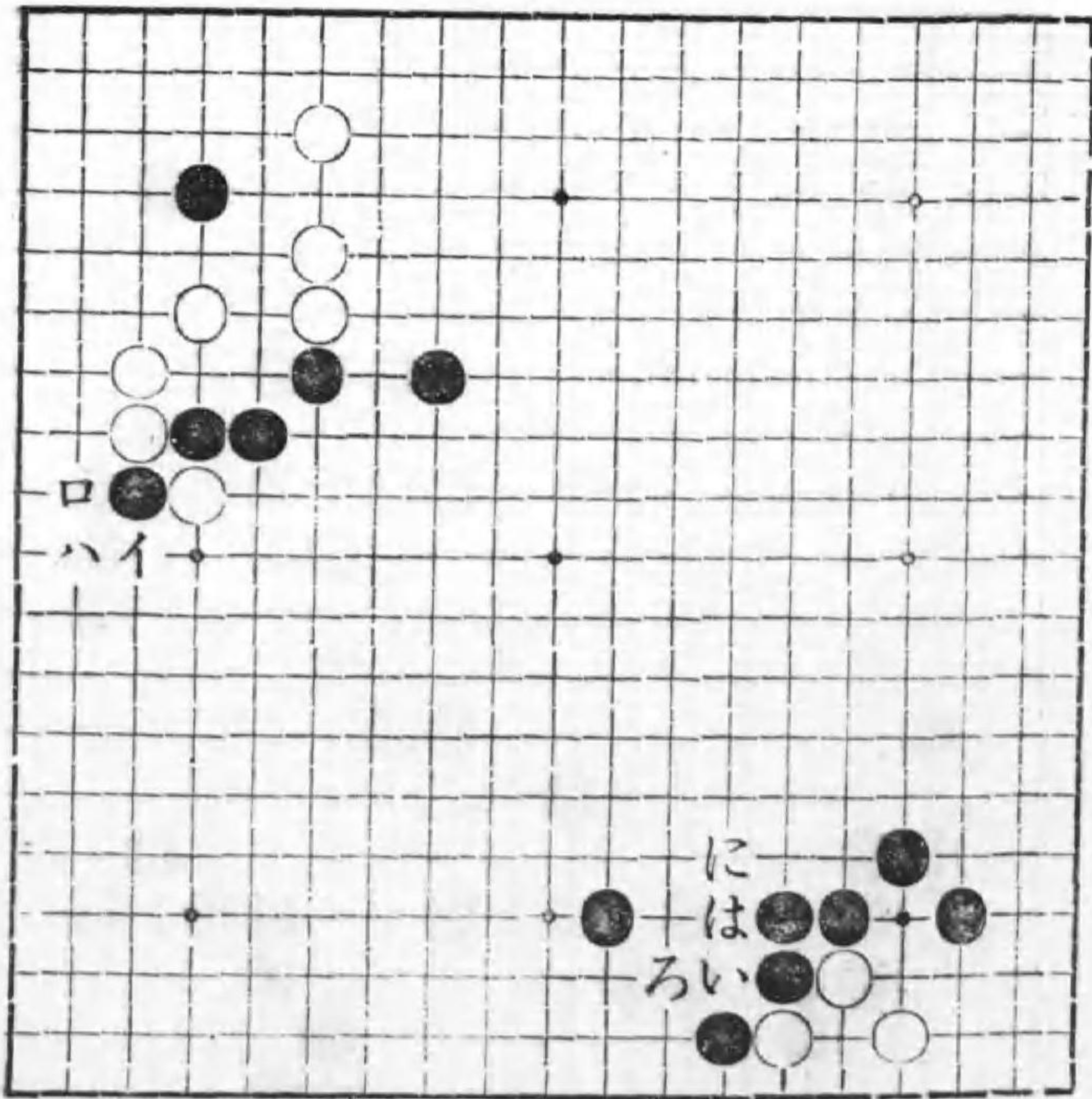
黒(ろ)白(は)黒(に)と成つて白二子は逃げられない。

白四十九は其處で白四十五を黒に取られる逃出し。

黒四十八を無いものとして左側を見られよ——

白(イ)黒(ロ)白(ハ)。

それで黒(ロ)以下二子は白に取られるものと知られよ。



本譜は白五十一より六十迄。

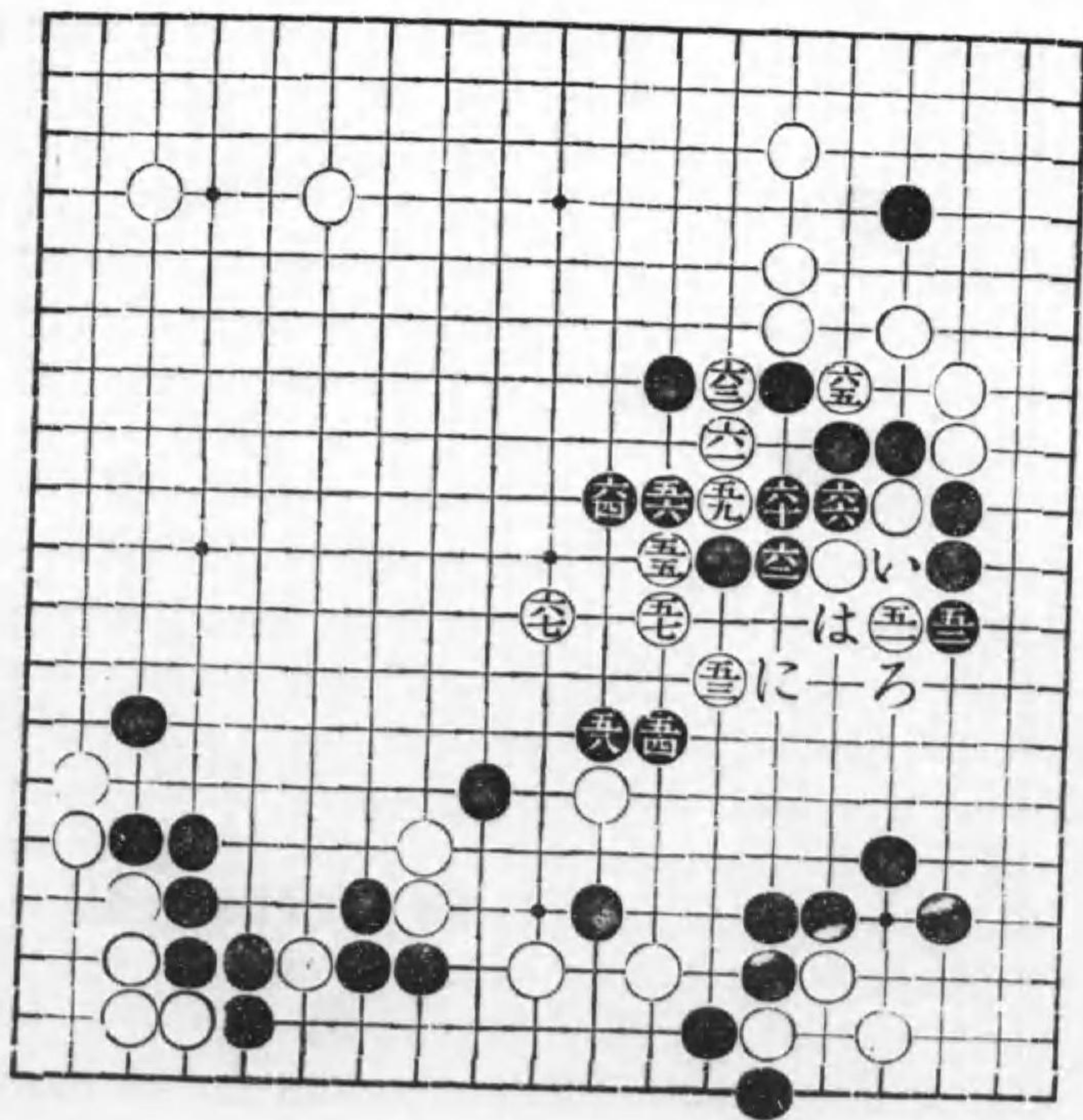
白五十三は下邊の白と合流待望である——

即ち五十四の所で連絡。

それが黒五十四と妨げたもの。と觀られやう。

白六十七を(い)だと、次に黒(ろ)白(は)と白五子と成つて——

白(は)の次は黒(に)で白は逃げられない。



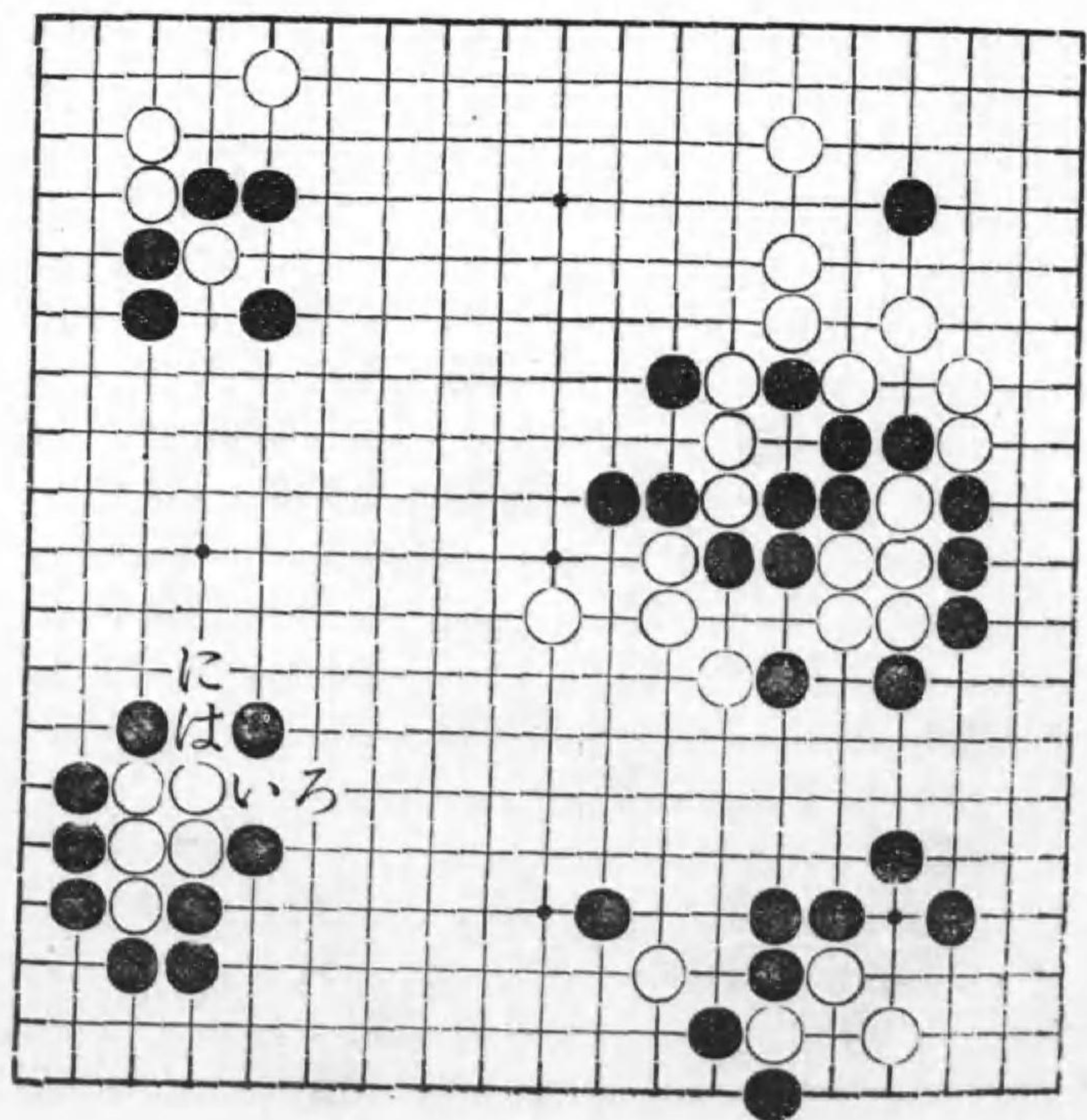
前譜黒(に)迄は右側で實際に觀られやう。

また左下隅でも同形、それを白先白(い)なら——

次に黒(ろ)。白(い)を(は)でも黒(に)。と白は出られない。

左上隅の白一子も出られない。等々を俗にゲタといふ名稱である。

其の名稱の一手は前譜黒(に)の一手である。

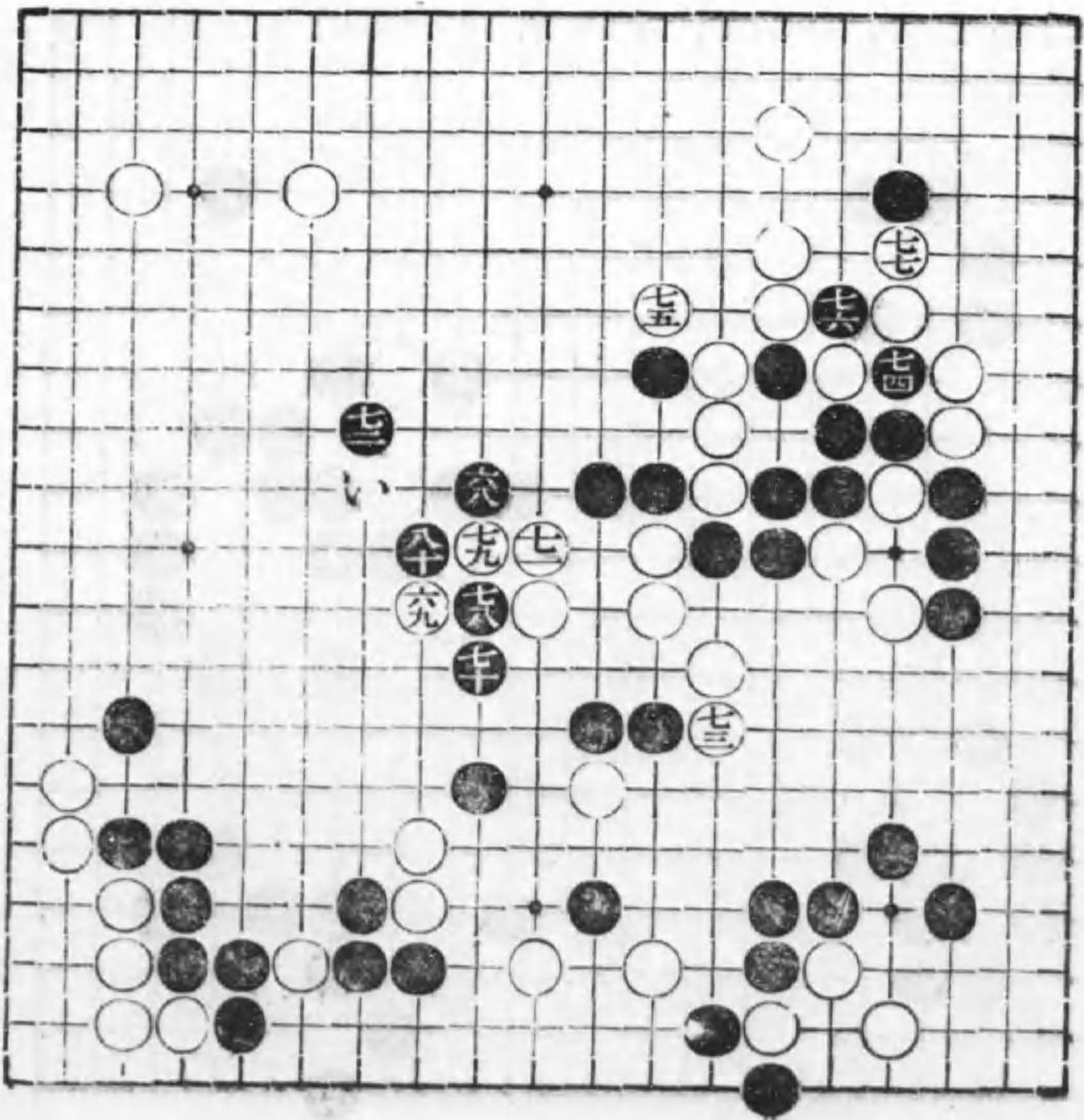


本譜は黒六十八より黒八十迄。

黒六十八は其點白に來られると、其右の黒三子が危険。また黒七十二も――

先に白(い)と白に來られて六十七以下黒四子が危険等で黒先に先にと逸走である。が――

逸走中にも六十九を先頭の其白五子奪取を黒は窺つてゐる。といふ情勢である。

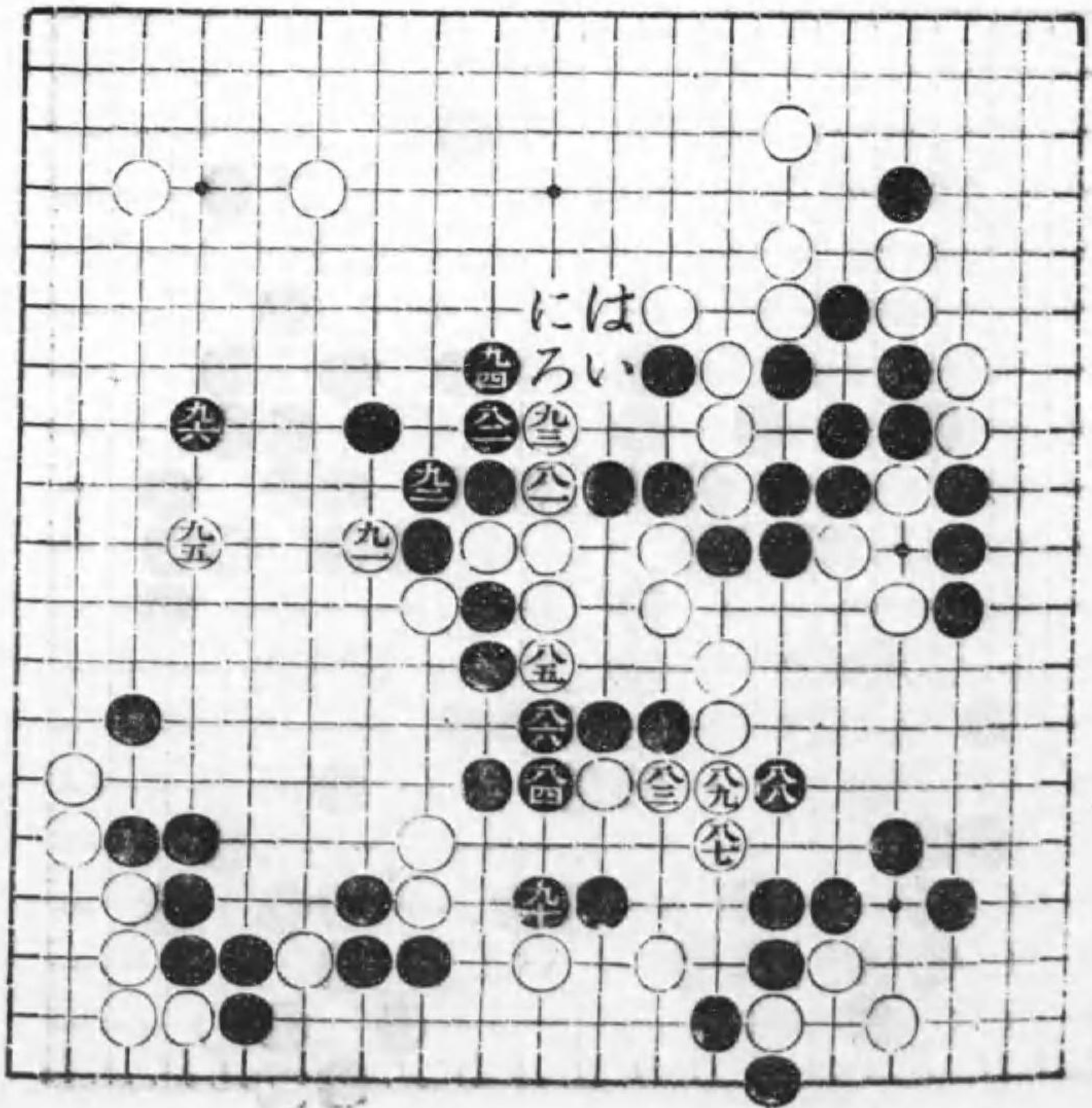


本譜は白八十一より黒九十六迄。

白八十一の方は以下白十三と成つて、其右の黒三子は助からない。

といふのは黒(い)なら白(ろ)と成る其前途の事である。即ち碁でも前途の鑑識が必要である。

さて白九十五以下の事だが、此れは黒九十六に攻められてゐる。と視られよ。



本譜は白九十七より黒百十二迄。

百六の方はそれで其處の黒地が確定。

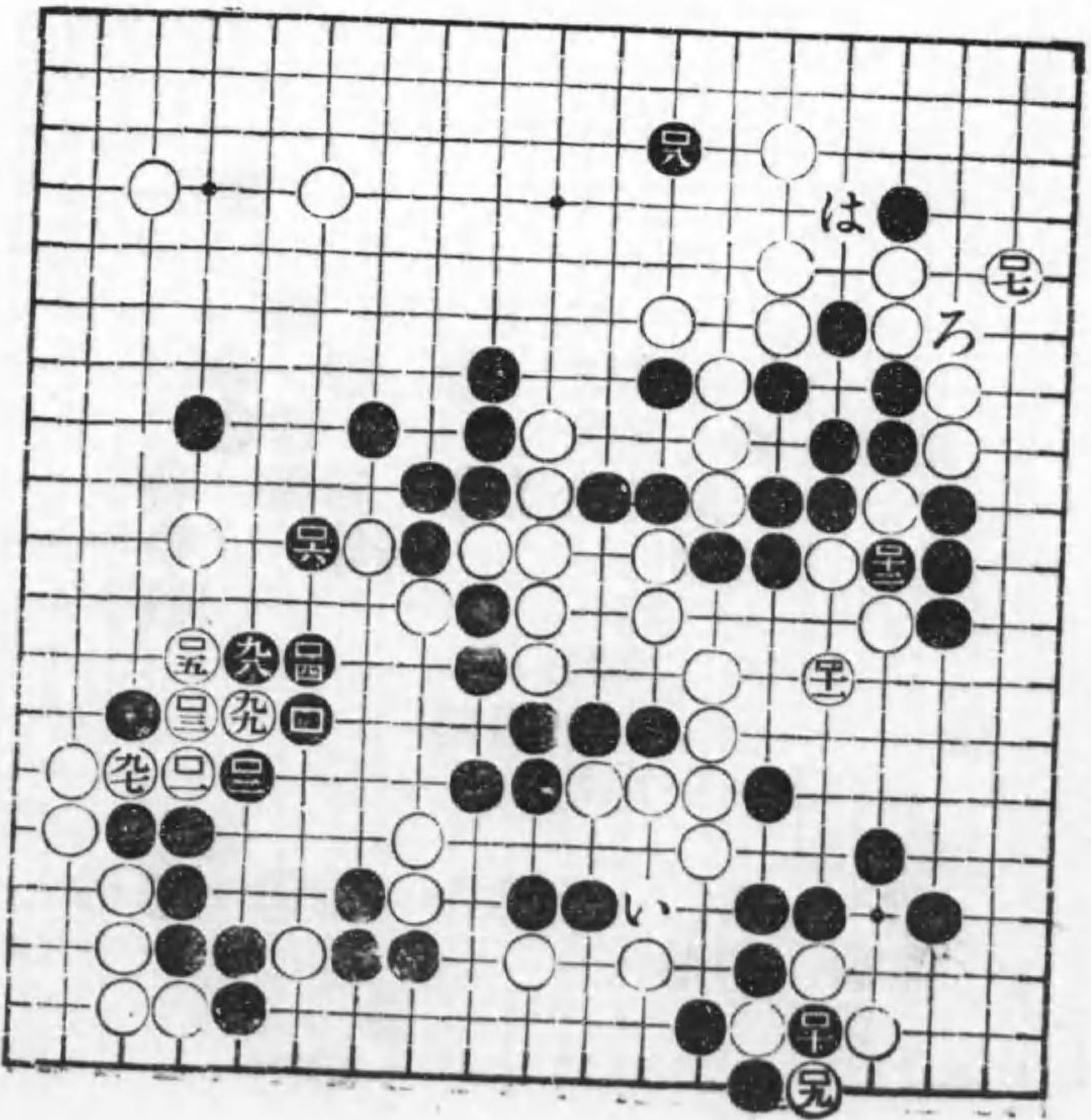
なほ黒先(い)なら其方も黒地。

黒百六迄は、白百五迄の左側の白地と交換である。

白百七は黒(ろ)と黒に切られる用心。

黒百八は次に(は)の手段を含むもの。

白百九の方は劫争——

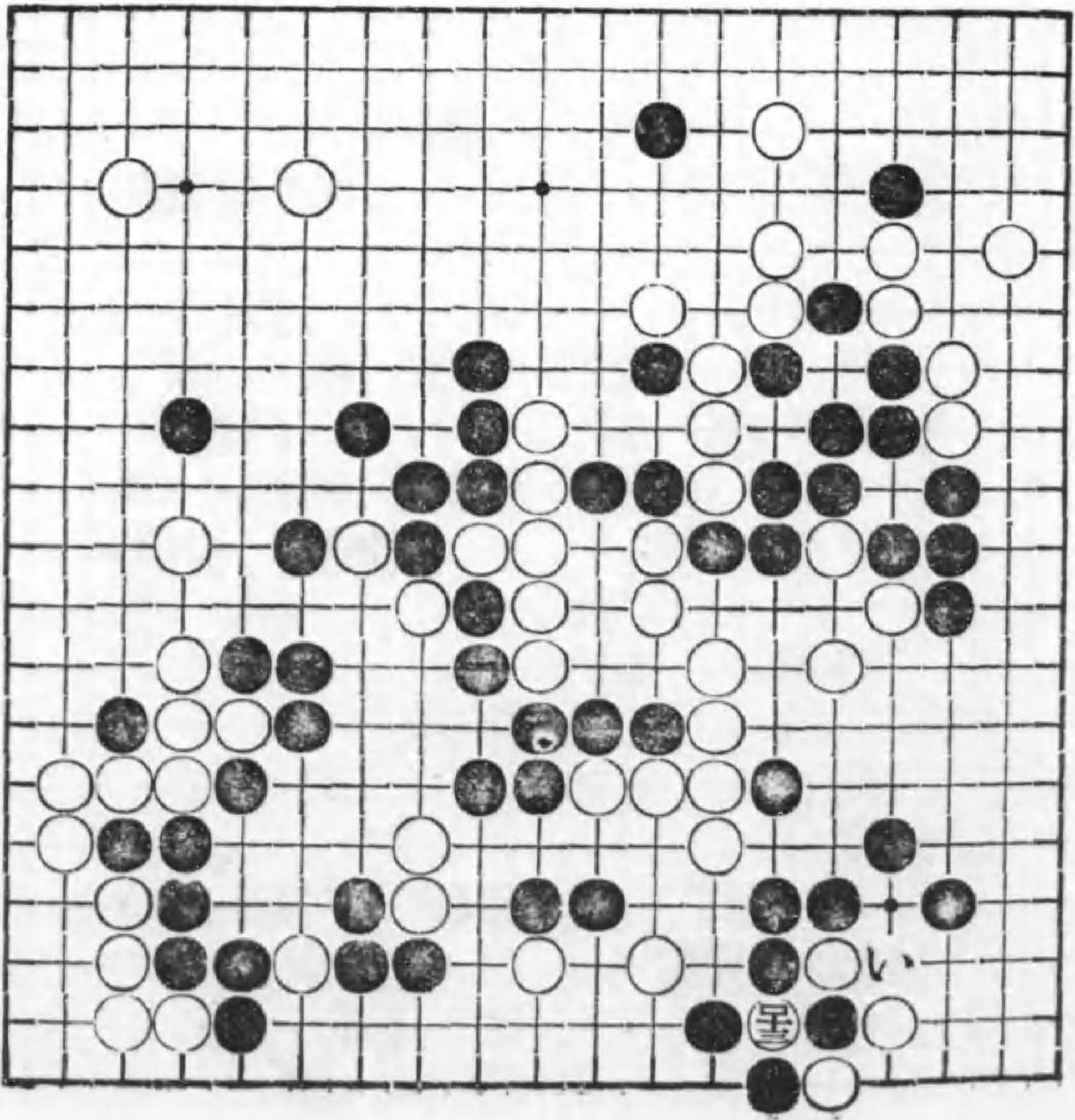


本譜は百十三と劫取の一手で——

それは前譜白百十一の劫立てによつて、即ち白百十三と劫取りである。

さて本譜によつて成程斯様に運んでゐる——

かと一度頭に入れてもらひたい。そして兩軍の形勢も觀望せられたいもの。分らないでもない。



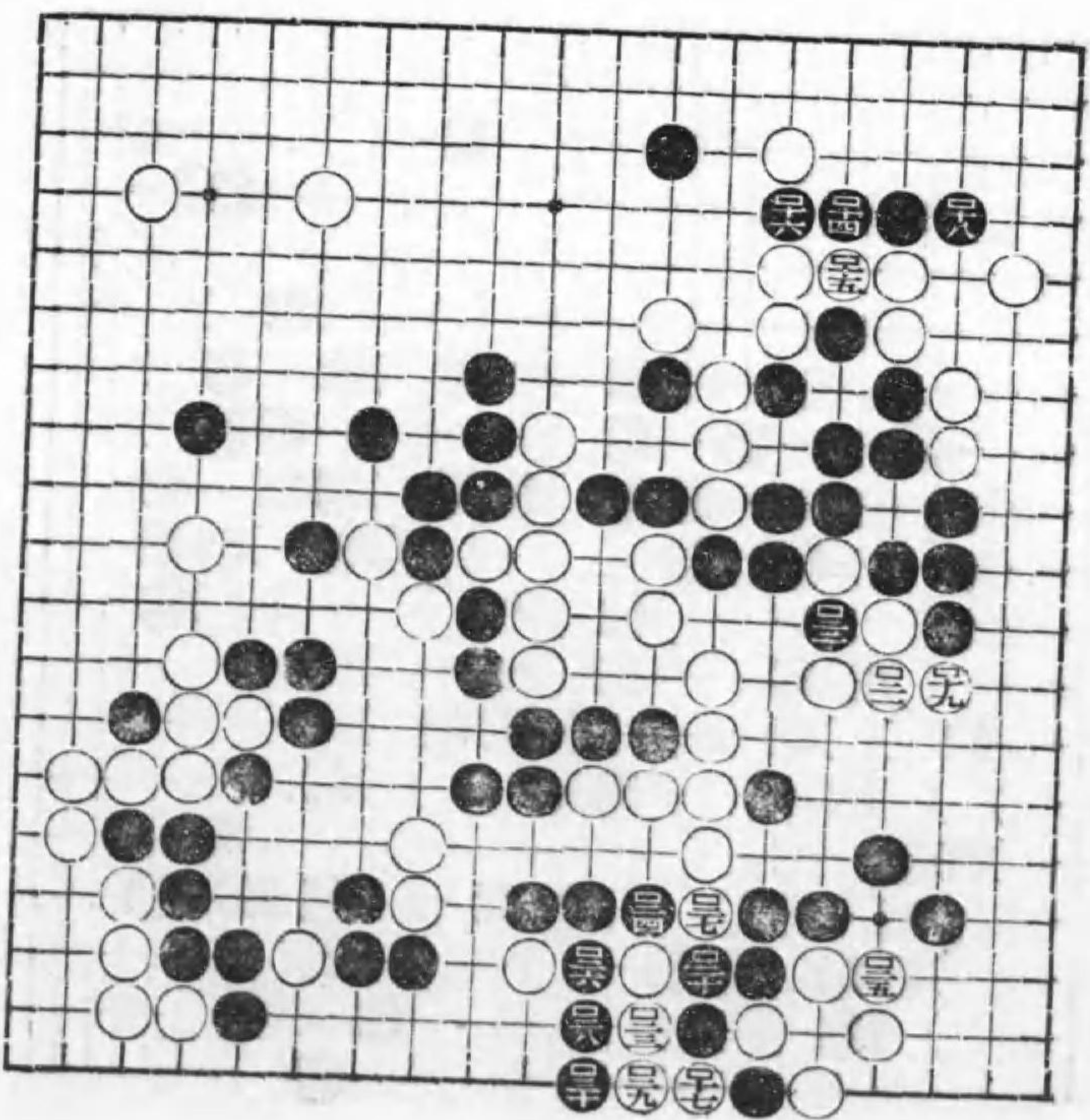
本譜は黒百十四より百三十迄。

黒百十四より百十八迄は見られる如く左様黒地にして、下邊——

白百十七と白に黒一子を打抜かし、要するに劫の方は白に勝たして黒は損はない。といふ意味である。

問題は下邊より右下隅に移つて——

右下隅黒八子の生死如何



本譜は白百三十一より百四十九迄。

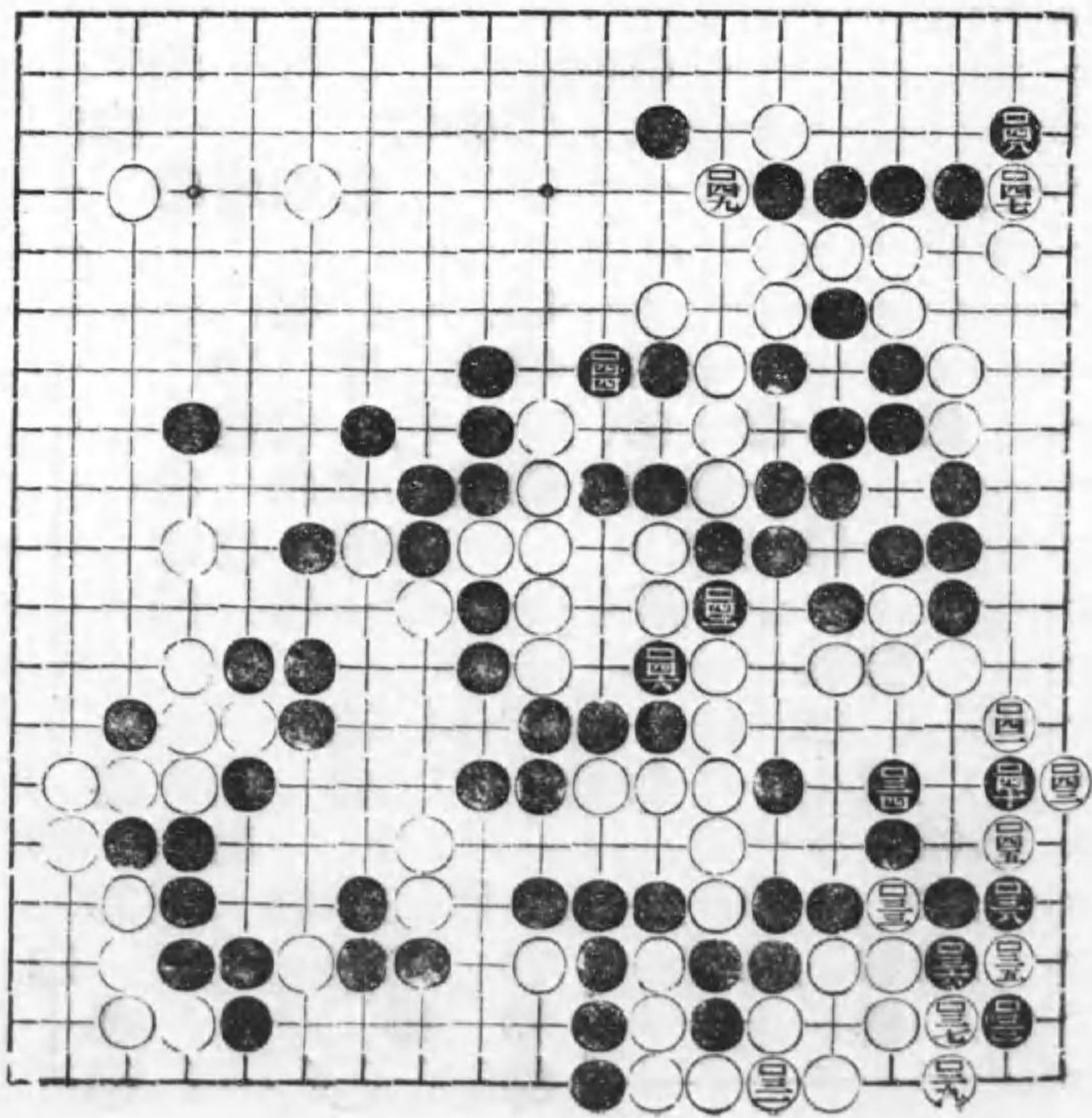
白百三十一は左様粘ぐ他は無。

また白百三十九はそれで白二眼、即ち其活きの爲。

黒百四十二百四十四、百四十六の三手は右下隅の黒を捨、中央白八子と振替る意味である。

白百四十九は其白の一團を活きる運動である。

實戦

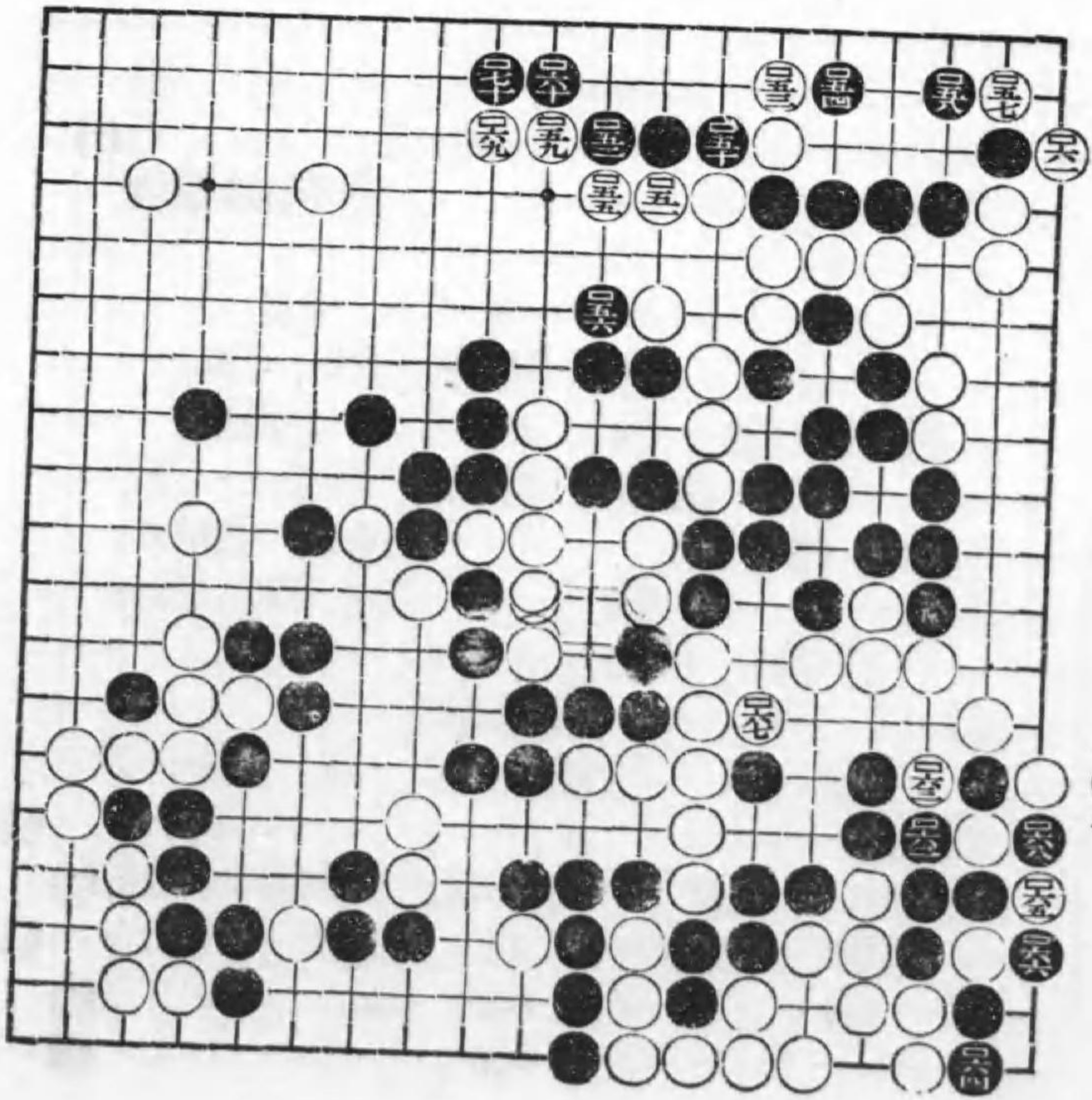


本譜は黒百五十より百七十迄。

黒百五十は前譜で斯様の一手と判じられやう。

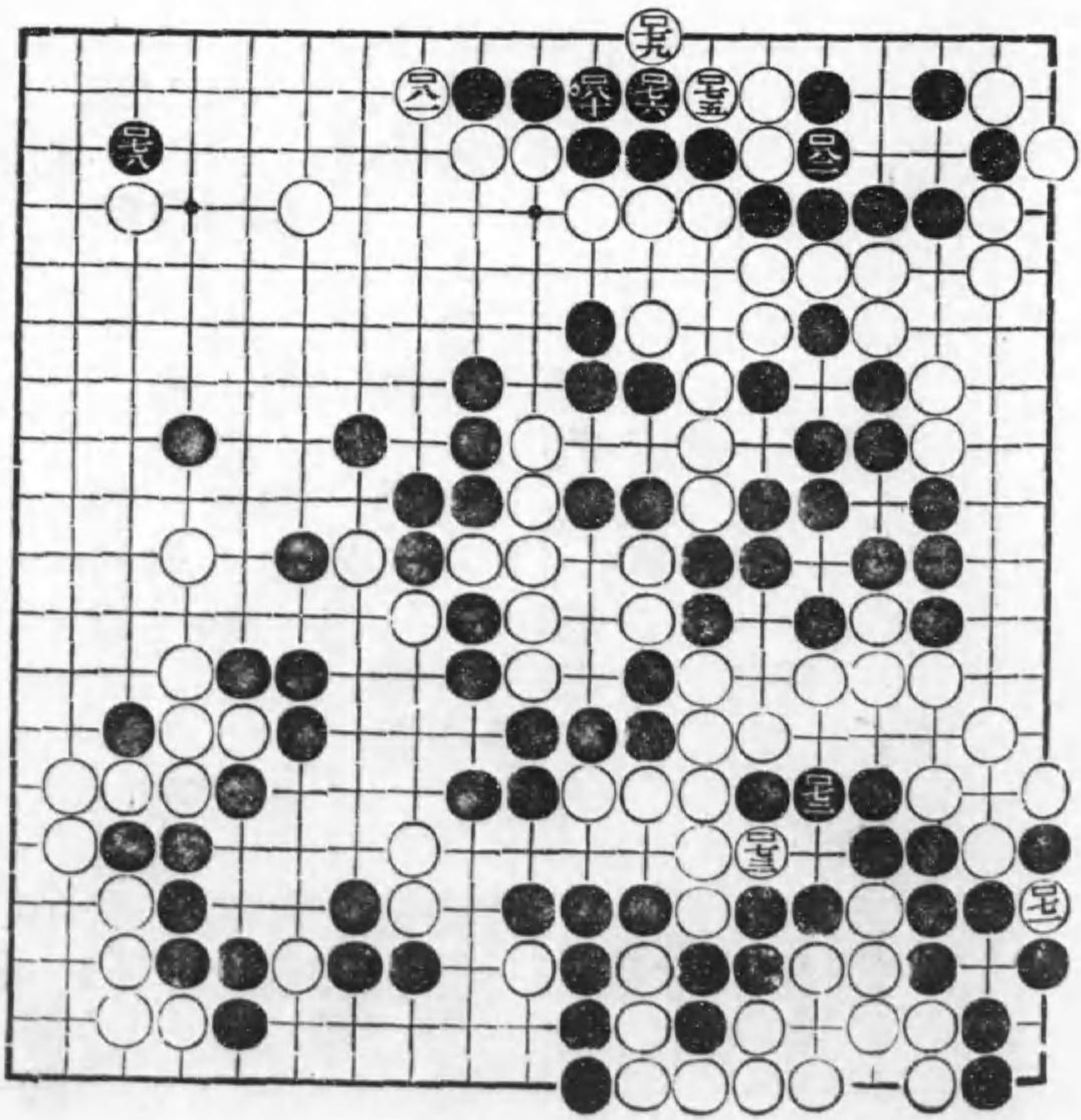
白百五十一より百六十一迄は、それで最早黒に取られぬ用心である。

右下隅に移つて、黒百六十二より百六十八迄の劫手段は、それを活ないと黒敗けだからである。
白百六十九は劫立て――

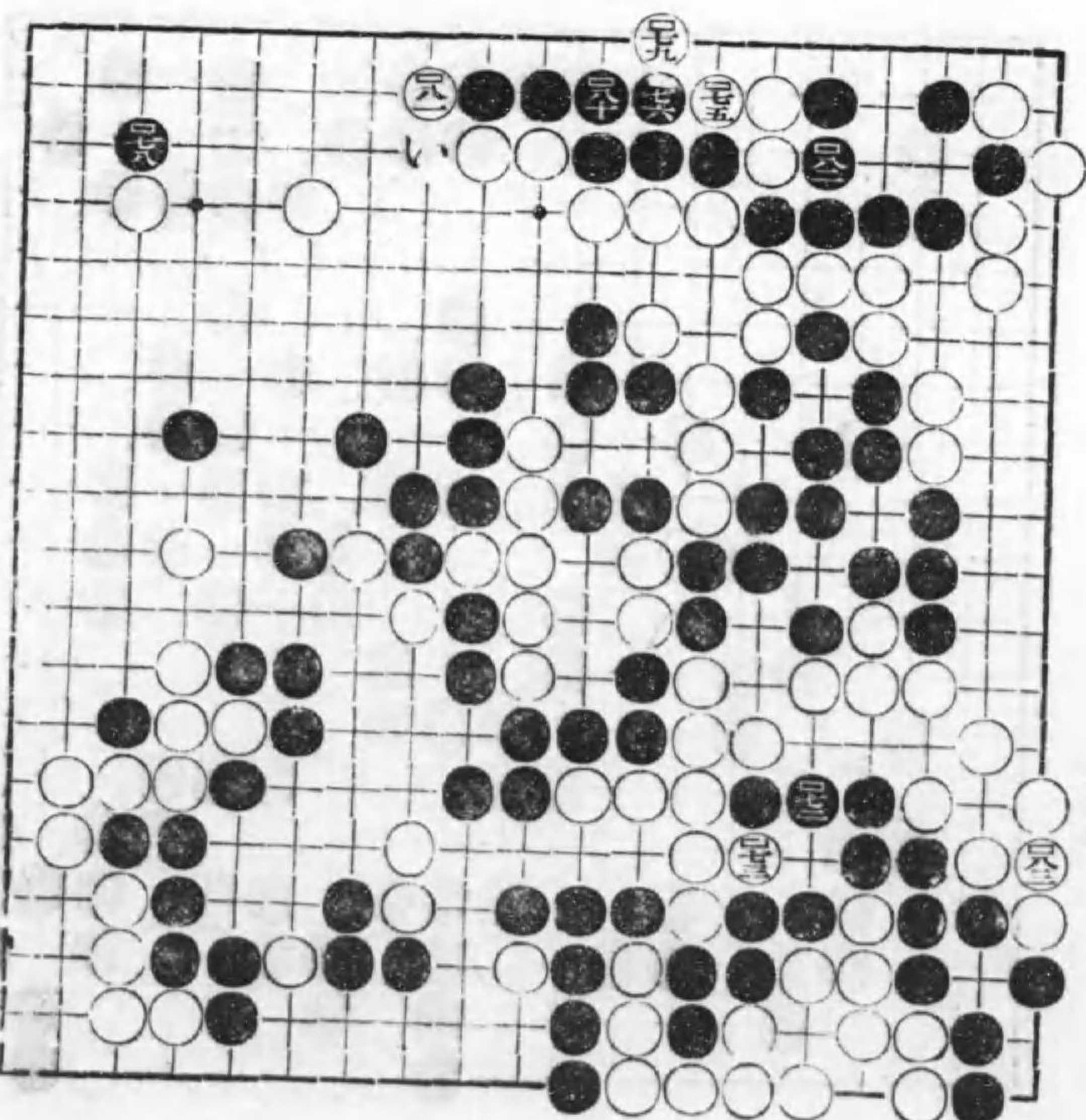


本譜は右下隅劫取り白百七十一より黒百八十二迄。
黒百七十二は次に百七十三で活きやうといふ劫立て
黒百七十四は白百七十一の上の劫取りと知られよ。
白七十七も百七十一の劫取りと知られよ。

黒百七十八の劫立てに、
白百七十九より黒百八十二迄は、次に白劫を解決の前提と知られよ。

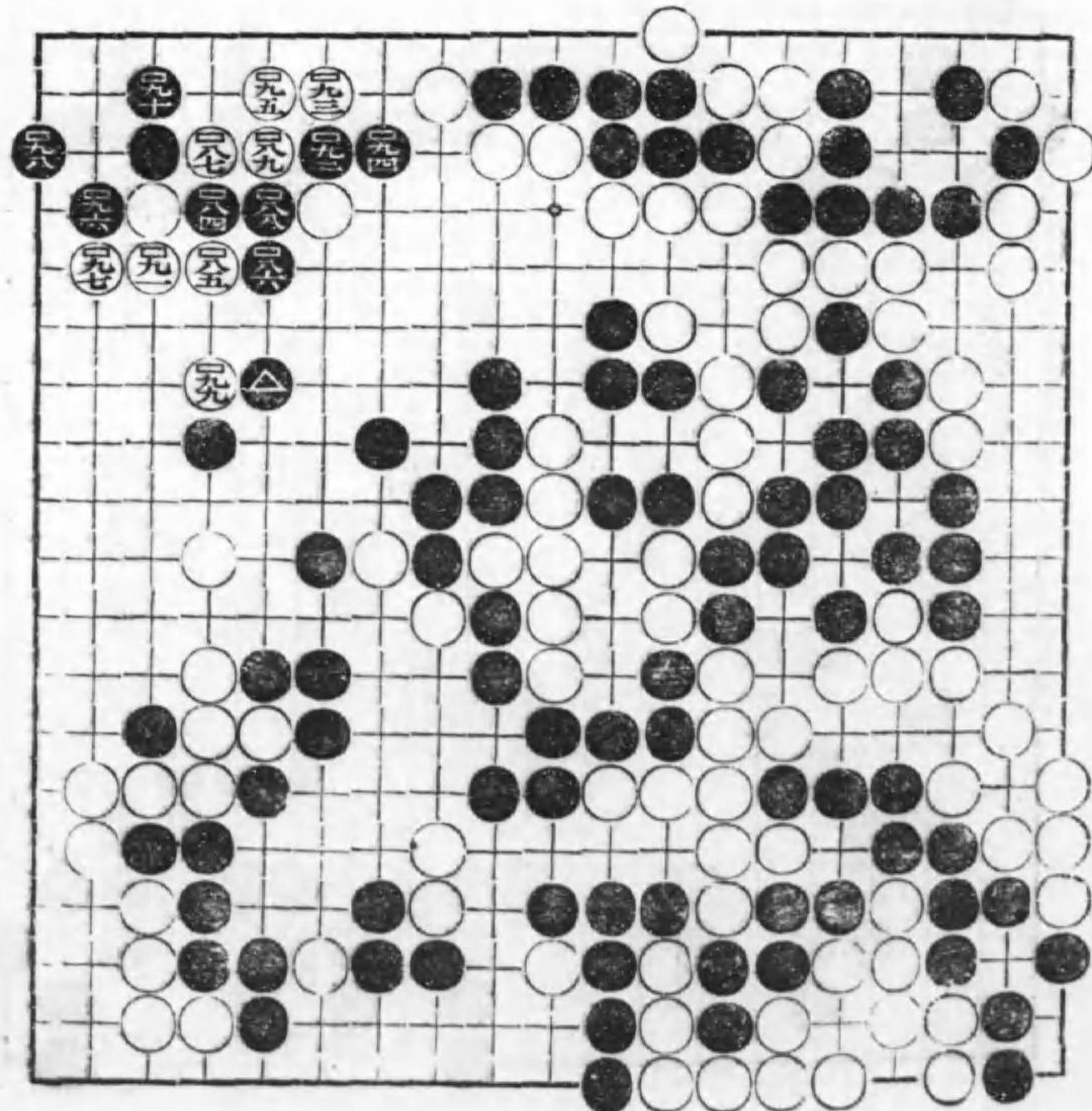


白百七十九より黒百八十二迄を、右下隅白劫粘ぎ、百八十三の前提と言つたのは、白は百八十三と成れば劫立てが最早——
 不必用。それに第一百八十二迄を無しに白百八十三だと黒(い)。
 黒(い)と成つて白悪いからの、即ち白は用意周到である。
 と認識できたら上達顯著
 右下隅の黒は全滅である



一〇八

本譜は左上隅黒百八十四より二百迄。黒二百の略字は三角である。
 黒百八十四は前譜黒百七十八と劫立てに素づく——
 即ち右下隅の黒を取られた代償の白地破壊である。
 黒二百「△」は白百九十九以下五子奪取の氣鋭——
 なほ激戦は續き斯の局は興味多大の名局である。



一〇九

本譜は白二百一より黒二百二十六迄。

左上隅黒二百二十四は其一手が活點。

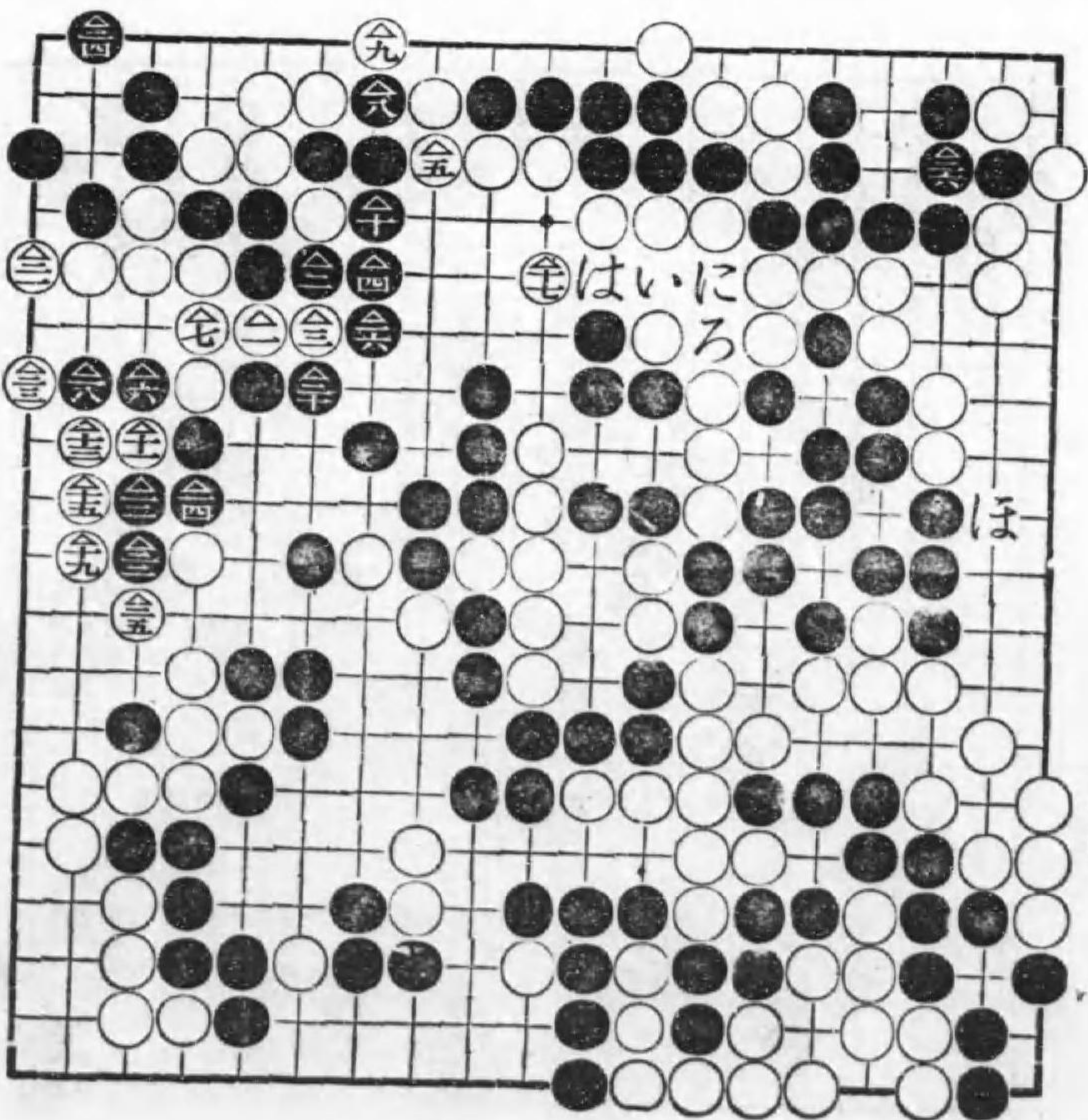
此方面は白二百二十五と成つて分野も定まり、後は終束である。

右上隅黒二百二十六は、

第一其處で白に黒一子取られて大きい。

なほ其含みは――

黒(い)白(ろ)黒(は)白(に)黒(ほ)――



前譜黒(ほ)迄と成つて見られよ、其白大團には活きが無いのである。

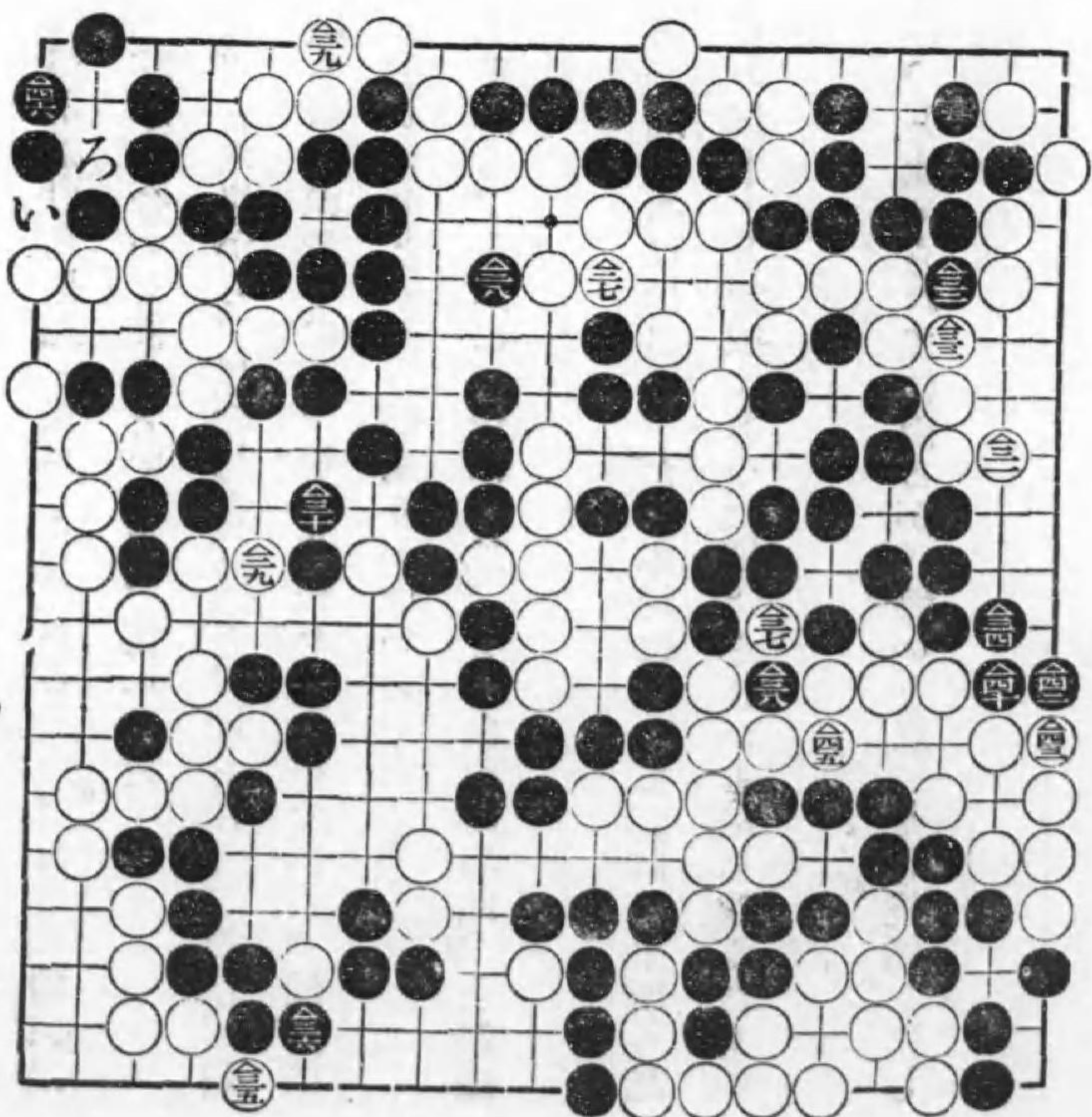
△四一、△三七の劫取。

△四四、△三八の劫取。

黒二百四十六は、白二百三十九の劫立てに結局應じたもの。それは――

白(い)黒(ス)白二百四十六と成つて黒が取られるからである。

石の死活



前譜は黒二百四十六迄、それが本譜白丸黒丸と塔易くしてあるもの。さて本譜黒二百五十と成つて最早小競合い、其小競合いを侵分といつて、例へば白――

(ろ)黒(は)と黒地を二目にし。また黒から、黒(に)白(ほ)と、即ち白(に)黒(へ)白(ほ)と(へ)の所の黒地一目を減らされぬやうにし。等の先後を争ふ事である。侵分は俗にヨセともいふ。侵分といふよりヨセといふ方が通りがいいのである。

本譜で作碁にすると二百五十手から、それに黒地は白地、また白地は黒地、と幾變僣、簡單には觀られない。

といふ事より更に作り上げの一局を次に出さう。だが本局によつて面白い手所も見られ、碁といふものは玄妙なものだ――と實感はあつた筈。それが本局を選んだものである。

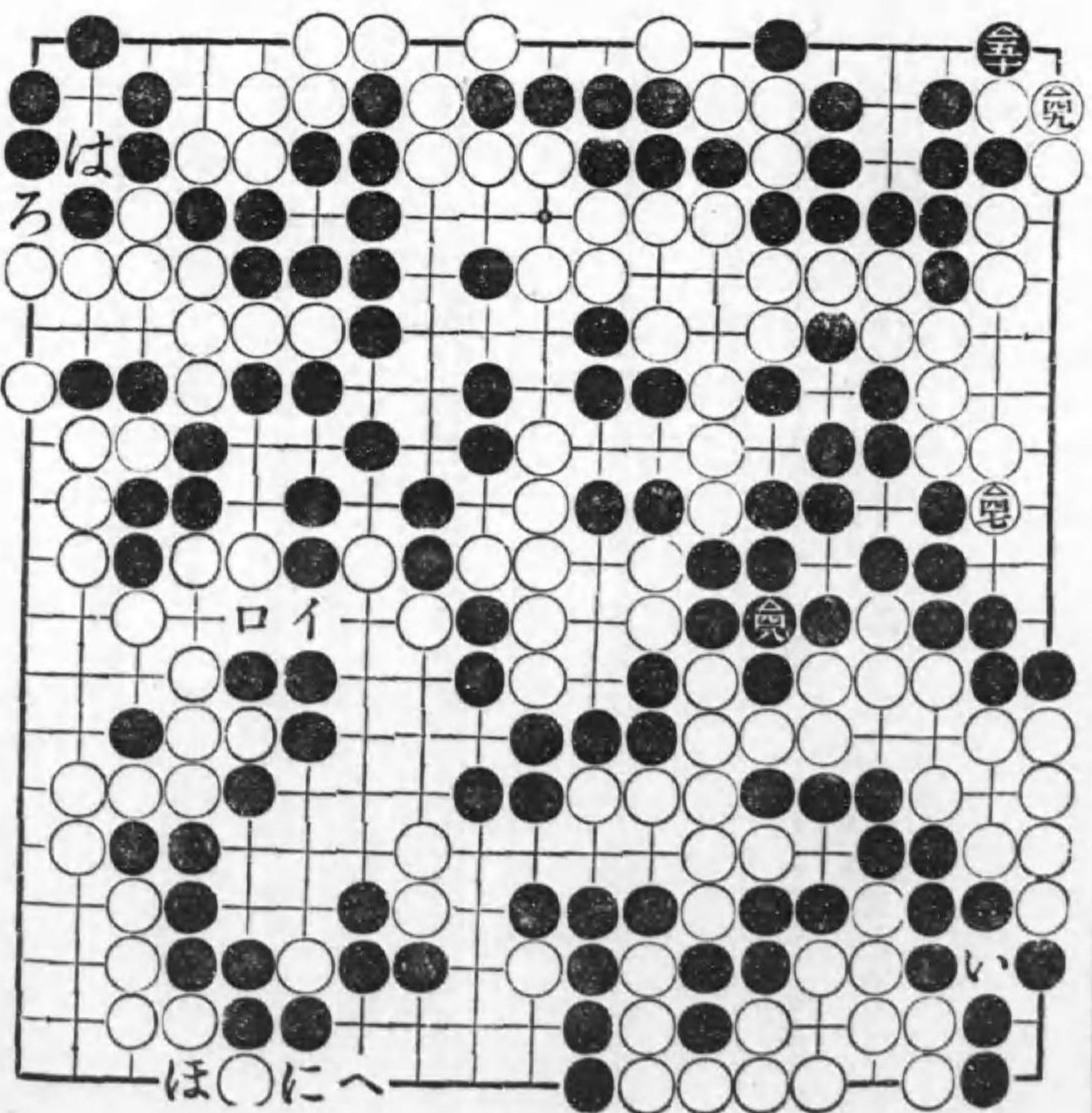
然しコレヤ容易な藝ではない、と止められては困るが。難いと思つたら後廻しにしてもいいのである。

本局の前し右下隅(い)の所は黒欠目で取られる事も説いてある。

また左上隅、白(ろ)に黒(は)は必要、即ち(は)でそれが黒に活點。

従つて(は)が無いと黒は取られる。とも説いてある。

白(イ)でも黒(ロ)で、左右の白二子は連絡できない等も説いてあらう。



石の死活

本譜は四子の置碁であつて、白方は専門家ではないが初段を受けてゐる人。黒の方は少し堅實すぎる打方だが、先づこれ位打てれば強い部の人。

白一に黒二、また白三に黒四、と黒の應手に趣きは違ふが、黒何れでも可である。

が白三に黒四の様、また白五に黒六の様、と黒應じるのが先づ通常と知られよ。

黒八は六と併せて其上方の黒地が豊富。黒八は其處を大場といつて好點である。

黒十も其一手で左側上下を通して。また次の黒十二もそれで確實の黒地と見られ、黒本格的應答である。

黒二十八、三十の二手が此れを堅實すぎるといふ。即ち其隅は白から侵入されない二重防備——

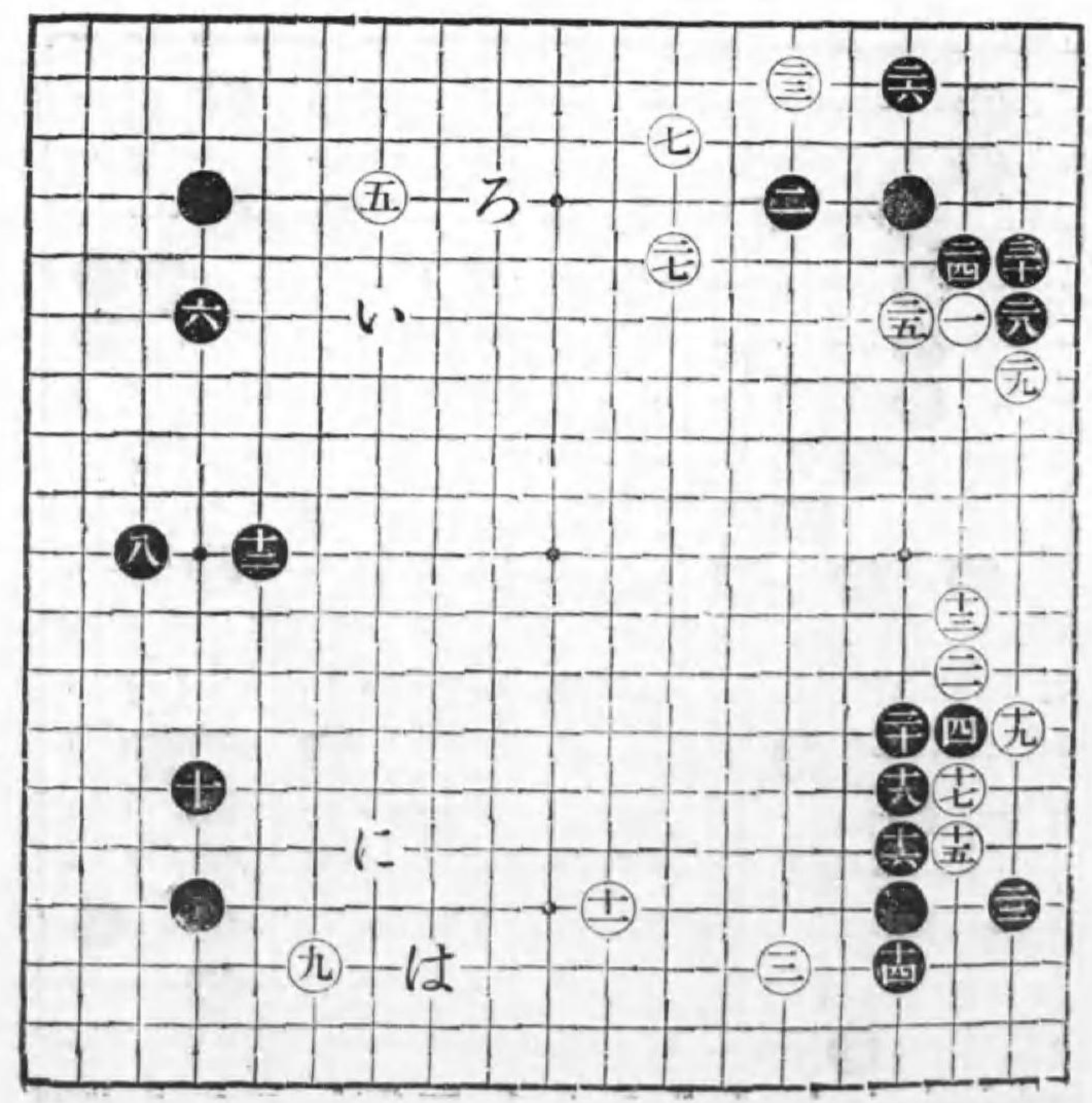
と黒二十四があつて見られやう。されば黒二十八は(五)。黒(五)は十二と併観黒地が厚い。それに機會を窺ひ黒(ろ)。黒(ろ)は白地へ侵入であつて、黒無理でない戦争開始。

本譜は白一より黒三十まで。

また黒二十八で戦争なら(は)と打込み。

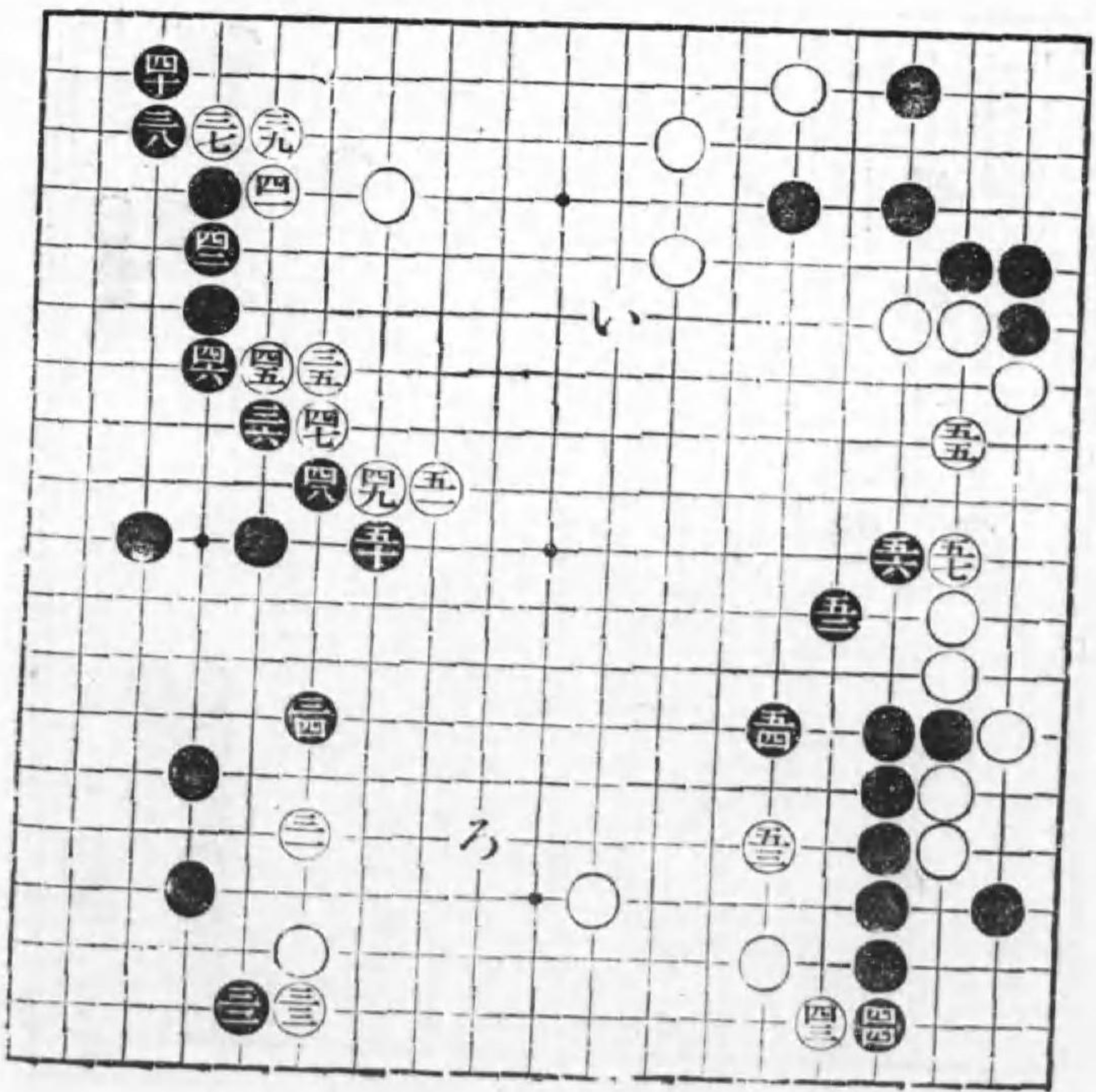
平和なら(に)で、即ち黒二十八を(に)は左側の黒地を豊富にし——

なほ中央にも將來好展開と解る筈。



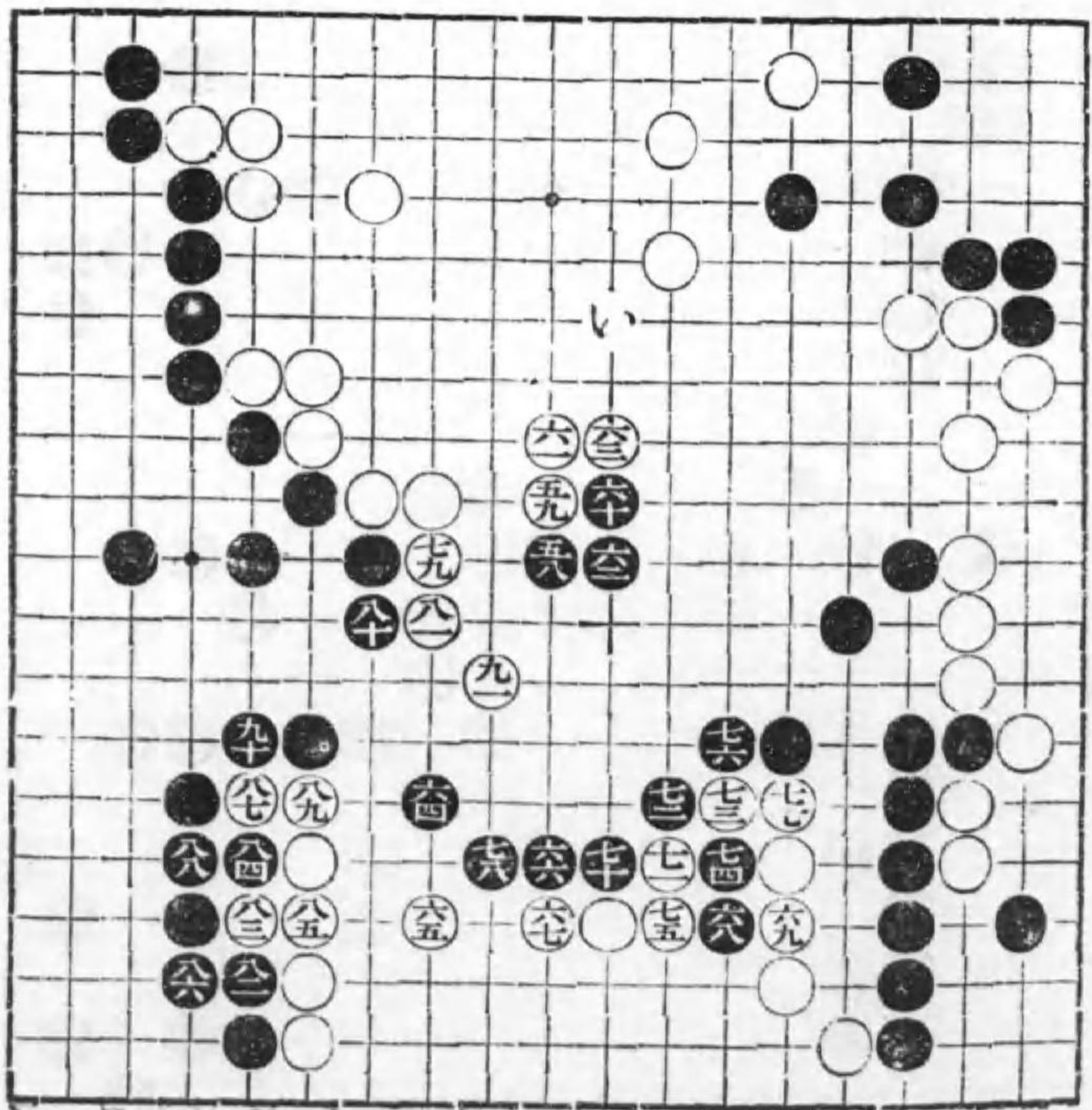
本譜は白三十一より五十七迄。

黒地も左側を通して大きいが、白地も上邊、下邊と大きいのである。即ち白五十一と成つて大観したものを何と打つものか——と考へるものと思はれやう。(い)とも侵入したものの哉。イヤ此れは危険。等と。また(ろ)とも。



本譜は黒五十八より白九十一迄。

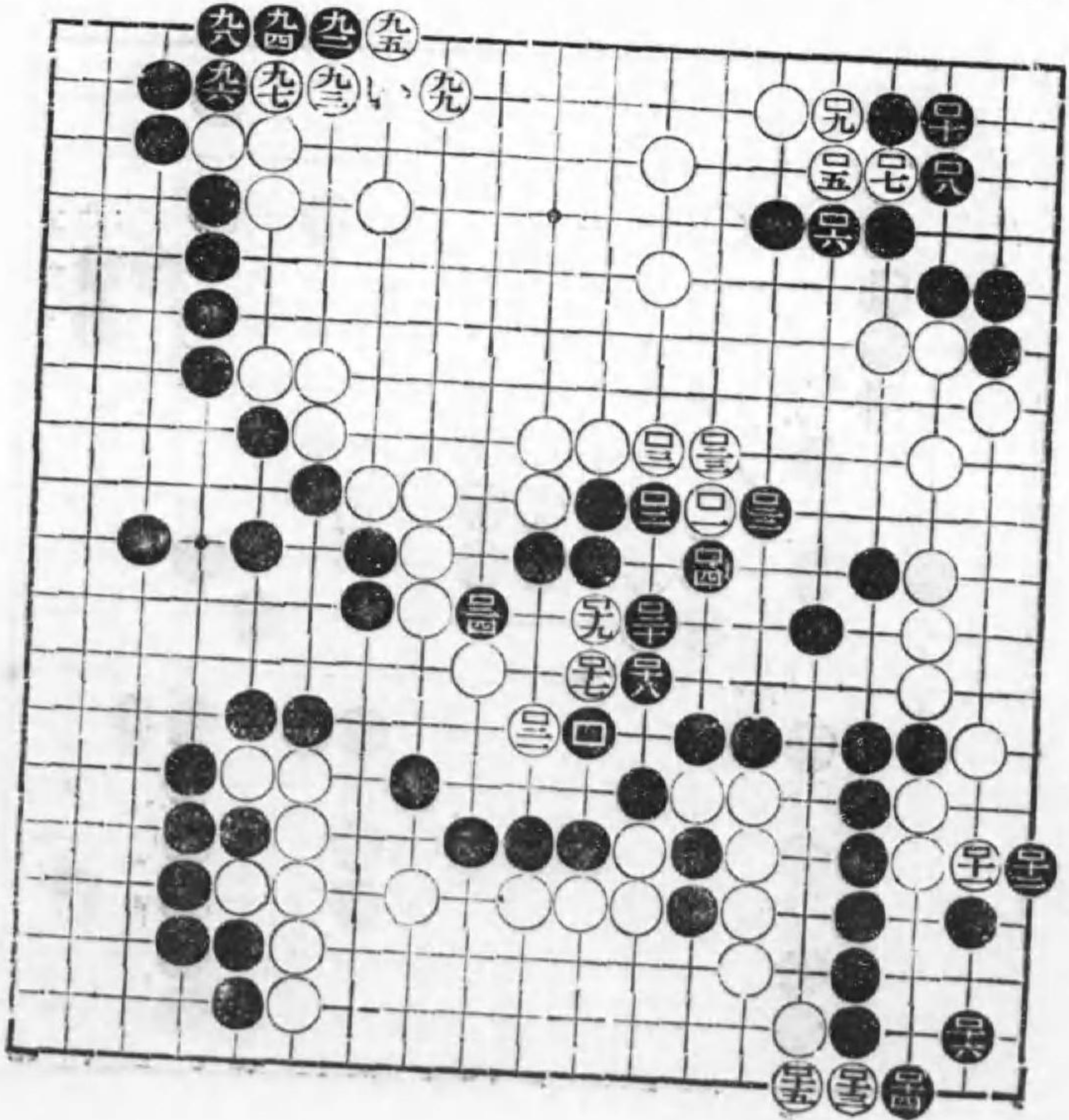
黒五十八は以下白六十三迄と圍はし、それは黒勝ちと目算したものであらう。目算とは黒五十八と打つ前、白地が何目、黒地が何目、と其事であつて、黒の數が多ければ(い)等を五十八で打たない。此目算は一局の中、度々やる事である。



本譜は黒九十二より百二十四迄。

黒九十二は大桂馬走りといつて、白に九十九と後手を引かせ、先手で大きい侵分である。

白九十九を手抜だと、黒に(い)と切られて白九十五の一子は取られ白は大損。黒百二十四は悪い手である、それは次譜に明る黒悪果の後手。

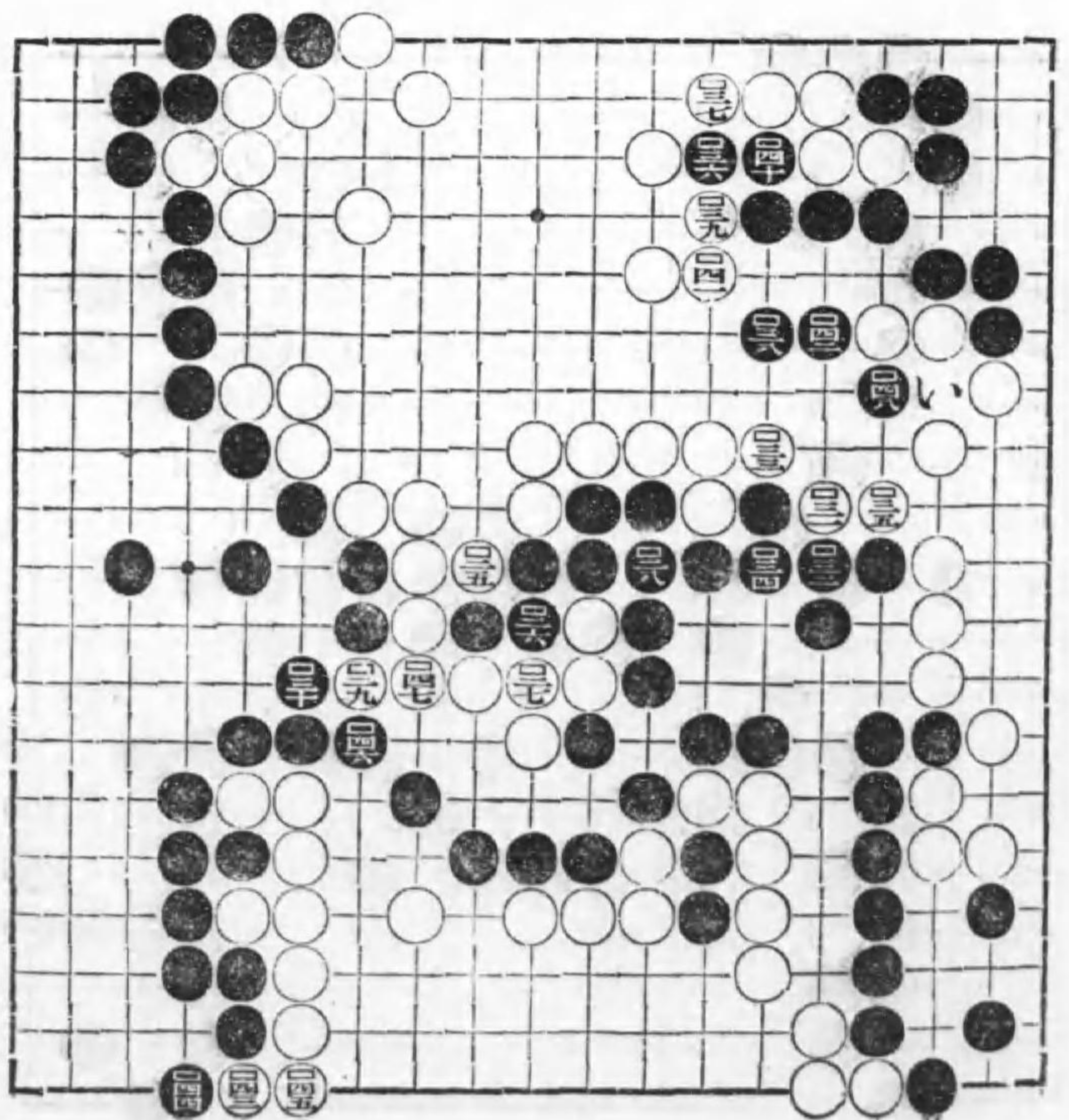


本譜白百二十五より黒百四十八迄。

前譜黒百二十四を、黒悪果の後手——

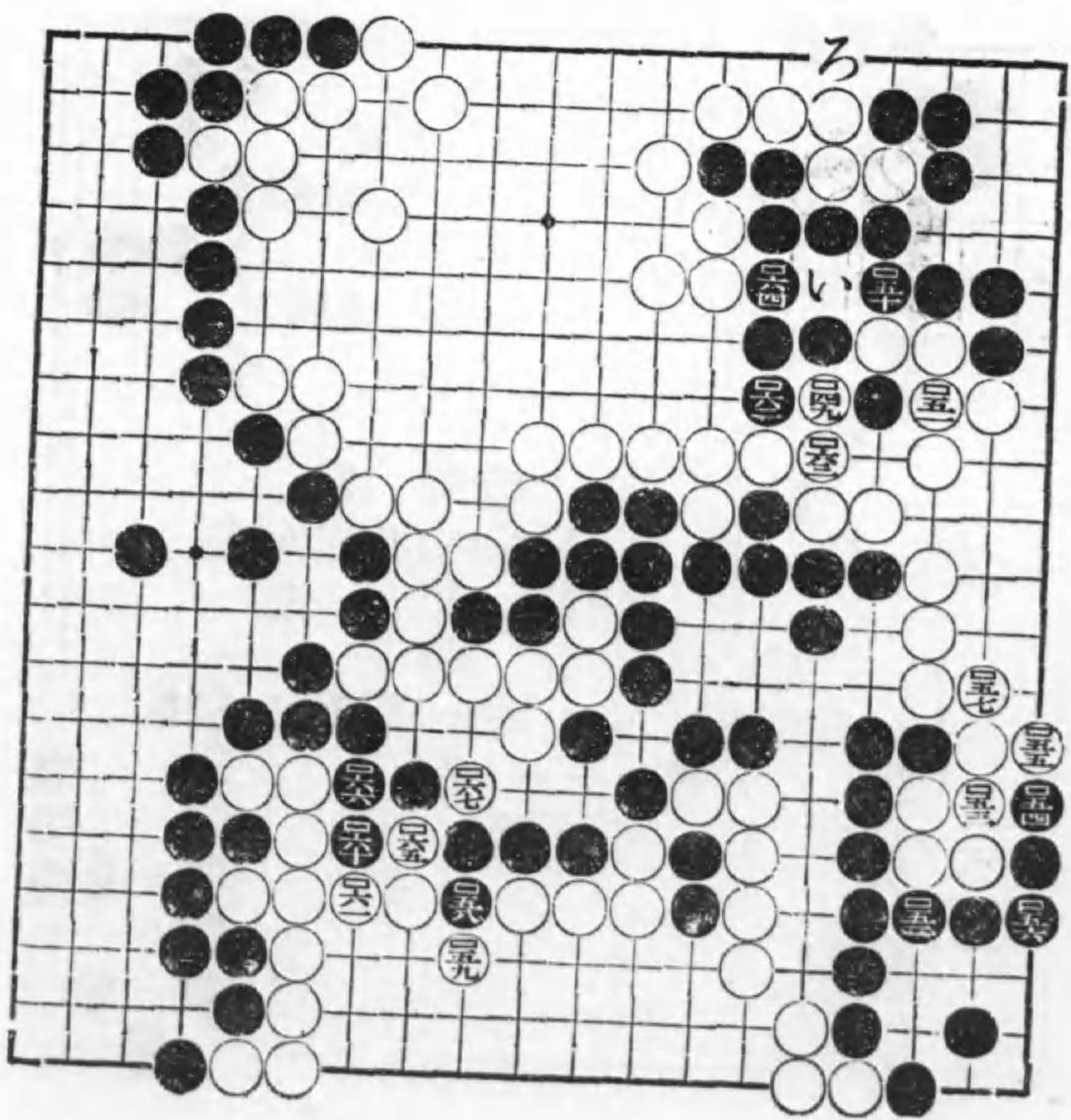
といつたそれは本譜白百二十五より黒百三十迄。

黒百三十は其處へ白に出られると黒損だからである。また黒百四十八は(い)と白に受けさせる目的だらうが黒損——



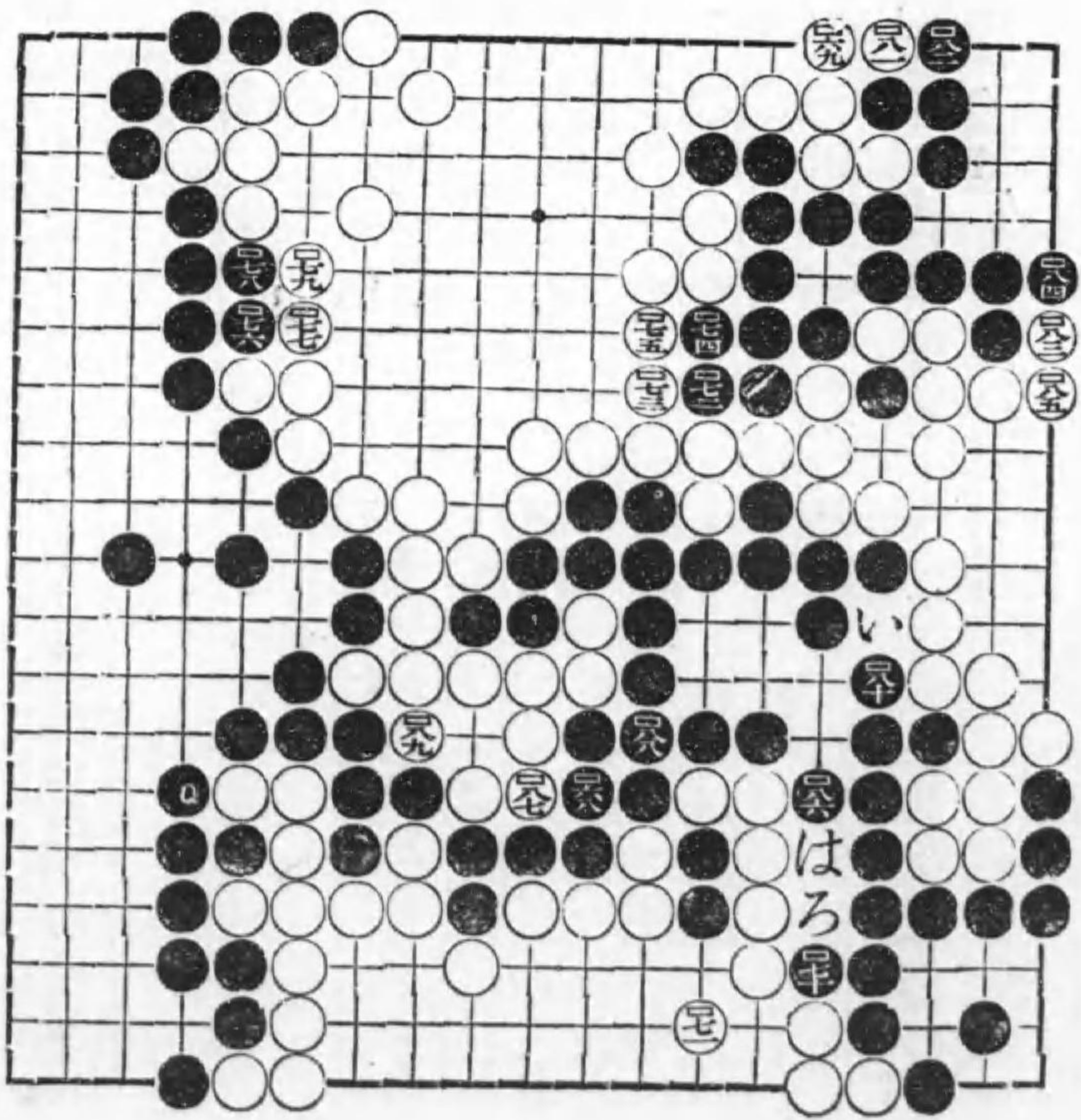
本譜は白百四十九より白百六十七迄。

前譜黒百四十八を損——とは白に百四十九と切られて、黒は取られての事である。篤と其點を見られよ。また黒百六十四は(い)の所に一目出來た一目の手、それより(ろ)が大きい。黒は盤の全部を見通さないからであらう、着々ヨセが黒悪く。



本譜黒百六十八より白百八十九迄。

で全く終局、即ち一目の手も残つてゐないのであつて、後は駄目——駄目とは一目にも成らないからである。駄目といつても互いに一手、先づ黒(い)——次に白(ろ)また黒(は)は。此れで打つ所は無い、後は作り上げである。



先づ勘定をして見られよ、左側一帯の黒地六十六目、右上隅の黒地十目。右下隅より中央に亘る黒地十三目。計八十九目。

白地は下邊が二十五目、二十五目とは黒石が中に二子あつて、それを黒地へウメルから白地と同様の理。

されば右側の白地も黒石一子あつて十三目。續いて上邊から最後の白一目までを白地四十四目。で三ヶ所合算白地八十二目。

だから黒七目勝。といふ差引勘定である。

次に作碁、即ち作り碁の作り上げであるが、本局の如き効も無い、また戦争も無いといふ極めて平和な終局も實觀の如くである。

此れは黒が不斷に優勢を見透し、多少失策はあつたが、四子置いた効力を失はないものである。また白も戦争を仕掛ける機會が無かつたもの。いくら白だつて無理な戦争には出られない、即ち自己の品格を思ふからである。

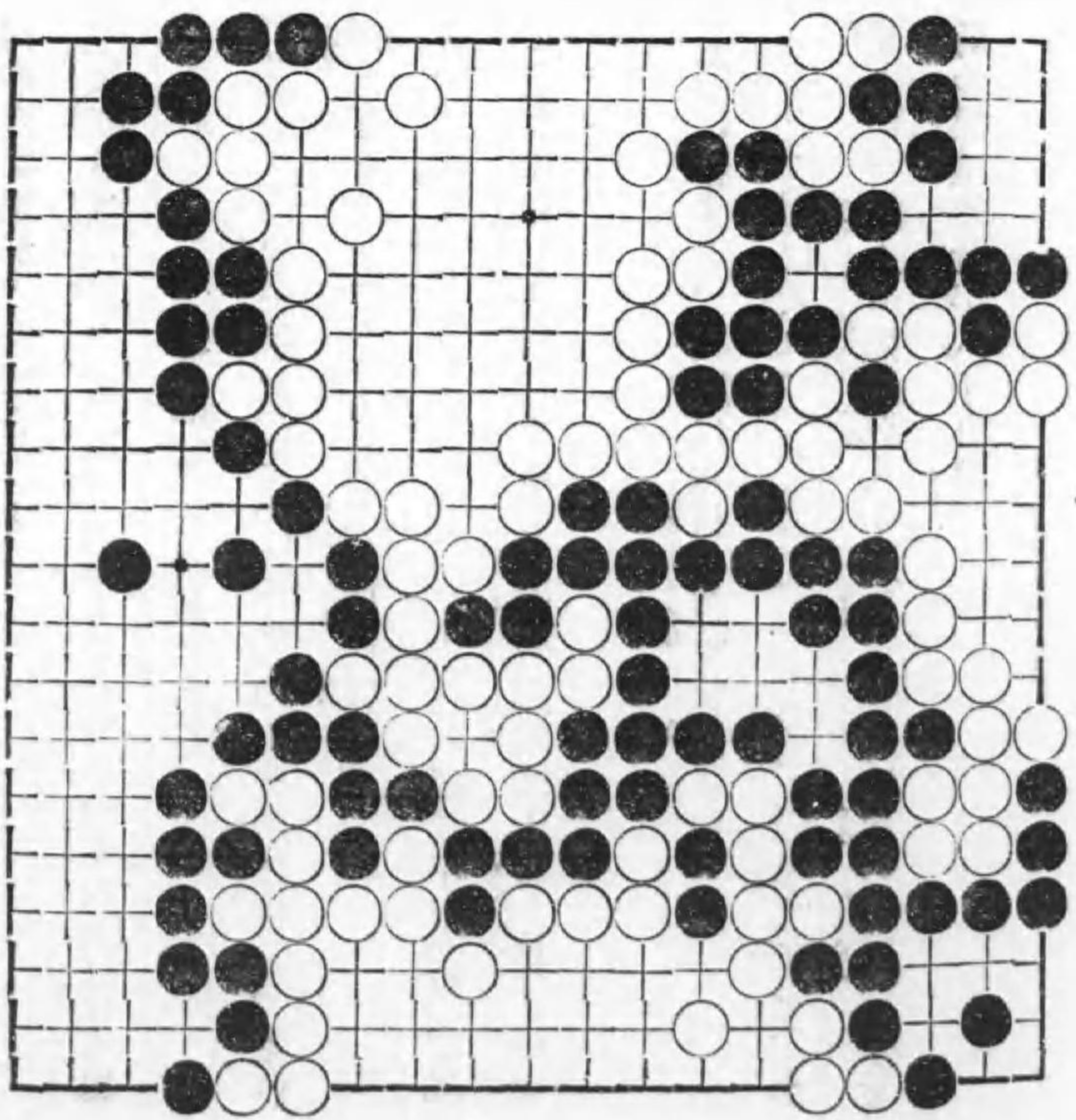
斯様に駄目を詰めて目算するのは無益である。

駄目を詰めるのは作る前提と知られよ。

作らないで敗けましたと投げるなら、それは十目以上も敗けと見

一目の手や二目の手は止めたがい。

強くなると其様な事も、自然に覺えるが、此れは心得ておく事である。



初段を日指して

作るのは、黒の方は白が。白の方は黒が。と知られよ。

先づ白が作るとして「ニの七」に在る黒一手、また「トの十五」「トの十六」に在る黒二子を合せて黒三子を取つて、それを(い)(ろ)(は)の三ヶ所に入れ。

次に「レの二」「レの三」「レの十」の黒三子を(に)(ほ)(へ)の三ヶ所に移し、それから「チの十一」と其線の下に黒三子を(と)(ち)(り)の三ヶ所に移し、

すると左側は黒地六十と見よ。次に「トの十三」「への十三」の黒二子を(ぬ)(る)に移し、「ホの十一」の黒一子を(を)に移し入れ、すると其處の黒地は十目と見よ。それから――

「ロの十八」に在る黒一子を(わ)に移すと、其處は六目の黒地に見よ。更に右上隅、「ハの三」の黒一子を(か)に入れ、「ハの二」「ハの一」の黒二子を(よ)と(た)。で此れも黒地十目に見よ。以上で黒地計八十六目。それは黒の取石三子を

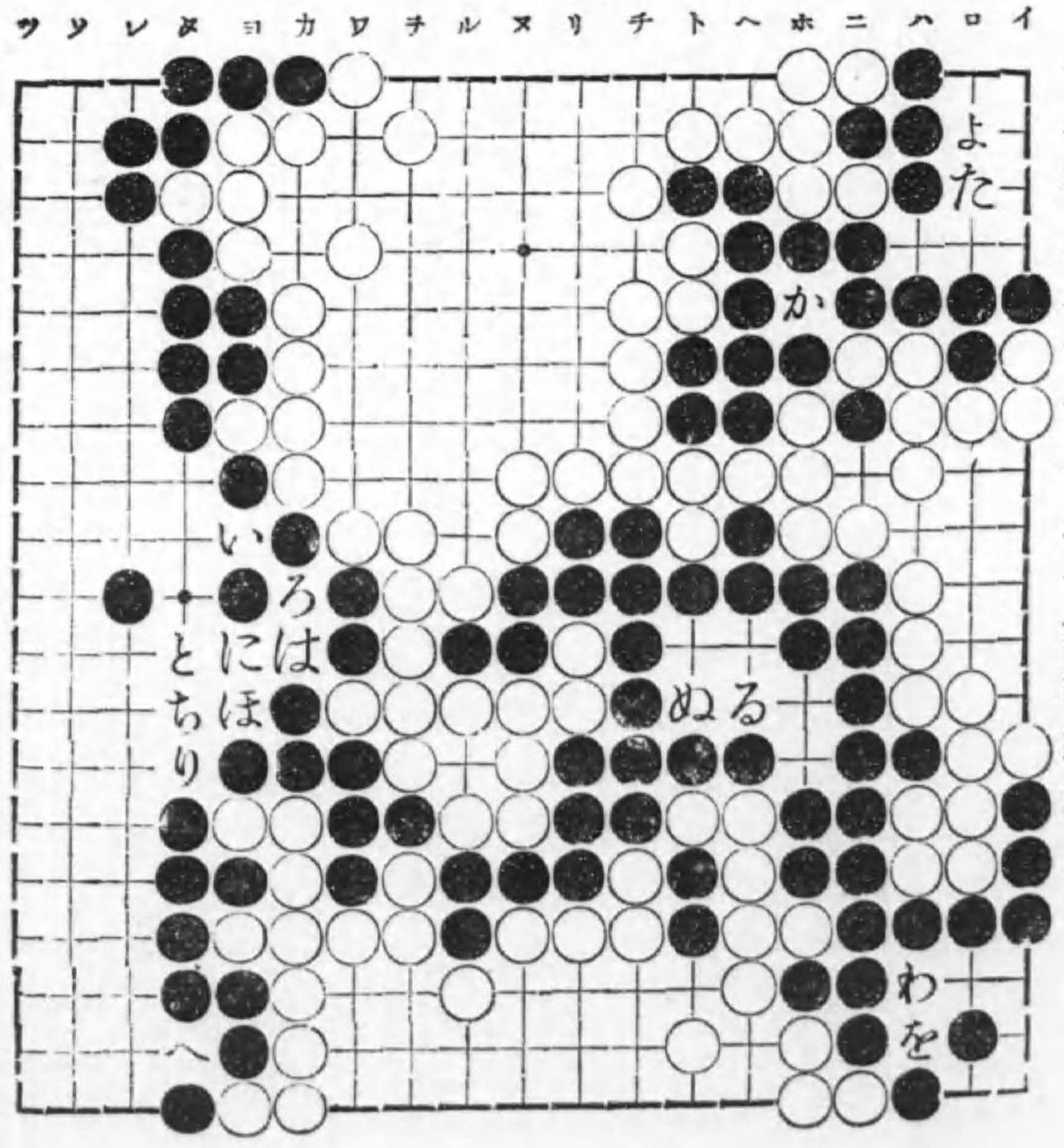
黒地に入れ。と明る筈。即ち前の黒地總計が八十九目。

取つた石、即ち本局は黒に取石が無いから――

白が黒三子を黒地へ入れる時、静かに原形を壊さないやう――

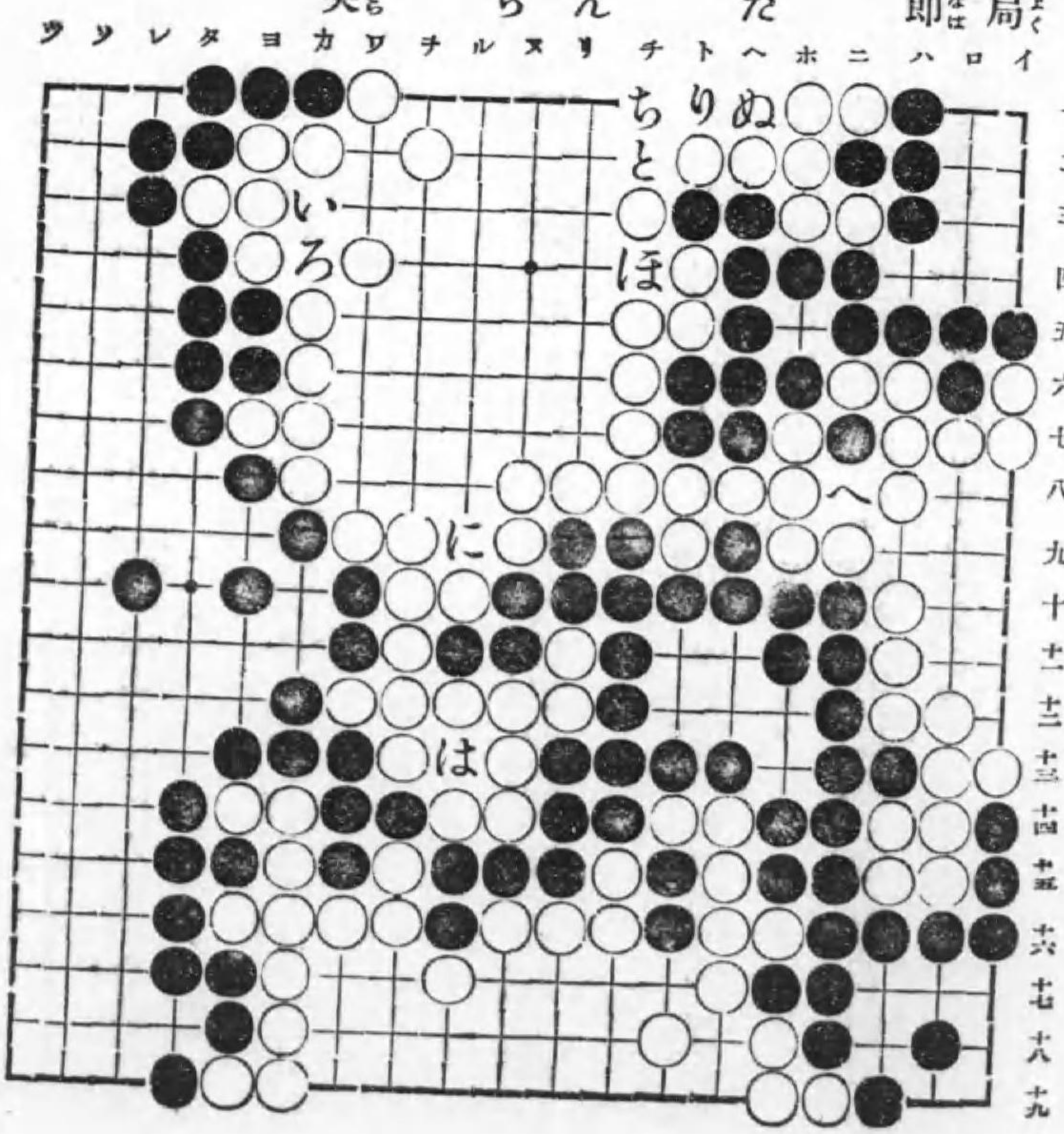
壊したら判らなくなり争論等も起さ、碁はソツチのけの不愉快。

併し碁が強くなると萬一壊しても原形は明るもの。



今度は白地を作る黒である。先づ上邊から、「ワの一」の白一子を(5)、「ヲの二」の白一子を(ろ)、「フの四」の白一子を(は)、「タの八」の白一子を(に)。
 次は「リの八」の白一子を(ほ)、それから右側の「ハの八」「ハの十」「ハの十一」——また「ハの十二」「ロの十二」の白五子を取つて、其中二子を「ニの七」と(へ)に入れ、其處の白地は十五目。すると白三子が手中に残つて(と)(ち)(り)——
 そして下邊「ル」の十七の白一子を(ぬ)。此れで上邊の白地は四十目に見よい。
 次は下邊の白地「への十七」「トの十八」の白二子を「トの十五」「トの十六」に入れ、其處は三、八、二十四。——
 其合計は上邊四十目右側十五目で即ち白地七十九目、されば黒地合計八十六目より白地が七目劣る理。處で下邊の白地二十四では一見勘定が見にくひ——
 それを「チ、リ、ト」の各十六の三子を「チの十七」以下直線三ヶ所で見よ。

要するに碁は友人と對局でも禮儀を守るもので、即ち勝敗の爲に——
 虫の居所が悪いと敗けた方は——
 君失敬じゃないか、なんて、つまらぬ言葉じりから交遊斷絶。
 敗けて強いてゲラ／＼笑ふのもおかしいが——



實 戰

更に、左側の黒地は十九線三筋で五十七目、それに上の三目を入れ六十目。
 右上隅と中央に近い黒地が一ヶ所十目の計二十目。右下隅の黒地は六目。合計黒地
 八十六目である。

白地は上邊が五、八の四十目。右側また下邊の左側が各十五目の計三十目。それに
 下邊の右側が九目。合計七十九目の白地——
 差引黒地七目勝。

と明瞭に成つて黒は僥倖、甚だ失禮でありました——なほ黒の悪い點をお直し願ひ
 たい。等も禮儀の一である。

そして黒から石をかたづけけないで、白からかたづけ出すのを待つのである。黒が早
 くかたづけけると、マアお待ちなさい判らない——と言はれても。

先づ其様な事は無いが——萬一の用意周到である。勝つた方は急ぐ要もないのであ
 る。相手が頭が悪いとゴマカス、とも誤解されるからである。

敗けても微笑ぐらひの程
 度にして——

最う一局——

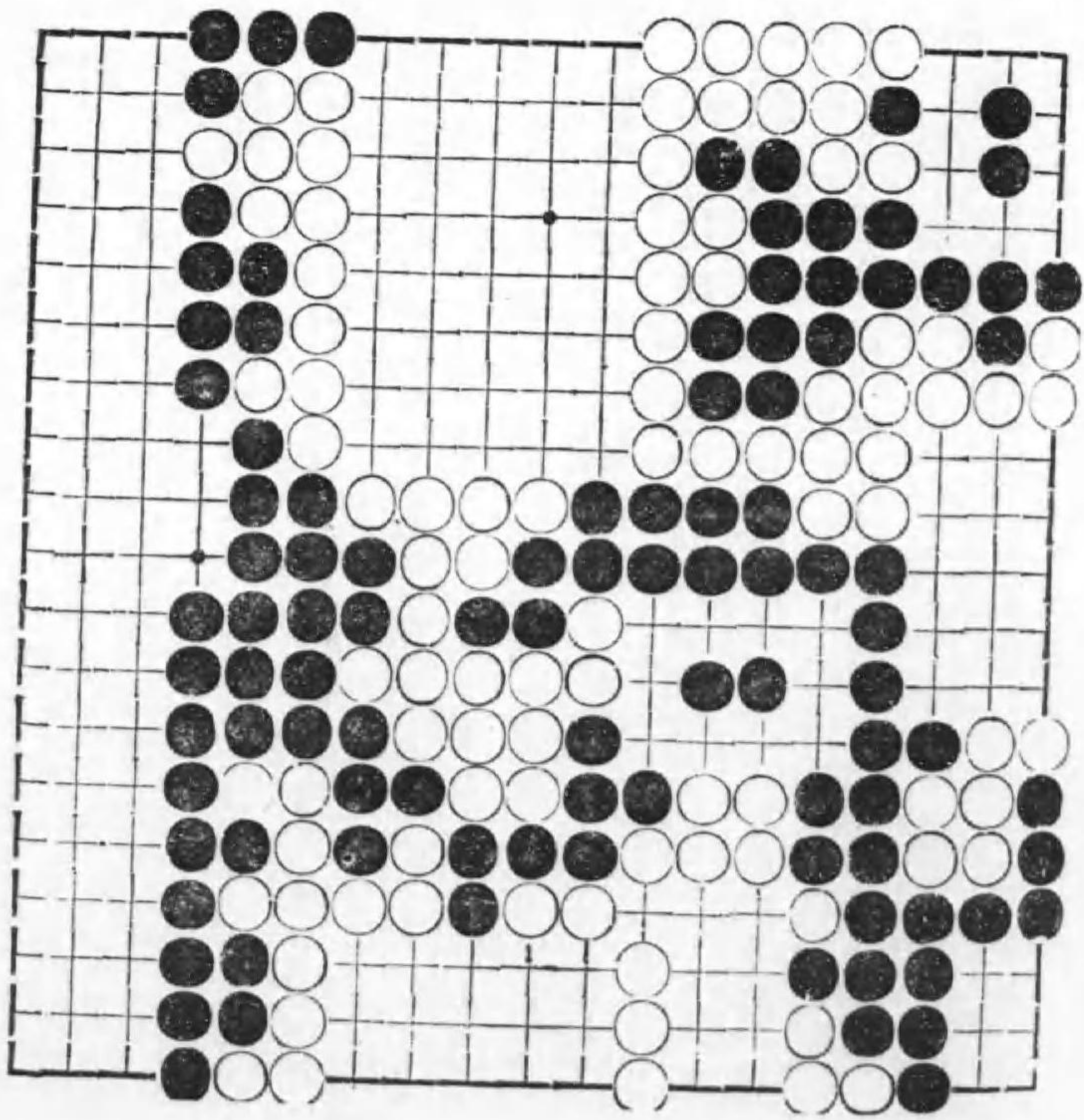
に相手が今日は一寸用事
 があつて——

にアア左様——

失敬——

てな軽い氣分。

それで次會も愉快に打て
 る。



待 つ た

待つたとは、自分の打つた手を見損じ、君其手を待つてくれ給え、大變だ敗けてしまふから、君そんな事で勝つても面白くなからう、なんて見損じた方は言ふ——それを待つてやれば何んでもないのだが、折角だがお断りだと、笑つてすましてゐる。

君どうしても待たないネ——に困つたな、此れは勘辨してくれ給え。等なら諦めてしまふが、君も紳士だらう。それが不仲の原因、氣をつける言葉である。

さて待つた——と言ふ所は右上隅白先(い)。また右下隅白先(ろ)。それから此れは黒先(は)。と何れも見損じてゐる所である。なほ澤山あるから自己護身の用に次圖で注意しておかう。

待つたは不面目である。
待つたは自分は絶対しないに限る。

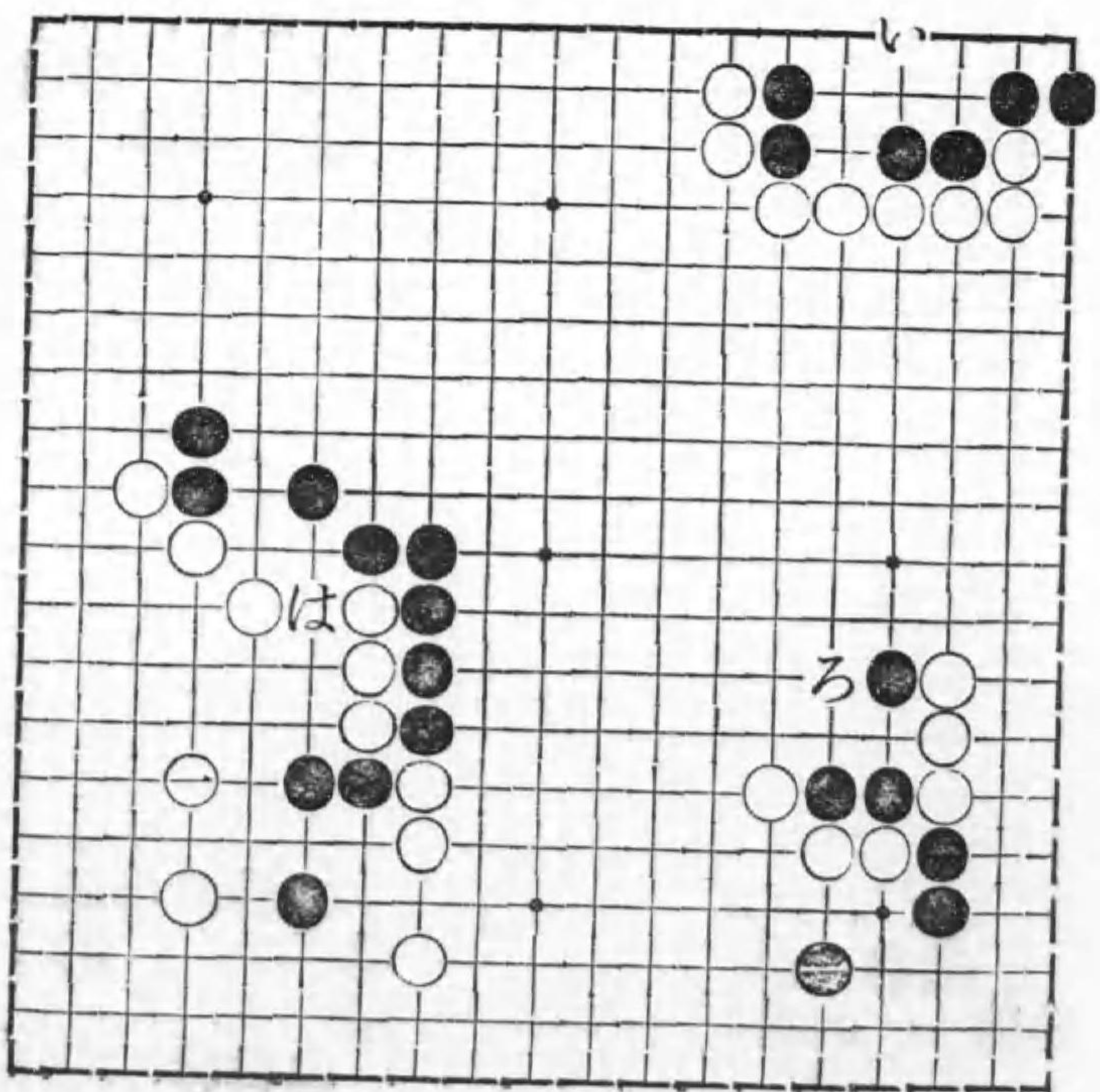
待つたは依頼心が生じ自然に不注意を重ねる。

待つたは相手には許し、其寛大な氣分がいい。

どうぞ御自由に——位な言葉も添え。

それは取消します——なんて演説會等での風景と、碁の待つたと同じである。

待つた



右上隅白先(5)。

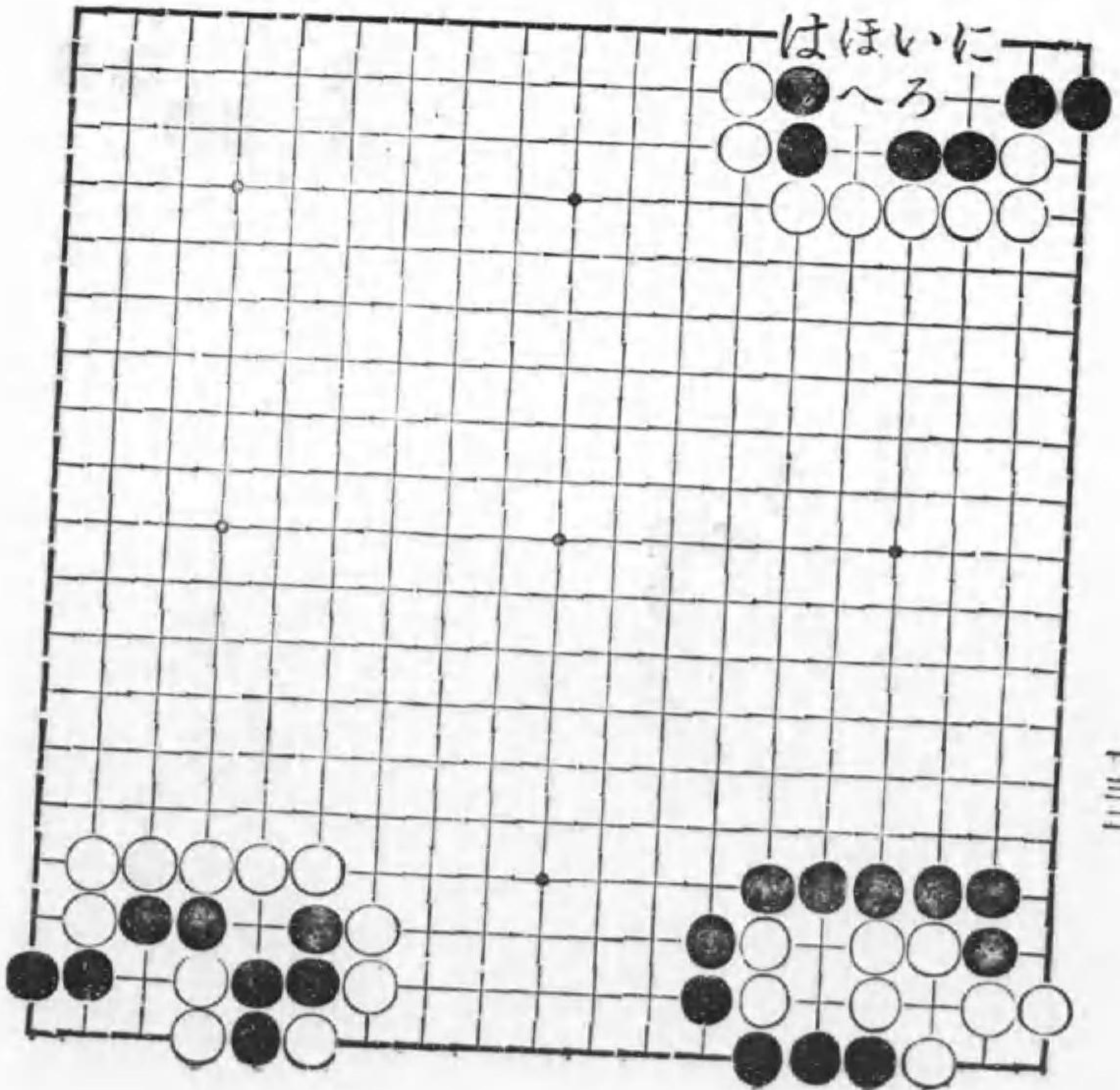
に黒(ろ)白(は)は次に黒(に)白(ほ)で黒は取られるそれが白の方に替えた右下隅である。

更に白(い)に黒(へ)だと

黒(へ)に白(は)。

に黒(ほ)白(ろ)と成る

他は無い。が此れも黒取られ、それが左下隅。



左下隅黒先黒(5)。

そして白(ろ)黒(は)。

と成つて白悪果は——次に

白(に)白(は)。

黒(ほ)迄が右上隅の方。

右上隅に移つて白(イ)だと

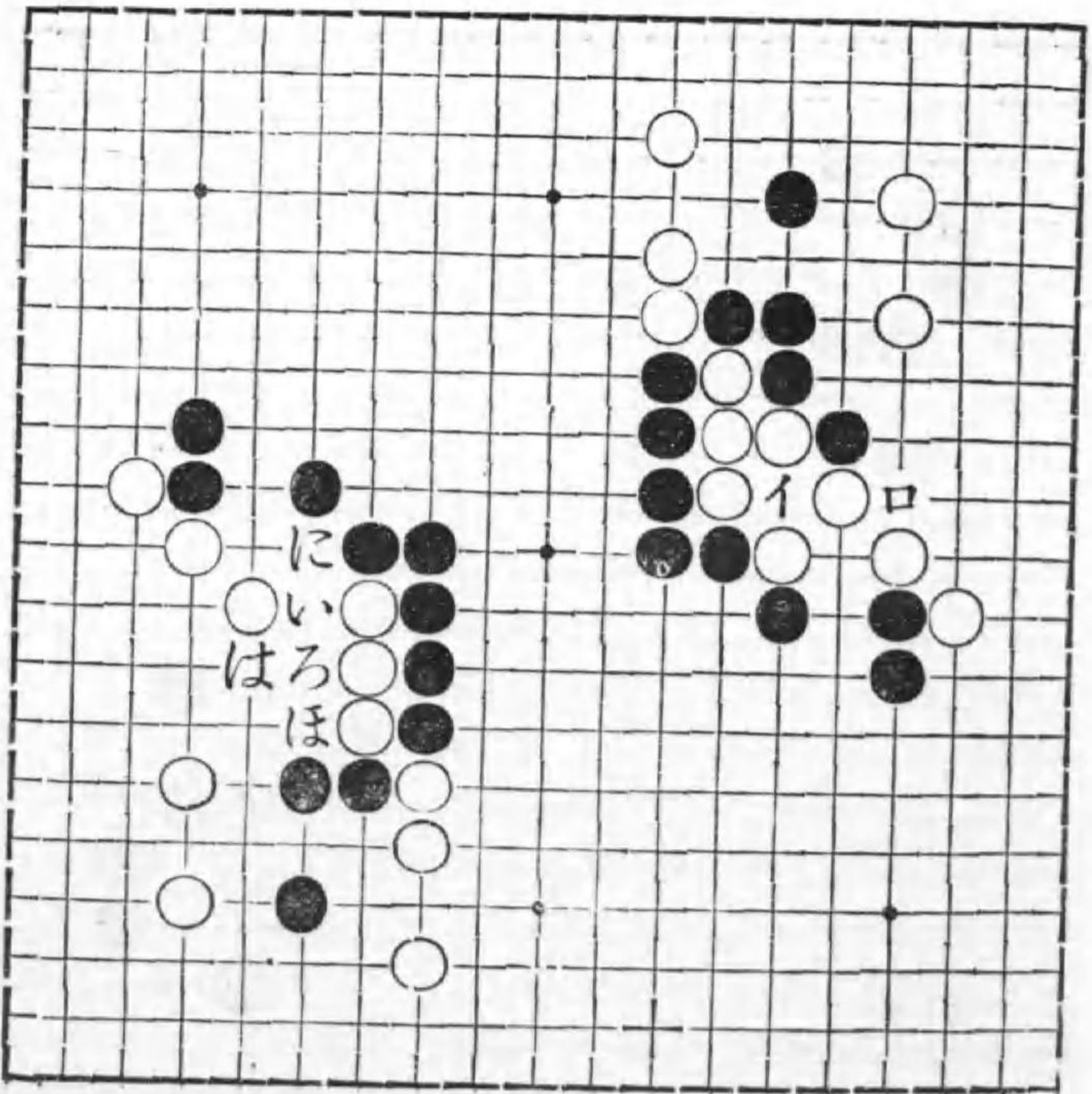
黒(ロ)。

黒(ロ)と成つて白は大悪果である。

此れを待つた、待たん。

黒は惜いからである。

待つた

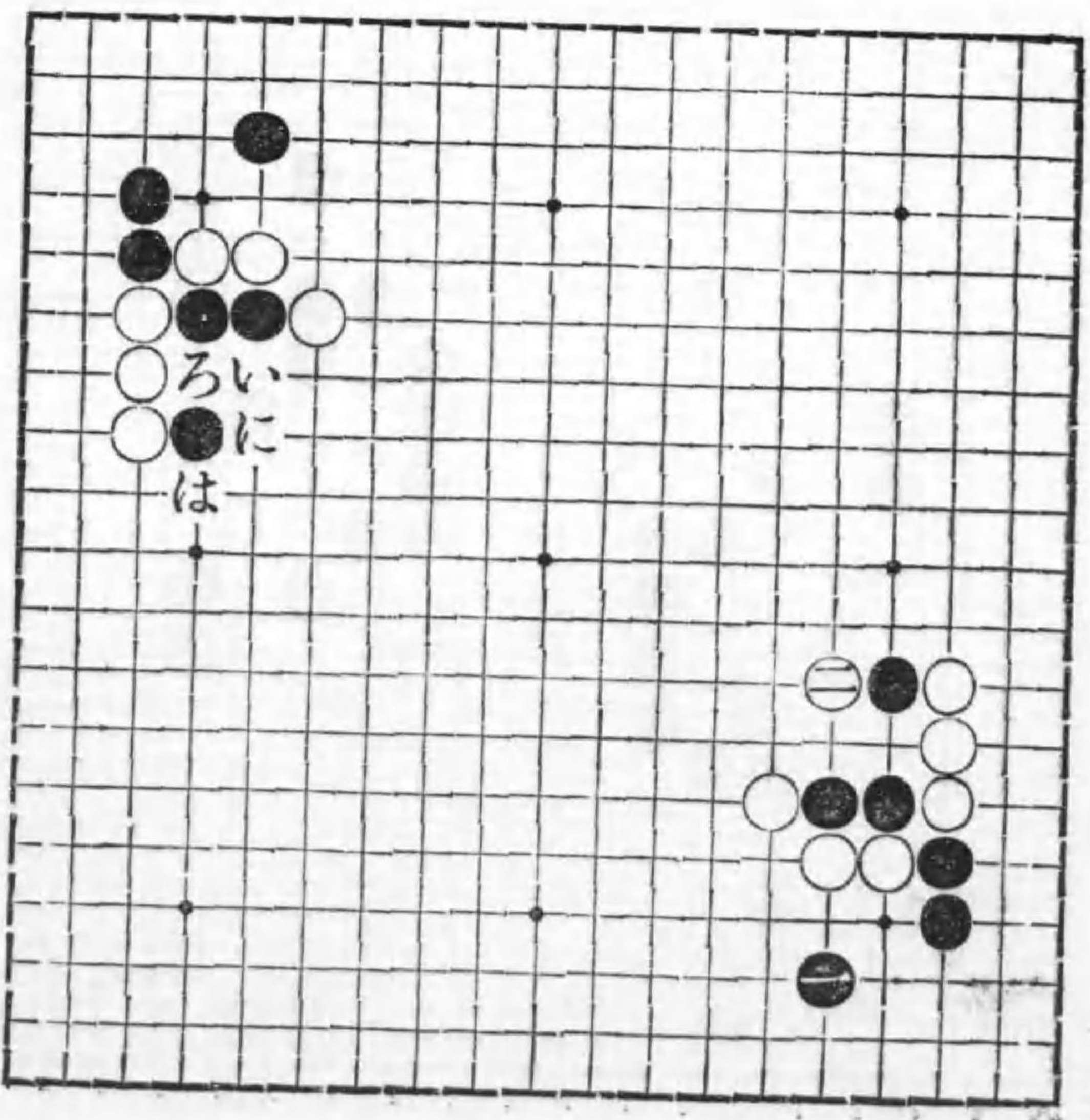


黒一は白二で黒は取られる。等の度忘れもある。

それは左上隅白(い)なら黒(ろ)白(は)黒(に)と黒は出られ――

と黒は思違ひに因るもので、黒二子を取られては、此れは――

白を兩斷の要石。單に二子なら四目だが、要石は三十だか或は百目だか分らぬ關係。

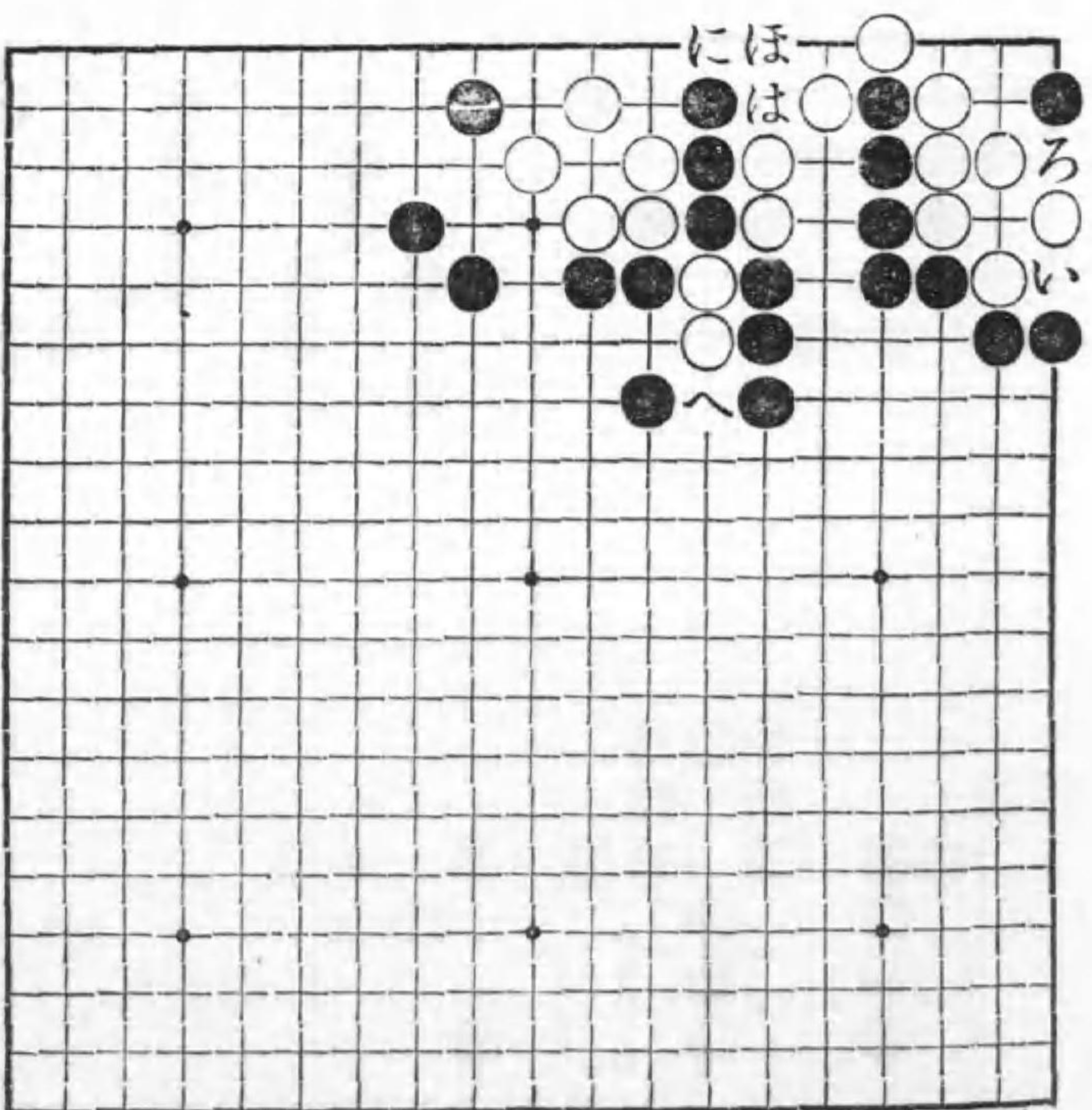


黒一は白(い)なら、次に黒(ろ)。また白(い)を(ろ)なら黒(い)。

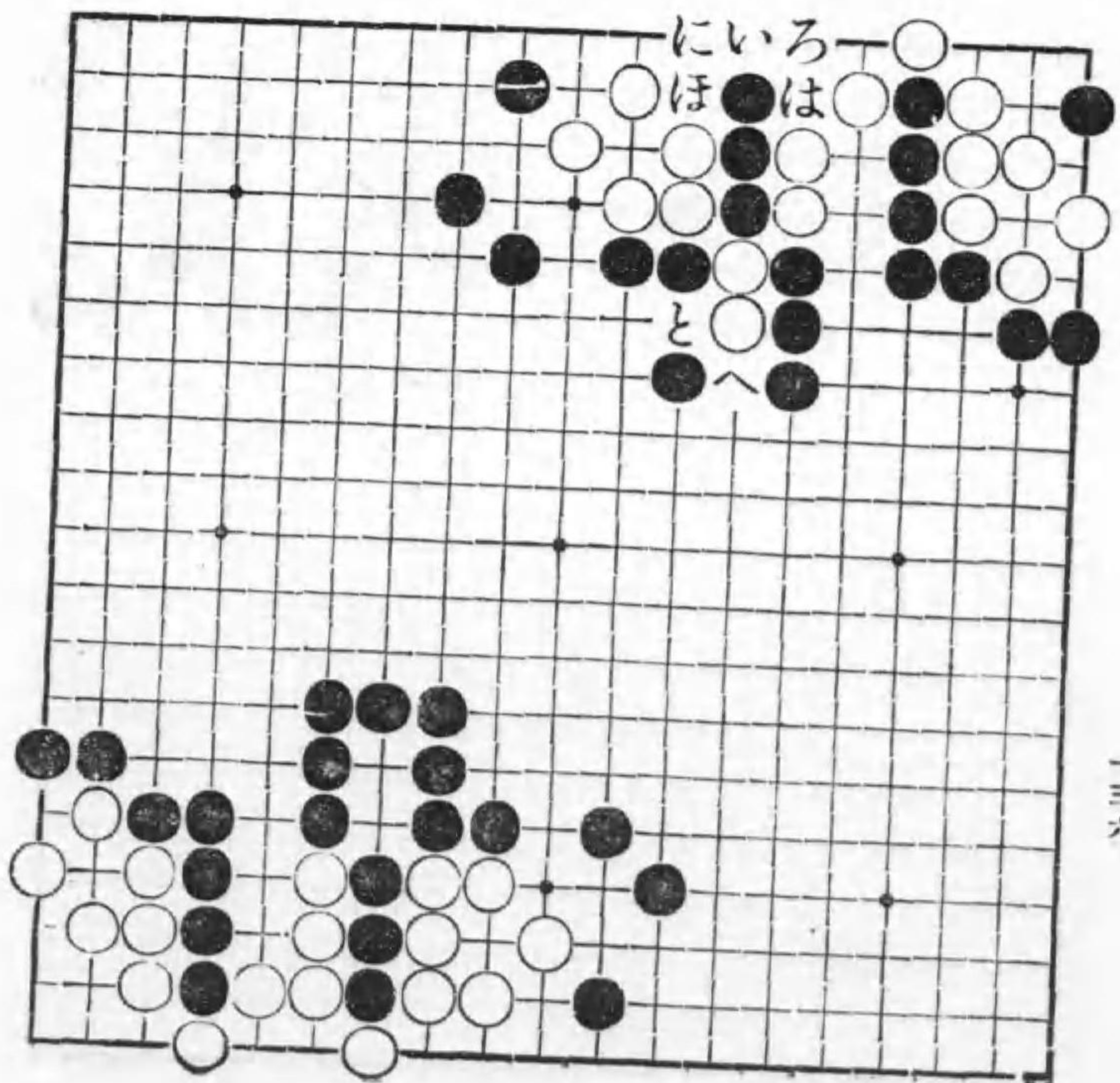
と隅の白は取れ。それに白(は)なら、黒(に)。また白(ほ)なら黒(へ)と黒が一手早い。

それが即ち黒一と此方の白五子を取つたもの。

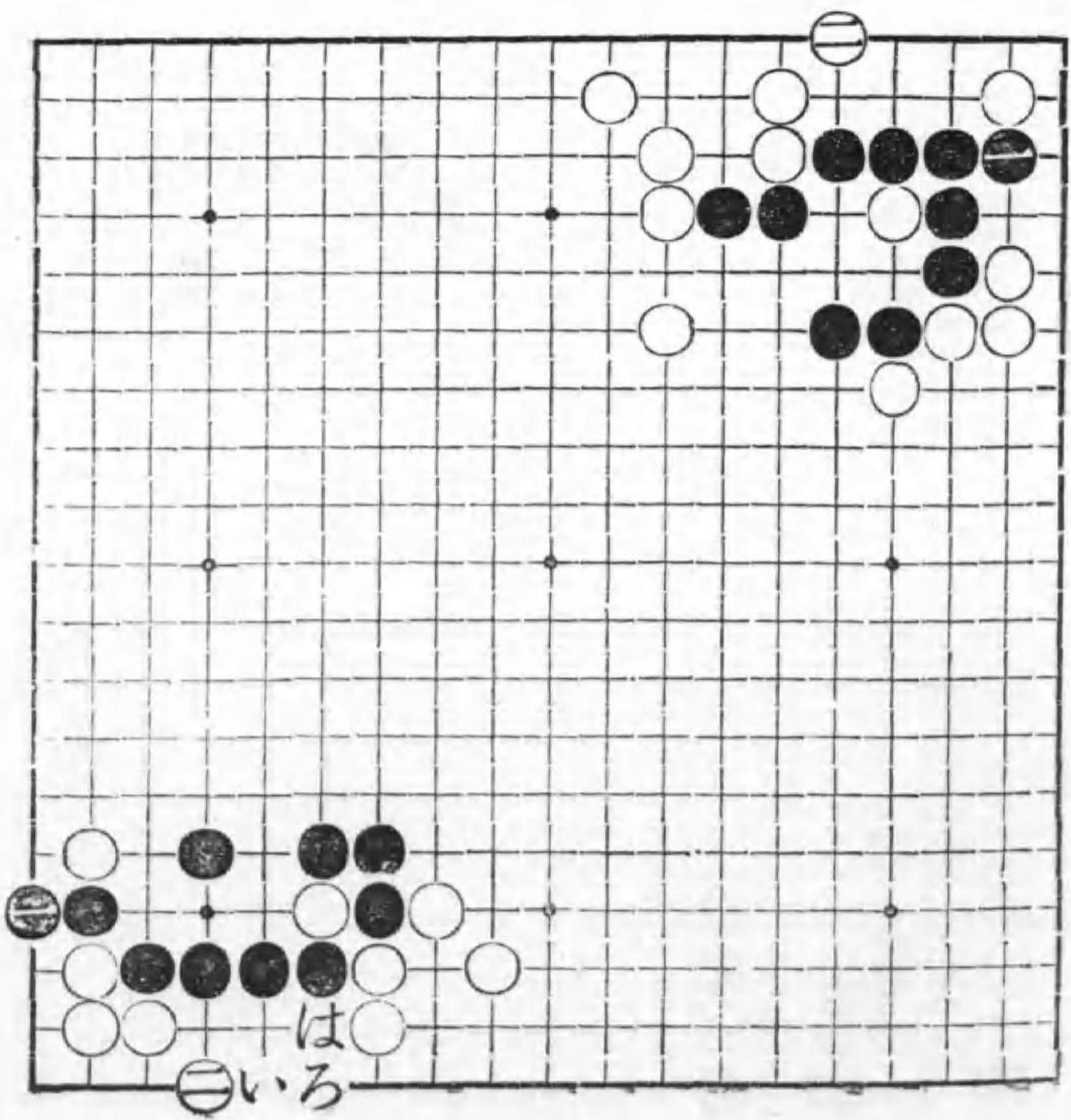
處が黒は待つた――
白に甘い手があるからである。



黒一に白(5)。
 白(5)に黒(ろ)だと、白
 (は)黒(に)——
 そして白(ほ)。黒三子は
 白に取られる。
 それで白(い)には——
 黒(へ)に白(ほ)黒(と)白
 (は)。
 と白は連絡、黒は待つた。
 イヤ此れは鶯の谷渡り。と
 白はすましたもの。下圖を
 見られよ。



黒一と其白一子を取らう
 としても——
 白二で隅の白一子は、此
 れも——
 鶯の谷渡り。
 左下隅白二でも同じであ
 る。其白二を(い)だと——
 黒(ろ)白(は)黒二で、白
 は谷渡りの仕損じ。



待つた

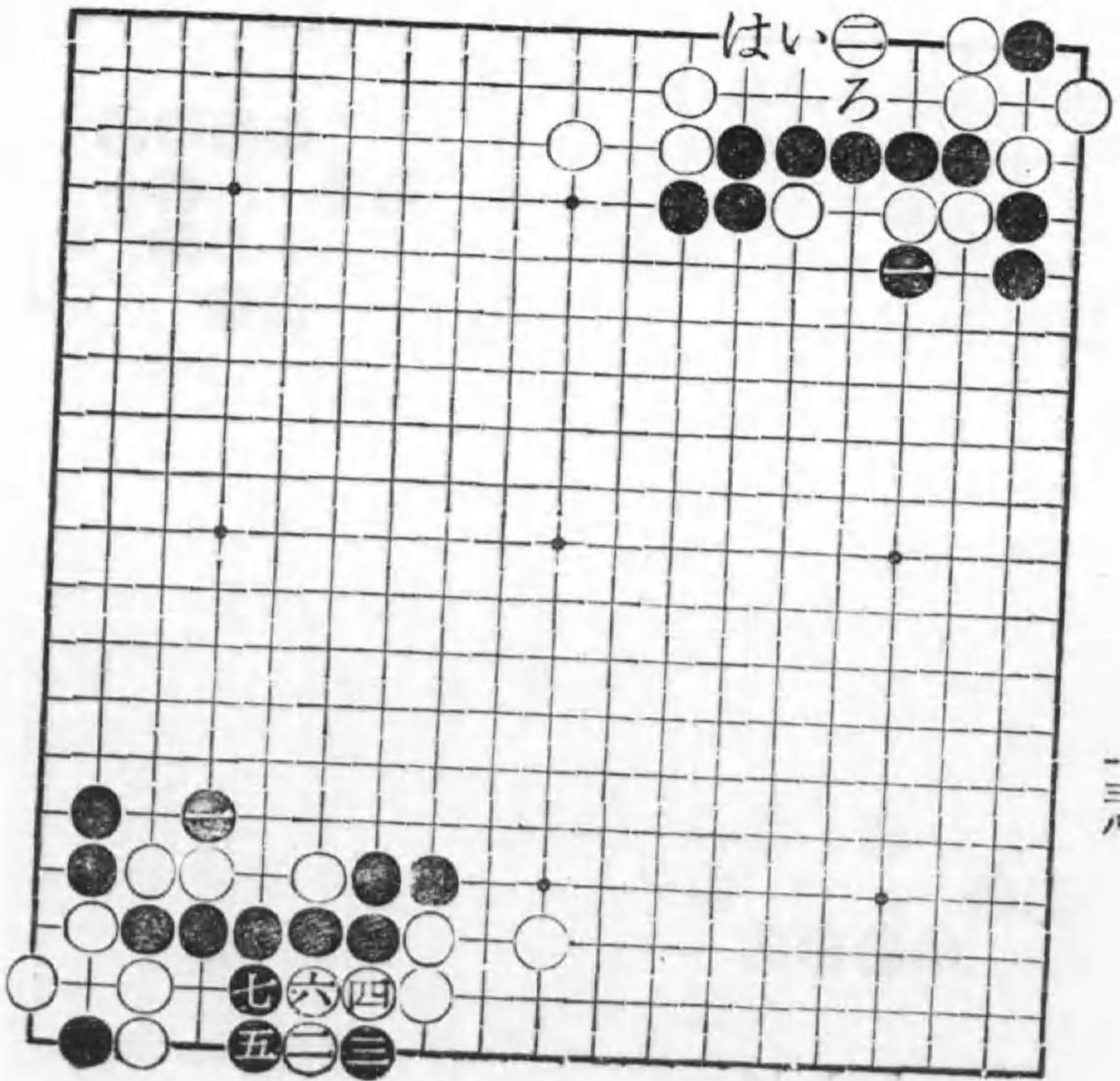
白二で此れも隅の白は左へ谷渡り――

白二を(5)だと黒二に白(ろ)は黒(は)。其黒二を(は)でも白は連絡不能。

下圖を見られよ、黒七まで成つて隅の白は取られ。

黒一は下圖白二と白を豫想し、上隅の様に白二で黒は待つた。

白は渡つて待つてゐない。



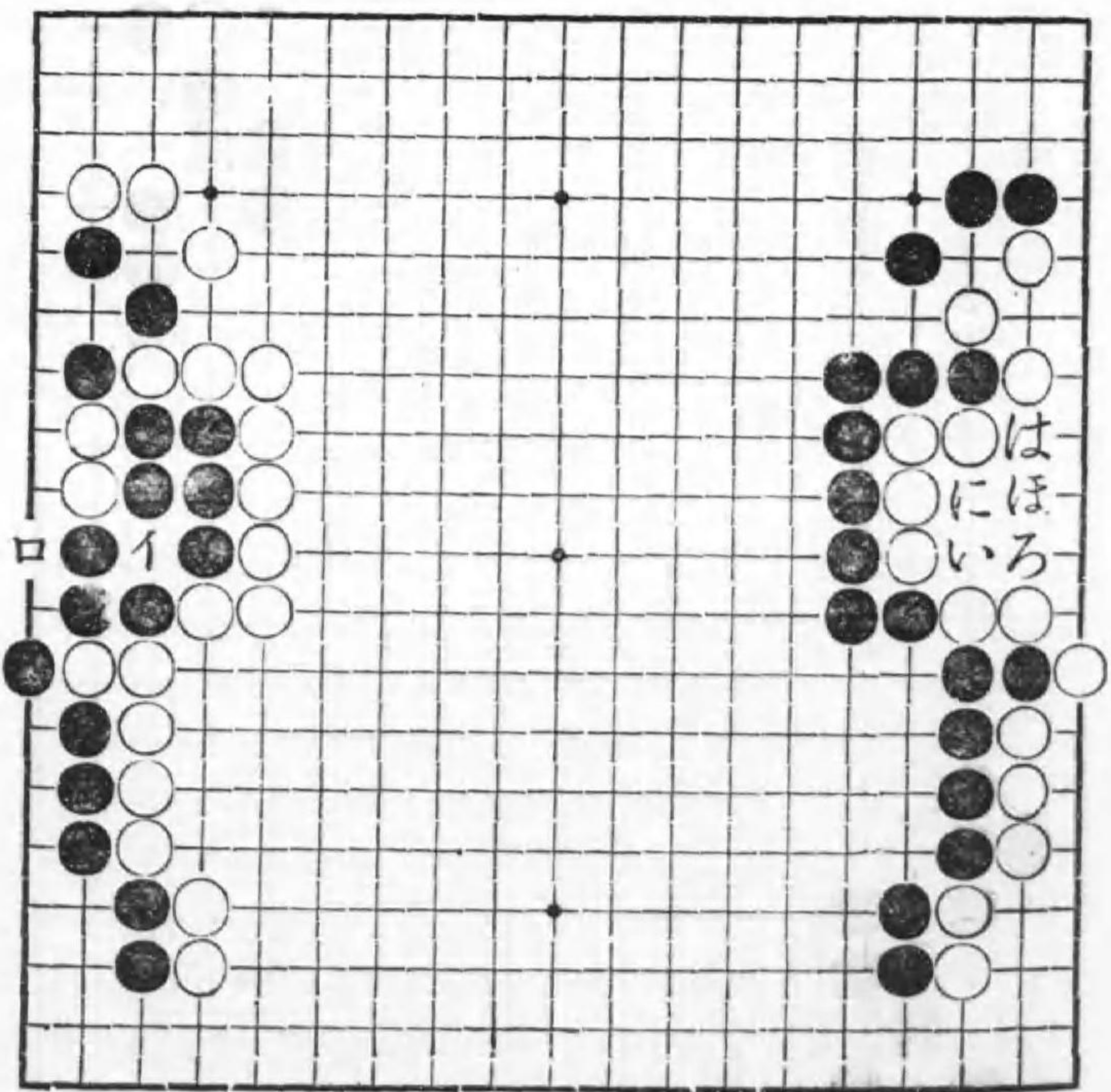
なほ待つたする所は右側を白は完全の白地と思つてゐる。其所へ――

黒(い)。白(ろ)だと、黒(は)白(に)そして黒(ほ)。

其黒(ほ)までを左側に見られよ、だが黒に變えて悪い事は何れでも同様だからである。

黒は待つたそれは黒(い)は白(ロ)で。

待つた



白一に黒二とそれも黒待
つたする所で――

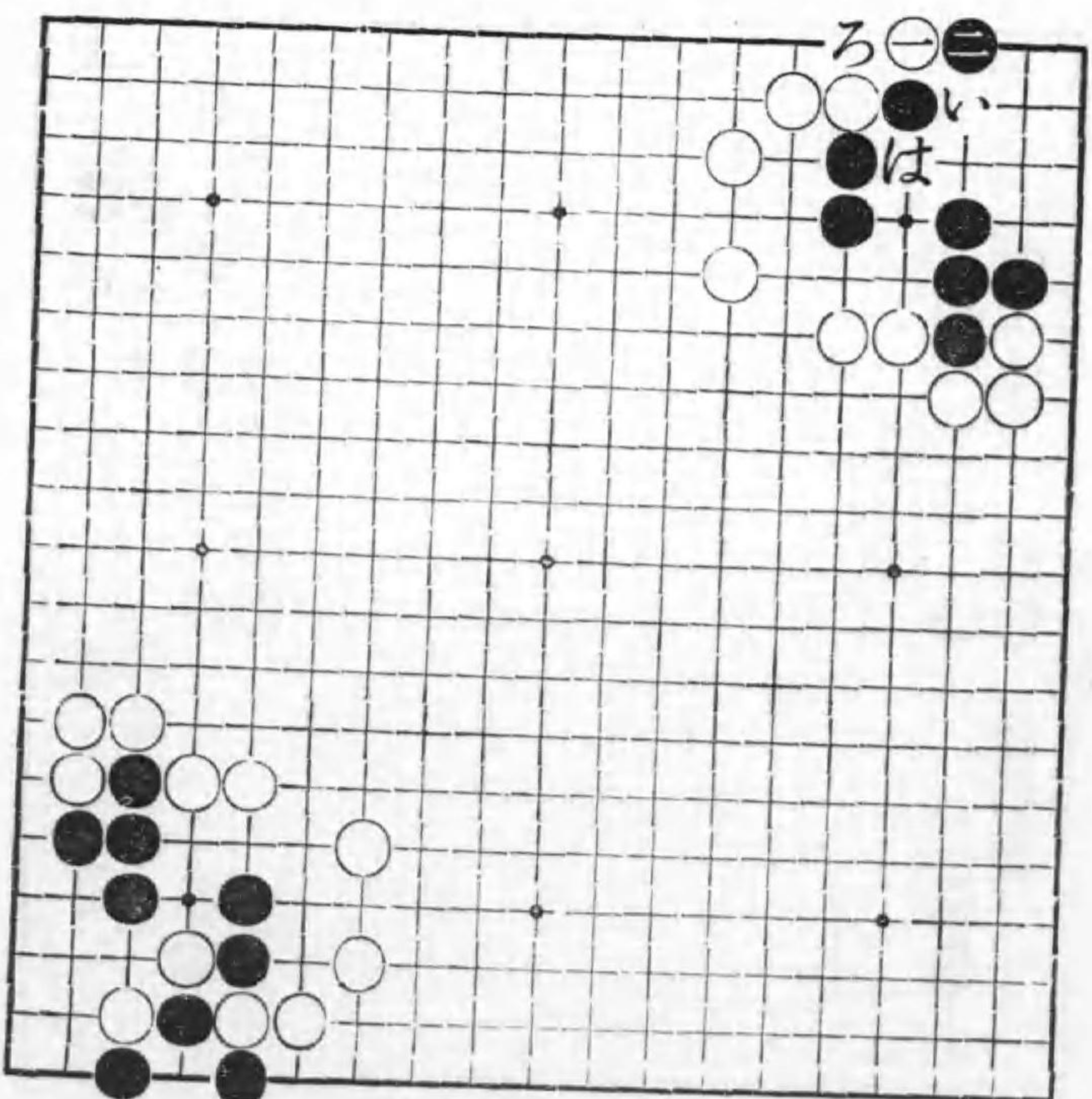
黒二等は最早相當に手所
を認識、打たぬであらう。

即ち黒二だと白(い)。白

(い)に黒(ろ)白(は)と成る
他は無い。

左下隅を見られよ、黒二
を(い)なら無事の所を意外
の大劫争。

併し黒二を絶対無いでも
ない。それは――



右上隅、白一に黒二だと

以下黒六と成つて――

二を三より黒地が二目減
じる。

それで一局の勝敗一、二
目の時なら、即ち二目が勝
敗に關する場合。

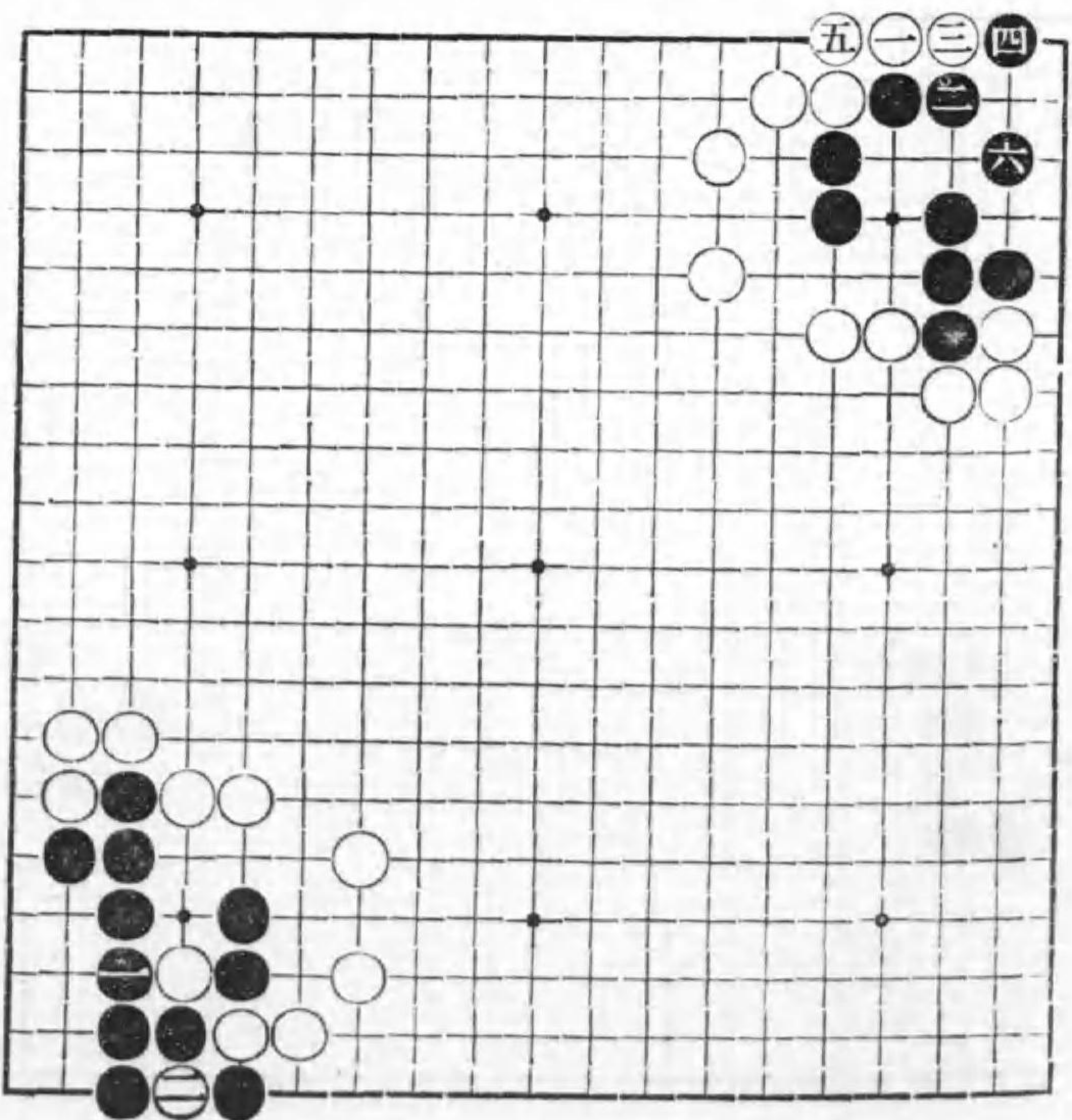
左下隅白二までと劫争。

大勢上萬止むを得ない、

此れが絶対無いでもない次
第である。

と覺えて初段を目指す上
達資料。

持った



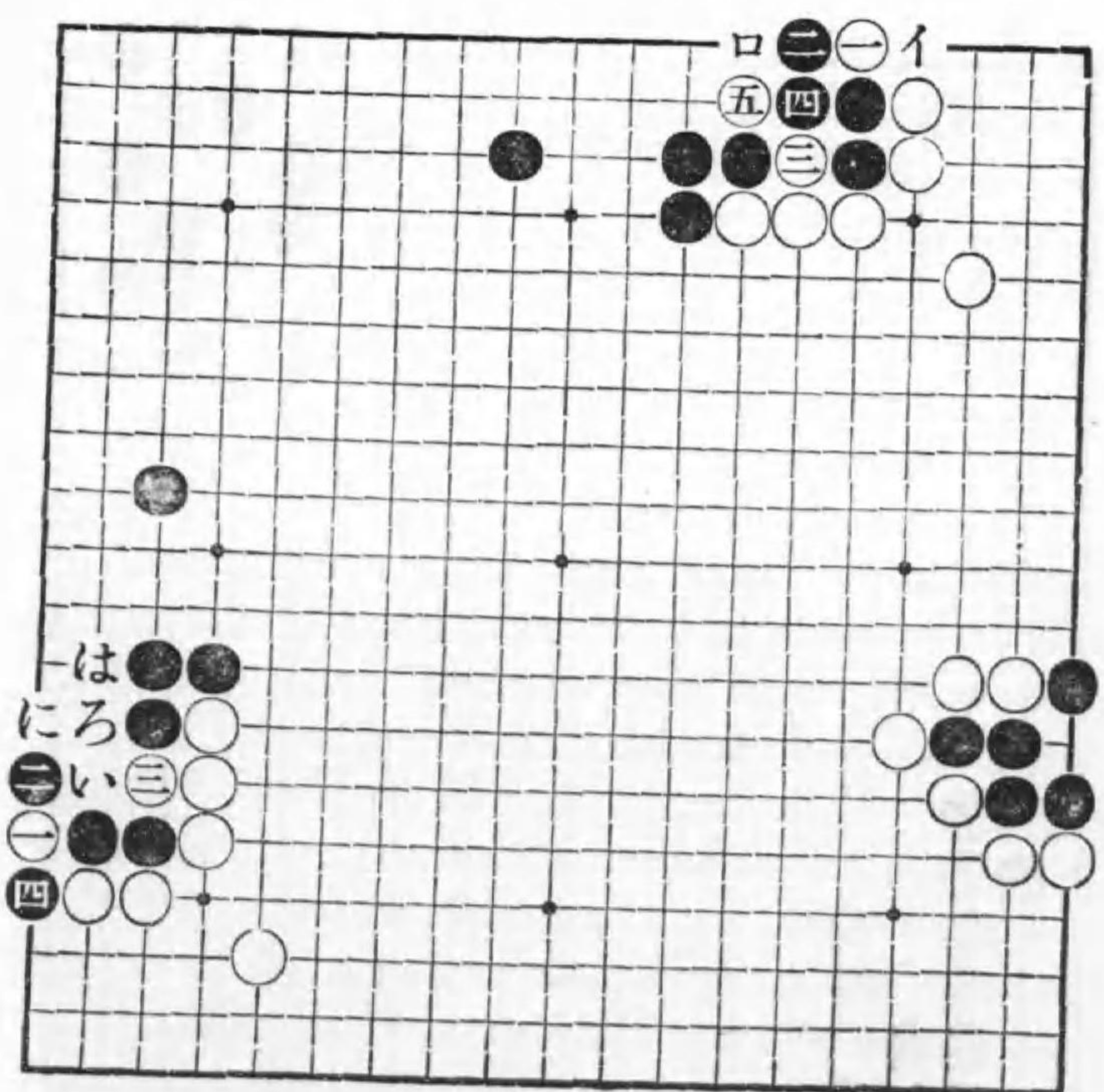
黒四は次に白(イ)なら、黒(ロ)。

そしてまた白一に黒二子取りなら、其白一を取返し。等もよく誤解のある手所である。

處が黒四の次に白(ろ)。

に黒(は)白(に)。

白(に)に黒(い)だと、右側の如く白一と黒四子は取られてしまふ。



一四二

簡單なる手所

なほ簡單なる手所として必要な常識を説かう。相當鍊達の人でも下らぬ不明よも大事を惹きおこし、それも早く悟ればよいが、面目上固執、より重大悪化に導き、即ち碁でも一局の破滅。

其破滅の中に右上隅、白一に黒二と受、以下白五まで。は次に黒(ハ)は白(ロ)。見られよ一の所は黒にとつて欠目――

右側の様に黒惡果、それが十目位の黒勝局なら、轉じて勝ち白へ。されば黒二は四の所の他は無い手である。

また左下隅の様に黒四までと成つても、黒惡果。黒四は一寸氣の利いた白一を取りに見えても――である。

黒一と三は次に白(イ)と粘がし。

そして黒(ろ)も。此れもよくある誤解の手所。即ち白

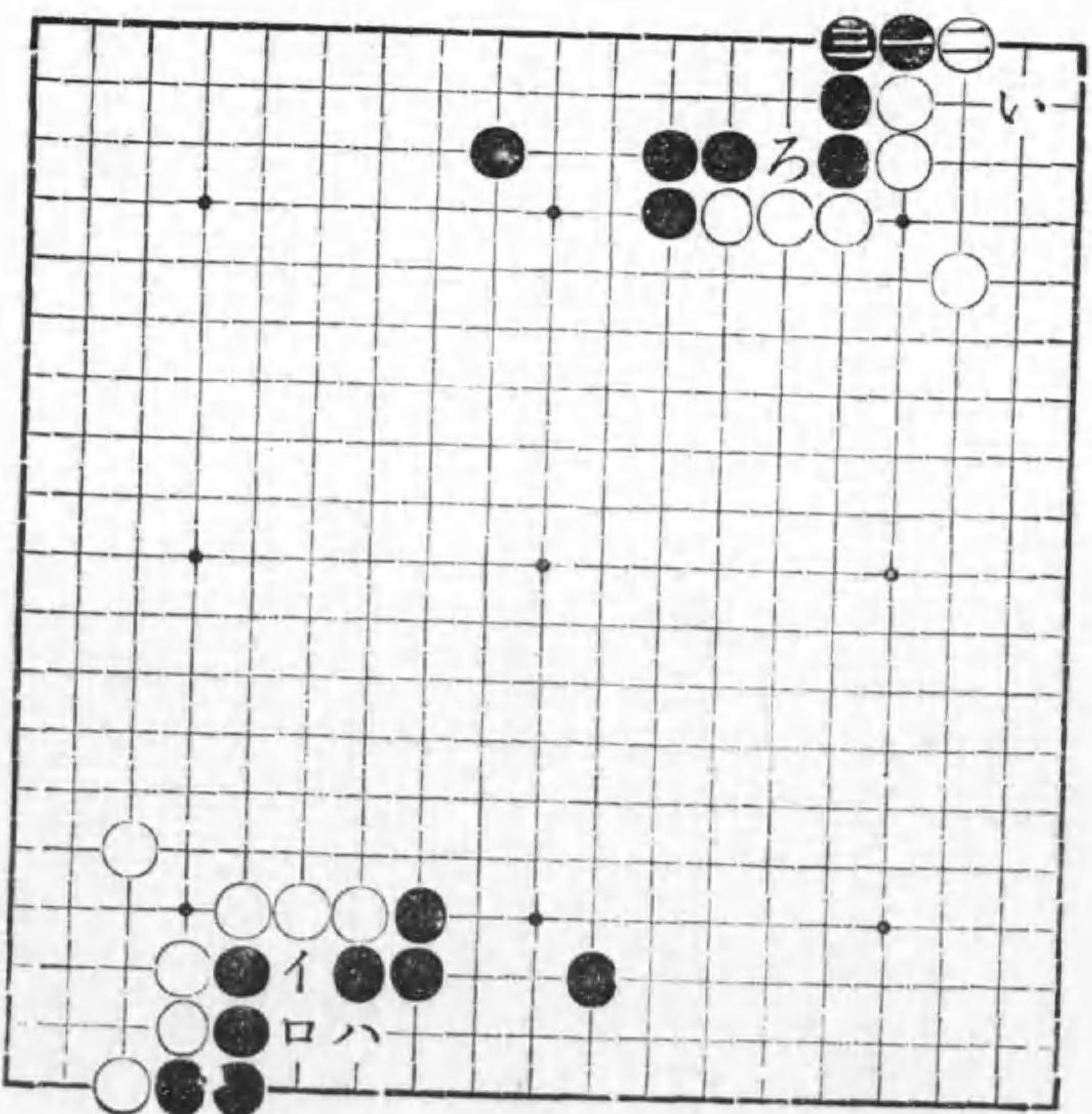
(ス)は――

左下隅白(イ)。

に黒(ロ)は白(ス)。

白(ハ)は(ロ)以下黒五子取りである。

此れも黒二十目位、勝ちでも逆轉黒敗け。



黒一と三も悪手標本、第一部に――

まさか標本も出来てゐないが、黒十目位、勝ちなら白の喜ぶ悪い手所。

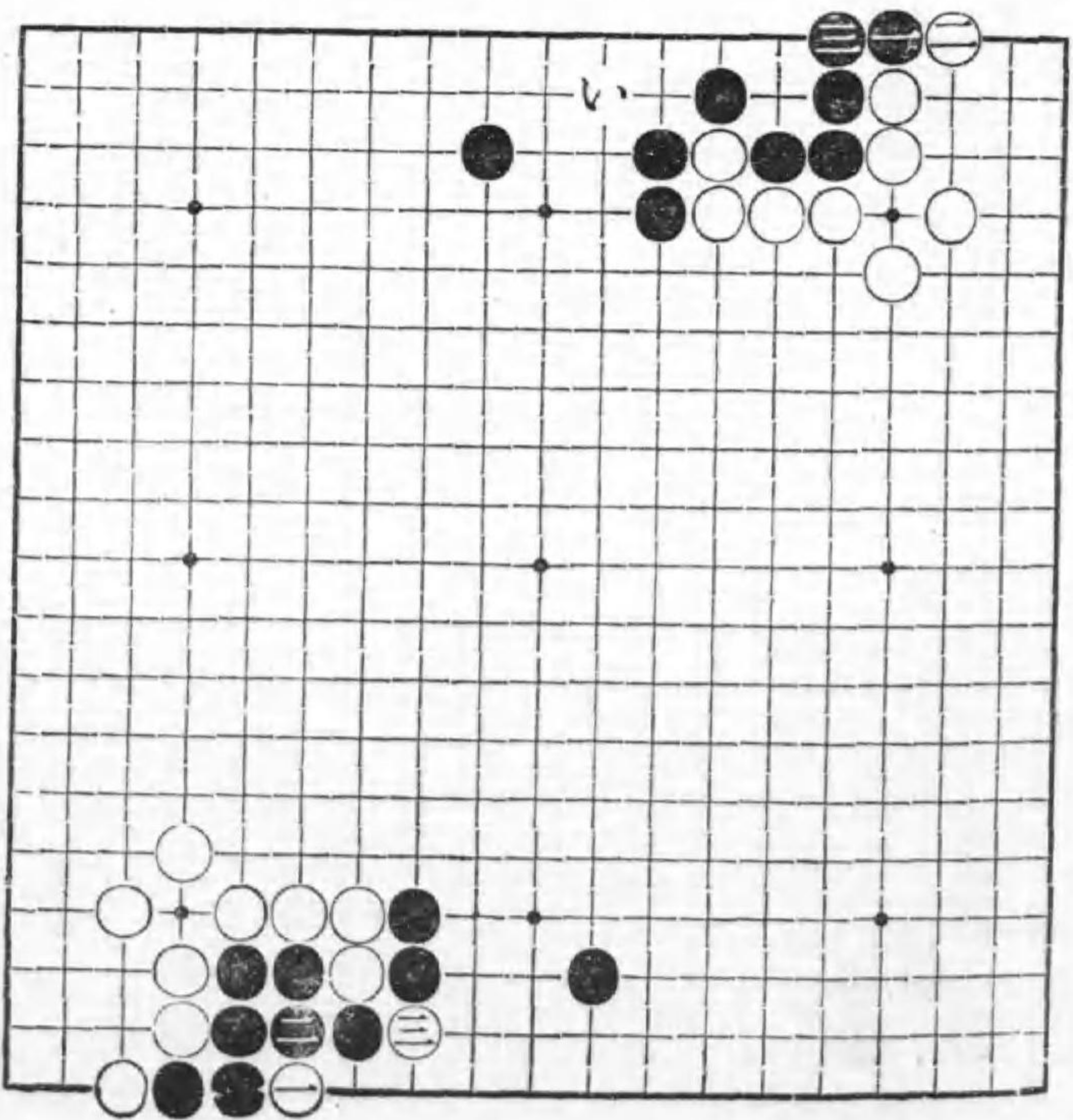
左下隅を見られよ。

白一から三までのそれを。

斯様に成つては黒二十目位、勝ちでも敗け。

右上隅黒先なら黒三白一黒(イ)が可。

簡單なる手所

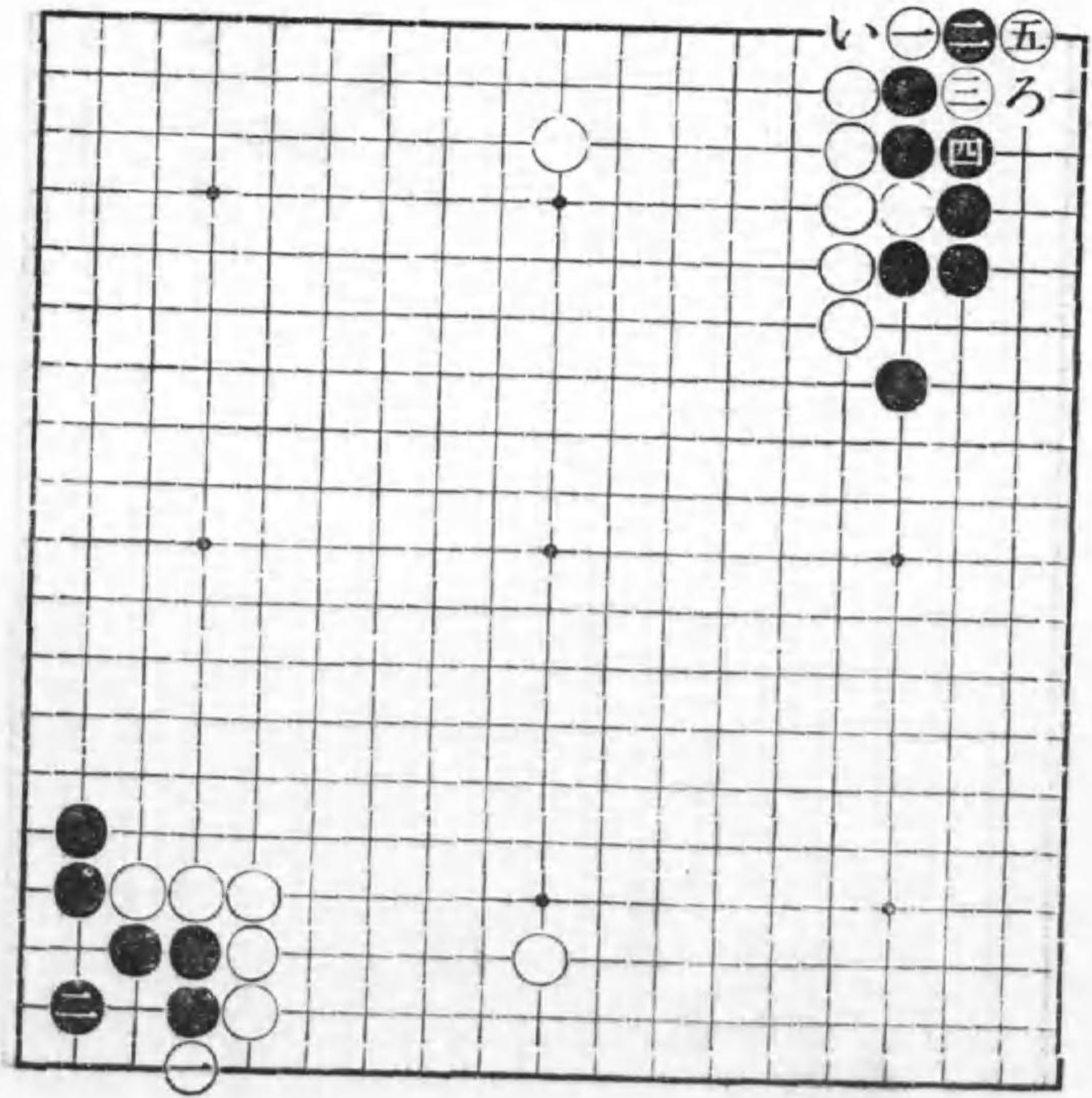


白一に黒二も悪手である
それは——
見られる如く白五まで成
つての事。

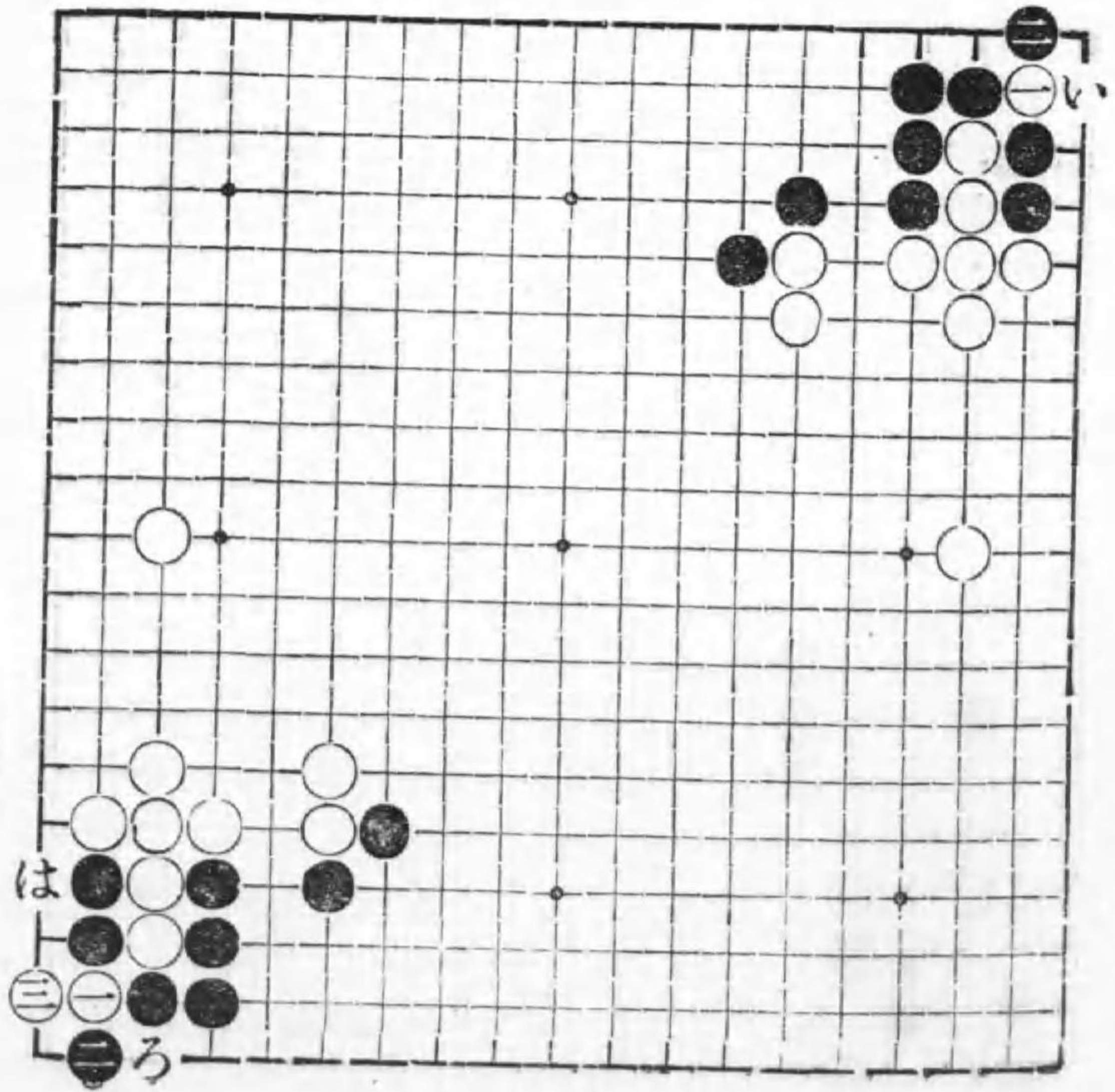
黒四を(い)だと白四。黒
一層も二層も悪果である。
後は言ふまでもあるまい。

白一には黒(ろ)が當然の
應手である。

左下隅白一にも黒二が當
然。二を(い)だと黒悪化。
と解る筈。



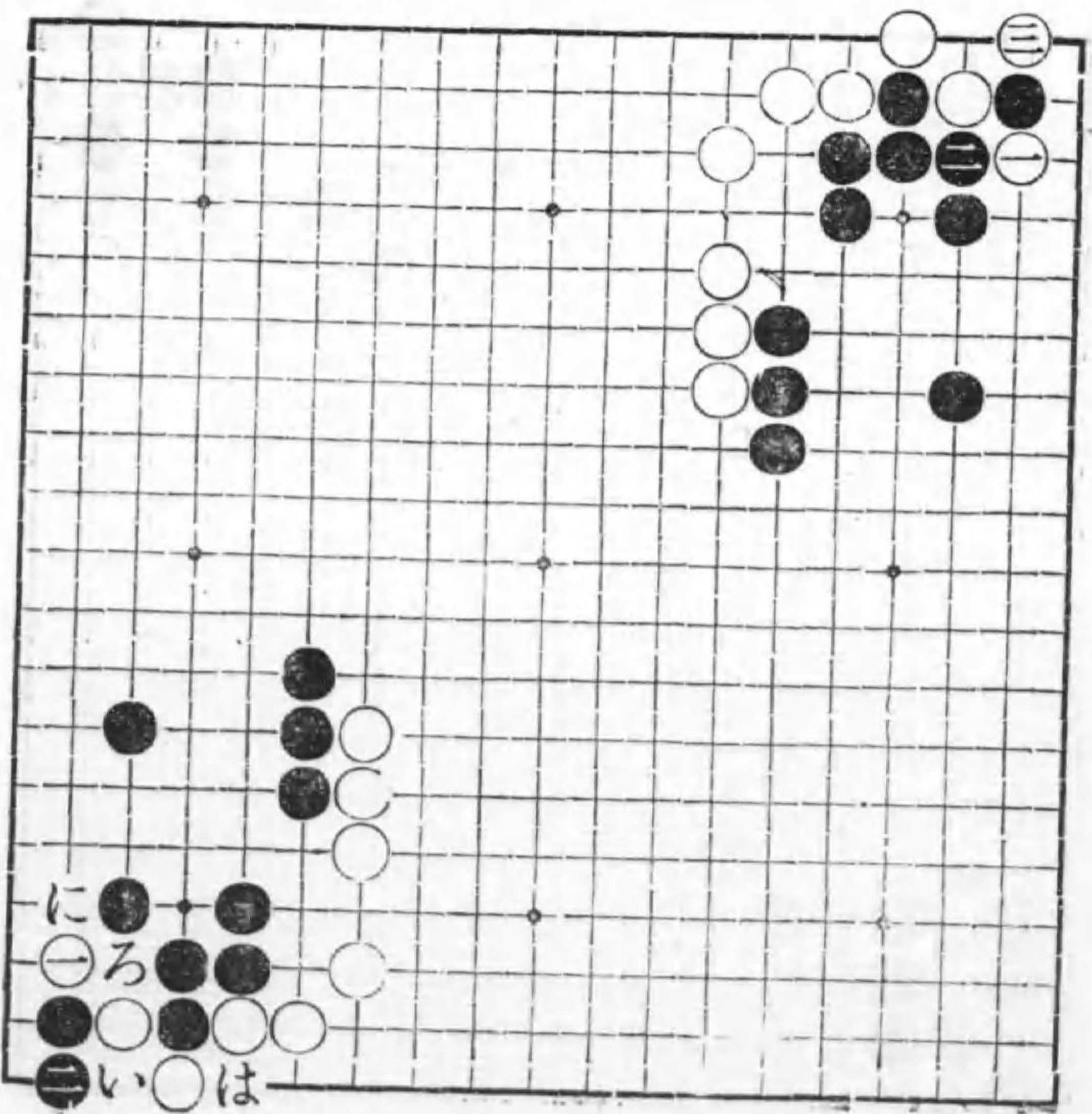
白一に黒二も手拍子——
といふのは次に白(い)。
黒二子は取られるからであ
る。
手拍子とは白一を早く來
る、黒二も早く受る——白
の調子に乗るもの。
左下隅を見られよ。
白三と成つて、黒(ろ)だ
と、白(は)黒一手遅い。白
一には黒三が當然。



白一に黒二は次に白三と成つて劫争——

黒二は其劫争を避けるなら、左下隅の黒三が可——
左下隅、黒二に白(い)だと、黒(ろ)白(は)、そして黒(に)で問題にならない。
要するに白一に黒二を心得ておく事。

されば白一は二の所で、黒一と成る所である。と白黒共に知られよ。

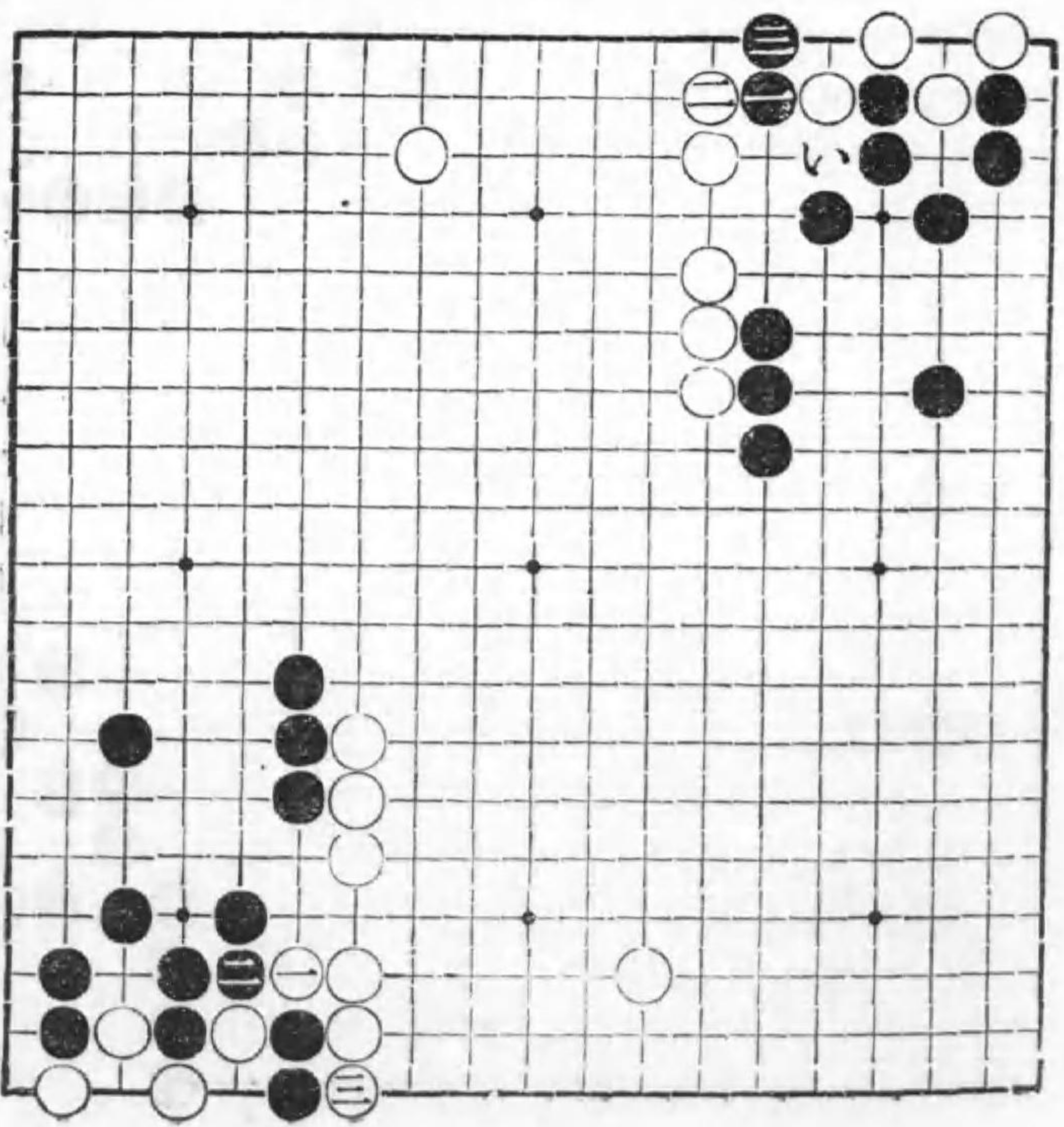


黒一は右の白四子を取る目的であつて——

黒三を(い)だと、白三と劫。黒三は劫なしで取らうといふのである。

處が黒三は大見損じ、それを左下隅に見られよ。

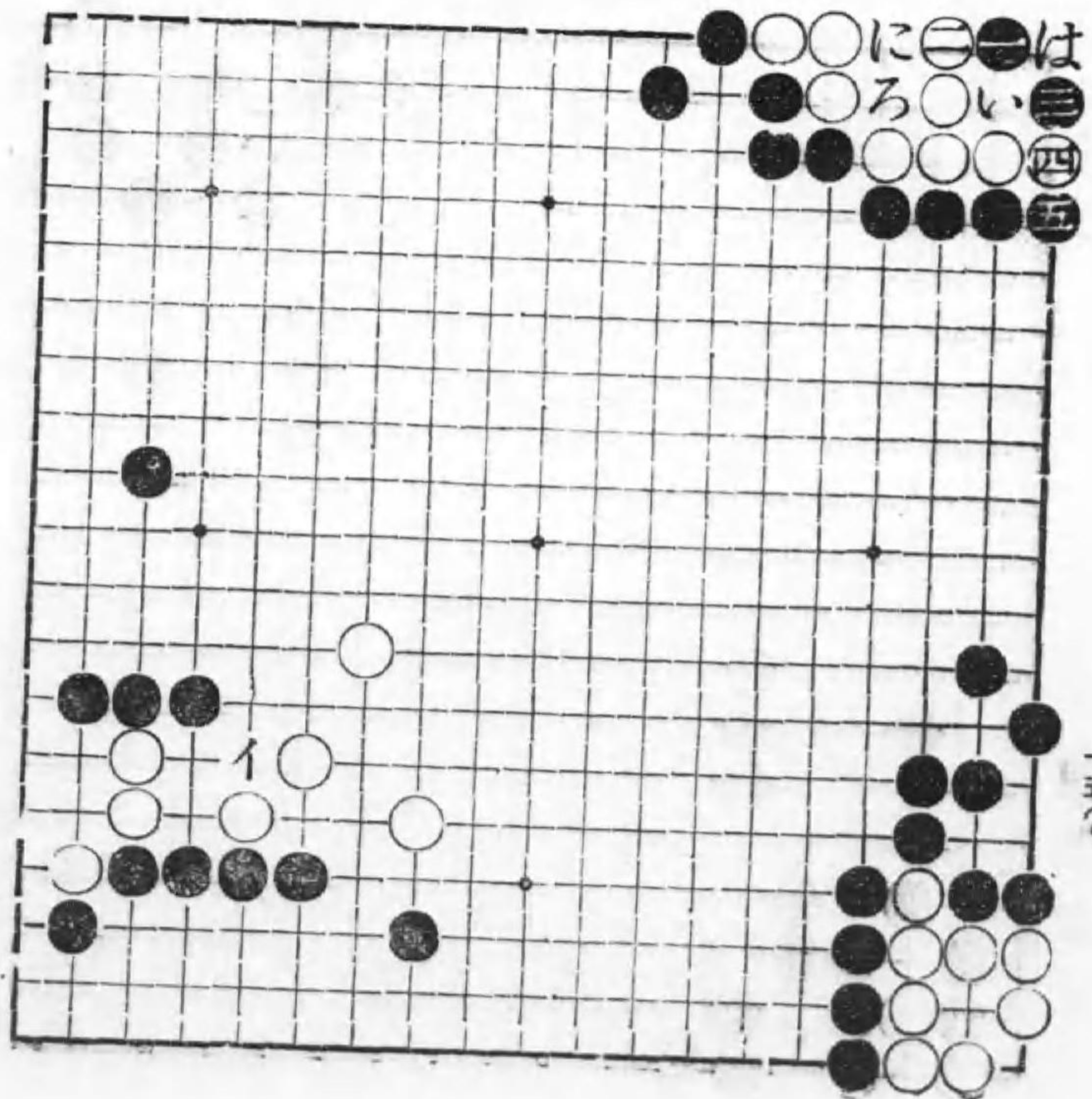
右上隅黒三は白三を見損じ、即ち黒二子を逆に取り、即ち黒大失策、そんな所で一局の敗を招くもの。



右上隅黒一から五までは
白地を消して、特。セキと
は次に白(い)だと――

黒(ろ)白(は)黒(に)と成
つて、右下隅に見られる白
は黒二子を取つて四目、黒
は白三子を取つて六目。で
白二目損。

されば白(い)は打てない
處で、右上隅白先なら三の
所。と白地は六目。で黒一
より五までは六目の手――



一五〇

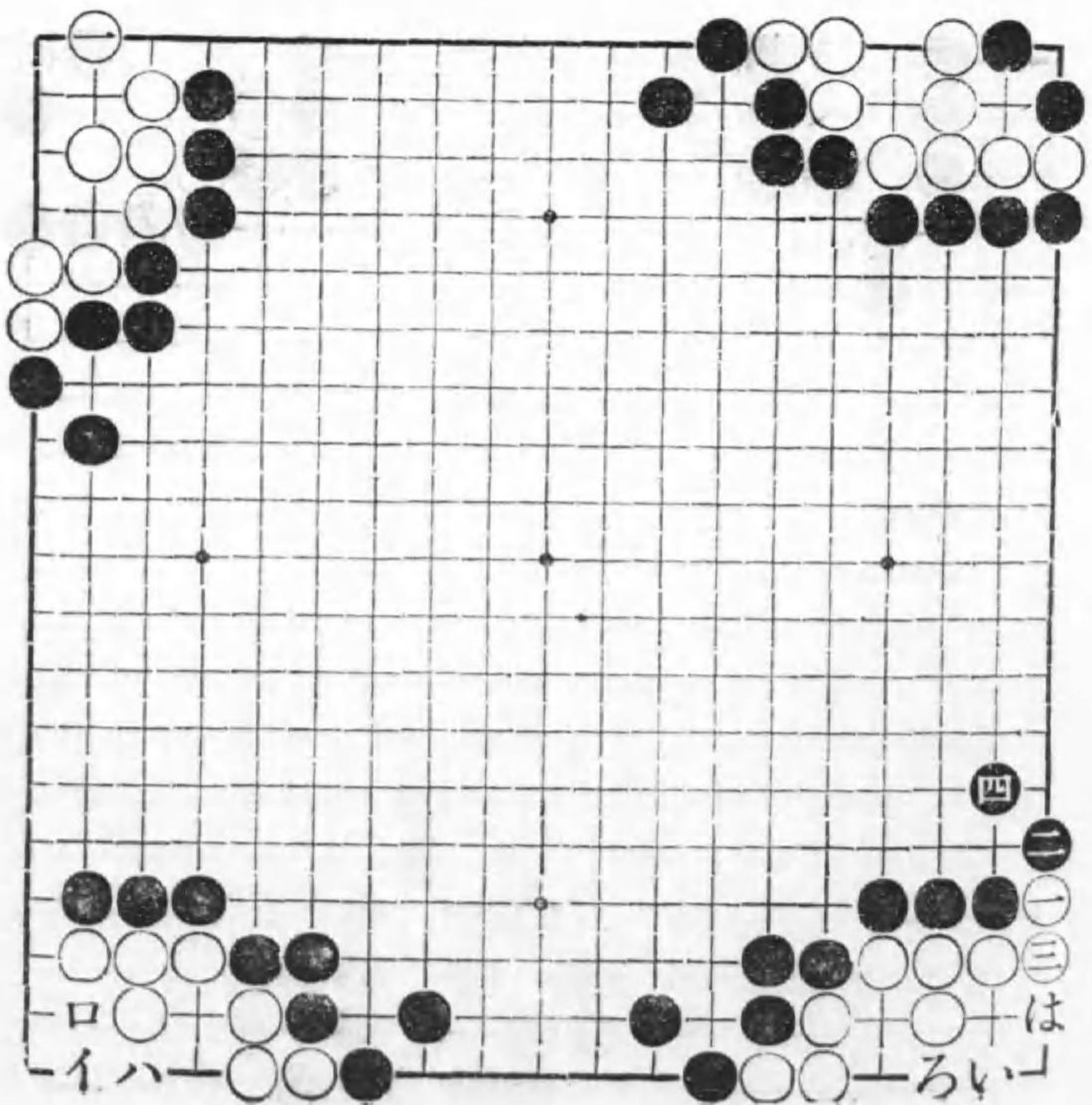
黒六目が大きい時代なら
六目でいいが――

前譜黒(イ)と左側の白を
切取り等があつては(イ)の
方が黒に得。

左上隅白一で白六目の地。
それを白右下隅の如くだ
と、黒(い)白(ろ)黒(は)と
依然として右上隅の如くセ
キが残つてゐる。

左下隅黒(イ)に白(ロ)は
黒(ハ)で白は取られる。

簡單なる手所

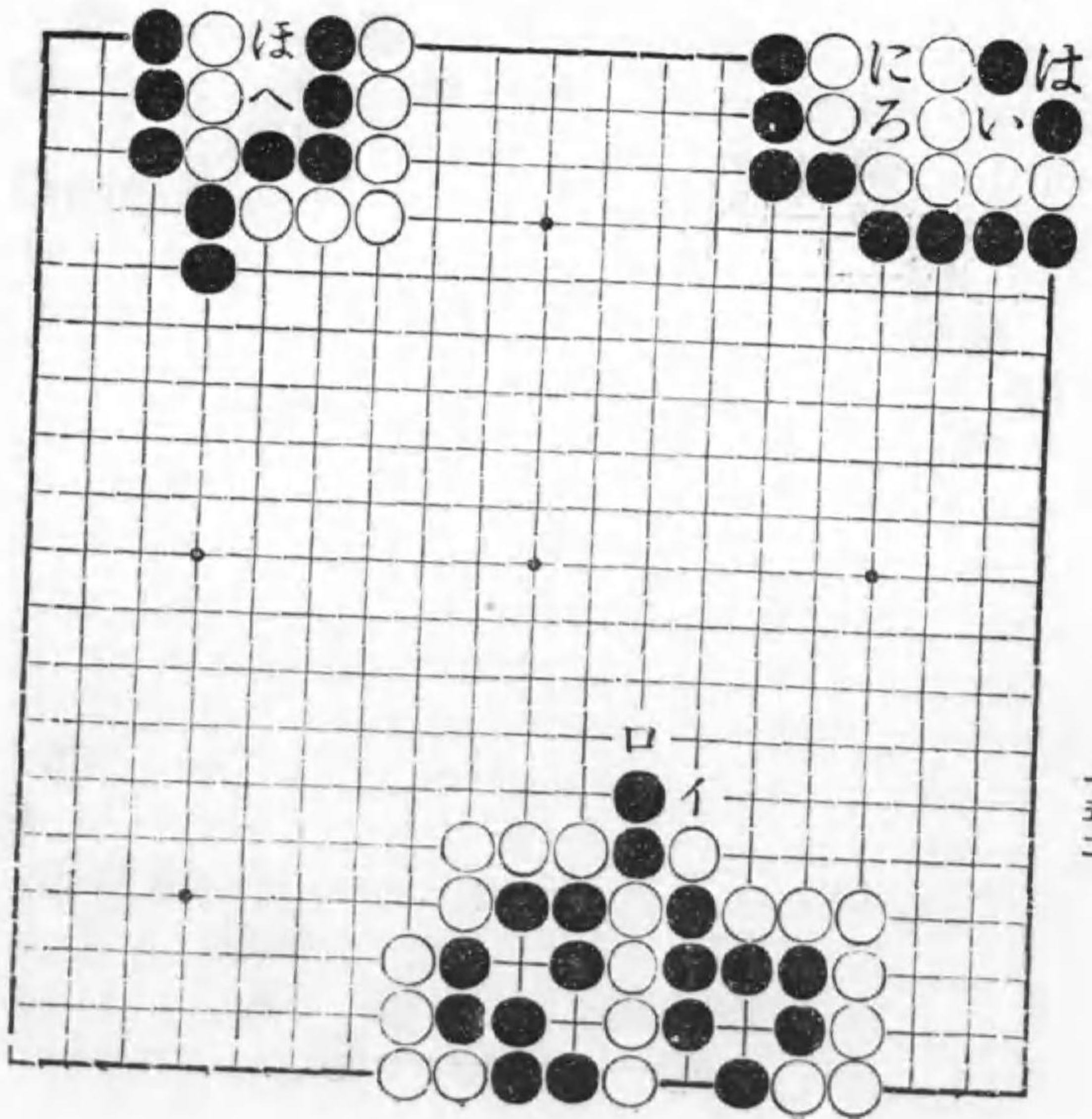


一五一

右上隅セキの事は解つて
白(い)黒(ろ)白(は)黒(に)
は、共に二子取つて損得な
い。で黒先に(ろ)白(に)等
は黒一目損と知られよ。

左上隅も持^{せき}。白(ほ)だと
黒(へ)で白四子と成つて取
られ。

で、黒白共に手は出せな
5。下邊もセキ。白(イ)と追
つたら黒(ロ)と逃げ。



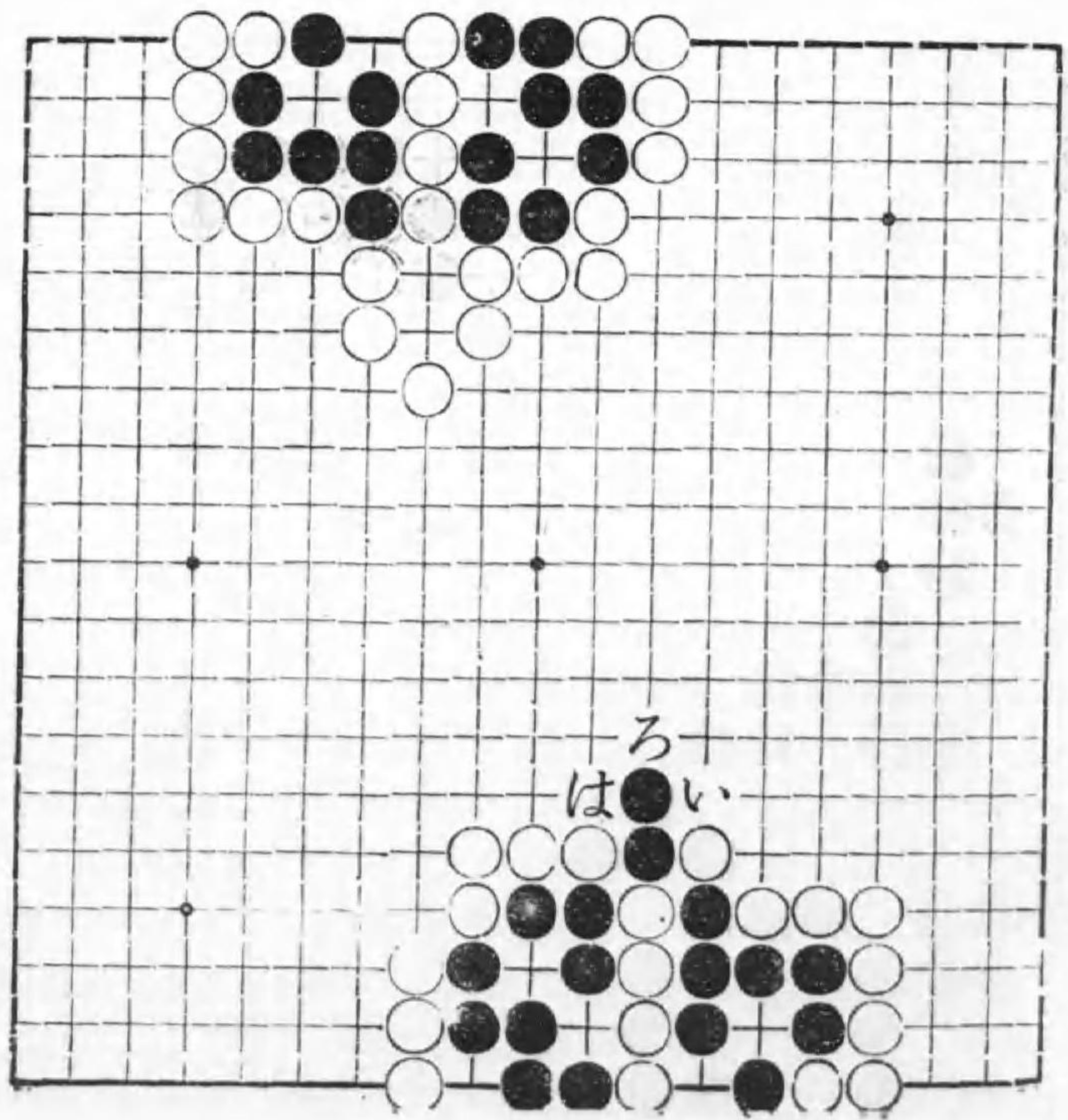
下邊白(い)と追掛けたら
黒(ろ)と一生懸命――

逃げるのである。何だ二
子位捨てやう――

それで白(ろ)また(は)と
白成つたものとして、それ
が上邊――

黒二子打抜かれたセキ破
れ。即ち左右の黒は白に取
られ。

といふ大關係の下邊の黒
二子である。

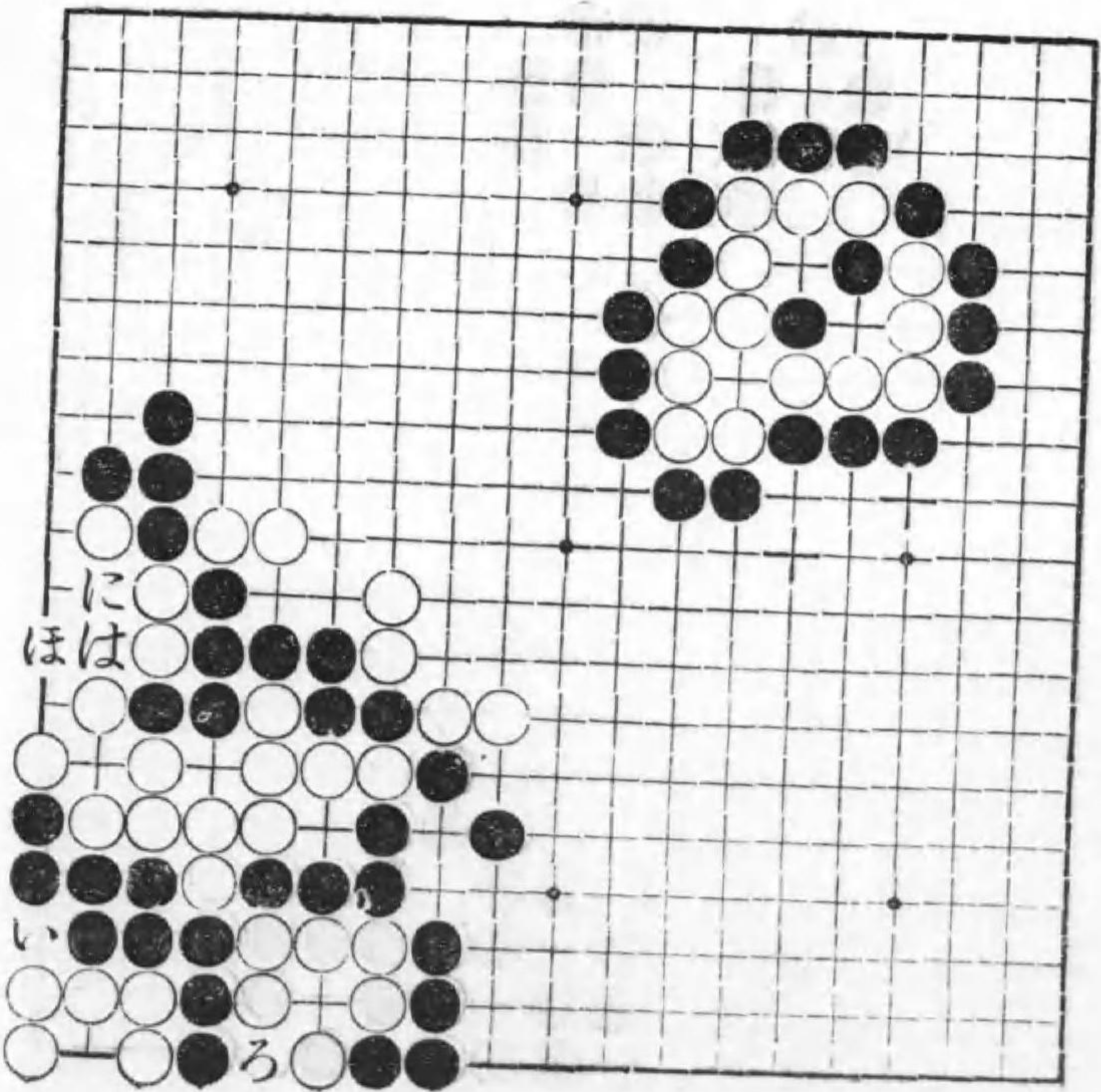


右上隅の方も白地の中へ
黒二子で踏張つて持。白は
困つてゐる態である。

左下隅の方も(い)(ろ)の
何れも中立地帯、即ち手も
足も出ないセキである。

處で黒先だと黒(は)。そ
して白(に)は黒(ほ)。

黒(ほ)と成つては次圖に
も見られる白惡化。此れも
セキ破れである。と以下説
くまでもない明瞭。



一五四

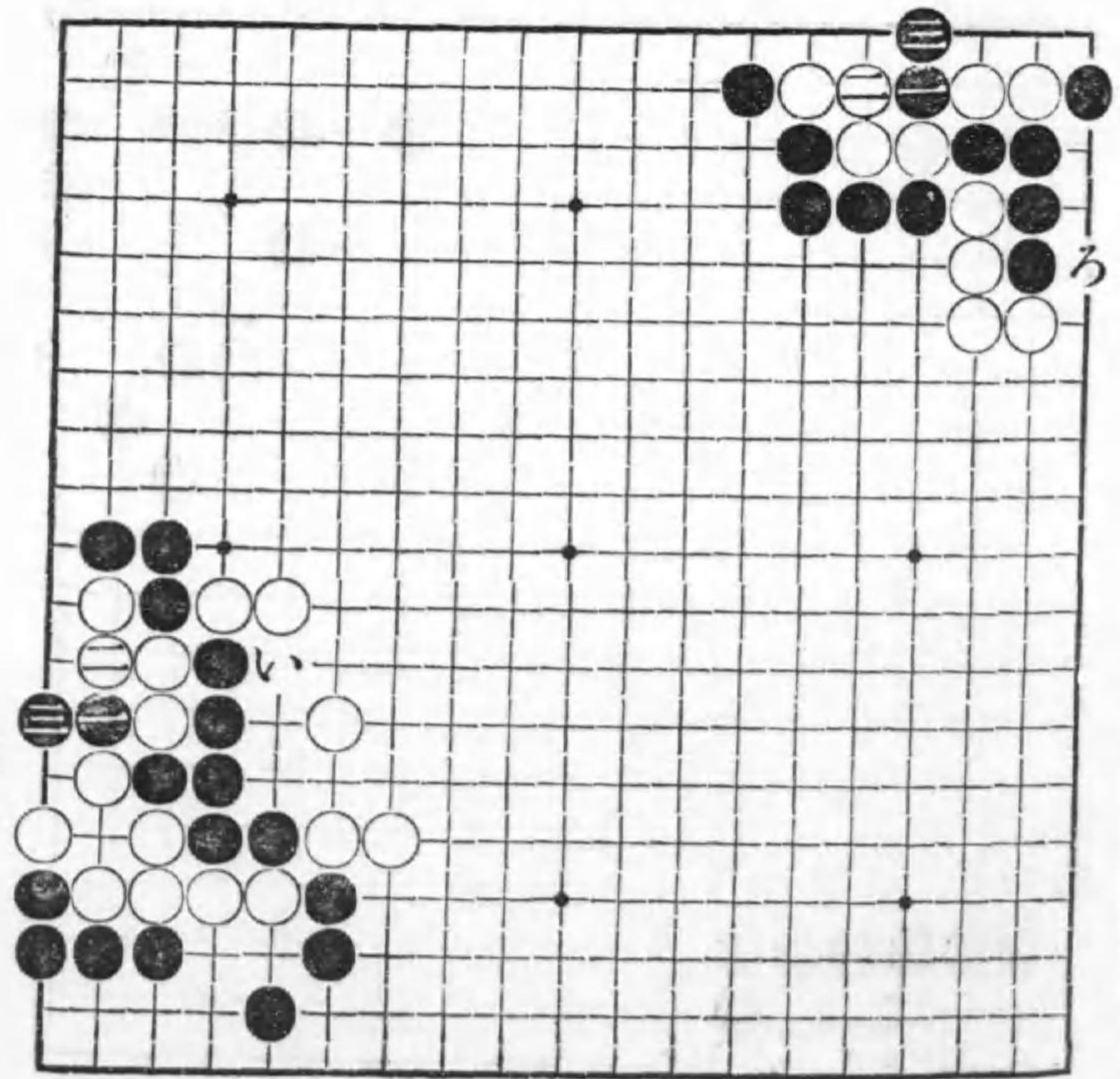
右上隅黒一と切つて、白
二と粘、黒三と下り。此
圖で、また――

左下隅黒三まで、即ち前
譜黒(ほ)までと同様である
但し周圍は違ふが。

左下隅白先だと白(い)。
と黒攻合負けである。

右上隅も假りに白先(ろ)。
併し右上隅の如き場合、白
先なら白二の所が利得であ
る。

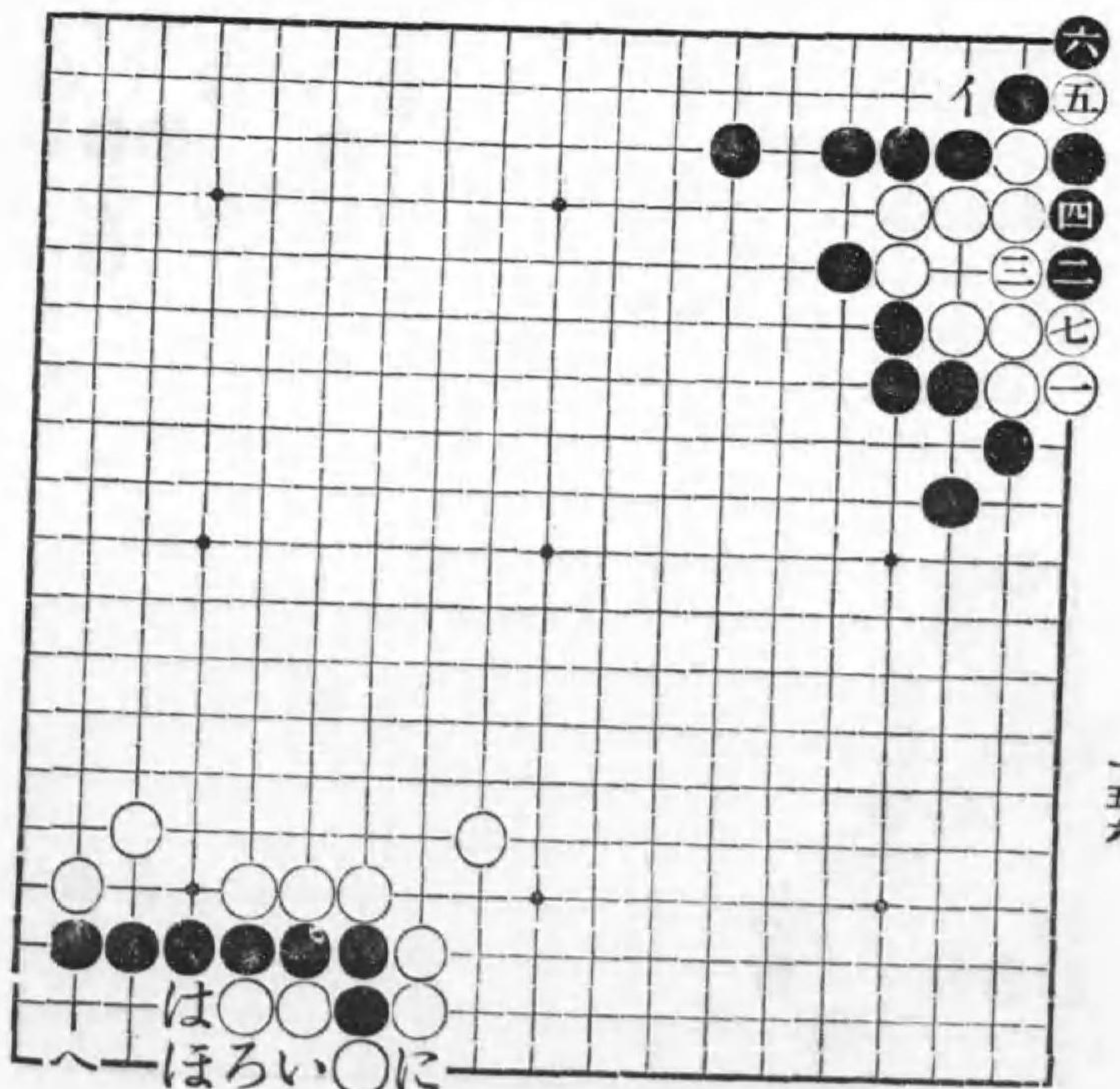
簡單なる手所



一五五

右上隅白一は以下白七と成つて、次に黒五に粘ぎだと、白(イ)と黒六子を取れ。で黒二と取りには行けない所。

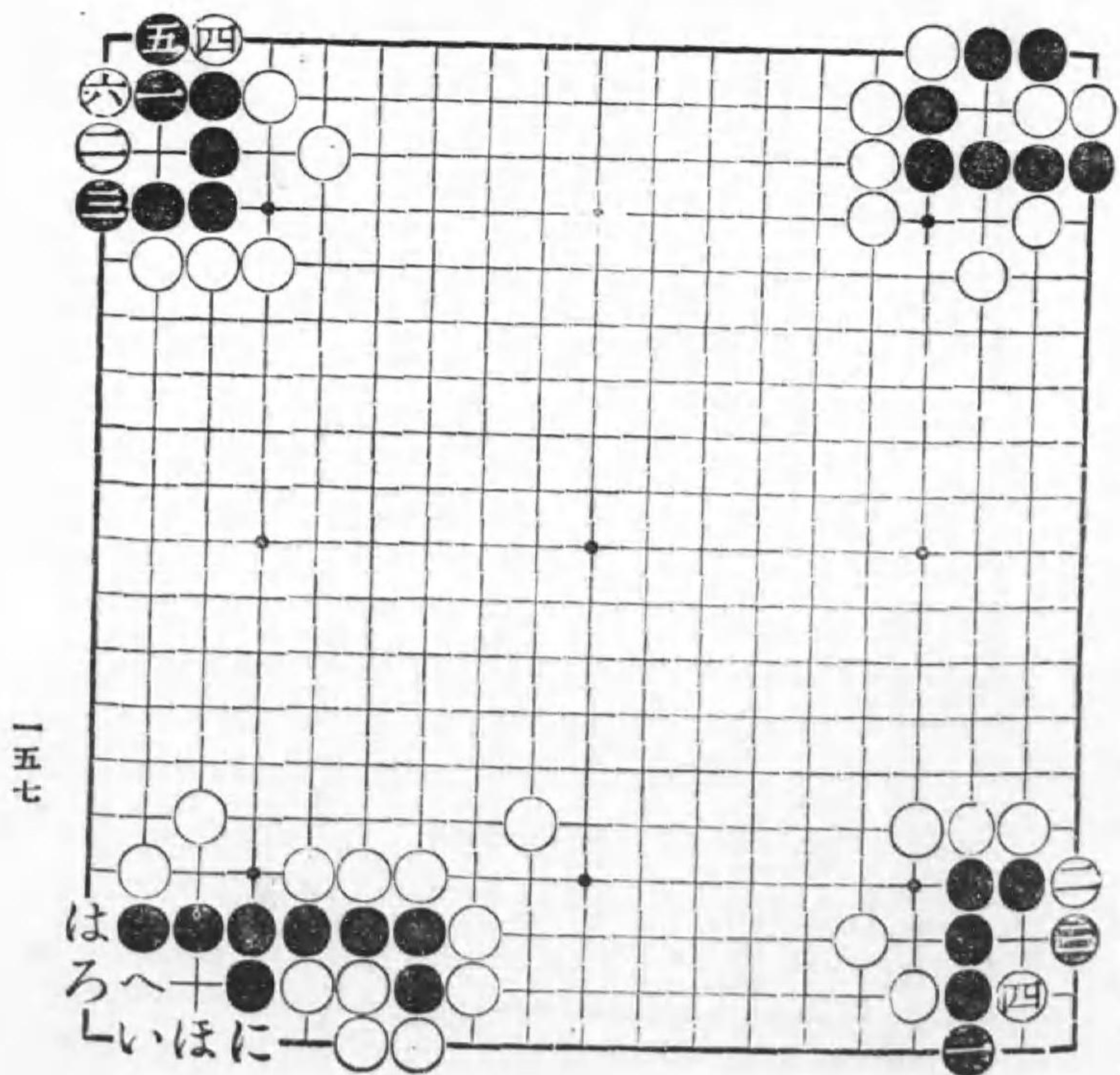
左下隅黒先なら黒(い)白(ろ)黒(は)——
に白(に)の他は無、そして黒(は)白(ろ)黒(へ)。
黒(い)を(は)だと——白(ろ)。
次譜を見られよ。



一五六

左下隅前譜の續きで、斯様では黒に活きなし——
次に黒(い)は、白(ろ)黒(は)白(に)黒(ほ)白(へ)。
それを右上隅に見られよ
周囲の關係は違つても内部は同質である。
故に前譜左下隅の如きは黒先黒(い)が肝要である。
右下隅も左上隅も手順は違ふが黒死である。

簡單なる手所



一五七

對局

九子より互先^{たがいせん}までは、置き方^{かた}はどう、また打始め^{うちはじめ}はどう、それを本譜^{ほんぷ}から説かう。が自分^{じぶん}は對局者^{たいきやくしゃ}のつもりで見られ度^たい。

九子置方^{しをかた}は見られる如く^{ごと}である。九子は井目^{せいめく}または堅目^{かためく}ともいふのである。

白^{しろ}より十一^{じゅういち}までは右邊^{うへん}を占領^{せんりやう}の目的^{めきてき}である。黒十二^{じふに}は次に白十三^{じふさん}と其尾^{そのはし}の黒一子^{いちし}を捨^{すて}、白にも地^ちを與^{あた}え自分^{じぶん}も十四^{じふし}と地固め^{ちかた}の考^{かんが}へである。

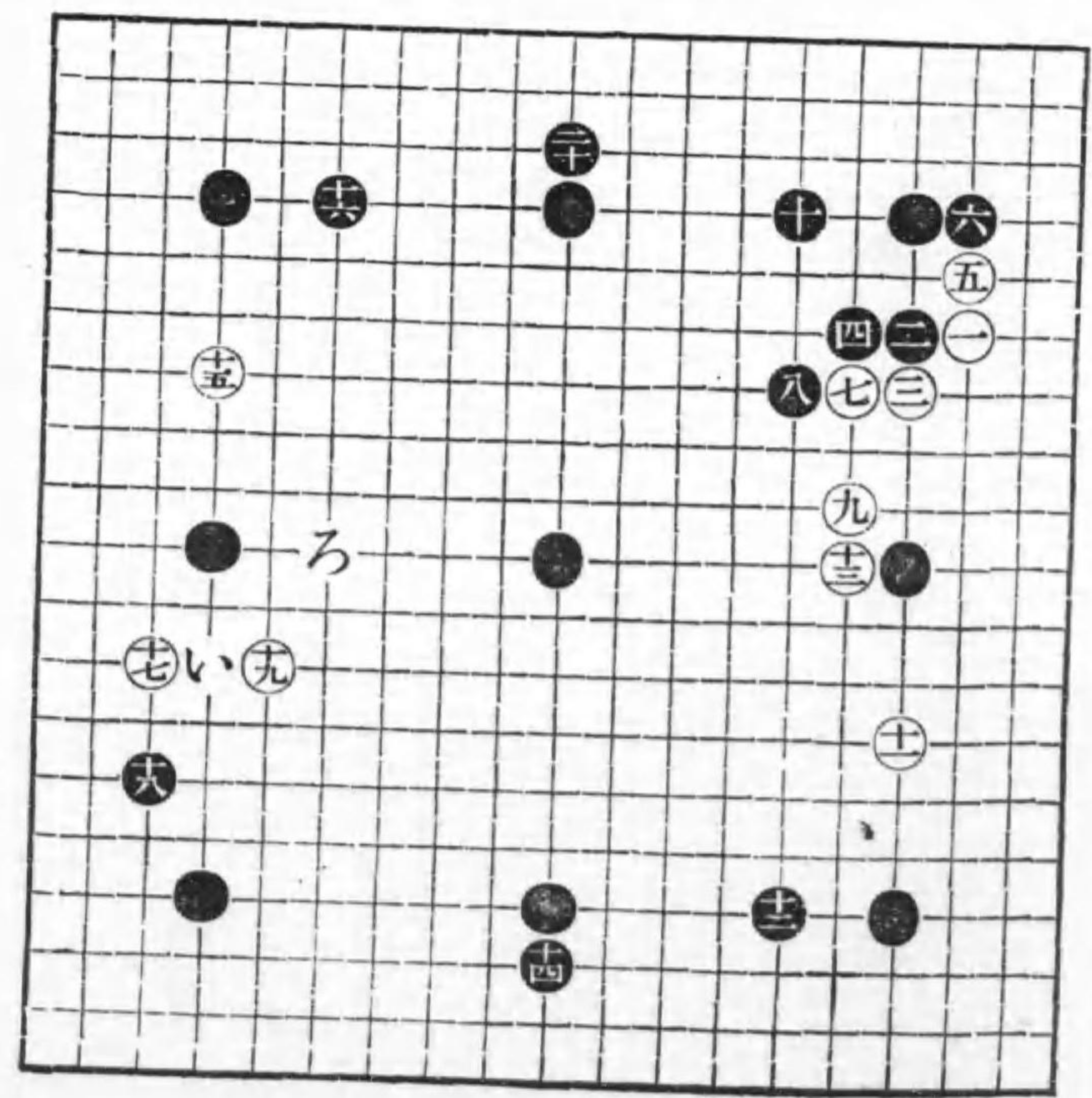
また黒十八^{じふはち}は次に(い)で白十九^{じふく}と飛ばし、更に二十^{にじゅう}と此れも其方^{そのほう}の黒地固め^{ちかた}である。

斯^かくて觀^みられよ、黒の形勢^{けいせい}、斷然^{だんぜん}優勢^{ゆうせい}。黒十二^{じふに}で十三^{じふさん}だと戰爭^{せんそう}である。また黒二十^{にじゅう}で(ろ)だと戰爭^{せんそう}である。が戰爭^{せんそう}より二十迄^{にじゅう}の平和^{へいわ}の方が黒の良方針^{りやうほうしん}。

碁を打ちながら、駄洒落^{だしゃらく}や口合^{くちあひ}を盛んに飛ばす人がある。例えば――

「負けて惜しき玉手箱^{たまてばこ}」
なんて相手の敗けたのを笑^{わら}す。

相手もそれを聞いて笑ふ人なら、別に差支^{さしつか}えはないが、なるべくそんな茶化^{ちあ}したことは云はぬもの。



對局

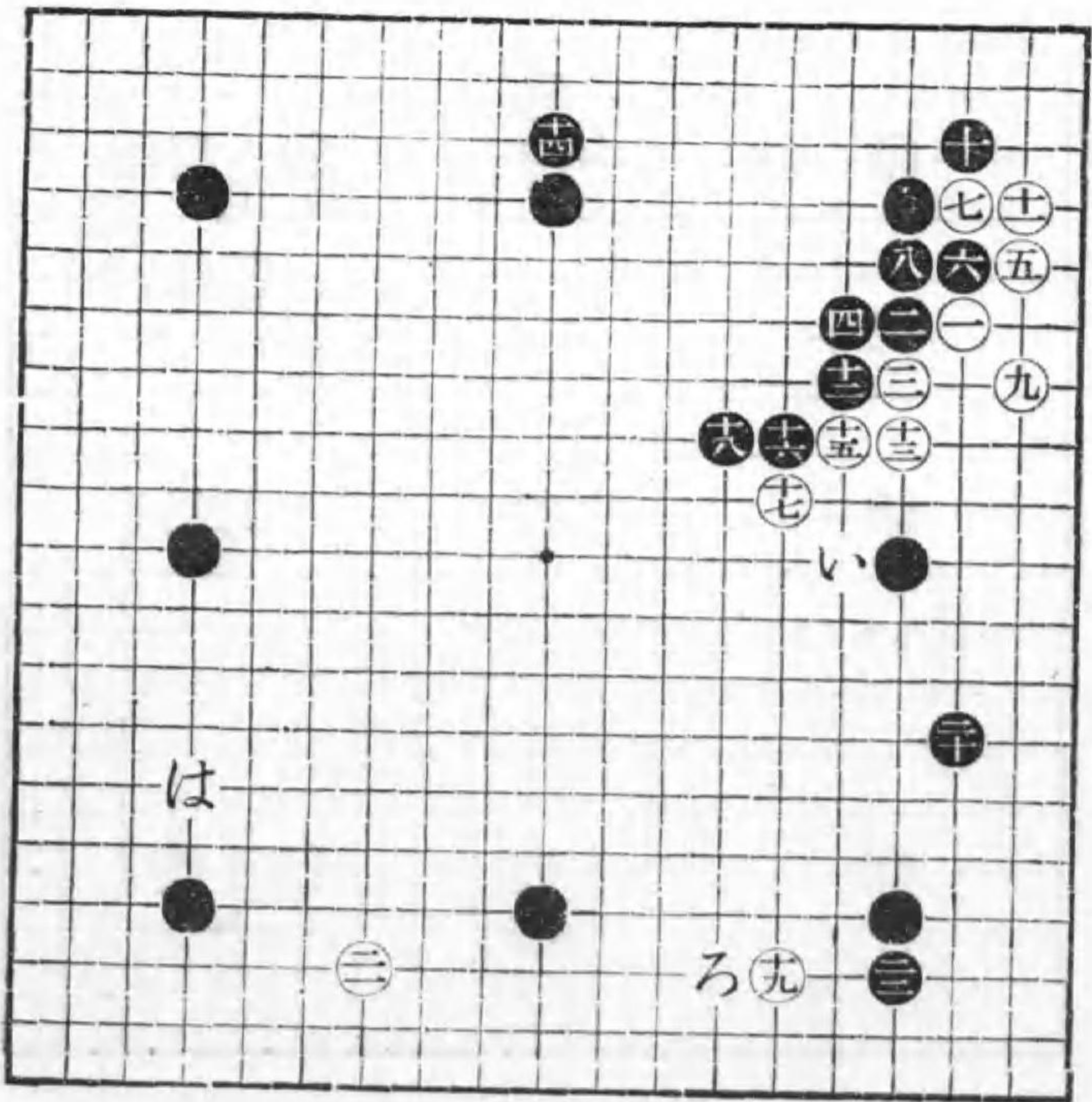
八子置くのは中央の黒一子を除いた本譜である。

中央には天元といふ名稱がある。

黒十六、十八は其上の方を大きく圍ふ目的である。

白十九を(い)なら、其星の黒一子を捨、黒(ろ)位で可。

黒二十二は(は)に必ず、でもない。左様黒二十二は確實の一手。



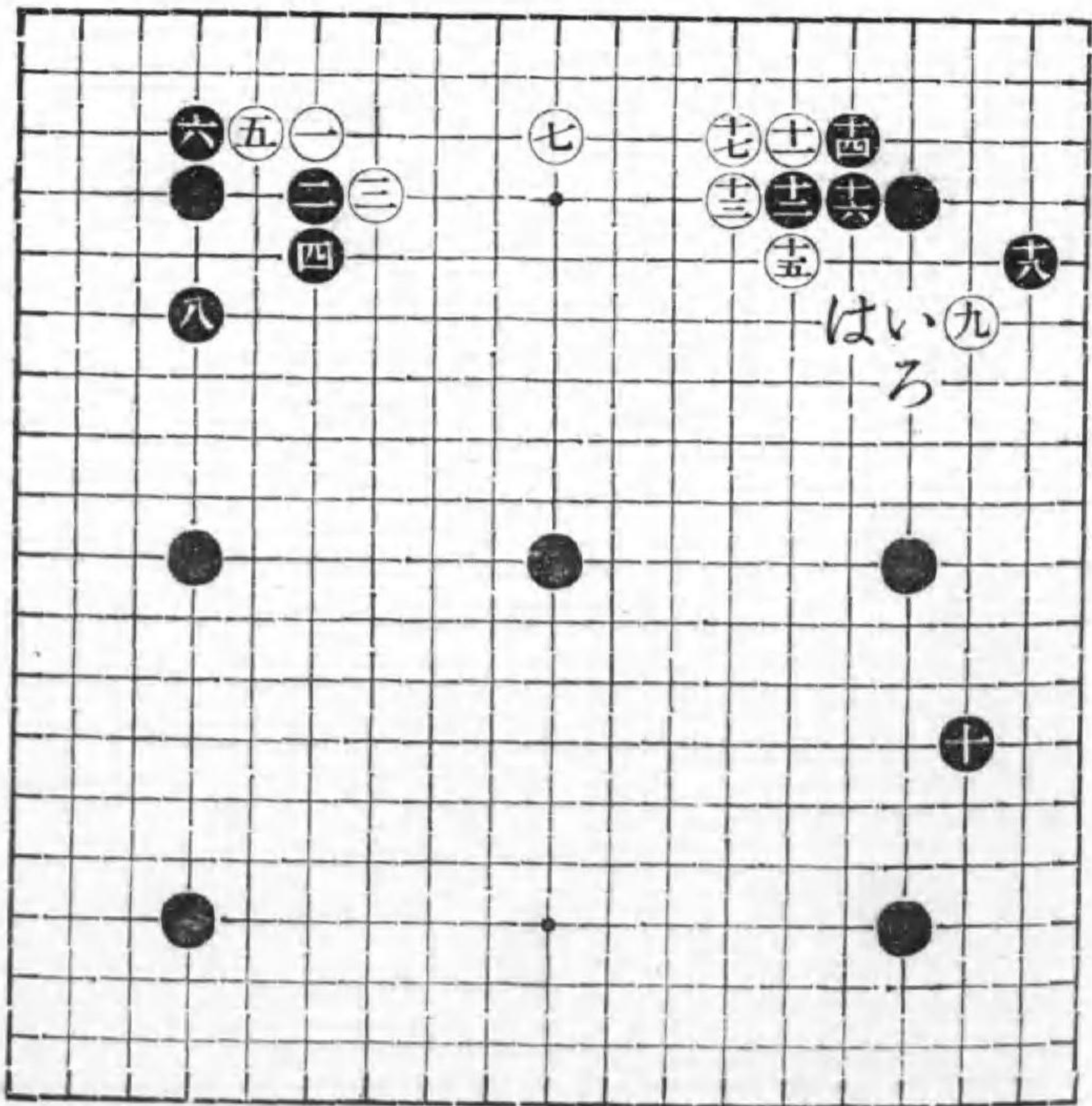
一六〇

七子置くのは上邊下邊の黒二子を明けた本譜の様である。

黒十も十二または十七の所に必ずしも——ではないのである。

黒十八で(い)、そして白(ろ)に黒(は)も黒悪くはない。

が左様黒十八で後に白九を攻め黒(は)。其含みで黒十八は可である。



一六一

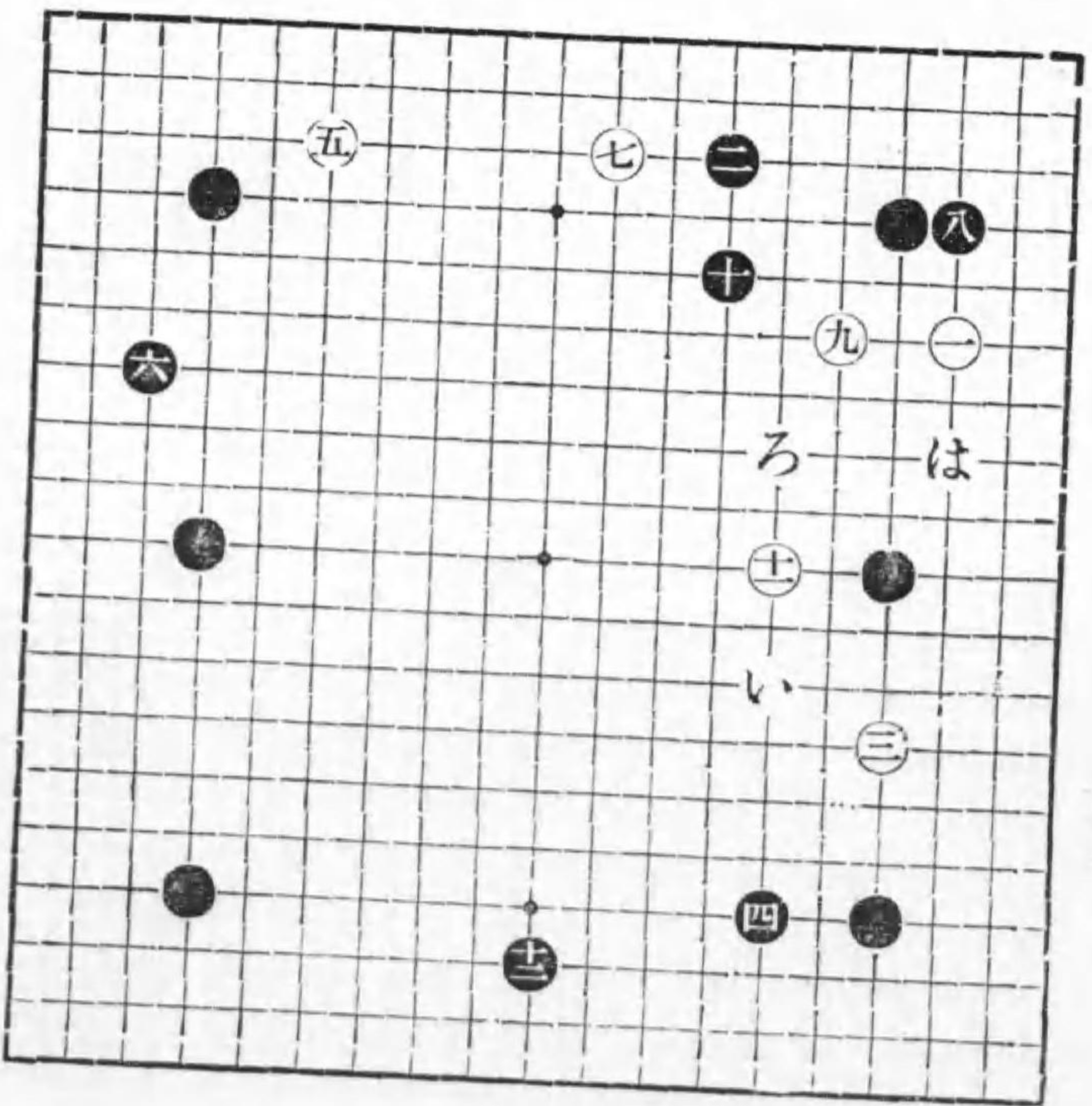
六子は斯様である。

白十一は其右の黒一子攻撃である。

が一面には黒十一と其所に黒から飛ばれて、白が困るからである。

處で黒十二は右側の白大規模などに眼もくれない膽略である。

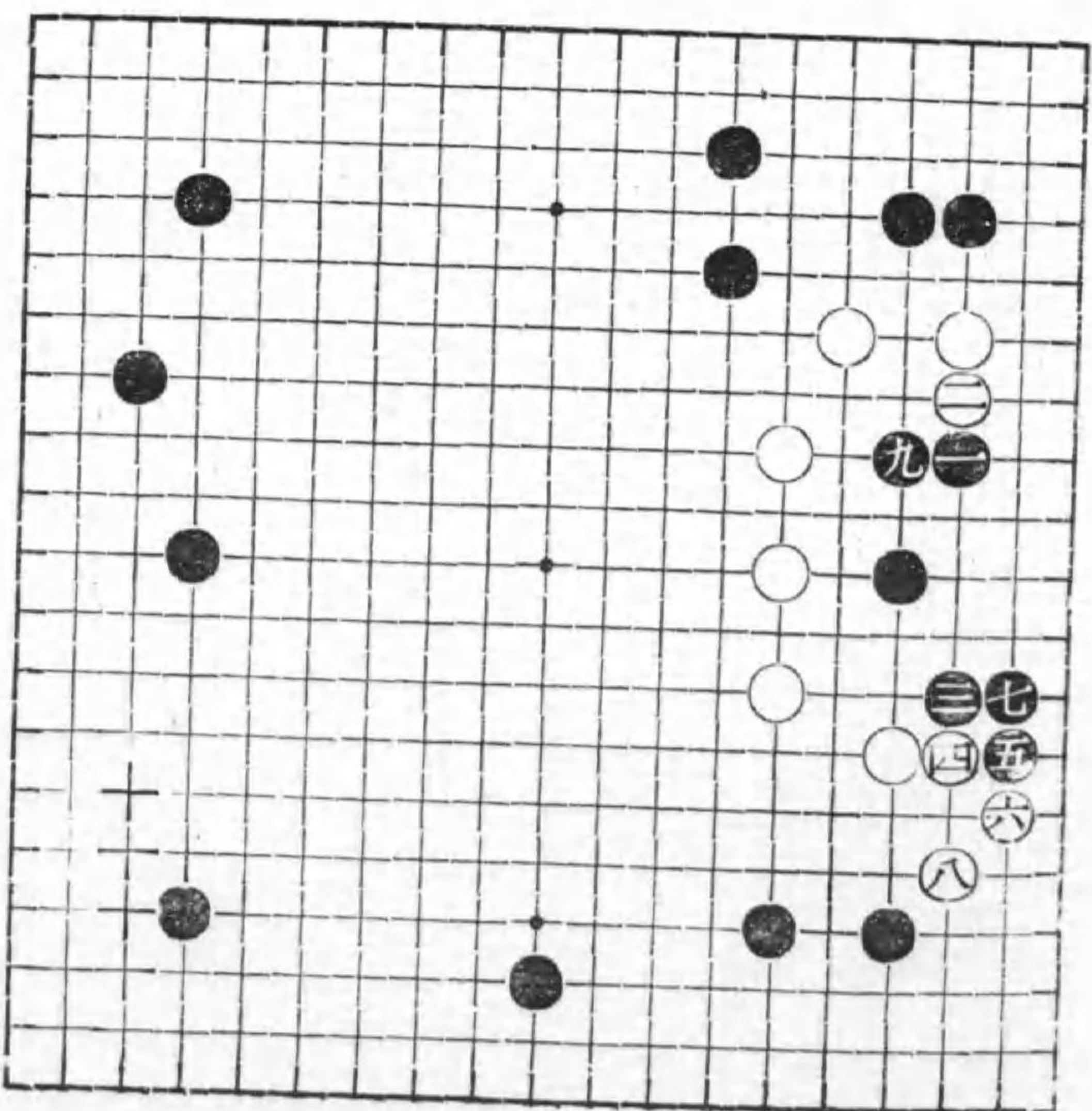
即ち白(い)又(ろ)の二手位で、黒は取られぬ、白の缺點(は)と黒から行く手があつて。



黒九と成つて白地は變じ黒地十目位。

で黒は前譜白十一に慌てない事情。

しかも白に二手をかせさせ黒九迄の成功である。



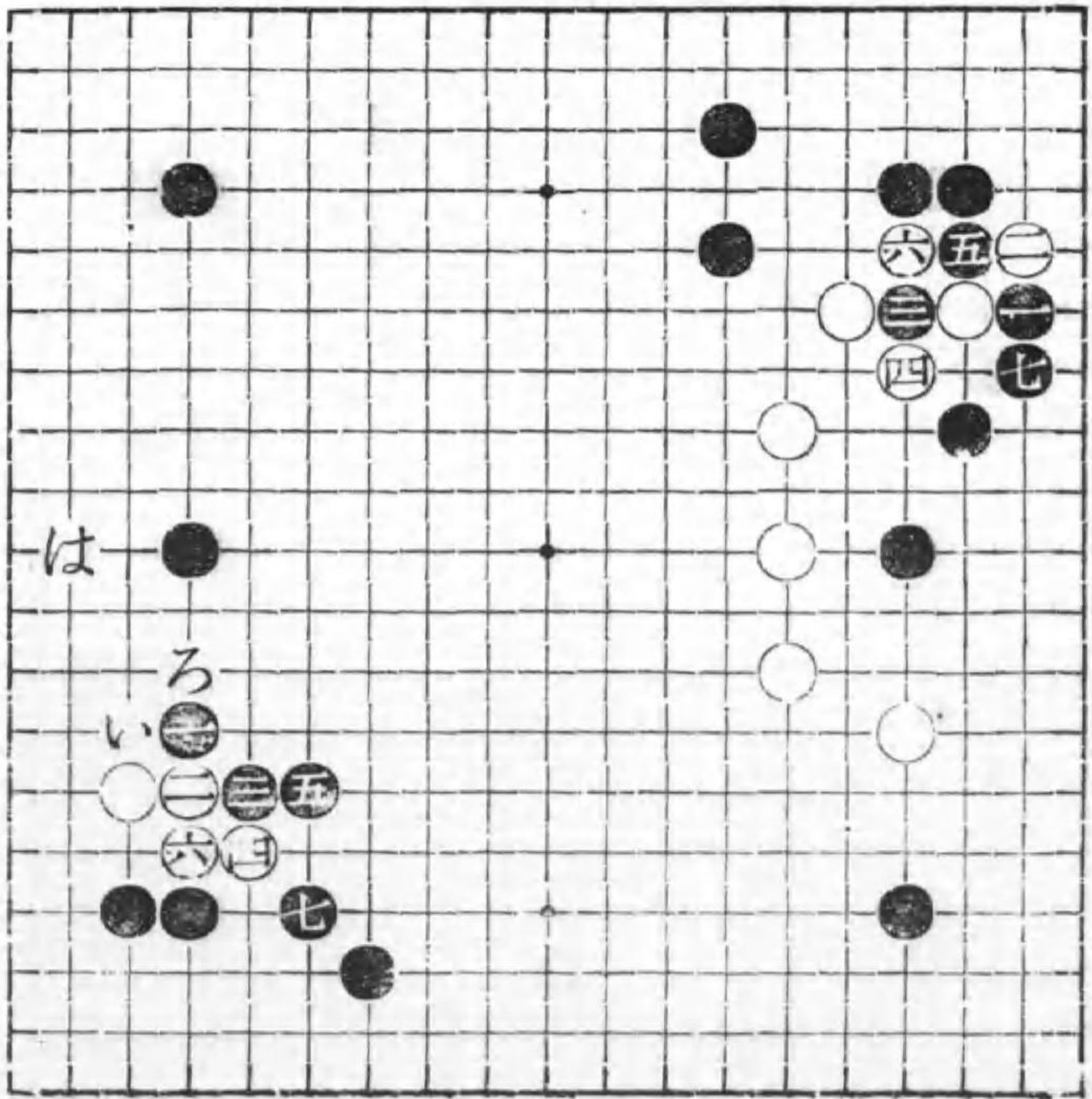
右邊、黒先なら黒一より七まで。

即ち黒は上下を連絡、白はつまらぬ黒三の一子取つたのみ。

左下隅は此れも黒先なら黒一より七まで――

と白丸の白一子を壓迫。

白取られはしないが、白次に(い)黒(ろ)、そして白(は)位の低い脱出。大いに参考にならう。



五子は此れである。

白十五を二十五の所だと

黒十六。では四隅が黒地。

四隅取られて碁を打つな

なんて譬えもある。即ち隅

は地量が多い所。それで白

は勝てないといふ意味。黒

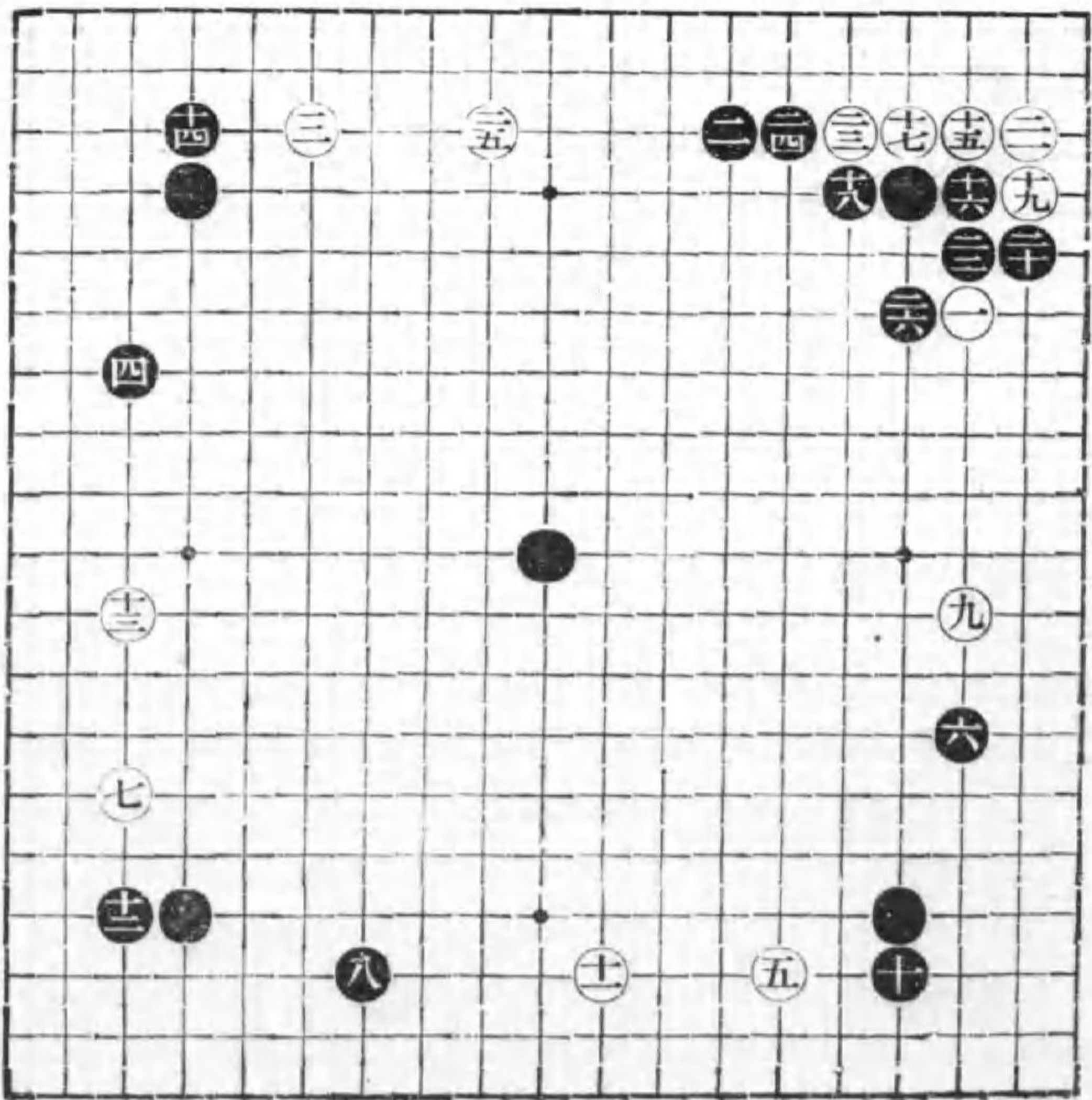
にも通用するもの。

それで白十五と一隅は取

つたが、それも十目足らず

斯くては黒優勢――と見

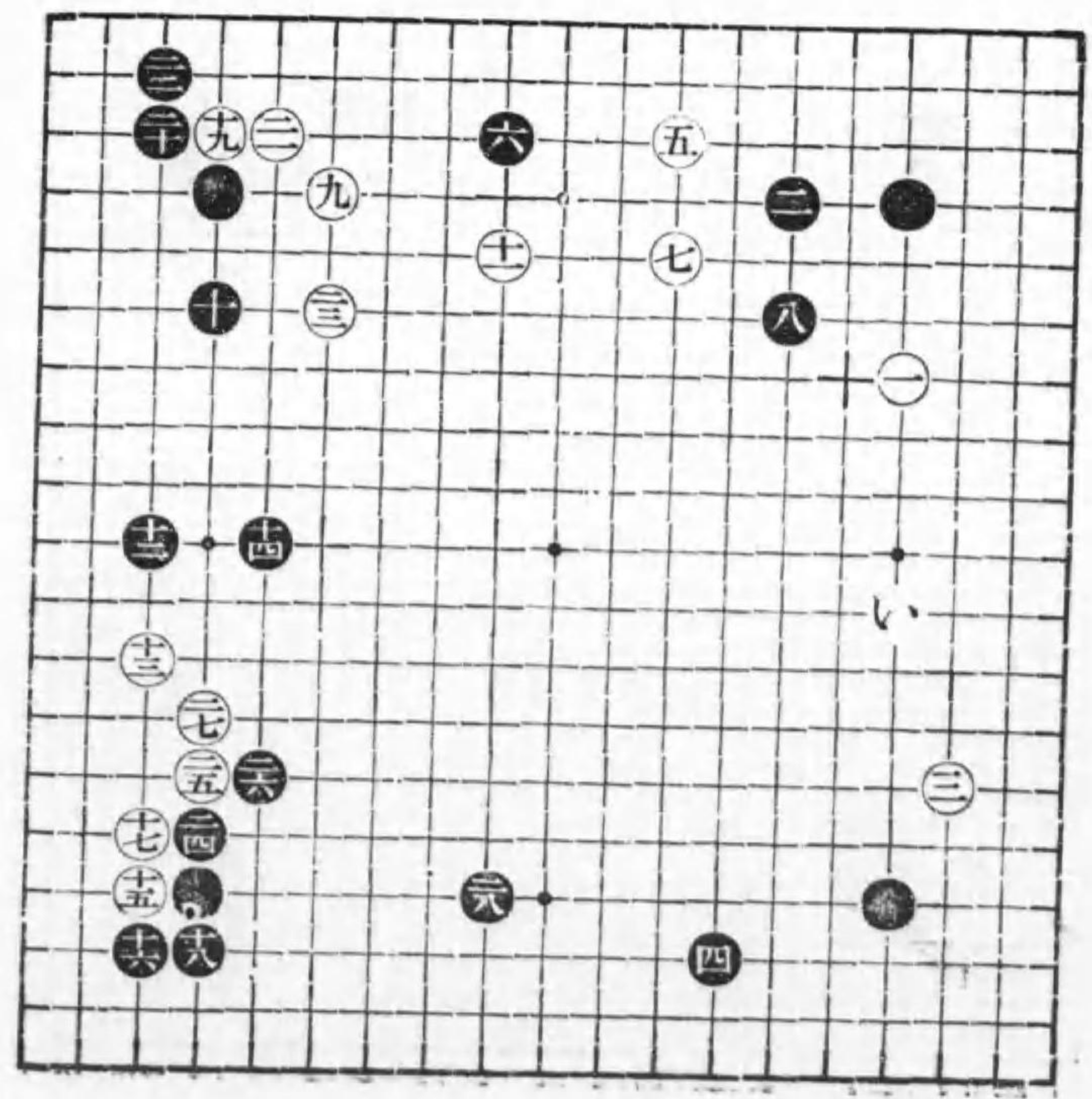
られる筈。



此れが四子で四子となる
と、白が名人なら黒は初段
の格、前途も楽しみといふも
の。自つと精も出やう。

さて黒六の一子を取圍ま
れて、黒損の様だが、白に
とつて不氣味千萬、氣は許
せないのである。

併し黒二十八と成つて、
彼我の比較——は黒優勢。
右側は黒(い)と打込みも
あつて。



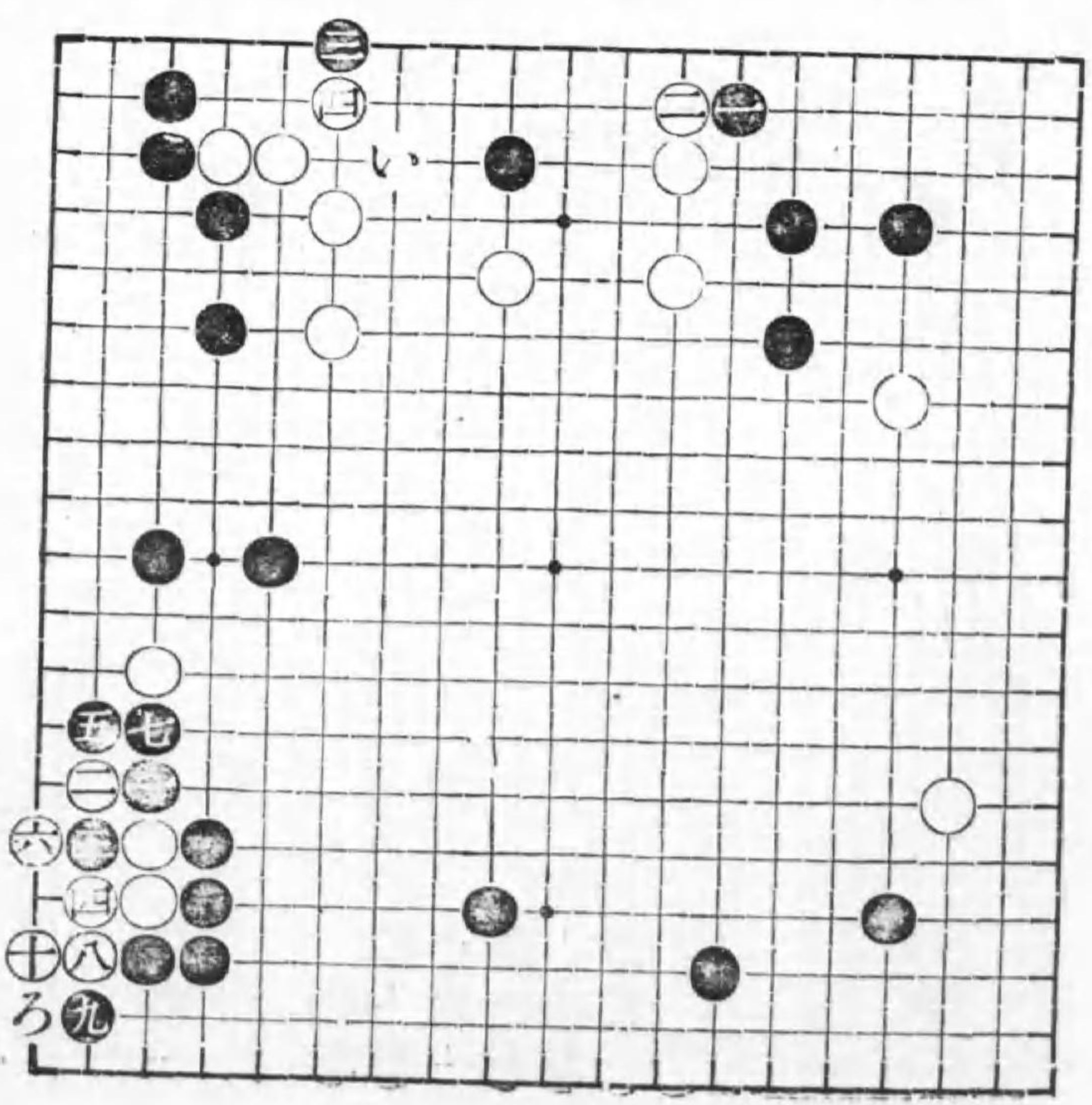
上邊は黒一白二また黒三
白四と白地を狭め。併し黒
一で(五)と手段もないでは
なし。

前譜白二十五を手抜だと
それが左下隅黒一より白十
までの白悪化である。

白十を(ろ)だと、黒十と
黒に打込まれ、白は取られ
る。

等も白手拍子といひ。ま
た輕勿といはれる手。

簡單なる手所

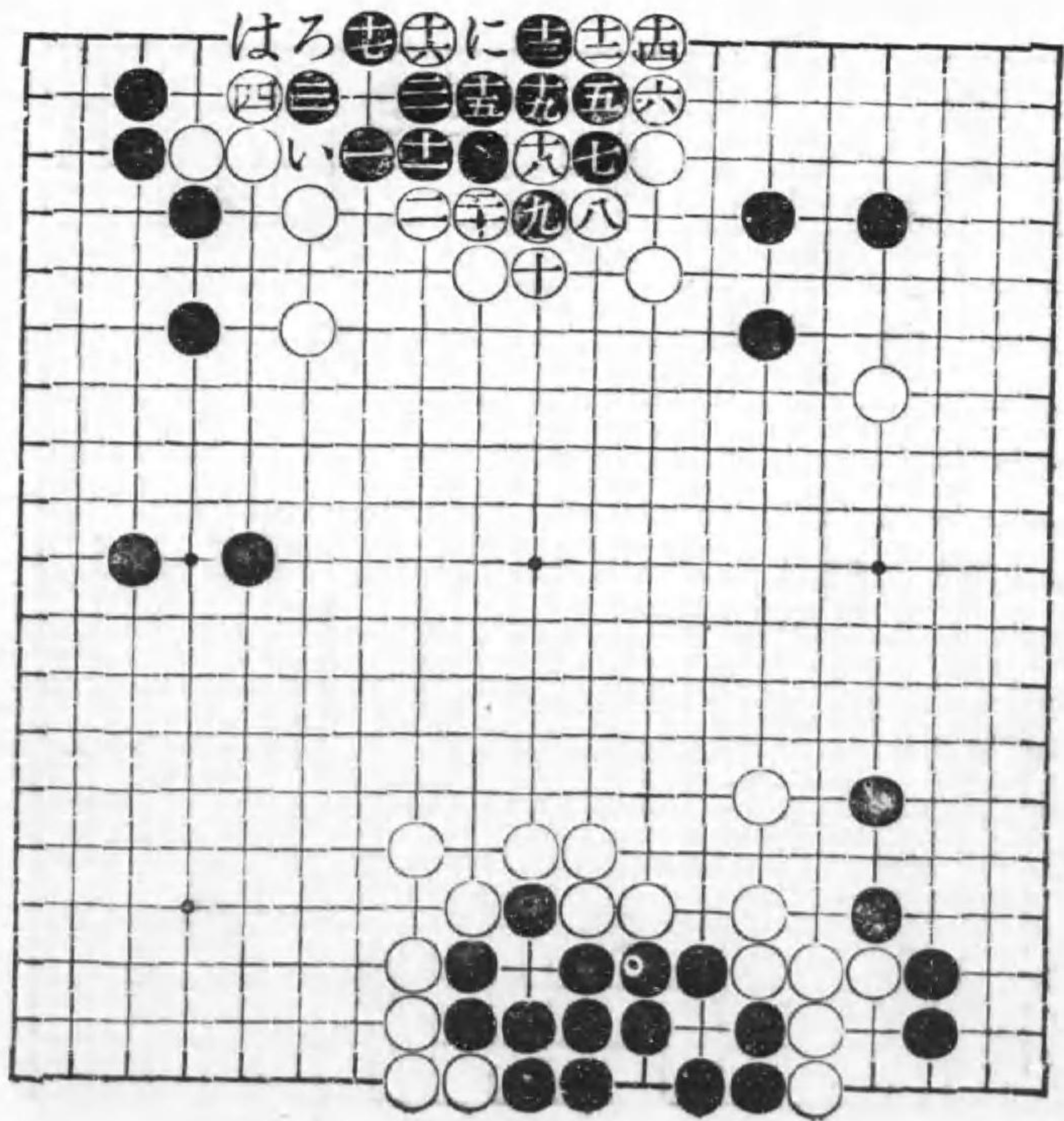


上邊、黒一より二十一まで、それで黒確實に活きである。そして――

白(い)黒(ろ)白(は)黒(に)と成るものとし、此れを――
下圖に見られる黒眼二つの活。

圖は逆轉だが。

さて上邊に見て、黒右上隅の方へ黒に悪影響。等が黒一の思案による善惡攻究の秋。



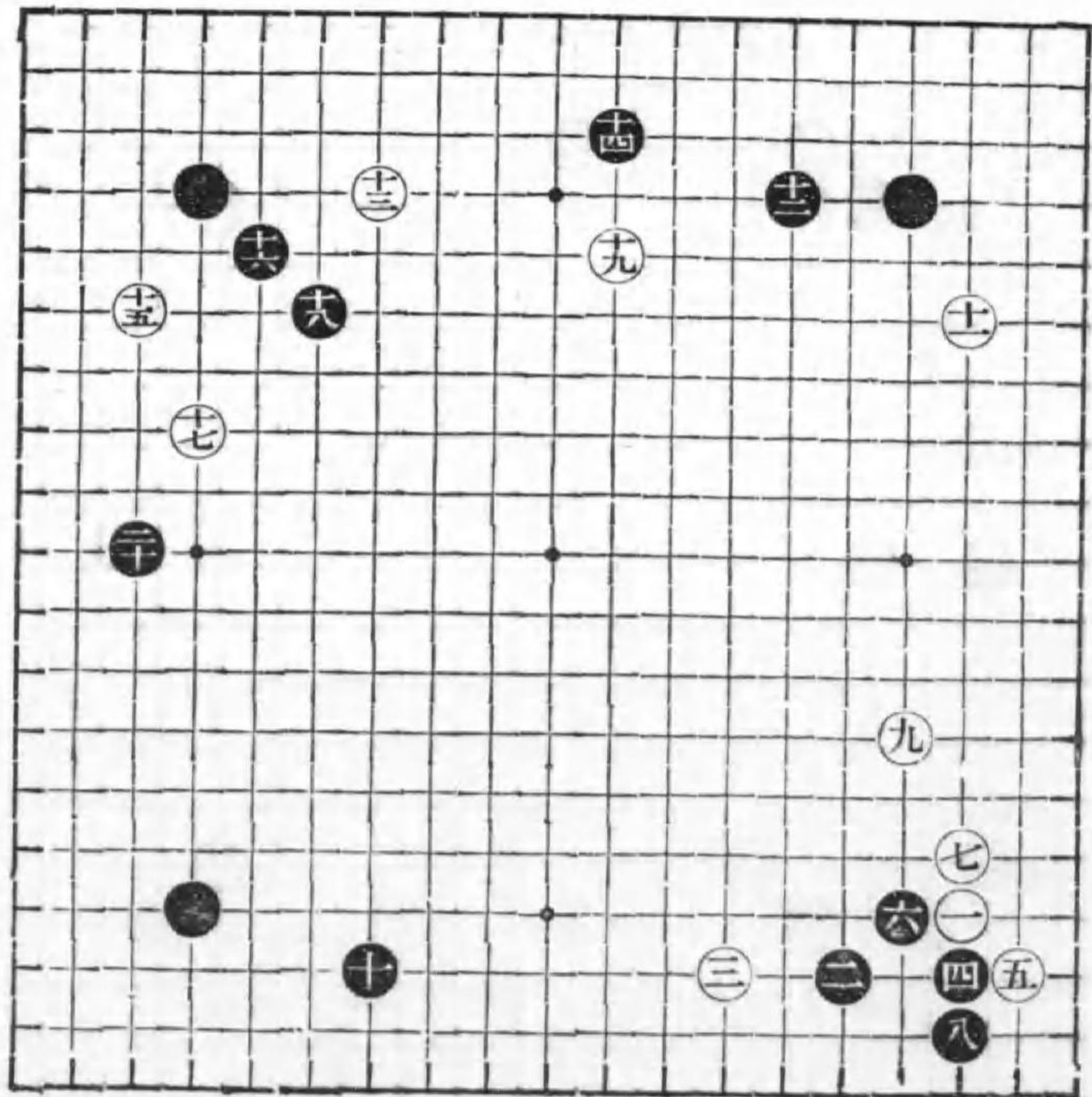
此れが三子で白が一の方に坐居の時。

白が上面黒が下面の方なら左上隅を明ける事。

黒二は二の所と限らないが二の方へ行くものである

白三は黒二の攻めであるそれで黒四より八まで。即ち黒二の安定を計つたもの

先づ黒堅實の態度であると観られやう。

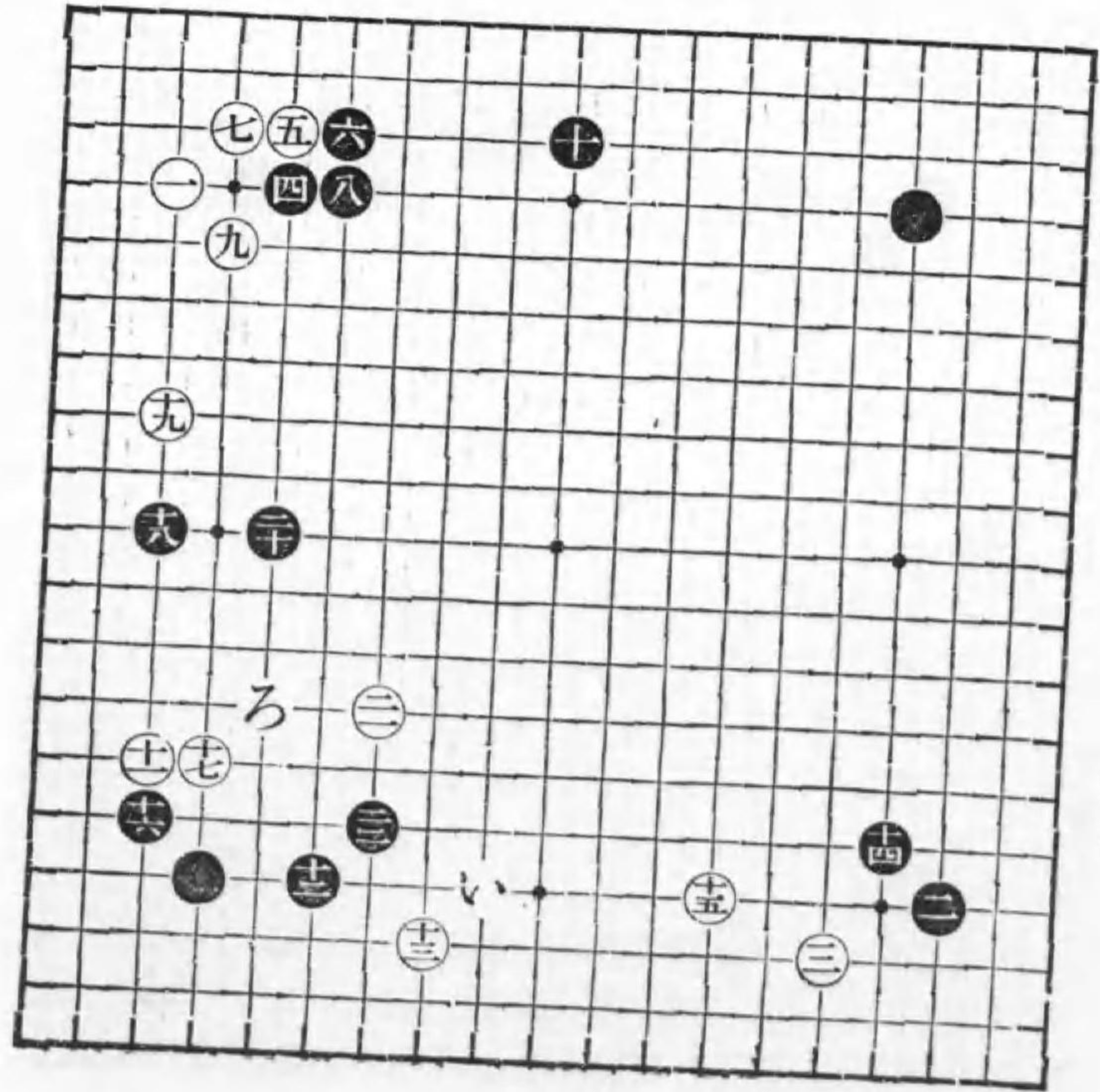


二子の置方は此れである
坐居の上下双方何れでも、
打出すに右が明いて便宜の
故もあるからである。

白一は白が上面坐居から
である。

黒二十二は次に(い)が目
的である。

また二十二は(ろ)を窺ひ
従つて其處が白に缺點、味
方二十の方に聲援の意味で
もある。

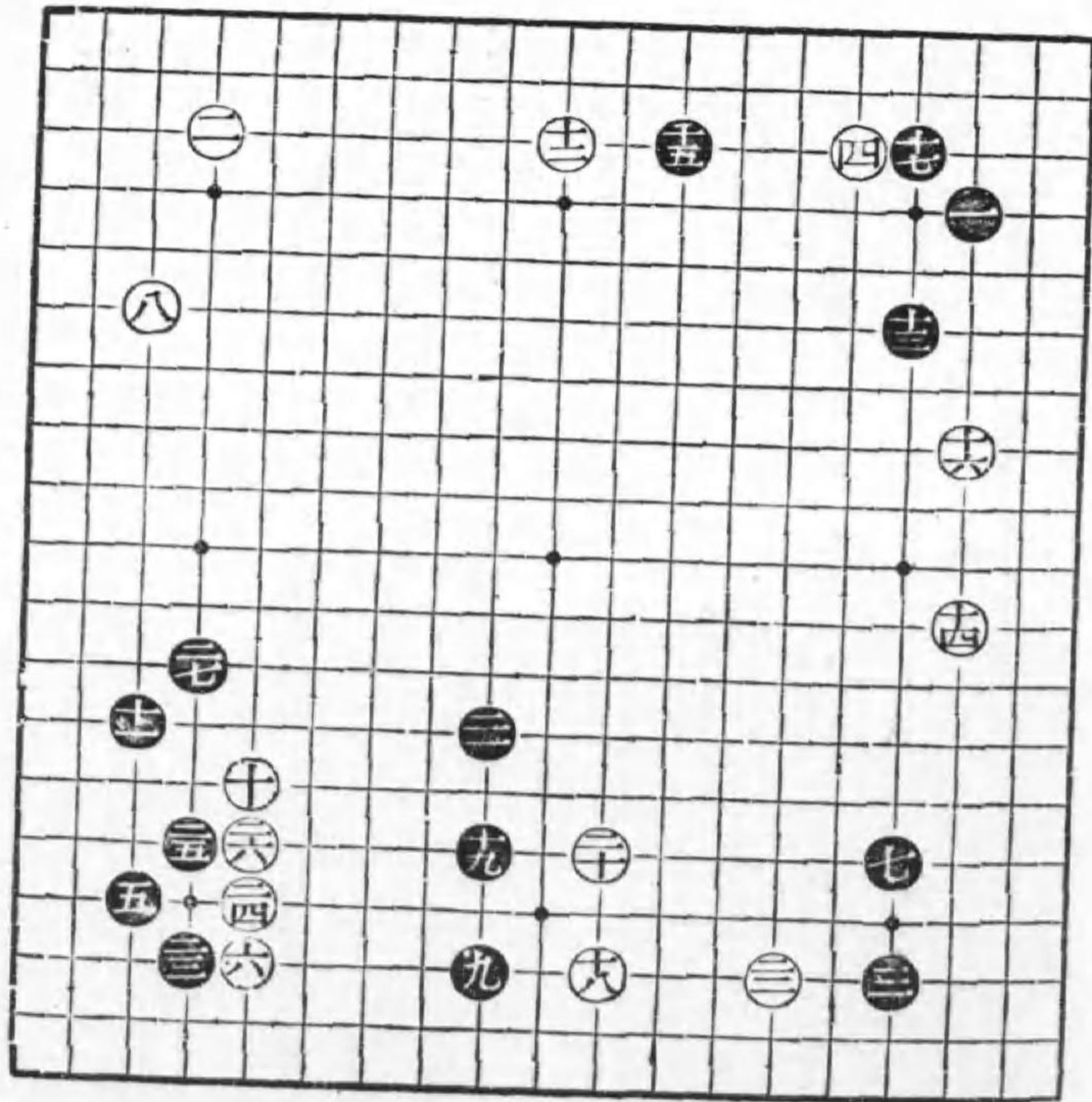


互先は前にも出てゐて本
譜の如く先番なら黒一より
二十七迄。白番なら二より
二十六迄。

だが白の作戦工合によつ
て黒の對策も違ふのである
黒七白八も共に形ちは違
ふが一城を築いたもの。

黒十三は十五の打込、ま
た十四の好點、と其二點の
何れかを占めやうといふ一
手。即ち次の目的を含む。

簡單なる手所



雜 觀

此篇に種々なるものを入れ上達資料にしやう。實は圖を書いては説明を書き、といふ工合であつたが、なほ以下の資料も必要と思つたからである。

上圖白二の時、黒は何だか不氣味であらう。それで無意識に黒(い)と手入れ、白に他の大事な一手を與えやう。

處が黒手抜——

即ち白先白(い)なら黒(ろ)。また白(ろ)なら黒(い)。で黒手抜といふのである。

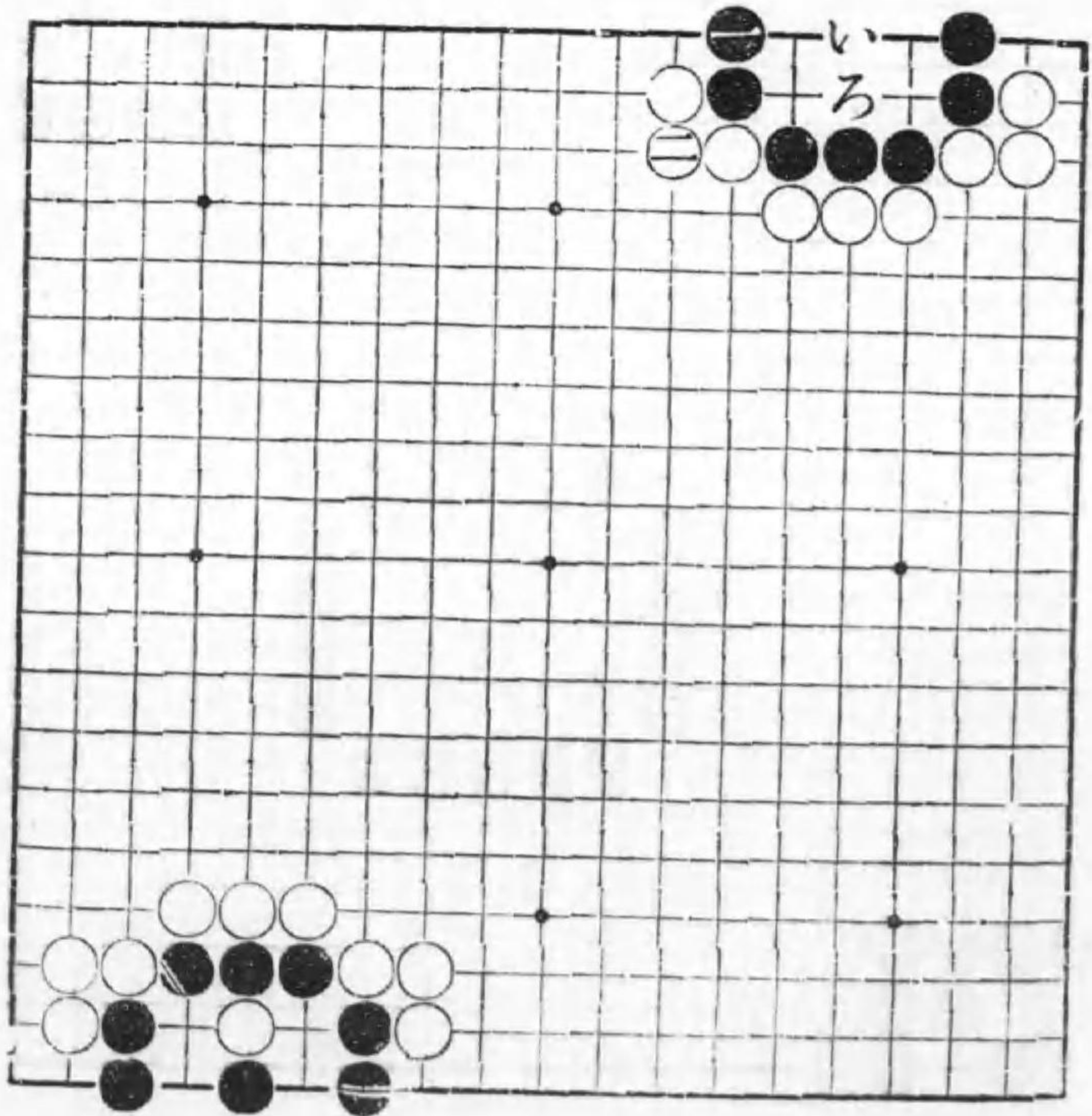
其白(ろ)に黒(い)が下圖に見られ、黒確實の活居である。上圖でも下圖でも此れを櫛形といつて、一見手抜可能と思はれ度い。

黒一で手を抜きそして他を打つた時——

白は何か手がなにか、と思案顔に——

「活は巴と降りしきる」
なんて黒は碁盤の横などをタイトテ、どうですかなと得意がる。

此れがいけないのである
白に一手でも打たせれば、
一手劫立ても無くし、黒い
いではないか。



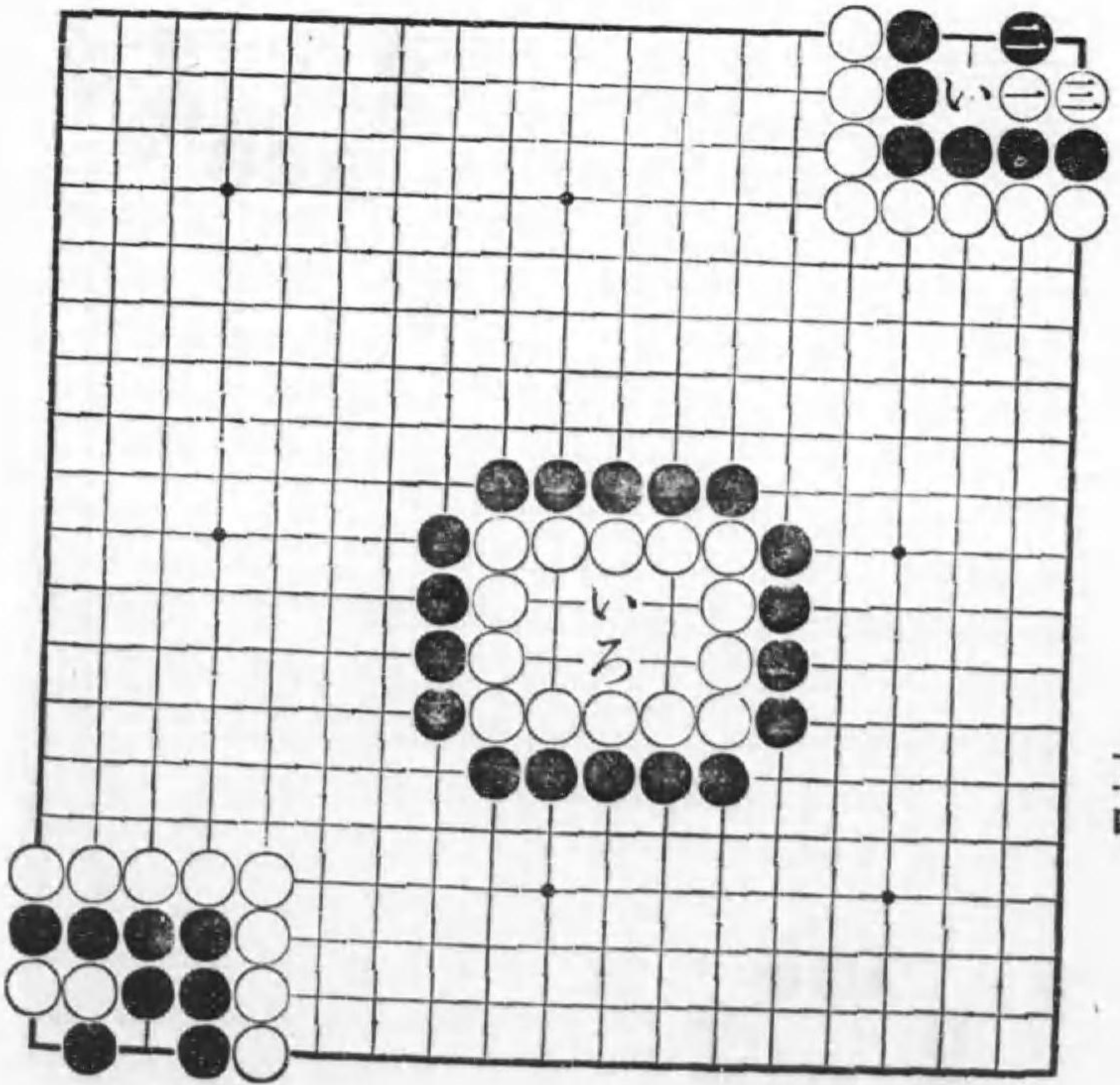
右上隅、白一から三で、
此れは黒が取られる。黒次
に(い)だと――

左下隅を見られよ、次は
白の手番である。

それが真中だと、黒(し)
に白(ろ)。また黒(ろ)なら
白(う)。

と白活きである。

右上隅、左下隅共に黒の
外部に駄目が一手でも明い
てゐれば黒手抜の所。



一七四

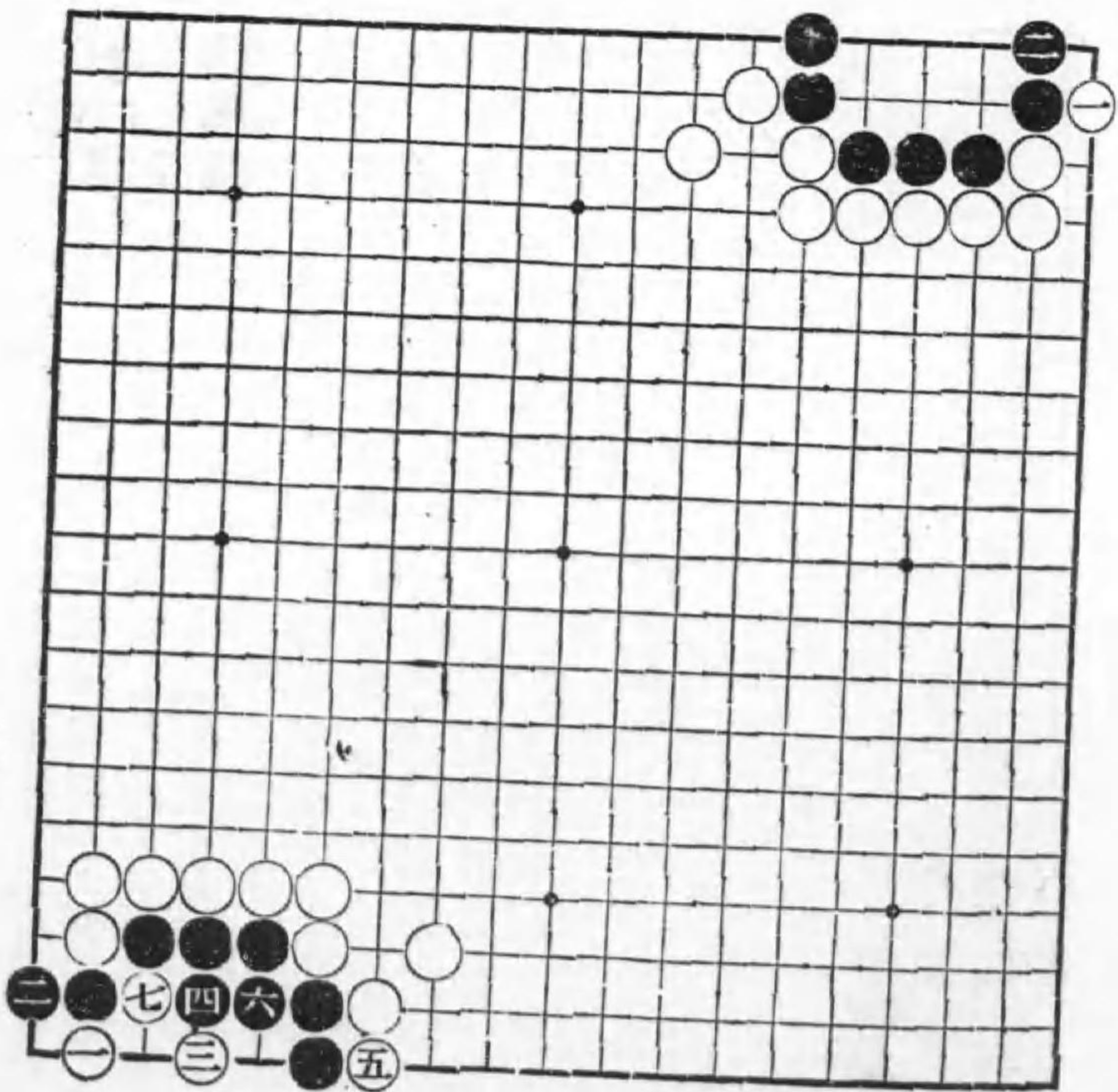
右上隅、白一は手拍子に
も行きたい所、だが白悪い
のである。

左下隅を見られよ、白一
から七まで、と劫の所を。

それを白が考えてる時、

黒「死なぬの國の善光寺な
んて――

言つたら、アレマ斯ライ
ヤ劫にもならぬと思つたに
今度は自分の悪い、へら
ず口。



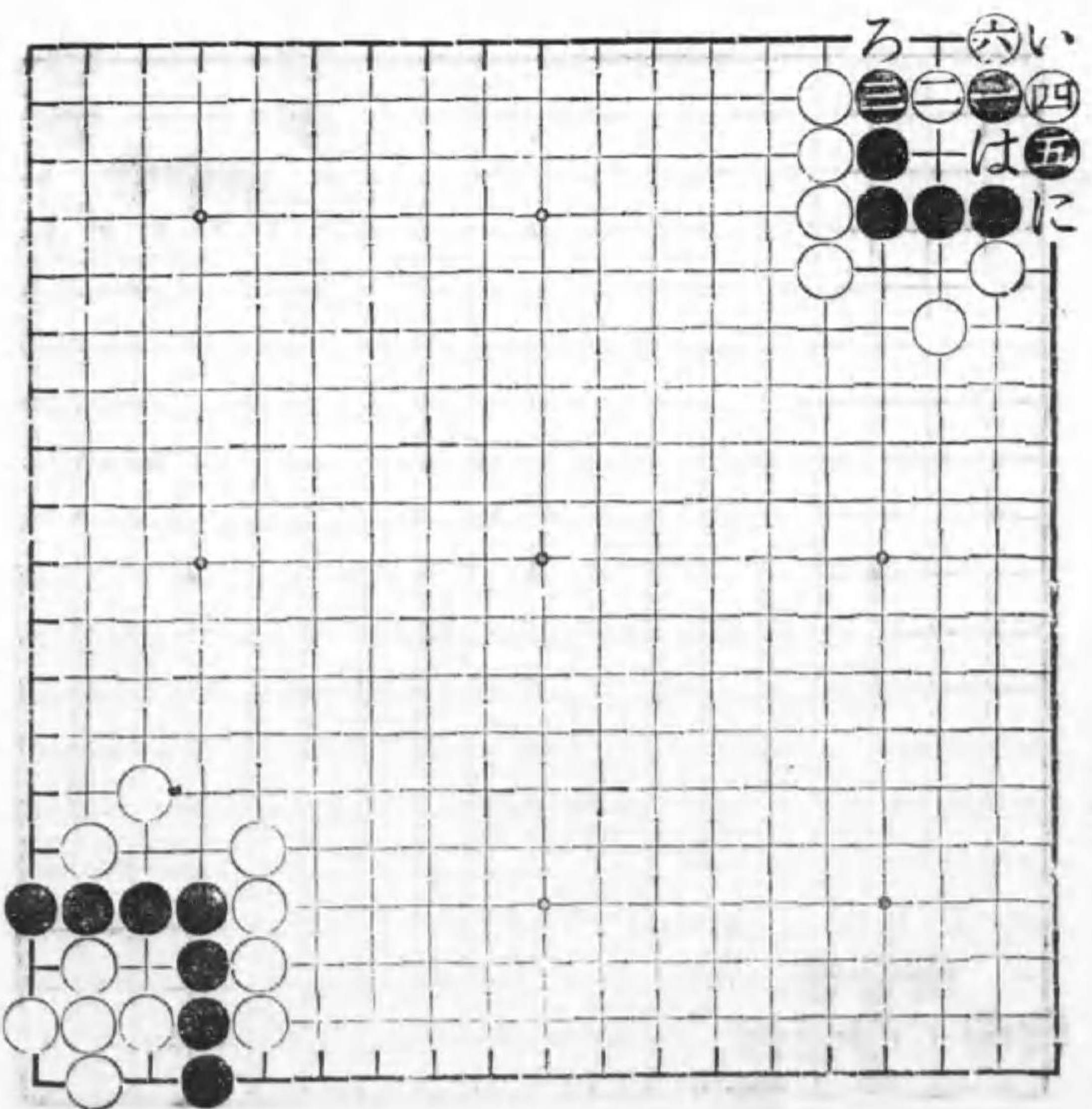
一七五

右上隅、黒一は一を三だ
と白一、では難問題惹起と
思ひ、黒一の次に白三なら
黒二――

處が白に二から六までの
手段があつて、次に黒(い)
と劫で解決の他は無い。

それを黒(ろ)だと、次に
白(は)黒(に)で左下隅の五
目ナカデ、といふ黒の取ら
れである。

右上隅黒三を六は白三。
黒五を(は)は白(ろ)。

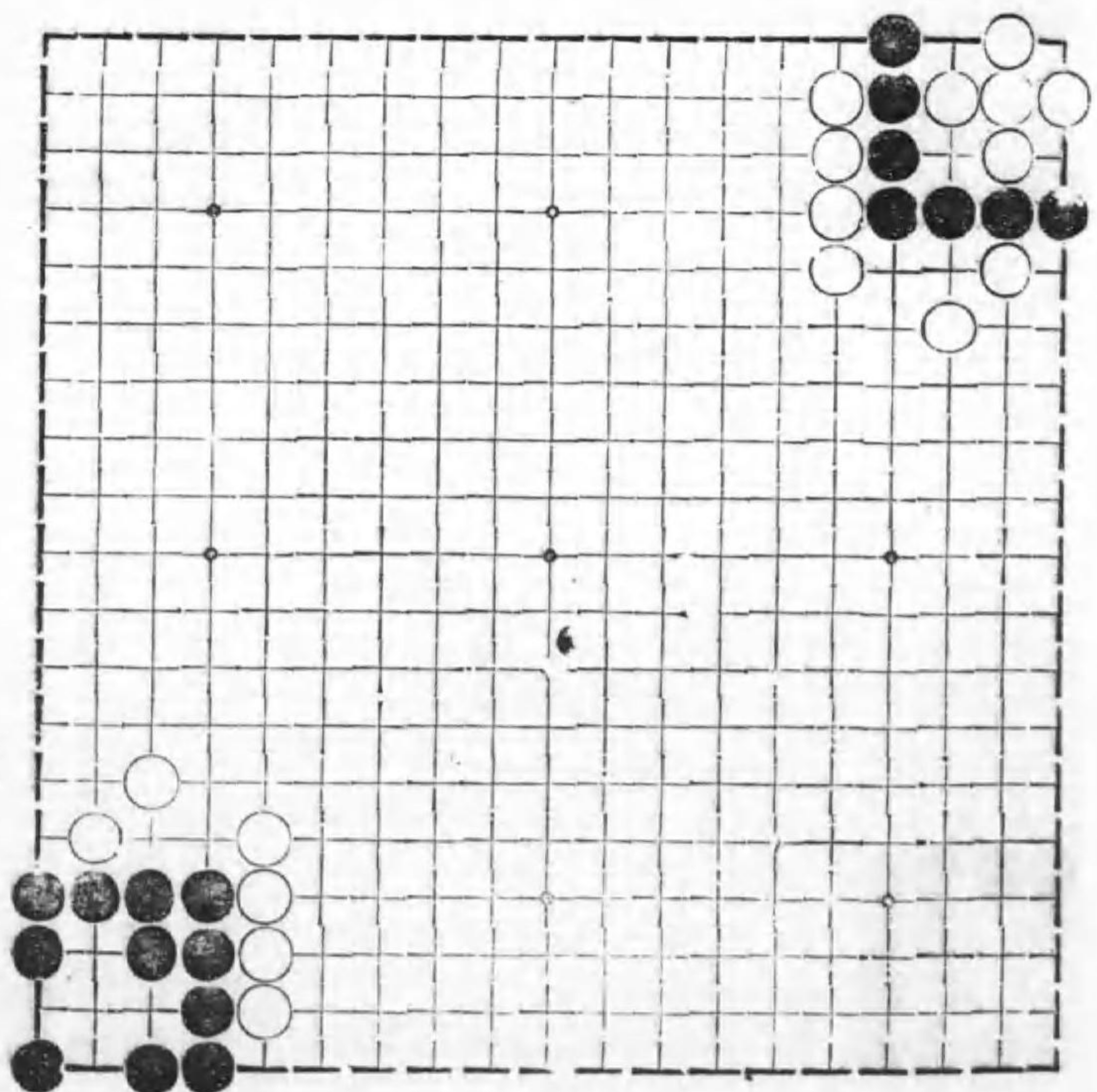


前譜右上隅黒一は三の他
は無ろ。

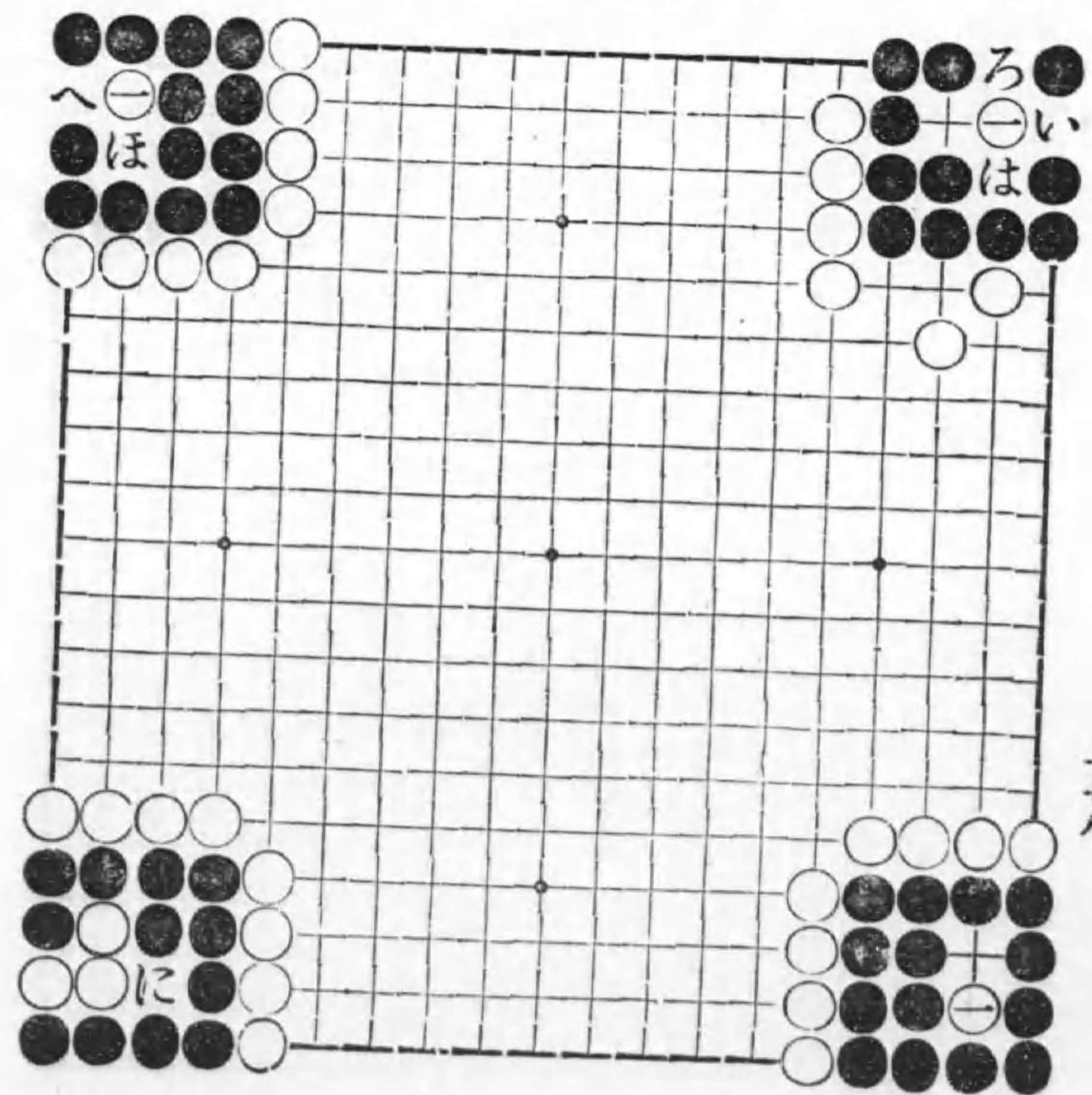
黒一で小さいが住み心地
もいい。等の處を白六と成
つて黒(い)に――

劫を取る時「劫でもない
と四疊半」なんて面白くも
ない顔をするであらう。

さて右上隅は白五目、中
にあつて、五目ナカデ黒取
られといふのは、其白五目
を黒が取るとして、先づ左
下隅――

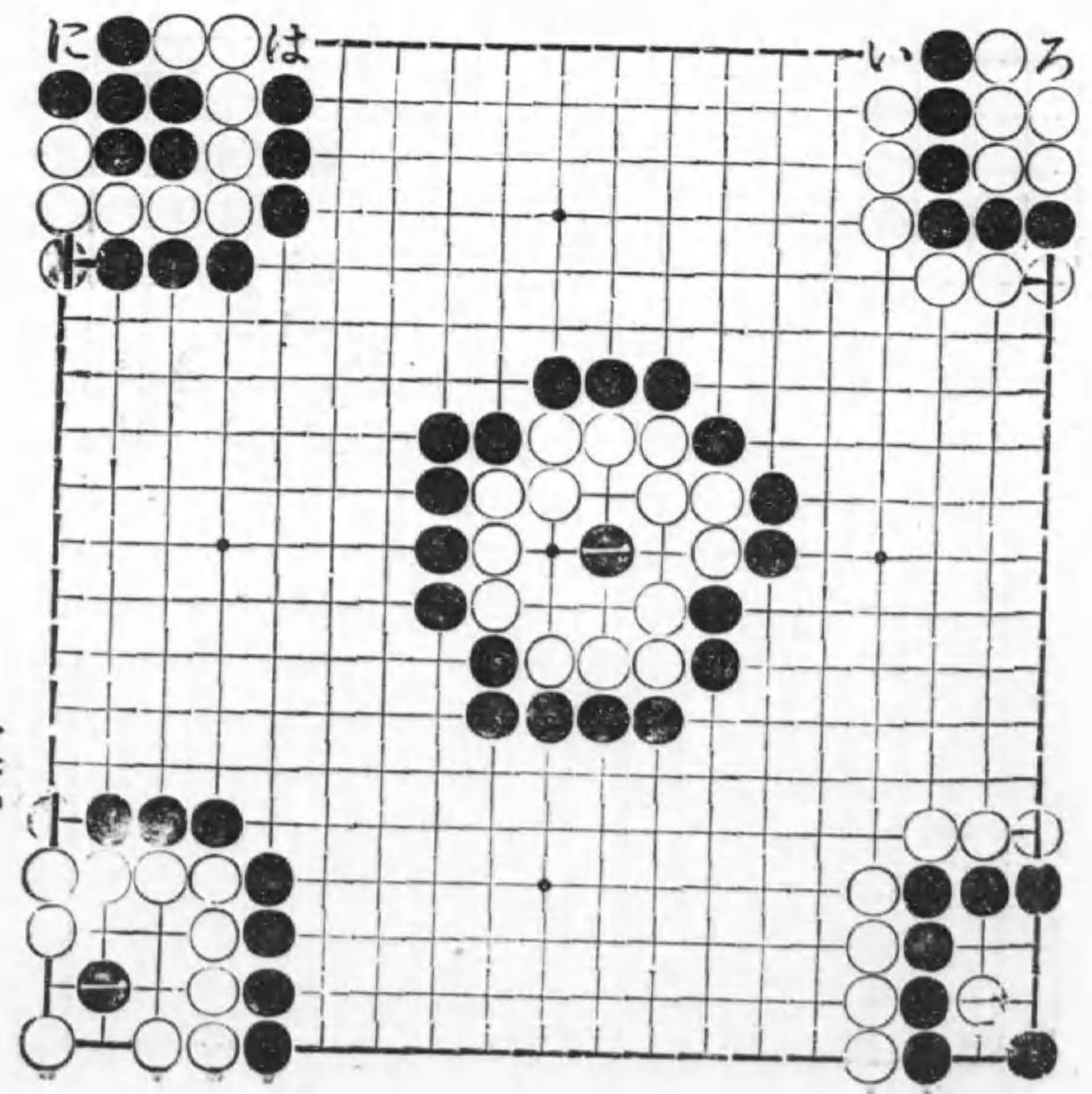


右上隅白一に黒は手の出
 しゃうが無いから——
 次に白(い)黒(ろ)白(は)。
 それが左下隅、周囲を詰
 めたとすると、分るから斯
 様。そして黒(に)の他は無
 い。其次が左上隅——白一。
 に黒は手出し出来ないか
 ら、白(ほ)黒(へ)。
 次の右下隅白一を見られ
 よ。白は一手で取れの譯、



一七八

右上隅白(い)に黒(ろ)。
 此れも五目ナカデ——
 右下隅を見られよ、白一
 で黒は取られる理合を。
 左上隅黒(は)に白(に)。
 此れは花六といふ形ちで、
 左下隅を見られよ、黒一で
 白は取られる。
 中央でも黒一で同様であ
 る。
 花六とは花の形容をいふ
 ものである。



一七九

黒一より五まで成つて黒はまた無駄口――

「シテウ刈萱女郎花」なんて。

それは次に白(い)だと、

黒(ろ)で征。

それで白(い)を(は)、そ

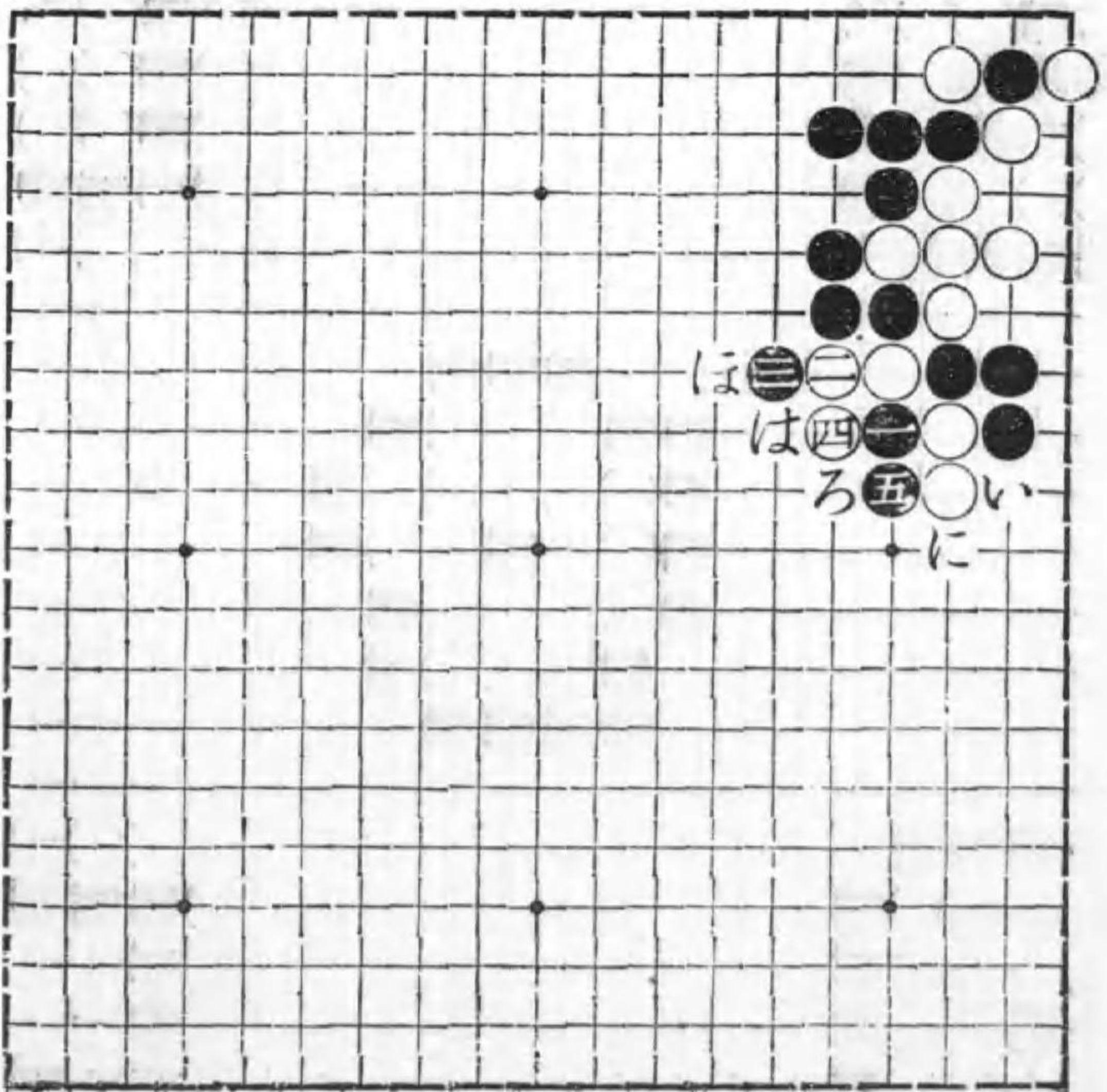
して黒(に)白(ほ)と白に――

氣付かれ白四以下三子が

強化。に加えて上部の黒七

子の方を惡影響。次圖の征

の方が黒いのに。



口は禍のもと――

見れよ黒一で白三子が、

即ち次に白なら黒三で征に

白四子を取れ。

左側の方は白二子を取つ

て、黒惡くもないが、征の

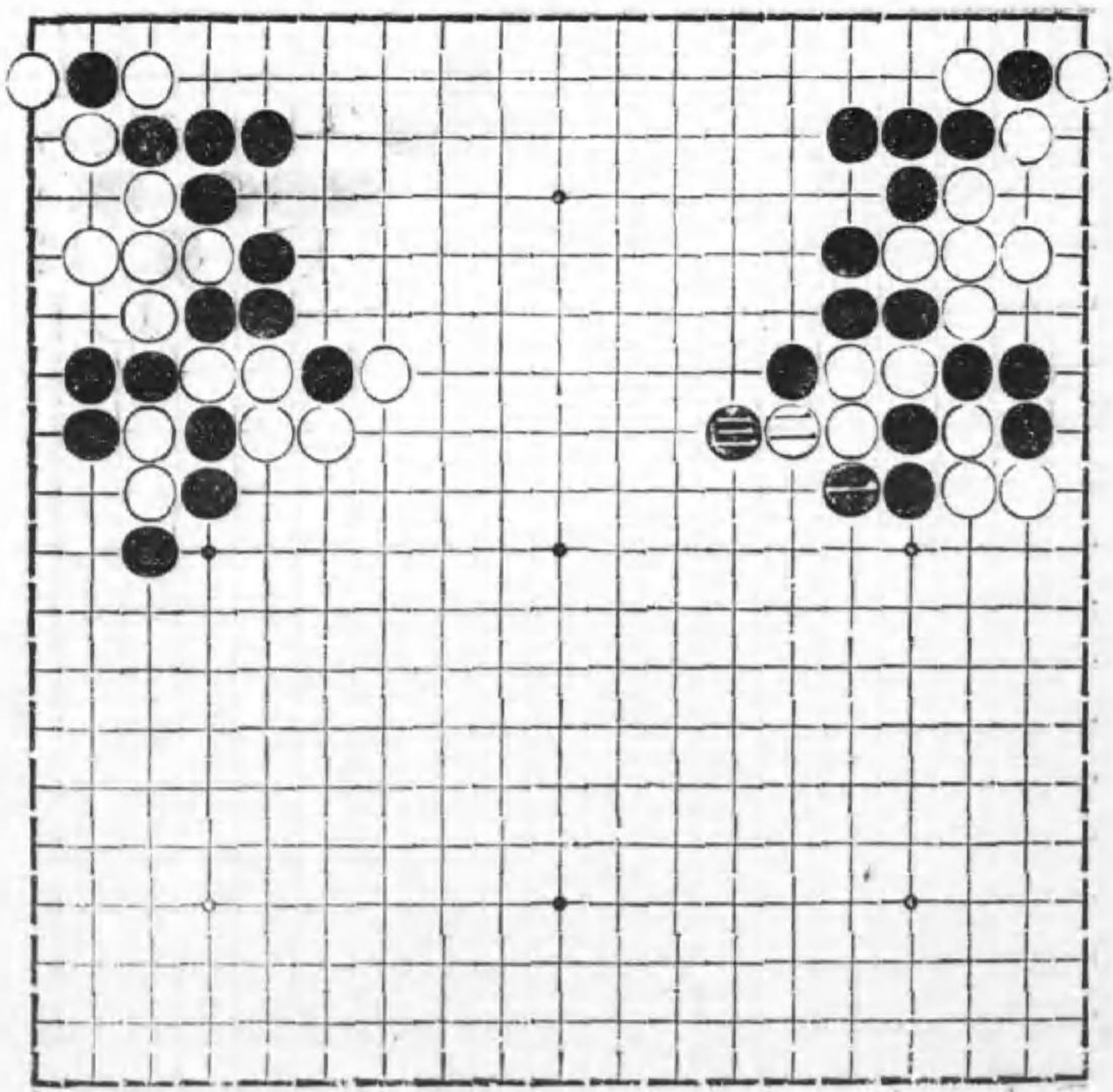
方なら、黒は一舉大勝であ

る。

何れにしても對局中無駄

口などは第一相手に氣付か

れ損の方が多い事である。



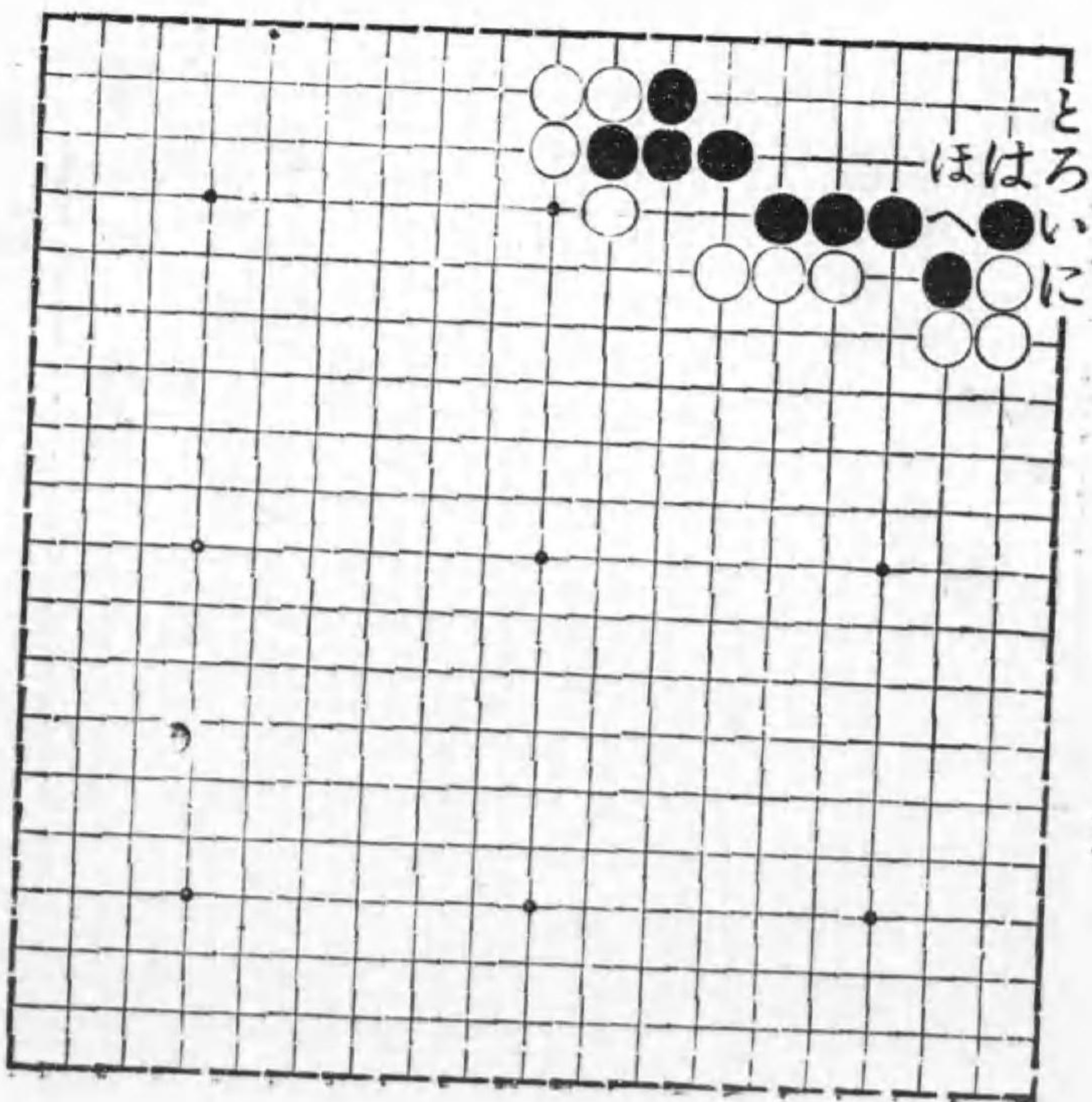
白先白(い)に、黒(ろ)だと――

此れも「斯うでもないに四疊半」の部類である。

黒(ろ)に白(は)と切つて黒(に)と白(い)を取る他は無、そして――

白(は)黒(へ)白(と)。と成つた次圖白(と)までの白丸までを見られよ。

黒(ろ)の輕勿が判らう。



今度は黒の手番であつて黒(い)だと――

次に白(ろ)。

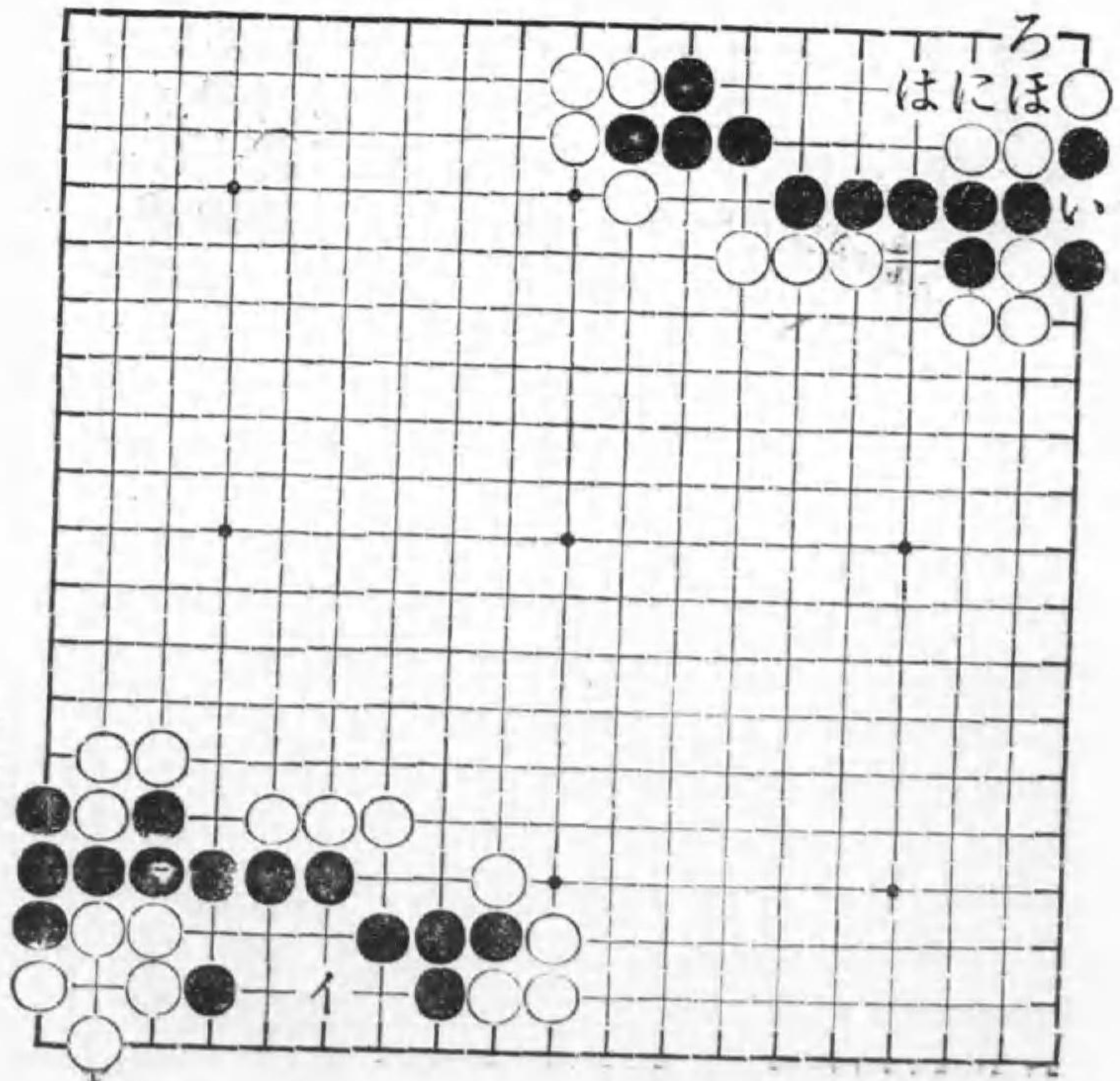
に黒(は)は白(に)。

それが下圖の黒地に白活居のもの。故に黒(イ)と後手の他は無。

されば黒(い)で(ほ)と劫。

だが前譜――

白(い)に黒(ろ)を一寸注意、黒(は)で無事。

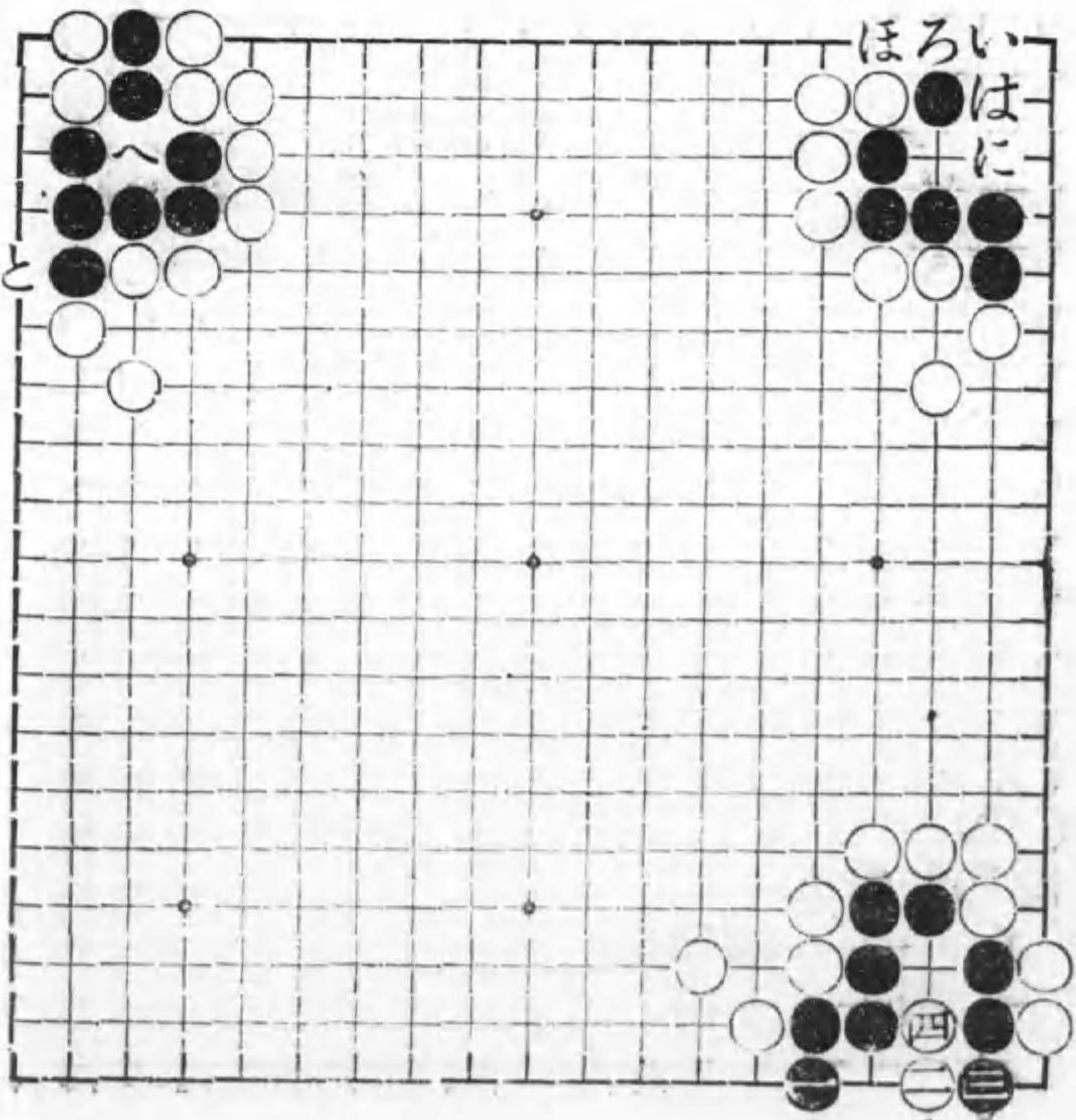


右上隅「手抜の金比羅大
権現」。なんて黒手抜だと
白(五)——

に黒(ろ)は白(は)、に黒
(に)は白(ほ)。

白(ほ)は(ろ)と、其下の
黒二子に當つて、それが左
上隅。そして黒(へ)白(と)
黒は取られる。

右上隅白(い)に黒(は)は
白(ろ)。それが右下隅黒一
より白四迄。



右上隅「古池や蛙飛込む
水の音」。なんて——

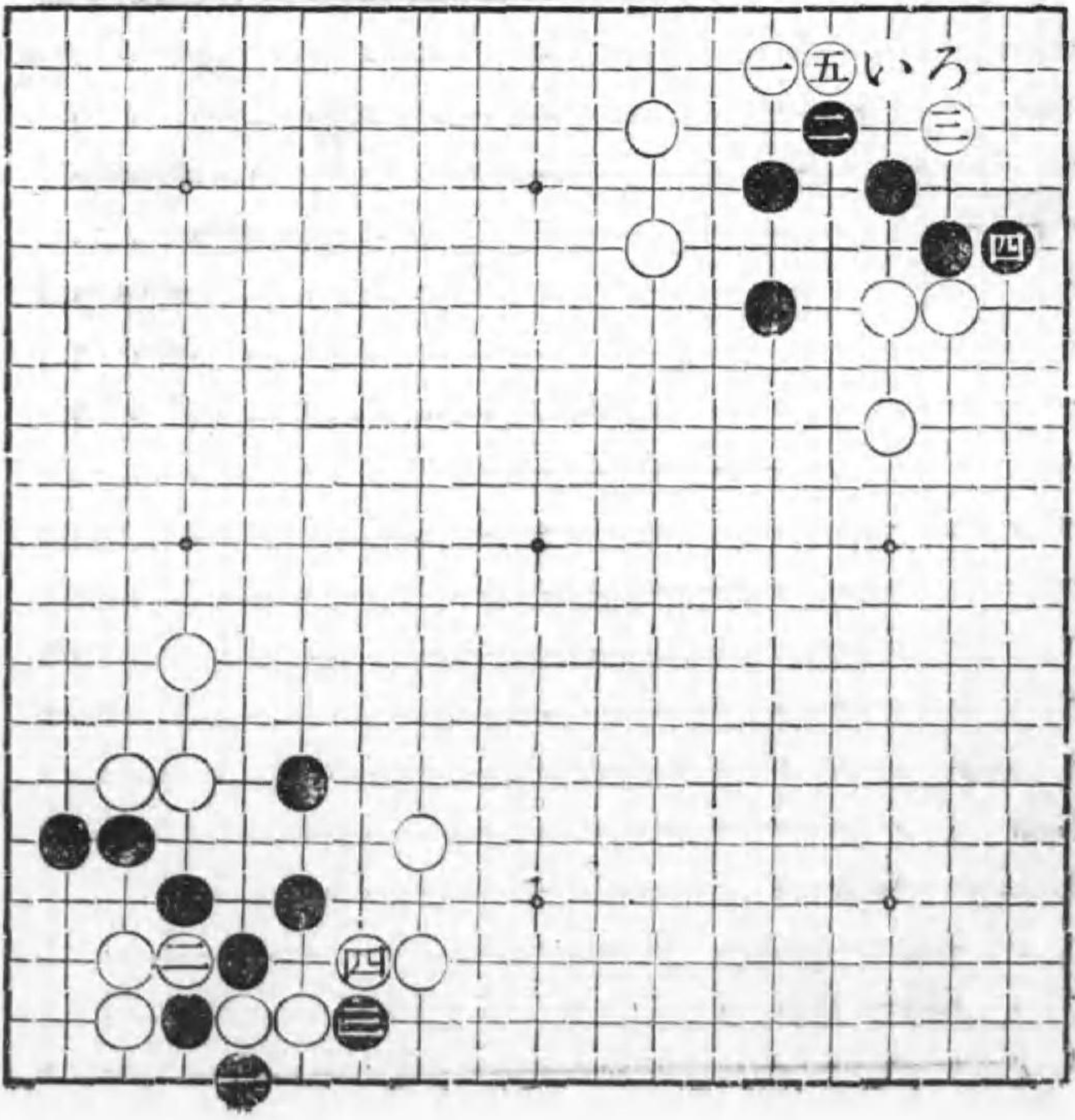
白三に黒四だと、白五。
そして黒(い)は白(ろ)。

と白に渡られ、黒の前途
は心細い。

黒二は(い)が當然の應手
である。

無駄口を云ふから手がお
留守になるのである。

左下隅黒一より白四まで
も黒悪い。



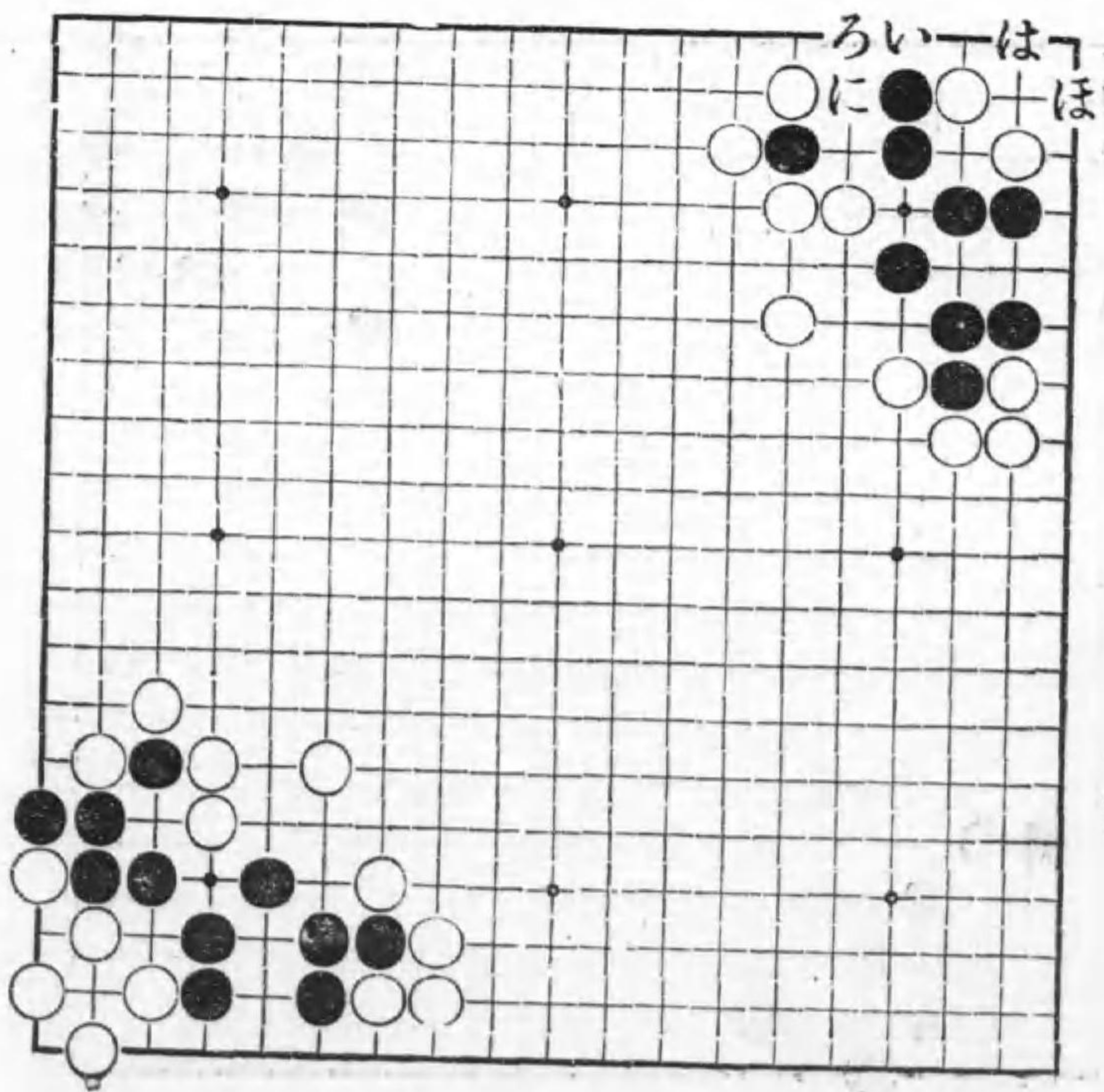
右上隅「跳てより口説上手と知りながら」。

白先白(い)、それが跳(ハネ)といふ名稱の用語であつて――

白(い)黒(ろ)白(は)黒(に)白(ほ)。と成つて、左下隅の如く白に活きられ、黒感心の態。

君、旨い跳だネ。なんて。

右上隅黒(に)は(ほ)の他は無い。即ち劫。



「打つ身に辛いおき碁たつ」。

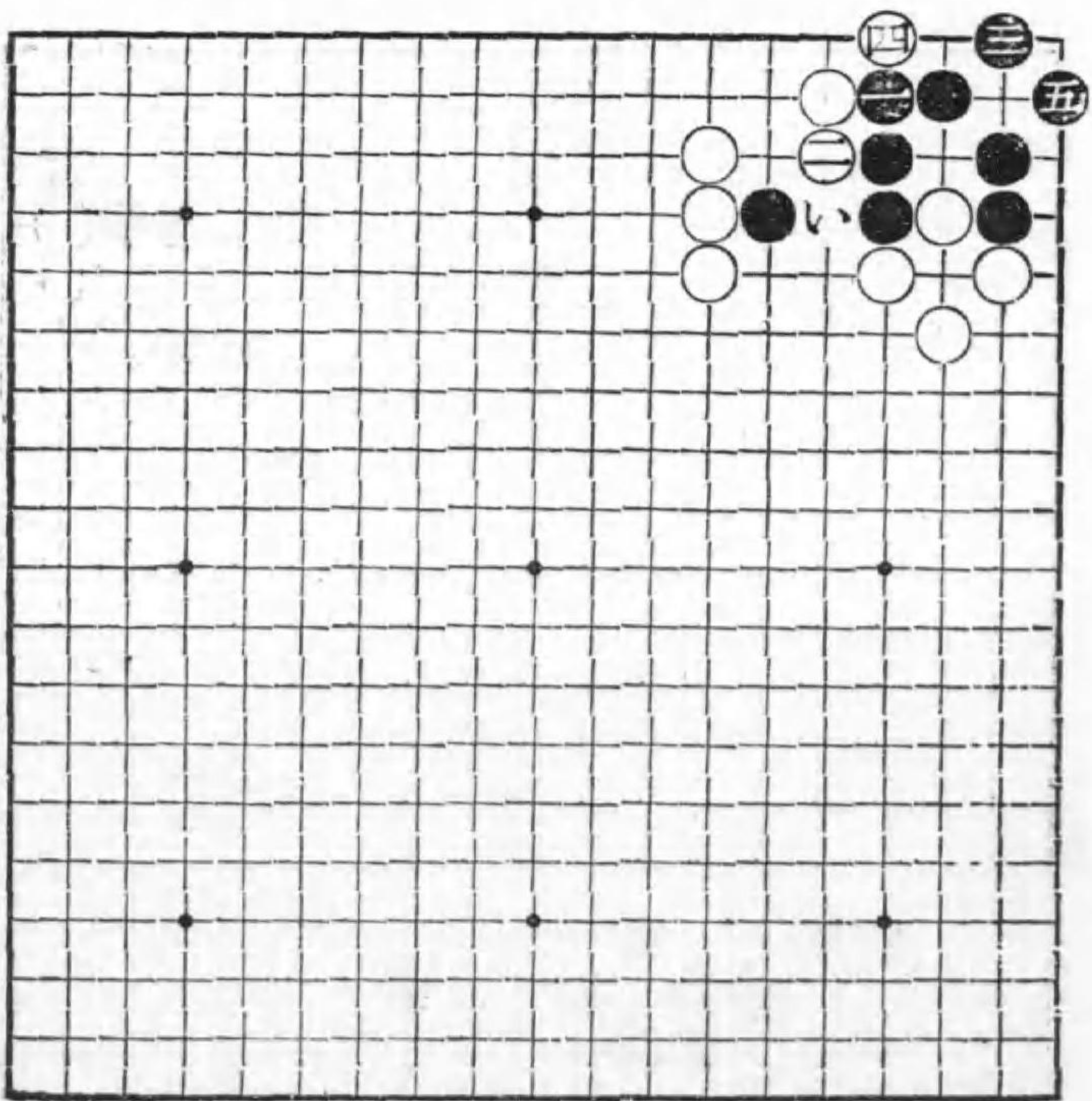
實際、黒一より五まで、と活きる他は無い――

黒三でも五でも自分の家内に引下り――

なほ白(い)と其左の黒一子は戸外――

等も残つて。

だが黒より五までの隠居生活も、知らねばならぬ事ではある。

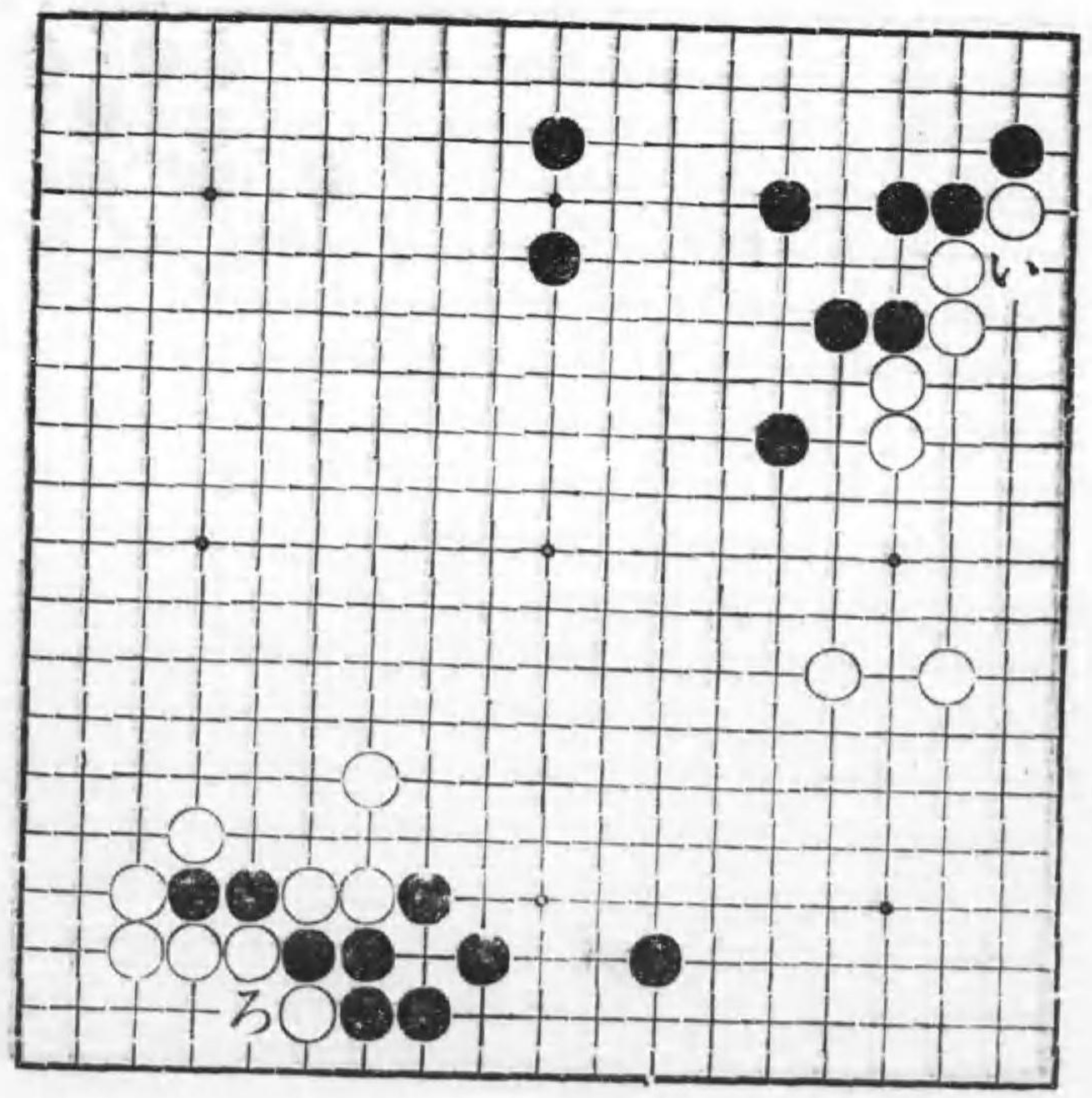


「粘いでくりやるな八幡鐘を」。此れは黒が白に（い）と粘がれて大きいからで――

（ろ）の方とは比較にならないもの。

（い）又は（ろ）の所は侵分である。

（い）の方は大きい、それを粘いでくりやるな。と黒待望の情景である。



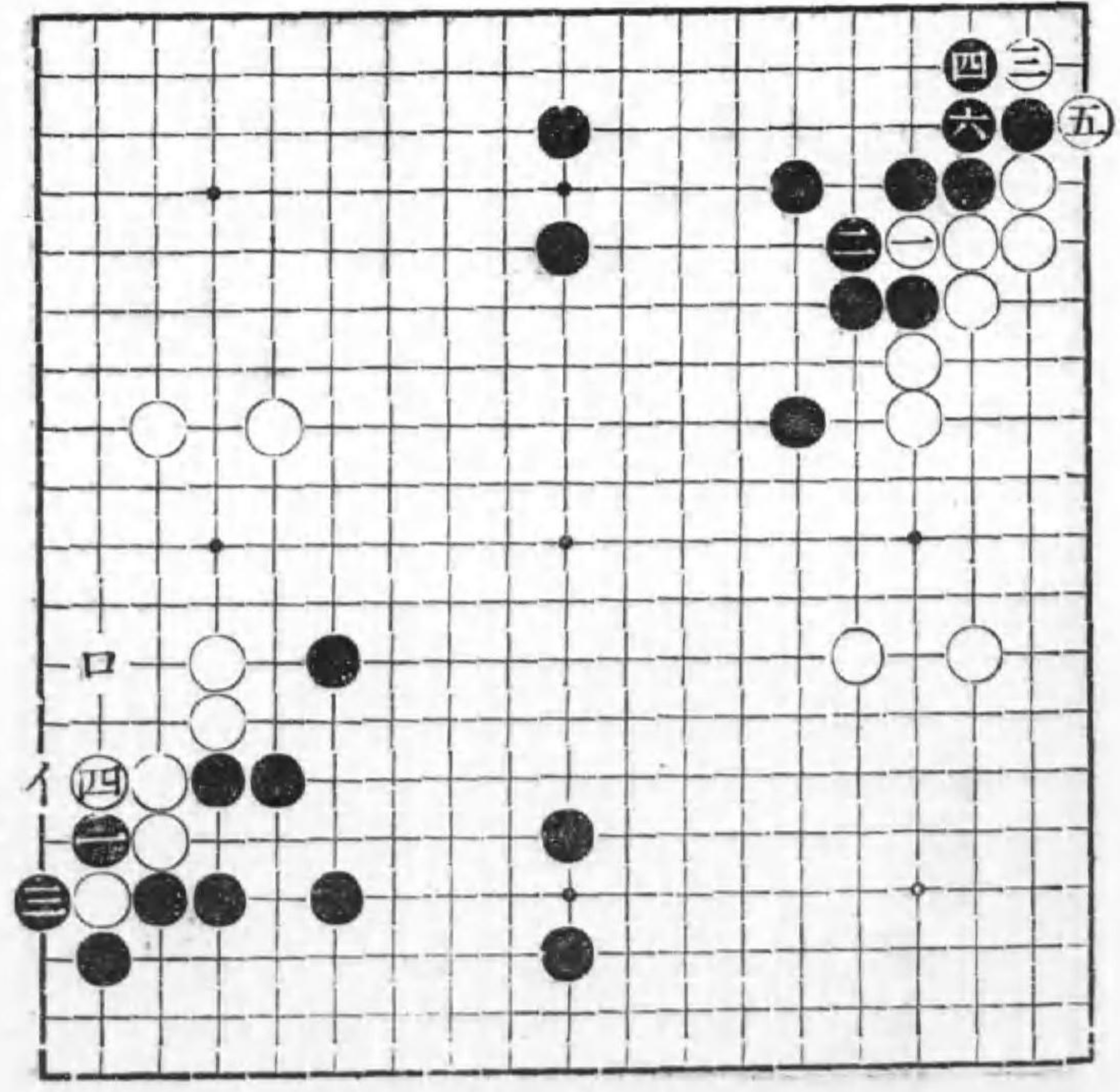
右上隅の方は前譜（い）と白が粘いだ事とし――

そして白先なら白一より黒六まで、白先手得である。

前譜白（い）に黒本圖四の所だと、白に先手得され黒が悪い。

左下隅の方黒先黒一より三までに、白（イ）は此れも黒先手得白が悪い。

で黒（イ）白（ロ）、なほ黒に侵入でき。

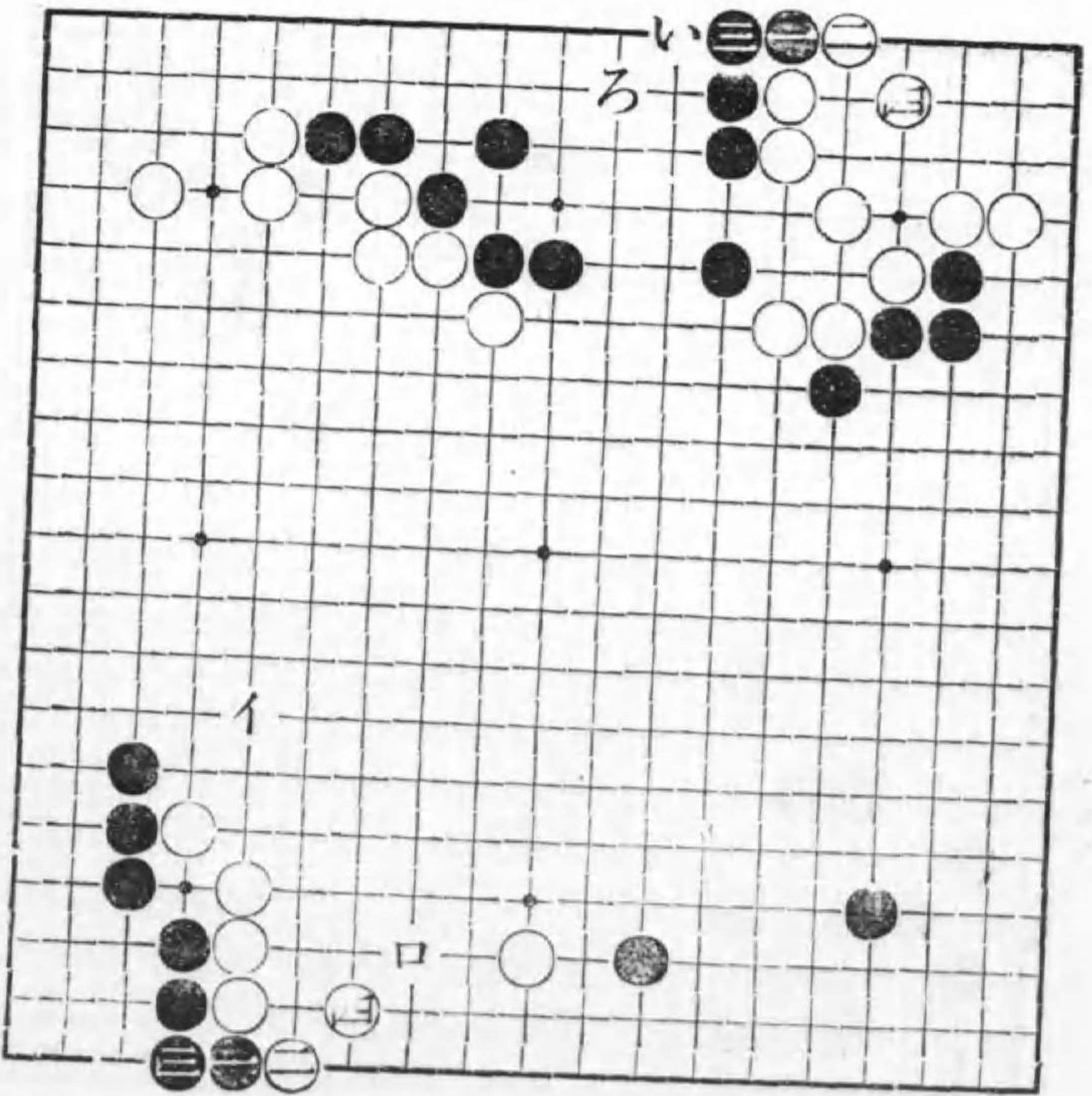


上邊黒一より白四までは
黒先手四目利得である。

即ち白先白三黒(い)白一
黒(ろ)だと、二目の増減、
其合算である。

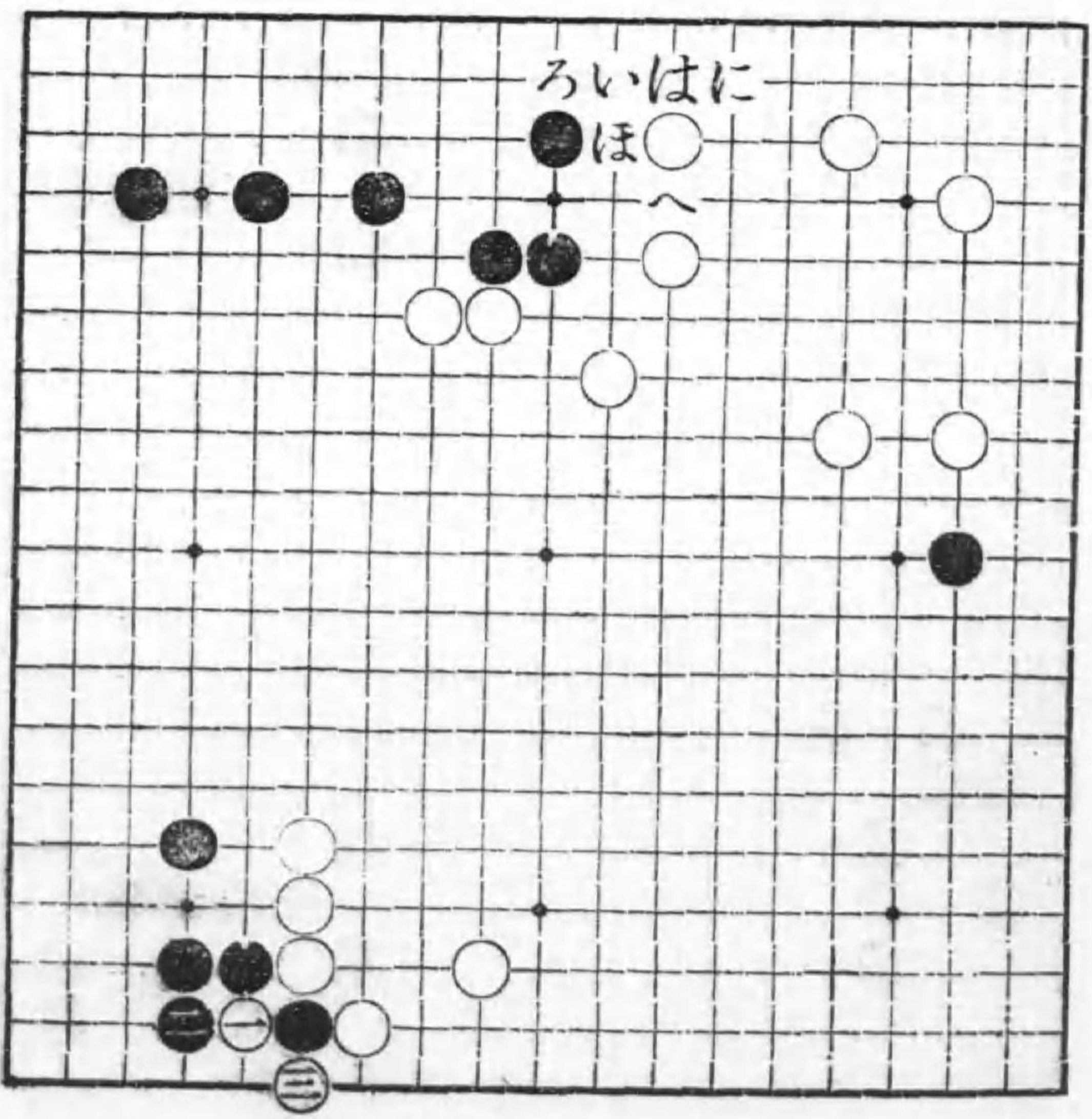
されば此方は争奪の所。
だが上部の境界が定まっ
てからで――

下圖の黒一より白四まで
は白を強化黒が悪い。即ち
黒(イ)で(ロ)の打込み等も
解消、黒反對に損。



一九〇

白から(い)と來られ、黒
(ろ)は白先手得、黒は辛い
――
といふ時、黒(は)そして
白(に)黒(ほ)白(へ)。此れ
が巧拙の分岐點である。
即ち黒は他に轉じ、次い
で白(い)だと――
左下隅、其白(い)を白一
とし、白三と成つて白は後
手。
形は違ふが同様な理合。



一九一

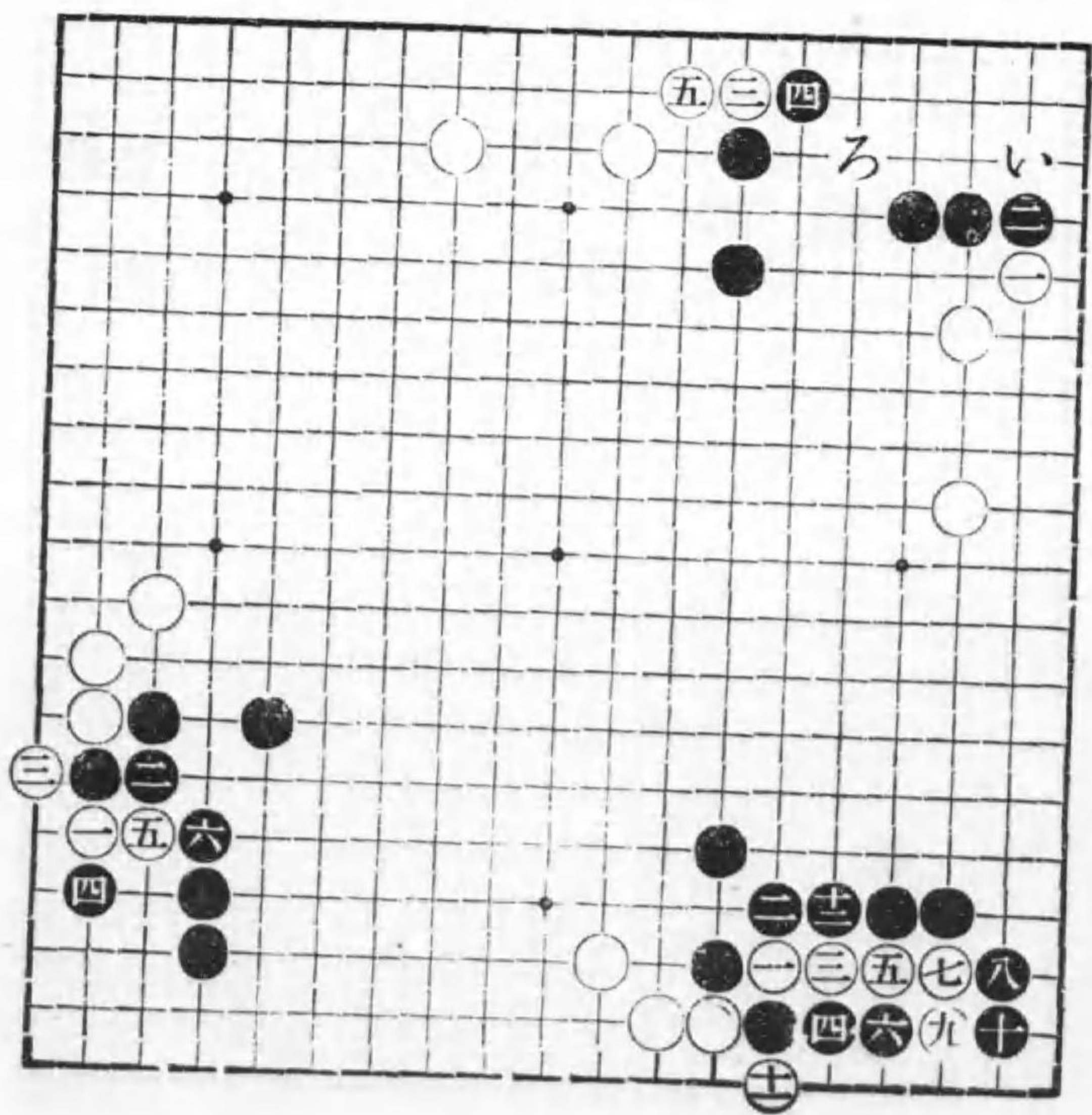
白一は次に(い)と飛込み
だから黒二と應じ——

また白三と五に黒(ろ)と
應じては——

白着々利得、そんな事で
黒は敗けるものである。

左下隅を見られよ、黒六
と成つて白大した侵入でも
ない。

また右下隅を見られよ、
白一と切りなら、以下黒十
二と成つて黒一手勝。



一九二

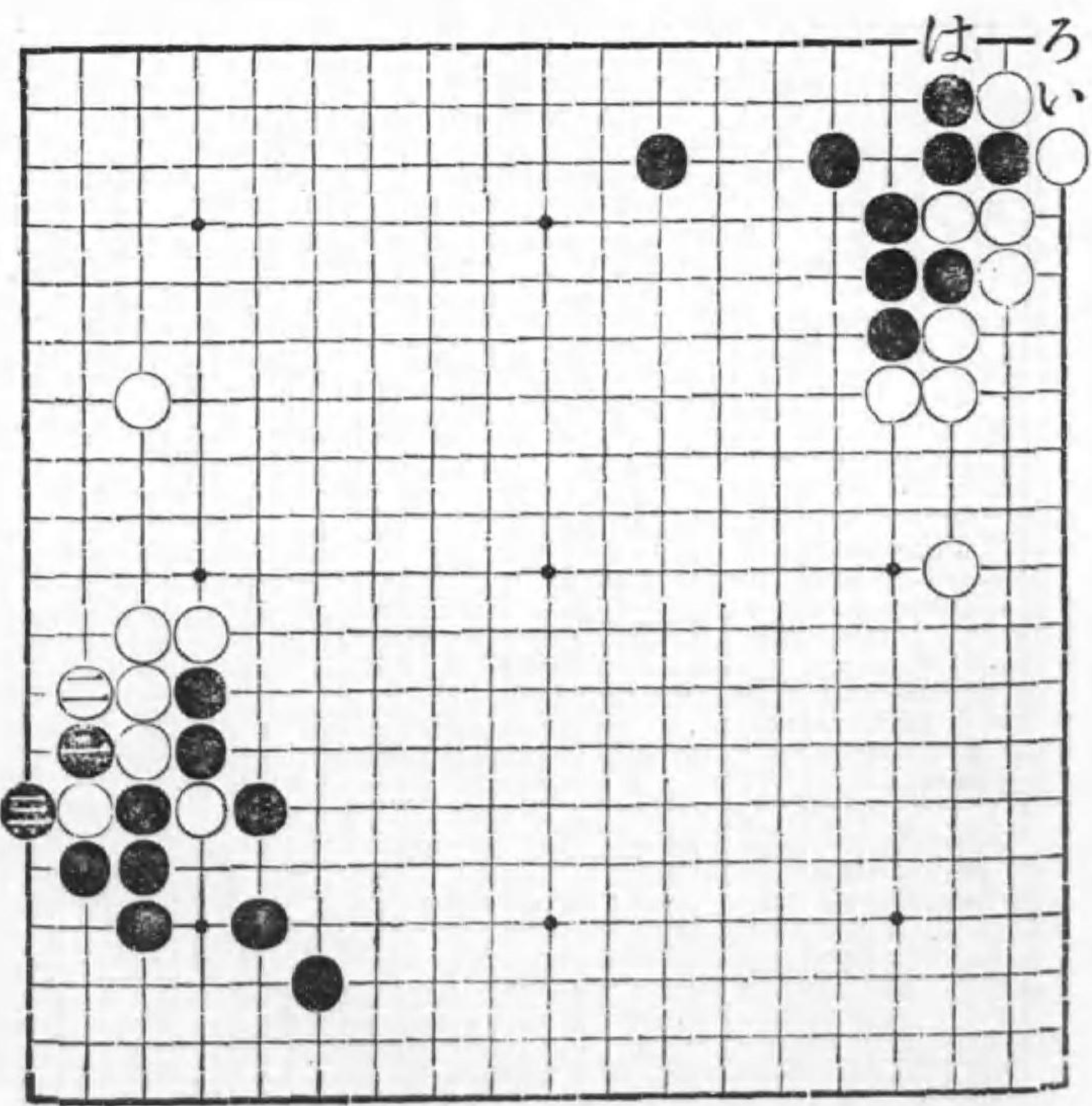
本圖も侵分であつて、即
ち最後の經濟戰。

右上隅黒(い)白(ろ)黒(は)
で(ろ)以下白二子は取
れるが——

黒(い)と先に白に取られ
て黒三目得。

それより左下隅黒一より
三の方が黒六目得。

此れが細碁の形勢にあつ
ては、大切な見分けである。



一九三